

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 4

東京大学本郷構内の遺跡

山上会館・御殿下記念館地点

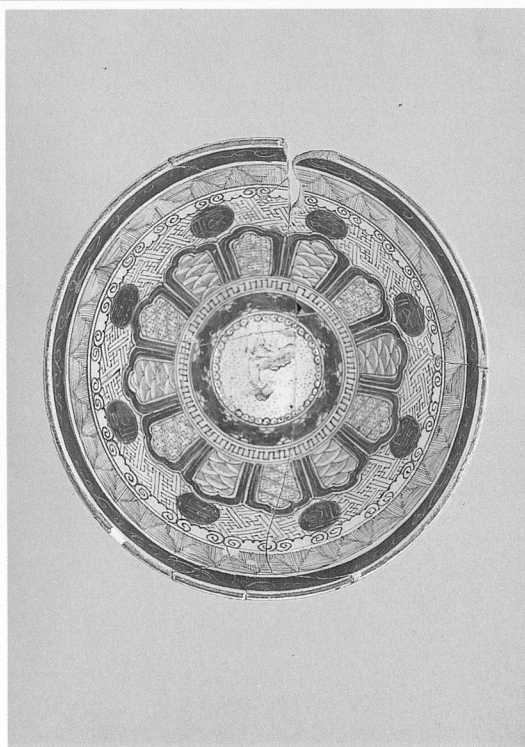
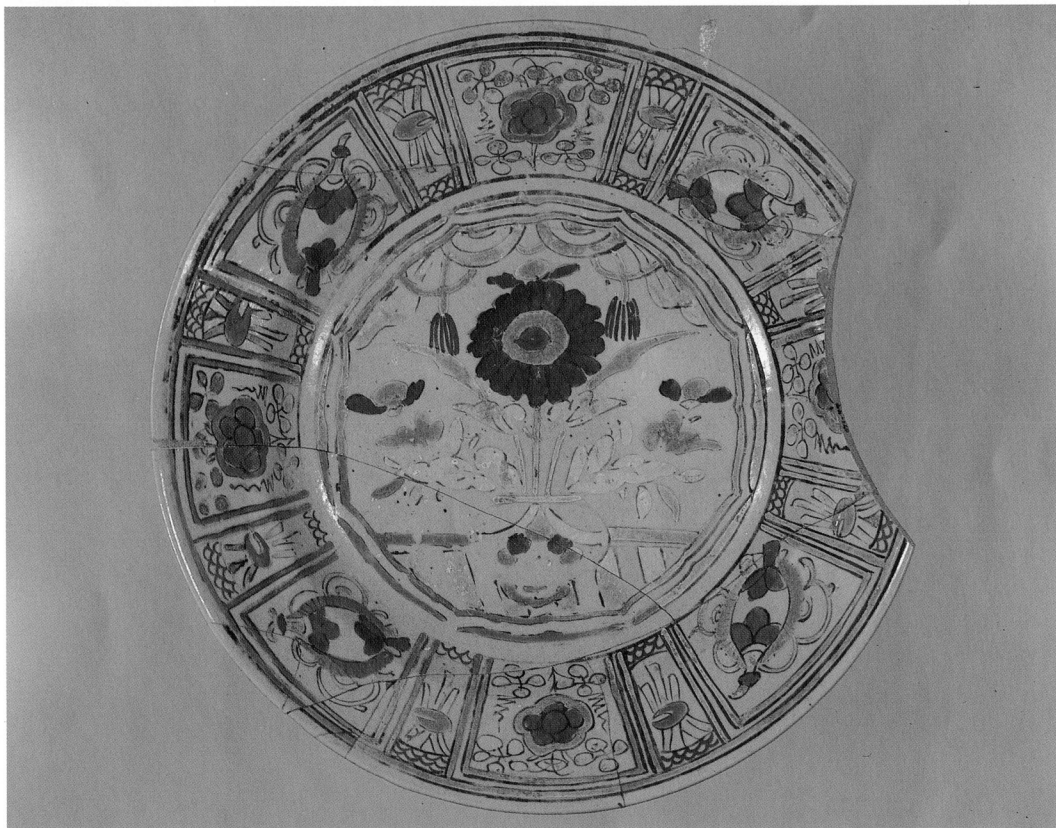
第1分冊 山上会館地点の調査

1990

東京大学埋蔵文化財調査室



発掘調査地全景 中央；山上会館地点 右；御殿下記念館地点（左は三四郎池）

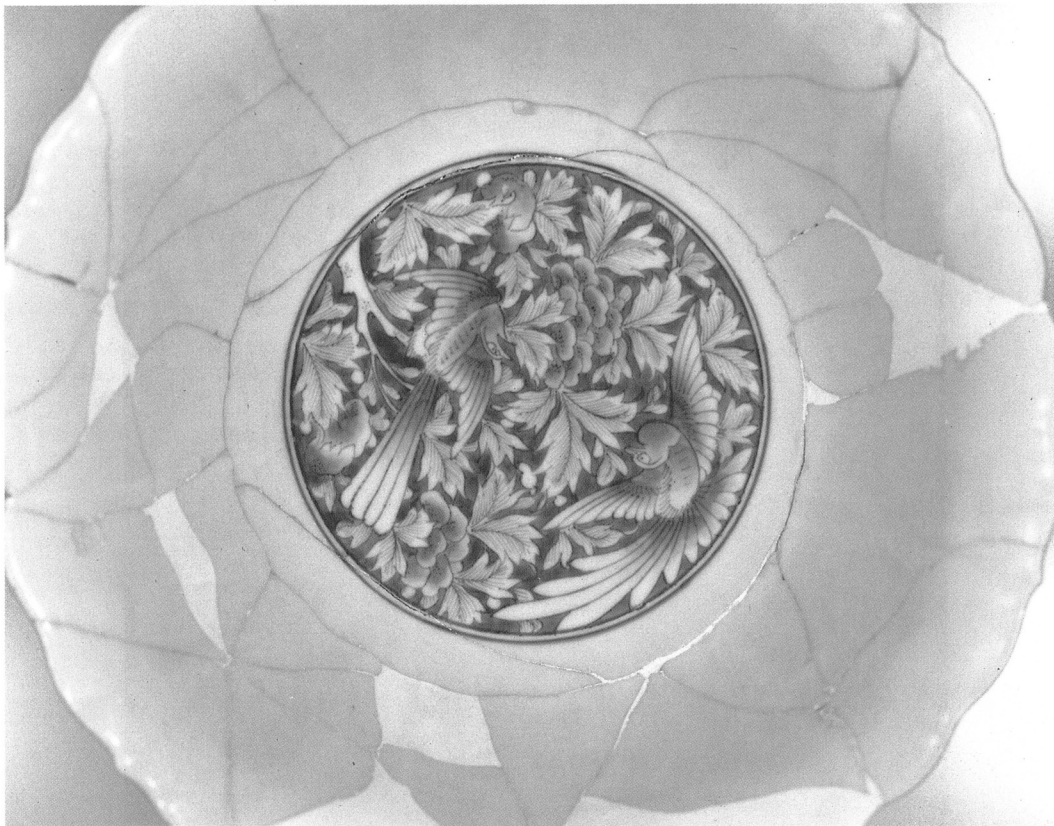


色絵磁器 上；芙蓉手大皿 下；再興九谷碗

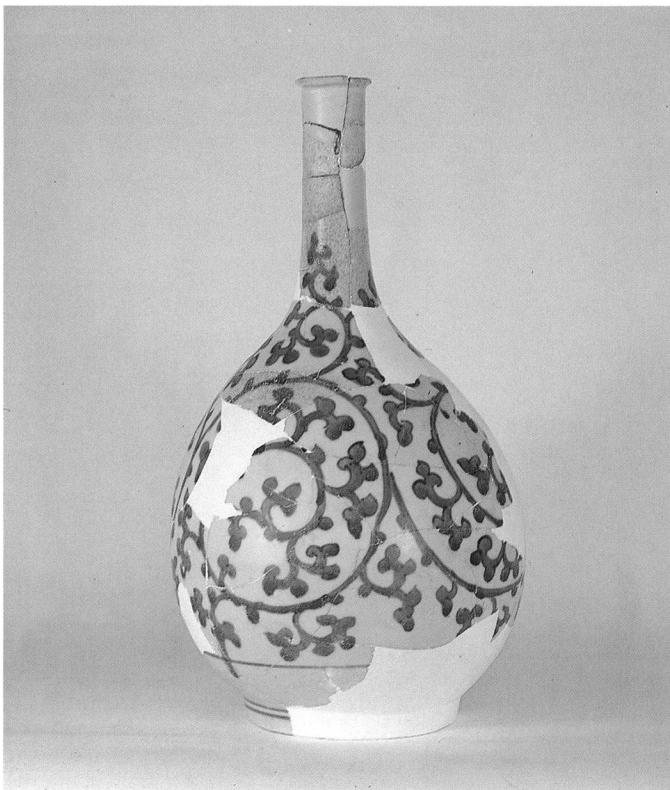


染付磁器 大皿

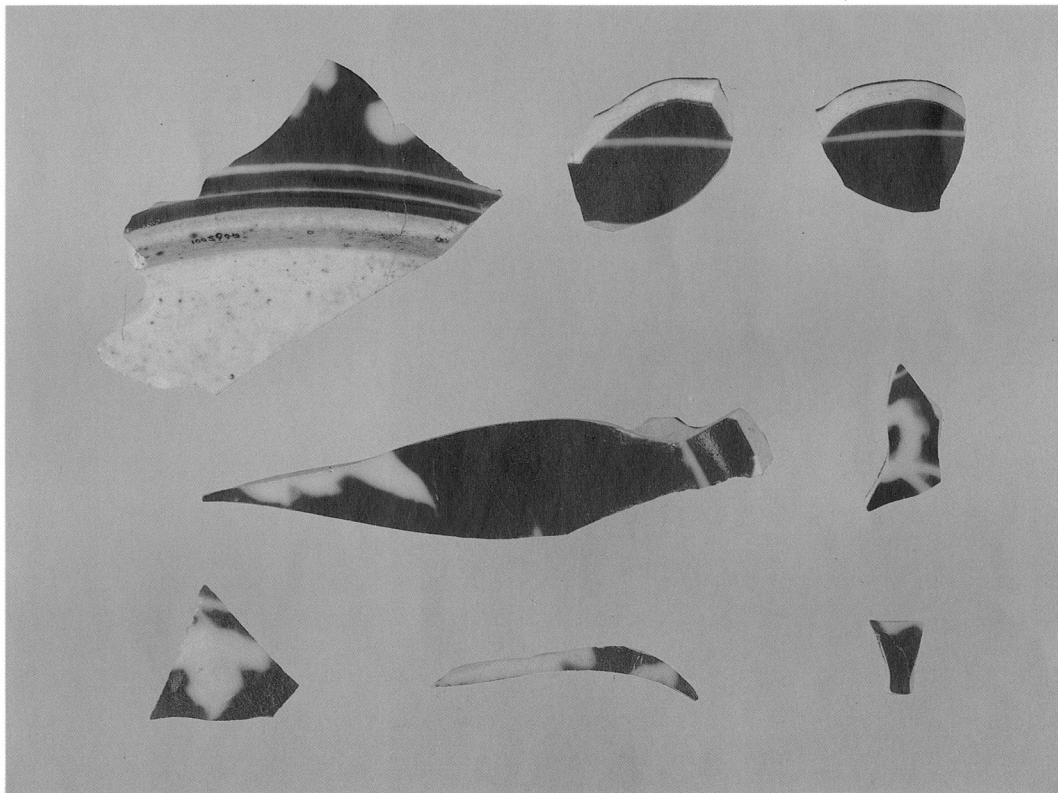
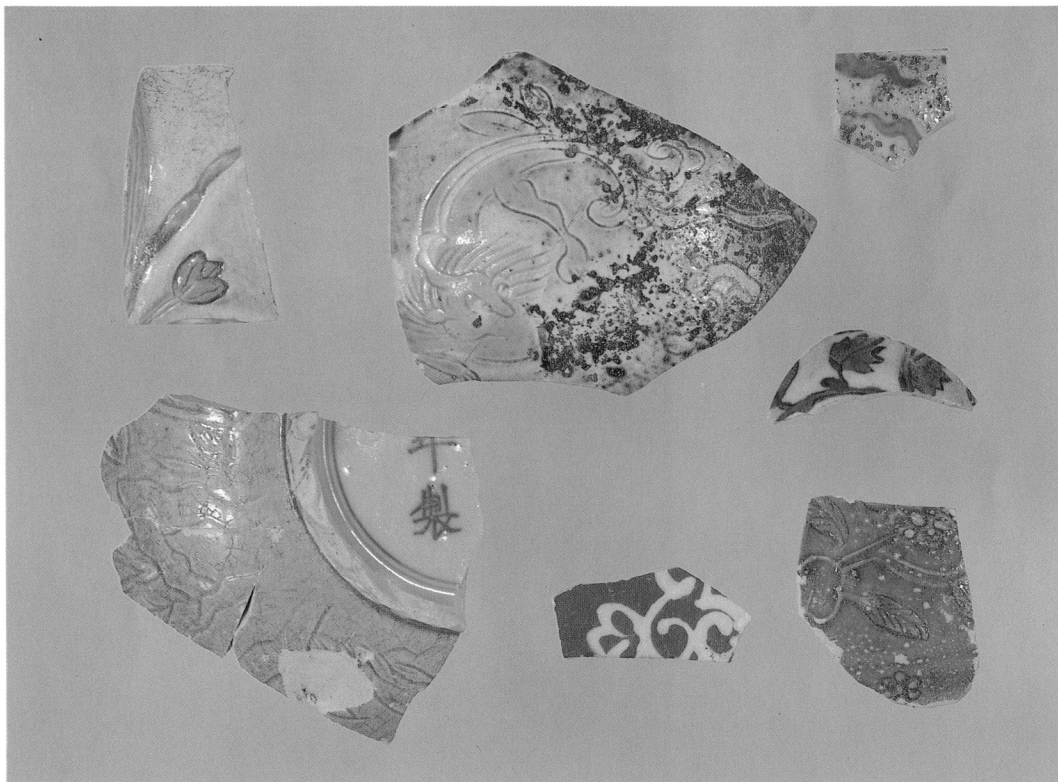
口絵4



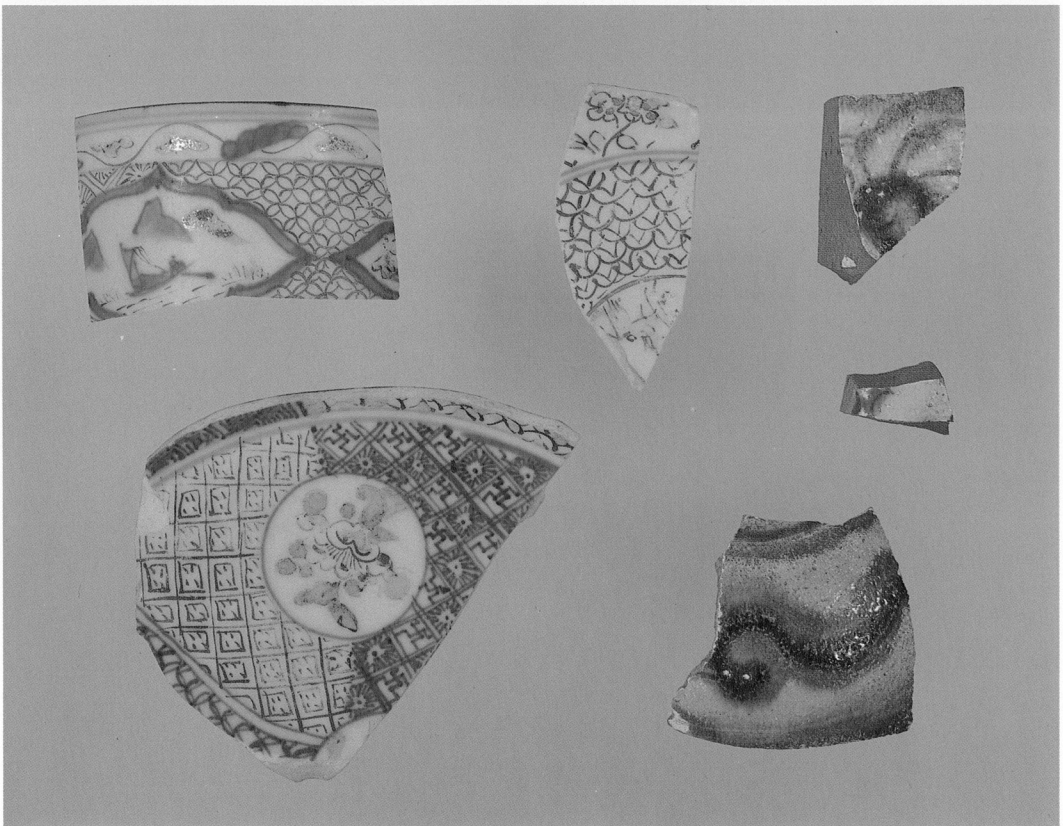
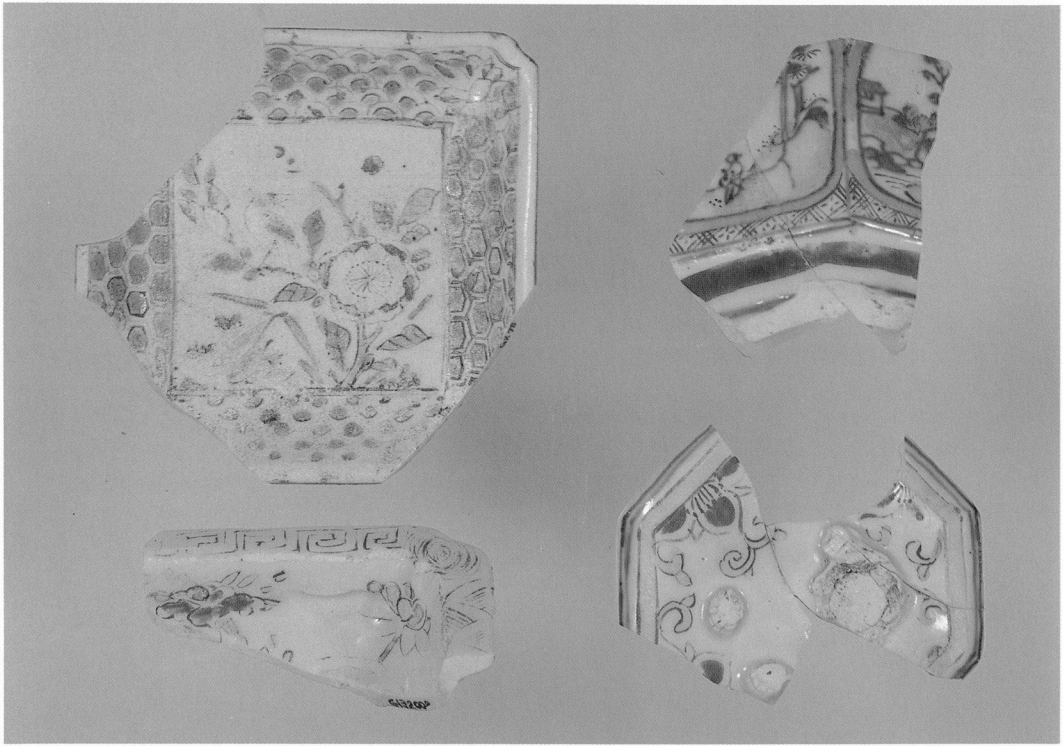
染付磁器 鉢



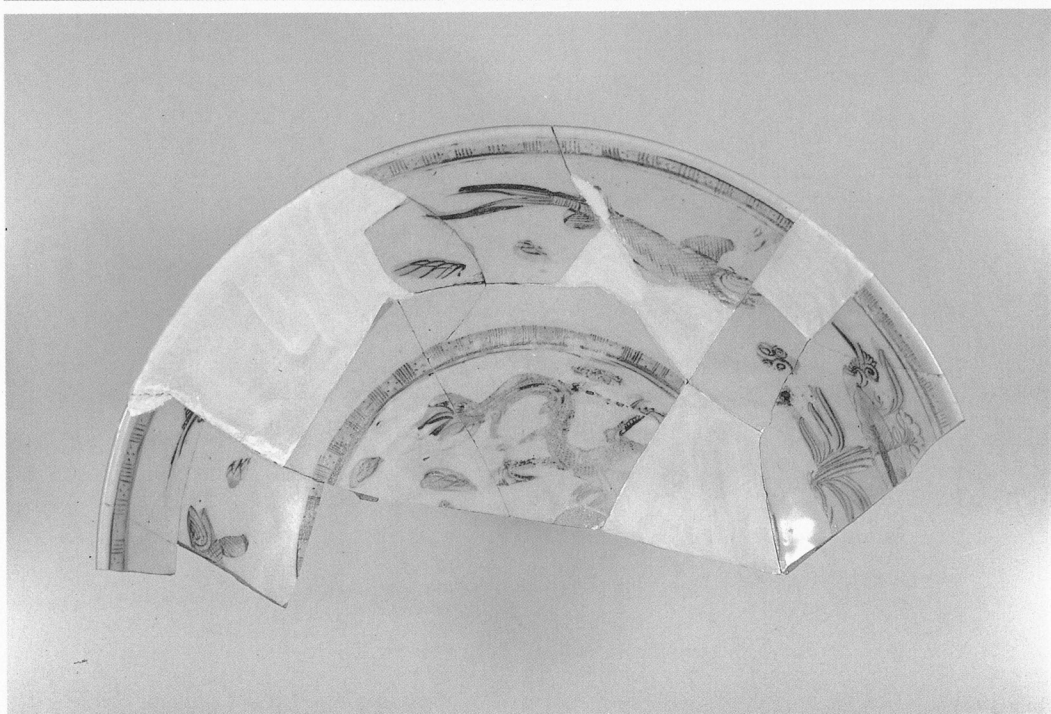
染付磁器 上：壺 下：瓶



船載磁器



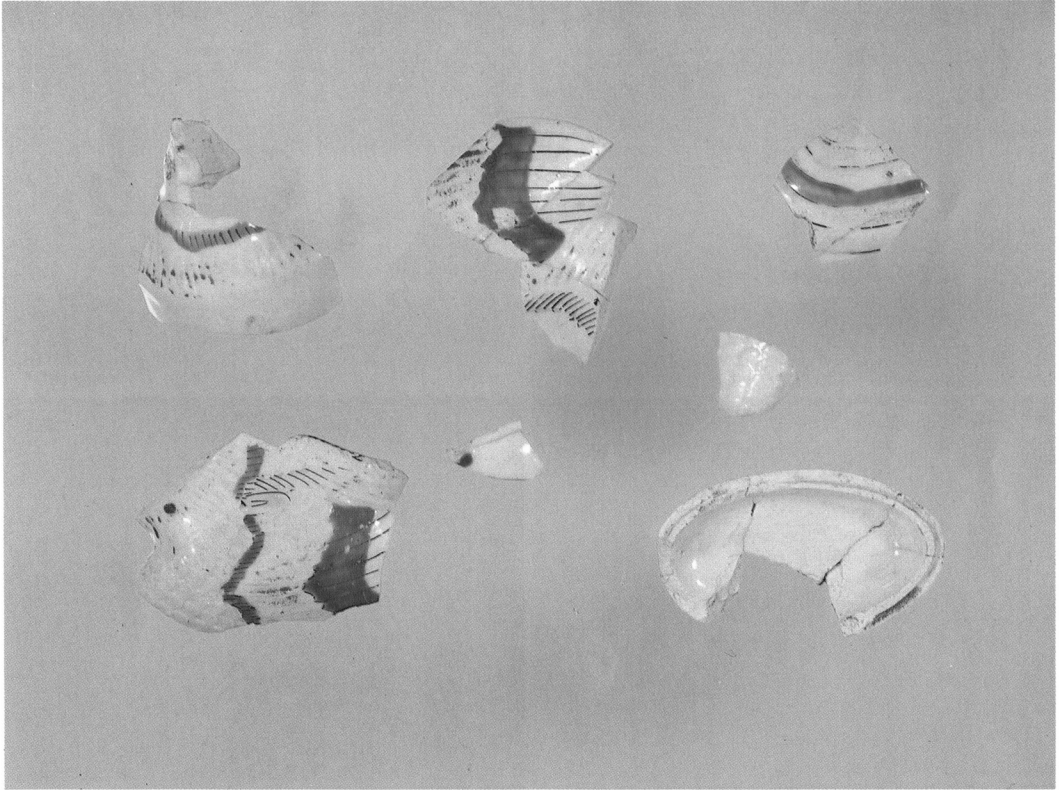
舶載色絵陶磁器



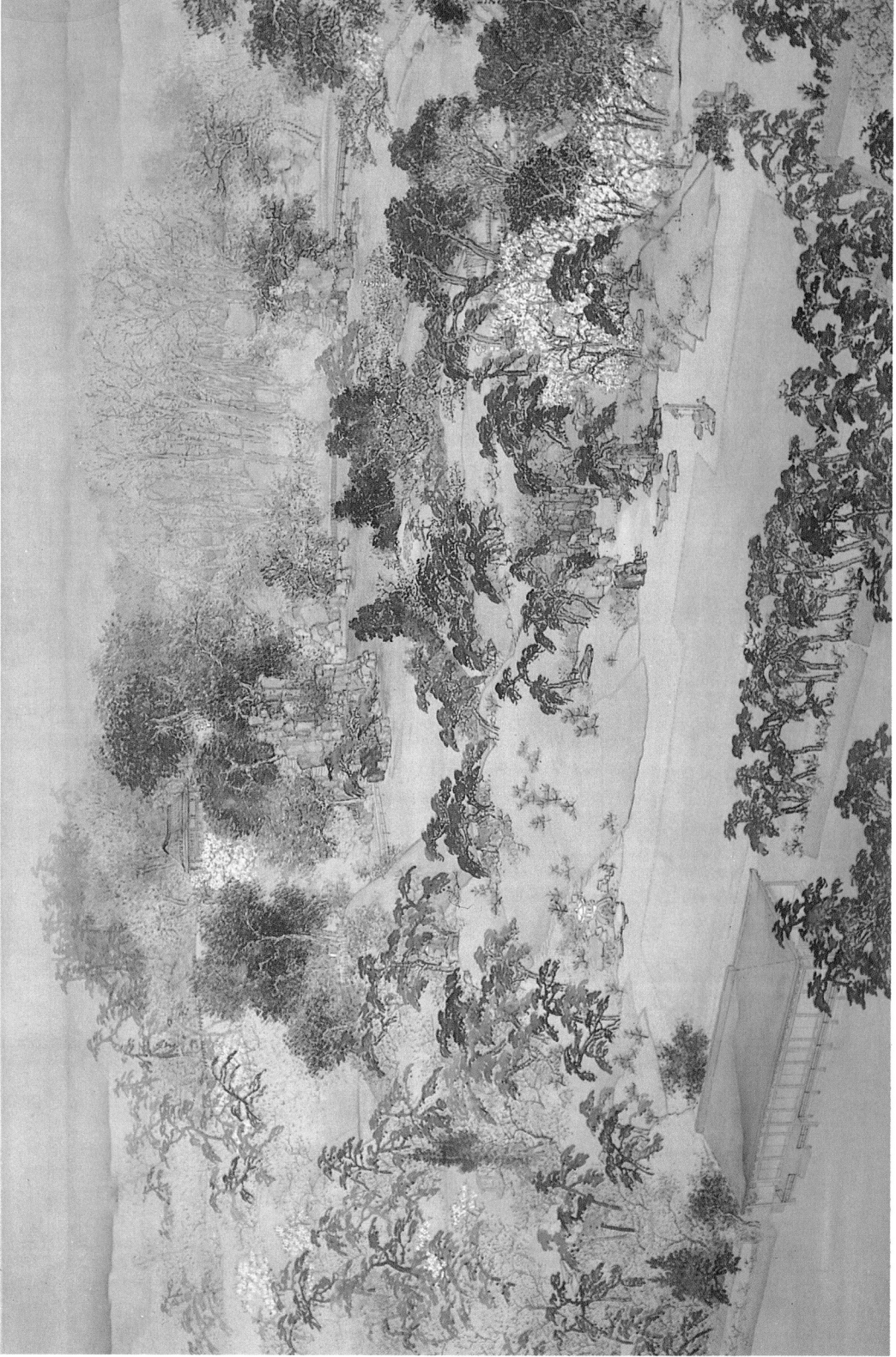
舶載色絵磁器



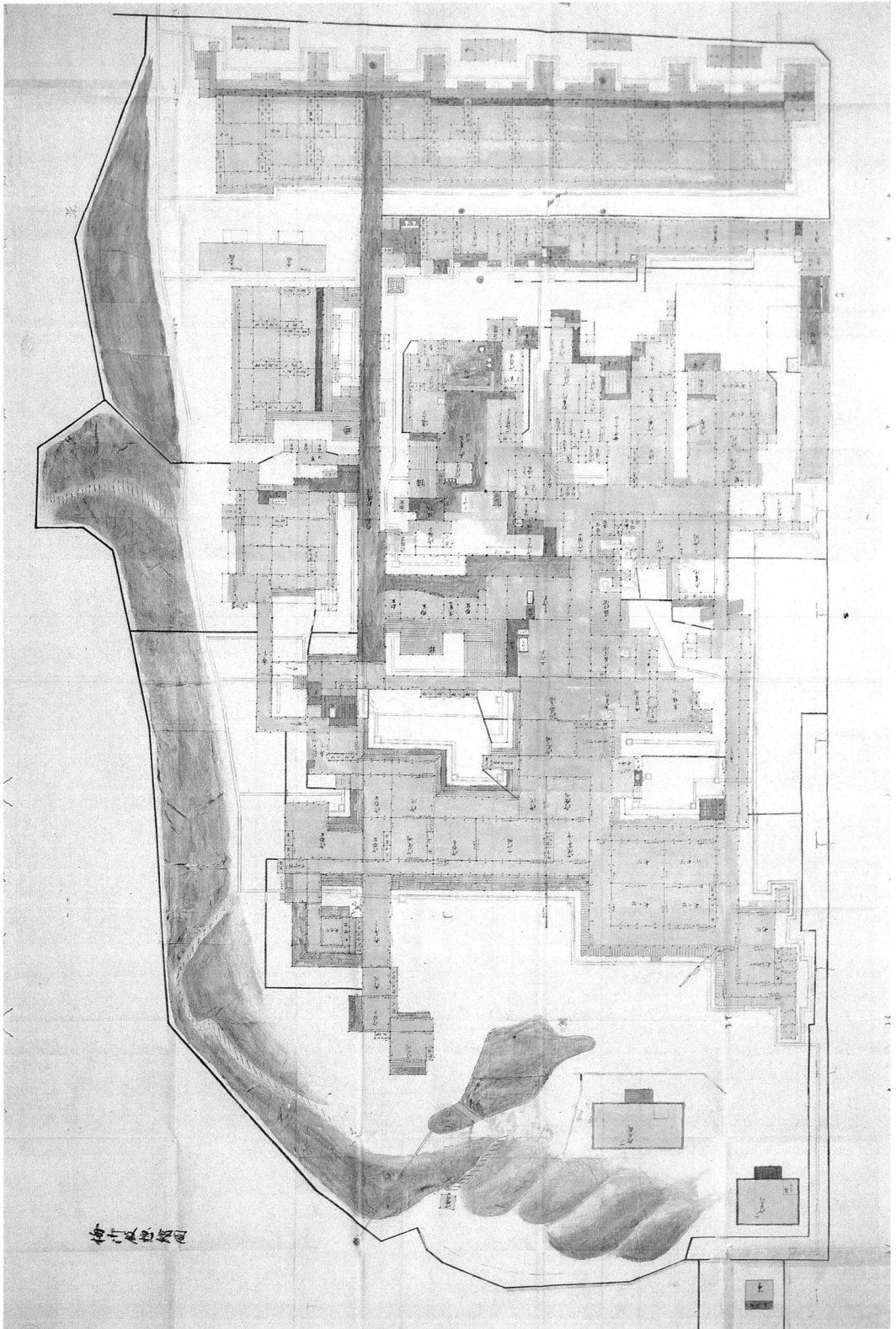
色絵磁器および陶器



上；色絵磁器(香合) 下；金箔瓦

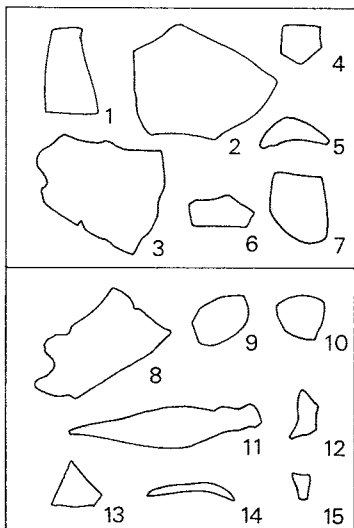


育徳園図 (財団法人前田育徳会尊経閣文庫所蔵, 16-9-1-1)

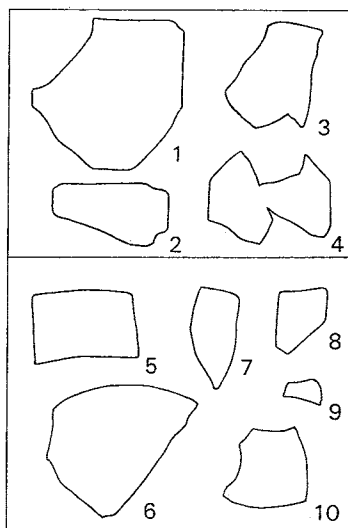


梅御殿惣御絵図（金沢市立図書館所蔵加越能文庫，特16.18—165）

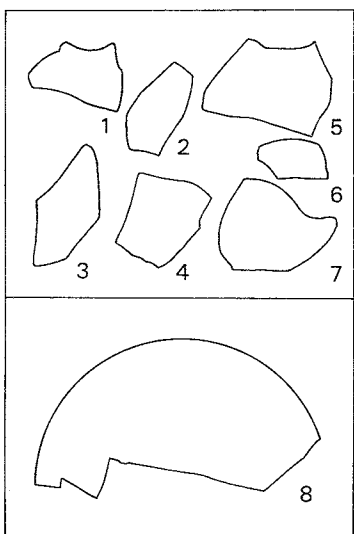
口絵 6



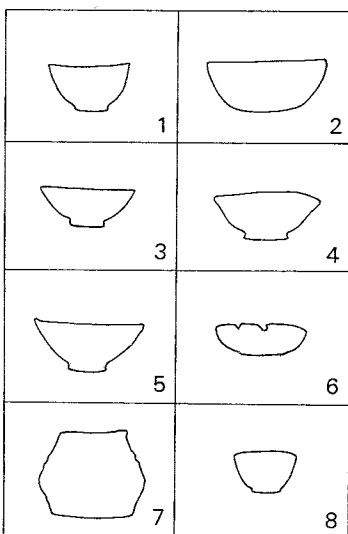
口絵 7



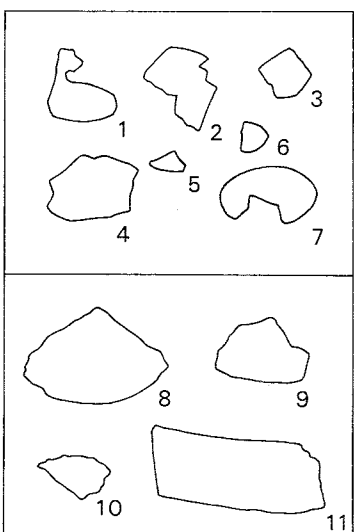
口絵 8



口絵 9



口絵 10



序 文

このたび東京大学本郷構内山上会館地点・御殿下記念館地点の埋蔵文化財発掘調査報告書が刊行されることとなった。1983年の両施設設計の完成以来、あしかけ8年の歳月をかけて、事業の完了を見たことは喜びに堪えない。

東京大学創立百年記念事業後援会では、事業の一環として体育館と学術会館の建設を計画した。ところが当キャンパスでは縄文時代・弥生時代の遺物が数か所で発見されており、体育館予定地に隣接した付属病院前は、弥生式土器発見地として東京都の遺跡地図に記載があった。このため東京都教育委員会などと協議した結果、試掘調査を行うことになった。

その結果によると、江戸時代の遺構・遺物が発見され、本格的な発掘調査が必要であるとの勧告を受けた。このため同後援会では東京大学と協議し、1983年11月に臨時遺跡調査委員会を設け、文学部考古学研究室の教官を中心として遺跡調査室を組織して調査に臨むことになった次第である。

試掘調査は面積も極めて限られていたものであり、また江戸という都市遺跡を発掘するという経験が学内で蓄積されていなかったため、当初はかくも長期の調査期間を予測することができなかった。発掘の進行に伴って、江戸の土木工事が大規模でしかも幾度となく繰り返して整地・建築が行われていた事実が明らかになり、長期戦の様相を呈してきた。

同後援会では、上野佳也室長をはじめとする遺跡調査室の活動に、可能な限りの便宜を図ってきたが、その成果がこの報告書に結実しているのを目にすると感慨深いものがある。

前田家の上屋敷をほぼそのまま踏襲している東京大学では、赤門などに当時のたたずまいを残しているが、今回の発掘調査によって構内の地下に予想以上に良好な状態で、当時の遺跡が眠っていることが確認されたことは驚きであった。また、発見された陶磁器類は最近の研究に大きなインパクトを与える資料として、高く評価されていると聞いている。

発掘と同時に行って頂いた文献史学からの調査では、江戸時代を通じての加賀藩江戸屋敷の様子を知ることができる数多くの絵図などが集められ、これらを基にして藩邸研究が進められ、本報告書にもその成果が収録されている。

本学では、今後も益々構内の再開発を行う必要に迫られており、これに伴って埋蔵文化財は避けて通れない問題となっている。幸いに学内の理解を得て遺跡調査室は東京大学埋蔵文化財調査室として再発足することになり、調査体制の一応の条件は揃ったといえよう。実際の運営については関係者の協議によって内容が定まってゆくのであろうが、今後長期にわたる調査の積み重ねの中から、当キャンパスの前史が鮮やかによみがえることを期待するものである。

東京大学総長

有馬朗人

序 文

東京大学本郷キャンパスは、古く弥生式土器の名称の発祥の地として著名であり、また縄文土器や先土器時代の遺物なども発見されている。地形からみても、本郷台地の先端部分にあたり、居住地としての環境に恵まれていたといえよう。江戸時代には加賀藩邸が営まれ、その面影が「赤門」や三四郎池を中心とした園池区域に残されている。

東京大学創立百年記念事業の一環として、山上会議所の建て替えと体育館の新設が決定され、これに伴って予定地の試掘調査が行われた。この結果、両地点ともに江戸時代の建築遺構などが、良好な状態で残されていることが確認された。近年、文献が多く残されている近世についても、発掘調査で得られる情報量が極めて多いことが確認されており、特に江戸時代における中心地であった江戸の、大名屋敷の発掘調査によって得られる資料は大きなものであることが予想されたのである。このため東京大学および創立百年記念事業後援会は、東京都とも協議の上、学内に遺跡調査室を設けて、本調査を実施することとなった。

調査は、まず山上会館地点を1984年から行い、終了後1986年から88年に御殿下記念館地点について実施した。

調査結果は本報告書に詳しく述べられているが、江戸時代における藩邸内の土木・建設工事の規模が、当初の予想よりはるかに大きく、調査対象となる土量が、これまでの発掘調査では経験したことのない膨大なものになった。特に山上会館地点では、幾度も改修された大きな切り通し状の溝があり、先の見通しのつけにくい状況で、人力で掘り下げてゆくのは大変な苦勞であったようである。

また、御殿下記念館地点は、明治時代以降に東京大学が常にグラウンドとして使用しており、基礎の深い建物が造られなかったため、江戸時代の生活面がそのまま残されていた。約6000平方mの調査区域全体に、深さにして1.5～2 m、生活の面としては7～8面が順次堆積していたのである。この点も、人口の集積度の高い都市遺跡特有の点で、これらの生活面を一面ずつ調査する必要があった。従って、実際の調査面積は45000平方mほどに達し、調査期間も必然的に長期にわたることとなった。

しかし、この発掘調査によって得られた成果は大きく、江戸時代初期の下屋敷時代から始まり、17世紀末に上屋敷になってから幕末に至るまでのこの地点の移り変わりが、豊富な遺物とともに検証された意義は大変深いものといえよう。

さらに、発掘と並行して文献調査も積極的に行われた点を特に記しておきたい。近世遺跡の調査では、発掘の成果と文献学的な研究を互いに関連させ、検証してゆく中で、その地域の具体的な歴史観が形づくられて行くものであろう。この意味で、文献調査についても深い理解を

示された後援会および東京大学に敬意を表したい。

今後、本郷キャンパスの再開発を行うにあたって、埋蔵文化財の問題は常についてまわることになる。このたび、埋蔵文化財調査室が学内の議を経て設置されたことはひとつの大きな前進であるが、この機能を学内全体で育てることを望むと同時に、室員諸氏の一層の努力を期待するものである。

東京大学遺跡調査室顧問

元東京大学教授

齊 藤 忠

例 言

1. 本報告書は東京大学創立百年記念事業の一環として建設された山上会館および御殿下記念館の建設に伴って実施した発掘調査の報告である。
2. 調査地は東京都文京区本郷7丁目3番地1号東京大学本郷構内で、調査面積は山上会館地点が約1500㎡、御殿下記念館地点が約6000㎡であった。
3. 発掘調査および整理・刊行にかかる経費は東京大学創立百年記念事業後援会が負担しこれに伴う事務は事務局庶務部広報企画課（現在は庶務部庶務課広報室）が行った。
4. 発掘調査は、東京大学臨時遺跡調査委員会および遺跡調査実施委員会のもとで、東京大学遺跡調査室（室長 上野佳也）が行った。調査担当者は、山上会館地点が西田泰民・谷 豊信・大貫（小川）静夫、御殿下記念館地点が寺島孝一・大貫・倉林真砂斗であった。
5. 生産技術研究所村井俊治教授に、気球による遺跡の撮影をお願いした。
6. 富山大学広岡公夫教授には熱残留時期による年代測定をお願いし、本報告書に原稿をいただいた。
7. 農学部岡野 健教授および杉山淳司・安藤博康氏には、出土した木製品の材質調査をお願いし、原稿をいただいた。
8. 早稲田大学金子浩昌先生には動物遺存体の調査をお願いし、原稿をいただいた。他にも多くの方々のご教示・ご指導を受けている。
9. 執筆の分担は次のとおりである。
I-1 寺島孝一 I-2 寺島・西田泰民 I-3 寺島 II-1 寺島 II-2 武藤康弘 III-1, 2 武藤 III-3 鈴木裕子
第1部 第1章西田 第2章第1節 西田 第2節 各文末に記載 第3節 西田 第4節 安芸毬子 第5節 加藤 晃 第6節 黒田 晃 第3章第1, 3, 4節 西田 第2節 黒田 あとがき 西田
第2部 第1章 寺島 第2章 武藤 第3章第1節 鈴木, 渡辺ますみ 第2節 加藤, 金子 智 第3節 黒田 第4節 黒田 第5節 西股総生 第6節 安芸 あとがき 寺島
第3部 各章または節のはじめに記載
10. グリッドは真北より1°50'30"東に振れている。国土座標系との関係は第1分冊の第3図に示した。なお、挿図中の方位は真北を示している。
11. 山上会館地点のI・II・III……期と御殿下記念館のそれとは対応関係にない。それぞれの地点の遺構・遺物の状況に応じて時期設定したため、今後の構内の調査の進行に応じて、統一的な時期設定を行ってゆきたい。
12. 東京大学遺跡調査室は1989年7月に組織替えにより東京大学埋蔵文化財調査室となった。また、転職・退職者もあり複雑になるため、発掘調査時および原稿執筆時の所属をそのまま用いている。
13. SUMMARYの英訳は文学部考古学研究室のMark Hudsonをお願いした。
14. 本報告書の編集は、武藤・西田の協力を得て寺島が行った。

SUMMARY

These three volumes report the results of salvage excavations preceding the construction of the Sanjo Conference Hall and the Gotenshita Memorial Arena. These buildings were constructed by University of Tokyo Centennial Society. This circumstances, the Temporary Archaeological Excavation Committee was formed in 1983. Under the supervision of this committee, the Archaeological Excavation Unit carried out salvage excavations from March 1983 to June 1988.

In the Edo period a large part of the University of Tokyo was the property of the Maeda family, feudal lords of the Kaga Clan. The property of the Maedas was established in 1617 or '18. At first the property was used as the *shimo-yashiki* (sub property). From 1688 to 1868, it was used as the *kami-yashiki* (main property) where the feudal lord himself lived. Besides the archaeological excavations, research on historical documents and maps was carried out. Thus we can compare the distribution pattern of excavated features with the pattern shown on historical maps both to check the accuracy of historical documents and to determine the function of features.

The Sanjo Conference Hall area is identified as the eastern part of the Ikutokuen-garden located in the center of the Maeda property. The main features excavated in this area were stone walls and ditches dating to 17th~18th centuries. Most of the stone blocks used for the wall have incised trade-marks. Some of the ditches are considered to have been used as paths in the Ikutokuen-garden. Although few artifacts were excavated in this area, imported porcelian from China, Korea and Europe are very important for the study of the ceramic trade in the 17th century.

The Gotenshita Memorial Arena site can be stratigraphically divided into three main phases:

I) 1688~1703: the excavation area was part of the *kami-yashiki* (main property). Gravel walks and house ruins were excavated. The gravel paths were arranged in a T-shaped pattern and divided the site into three sections. The western section near Ikutokuen-garden was used as a *sototsubone* (womens' residence). The other two sections were used as *yakusho* (administrative offices). The house of high-ranking retainer *kashirabun-ichi* (rank name) was found in the north-eastern corner of the site. Remains discovered consist of foundation stones, post holes and cellars. Cellars are particularly common features in Edo sites,

displaying various forms and sizes.

II) Latter half of 18th century: this area was used as a riding ground and stables. Ruins of stables, a horse washing square and a store house for fodder were excavated. The stables consist of a line of post holes arranged in 2×2m squares with a rectangular lavatory pit in the center. The horse washing square is a rectangular space with drainage ditches and a drainage pit. Many roof tiles were excavated from the fodder store house. Artifacts relating to the included clay-bowls with "stables" written in ink on the bottom. Apart from the stables and a riding ground, a plum tree orchard is also known to have existed.

III) Earlier period of 19th century: the area became the Umenogoten-residence, a grand house built for the wife of former lord after his demise and named after the previous plum orchard. This residence had an *Ojoguchi* gate which parted the public from the private rooms, and a typical high class house in the Edo period. The excavated area covers half of the whole Umenogoten-residence. Remains of the servants' rooms, entrance hall, store house, corridor, toilet, kitchen and workshops were excavated. Claybowls with "Umenogoten" written in ink on the bottom were also found.

Apart from these three main phases, other features included a rice store dating to the very end of the Edo period. Some very big rectangular holes from the early 17th century were also excavated but the function of these features is not known because of a lack of detail historical documentaton and maps.

Many artifacts were excavated from the Gotenshita Memorial Arena area. Most of them are ceramics. Examples of the earliest Hizen porcelain and imported porcelains from China, Ming-dynasty are very important for the study of the chronology, trade and consumption of ceramics during the Edo period.

東京大学本郷構内の遺跡
山上会館・御殿下記念館地点
発掘調査報告書 目 次

第1分冊

口絵

序文

例言

summary

| | |
|--------------------|-----|
| I 調査に至る経過 | 1 |
| II 遺跡の位置と環境 | 8 |
| III 江戸時代の遺構と遺物 | 14 |
| 第1部 山上会館地点の発掘調査 | |
| 第1章 調査の経過 | 29 |
| 第2章 遺構と遺物 | 33 |
| 第1節 近代の遺構 | 33 |
| 第2節 近世の遺構 | 38 |
| 1 概要 | 38 |
| 2 I期の遺構 | 38 |
| 3 II期の遺構 | 55 |
| 4 III期の遺構 | 62 |
| 第3節 陶磁器類 | 93 |
| 第4節 人形・小物類 | 142 |
| 第5節 瓦類 | 144 |
| 第6節 金属製品・石製品 | 184 |
| 第3章 考察 | 190 |
| 第1節 藩邸絵図と遺構の対比 | 190 |
| 第2節 石垣の刻印について | 194 |
| 第3節 出土した輸入陶磁器類について | 197 |
| 第4節 遺構から出土した蛎殻について | 200 |
| あとがき | 203 |
| 写真図版 | |

挿 図 目 次

| | |
|--|---|
| <p>第1図 遺跡位置図……………3</p> <p>第2図 発掘調査地位置図……………4</p> <p>第3図 発掘区設定図……………9</p> <p>第4図 御殿下記念館地点, 旧地面測量図, 遺構分布図……………10</p> <p>第5図 ローム試掘坑断面図……………12</p> <p>第6図 陥穴 実測図……………15</p> <p>第7図 石器……………16</p> <p>第8図 縄文土器(1)……………18</p> <p>第9図 縄文土器(2)……………19</p> <p>第10図 縄文土器(3), 弥生土器……………20</p> <p>第11図 縄文土器(4)……………21</p> <p>第12図 1号住居址実測図及び出土遺物……………22</p> <p>第13図 2号住居址実測図……………23</p> <p>第14図 2号住居址出土遺物……………23</p> <p>第15図 古墳時代～室町時代の遺物……………25</p> <p>第16図 E-1mライン, 15ライン断面図……………30</p> <p>第17図 17ライン, 19ライン断面図……………31</p> <p>第18図 近代遺構実測図……………34</p> <p>第19図 山上会議所, 御殿の変遷……………35</p> <p>第20図 山上御殿基礎……………36</p> <p>第21図 明治期の本郷キャンパス……………37</p> <p>第22図 I期全体図……………39</p> <p>第23図 1・194・197号遺構実測図……………40</p> <p>第24図 105号遺構実測図……………41</p> <p>第25図 105号遺構実測図……………42</p> <p>第26図 11・107・147・149・150・164・177・ 180・181・182・186・191・193・195号 遺構実測図……………43</p> <p>第27図 150・11・200号遺構実測図……………45</p> <p>第28図 100・202号遺構実測図……………46</p> <p>第29図 100・202号遺構断面図……………47</p> <p>第30図 164・177・180・181・182・186・193・ 193a号遺構実測図……………52</p> <p>第31図 155・199号遺構実測図……………53</p> <p>第32図 II期全体図……………56</p> <p>第33図 76・117・118・160・161・168・175号 遺構実測図……………57</p> <p>第34図 76・175号遺構断面図……………58</p> <p>第35図 36・126・183・184・185号遺構 実測図……………60</p> <p>第36図 137・157・158号遺構実測図……………61</p> | <p>第37図 III期全体図……………64</p> <p>第38図 3号遺構・石垣実測図……………65</p> <p>第39図 3号遺構断面図……………66</p> <p>第40図 4号遺構実測図……………67</p> <p>第41図 6号遺構実測図……………70</p> <p>第42図 33号遺構実測図……………71</p> <p>第43図 49号遺構実測図……………72</p> <p>第44図 9・110・111・119・127・128・144号 遺構実測図……………74</p> <p>第45図 40・153・53・136号遺構実測図……………75</p> <p>第46図 21・178・179号遺構実測図……………76</p> <p>第47図 69・90・94・101号遺構実測図……………79</p> <p>第48図 34号遺構実測図, 遺物出土状況図……………80</p> <p>第49図 5号遺構実測図……………81</p> <p>第50図 30号遺構実測図……………82</p> <p>第51図 12・58・96・102号遺構実測図……………83</p> <p>第52図 15・16・17・39・88号遺構実測図……………88</p> <p>第53図 93・129・130・133・124・139号遺構 実測図……………89</p> <p>第54図 72・122・142・169・170・171・172・ 173号遺構実測図……………90</p> <p>第55図 169～173号遺構実測図……………91</p> <p>第56図 磁器碗類……………94</p> <p>第57図 磁器碗, 坏類……………95</p> <p>第58図 陶器碗類……………97</p> <p>第59図 蓋物類……………98</p> <p>第60図 磁器皿類(1)……………99</p> <p>第61図 磁器皿類(2)……………100</p> <p>第62図 磁器皿類(3)……………101</p> <p>第63図 磁器皿類(4)……………102</p> <p>第64図 磁器皿類(5)……………103</p> <p>第65図 磁器皿類(6)……………104</p> <p>第66図 磁器皿類(7)……………105</p> <p>第67図 磁器皿類(8)……………106</p> <p>第68図 磁器皿類(9)……………107</p> <p>第69図 磁器鉢類……………108</p> <p>第70図 磁器皿類(10)……………109</p> <p>第71図 磁器皿類(11)……………110</p> <p>第72図 磁器皿類(12)……………111</p> <p>第73図 磁器皿類(13)……………112</p> <p>第74図 磁器皿類(14)……………113</p> <p>第75図 磁器, その他(1)……………116</p> |
|--|---|

| | | | | | |
|-------|--|-----|-------|--|-----|
| 第76図 | 磁器, その他(2) …………… | 117 | 第104図 | 105号遺構瓦集中層出土瓦(6) 切平瓦(3)・ 熨斗瓦…………… | 163 |
| 第77図 | 陶器皿, その他 …………… | 118 | 第105図 | 105号遺構瓦集中層出土瓦(7) 道具瓦(2), 150号遺構出土瓦(1) …………… | 164 |
| 第78図 | 陶器鉢類(1) …………… | 120 | 第106図 | 150号遺構出土瓦(2) 丸瓦 …………… | 165 |
| 第79図 | 陶器鉢類(2) …………… | 121 | 第107図 | 140号瓦集中層出土瓦(1) 軒丸瓦(1) …… | 166 |
| 第80図 | 瓶類 …………… | 122 | 第108図 | 140号瓦集中層出土瓦(2) 軒丸瓦(2) …… | 167 |
| 第81図 | 陶器壺, その他 …………… | 123 | 第109図 | 140号瓦集中層出土瓦(3) 軒丸瓦(3) …… | 168 |
| 第82図 | 摺鉢(1) …………… | 125 | 第110図 | 140号瓦集中層出土瓦(4) 軒丸瓦(4)・ 軒平瓦(1)…………… | 169 |
| 第83図 | 摺鉢(2) …………… | 126 | 第111図 | 140号瓦集中層出土瓦(5) 軒平瓦(2) …… | 170 |
| 第84図 | 摺鉢(3), その他 …………… | 127 | 第112図 | 140号瓦集中層出土瓦(6) 丸瓦(1) …… | 171 |
| 第85図 | かわらけ類 …………… | 128 | 第113図 | 140号瓦集中層出土瓦(7) 丸瓦(2)・熨 斗瓦・道具瓦…………… | 172 |
| 第86図 | 土物類(1) …………… | 129 | 第114図 | 140号瓦集中層出土瓦(8) 平瓦(1) …… | 173 |
| 第87図 | 土物類(2) …………… | 130 | 第115図 | 140号瓦集中層出土瓦(9) 平瓦(2), 海 鼠瓦…………… | 174 |
| 第88図 | ミニチュア, 人形類 …………… | 143 | 第116図 | 軒丸瓦(1)…………… | 175 |
| 第89図 | 36号遺構出土瓦(1) 軒丸瓦・軒平瓦・ 丸瓦(1)・熨斗瓦(1) …………… | 148 | 第117図 | 軒丸瓦(2)・軒平瓦(1)…………… | 176 |
| 第90図 | 36号遺構出土瓦(2) 丸瓦(2)・熨斗瓦(2) | 149 | 第118図 | 軒平瓦(2)…………… | 177 |
| 第91図 | 36号遺構出土瓦(3) 熨斗瓦(3) …… | 150 | 第119図 | 軒平瓦(3) 軒棧瓦(1)…………… | 178 |
| 第92図 | 36号遺構出土瓦(4) 平瓦・海鼠瓦 …… | 151 | 第120図 | 軒棧瓦(2)…………… | 179 |
| 第93図 | 39号遺構出土瓦, 49号遺構出土瓦(1) …… | 152 | 第121図 | 軒棧瓦(3) 丸瓦 熨斗瓦(1)…………… | 180 |
| 第94図 | 49号遺構出土瓦(2) 海鼠瓦・平瓦 …… | 153 | 第122図 | 熨斗瓦(2) 道具瓦(1)…………… | 181 |
| 第95図 | 88号遺構出土瓦, 4号遺構出土瓦 …… | 154 | 第123図 | 道具瓦(2) 海鼠瓦…………… | 182 |
| 第96図 | 93号遺構出土瓦 …………… | 155 | 第124図 | 埴, 刻印 金箔瓦…………… | 183 |
| 第97図 | 97号遺構出土瓦 …………… | 156 | 第125図 | 金属製品…………… | 185 |
| 第98図 | 100号遺構出土瓦, 150号遺構出土瓦 …… | 157 | 第126図 | 金属製品…………… | 186 |
| 第99図 | 105号遺構瓦集中層出土瓦(1) 軒丸瓦・ 軒平瓦・丸瓦(1)…………… | 158 | 第127図 | 金属製品…………… | 187 |
| 第100図 | 105号遺構瓦集中層出土瓦(2) 丸瓦(2) | 159 | 第128図 | 金属製品…………… | 188 |
| 第101図 | 105号遺構瓦集中層出土瓦(3) 丸瓦(3)・ 平瓦(1)…………… | 159 | 第129図 | 石製品…………… | 189 |
| 第102図 | 105号遺構瓦集中層出土瓦(4) 平瓦(2)・ 切平瓦(1)…………… | 161 | 第130図 | 発掘区と旧地形…………… | 191 |
| 第103図 | 105号遺構瓦集中層出土瓦(5) 切平瓦(2)・ 道具瓦(1)…………… | 162 | 第131図 | 磁器片拡大写真…………… | 198 |

表 目 次

| | | | | | |
|-----|----------------------------------|-----|-----|---------------|-----|
| 第1表 | 陶磁器観察表 …………… | 132 | 第3表 | 石垣刻印一覧表 …………… | 196 |
| 第2表 | 山上会館地点, 御殿下記念館地点共通遺物 一覧表…………… | 140 | | | |

写真目次

- | | | | |
|------|--------------------------|------|------------------------|
| 写真1 | 上；陥穴 下；2号住居跡 | 写真26 | 34号遺構 |
| 写真2 | 縄文土器 | 写真27 | 34号遺構遺物出土状況 |
| 写真3 | 縄文土器 弥生土器 | 写真28 | 12号遺構 |
| 写真4 | 古墳時代以降出土遺物 | 写真29 | 左；142号遺構 右；58号遺構 |
| 写真5 | 11・150号遺構全景 | 写真30 | 上；88号遺構石出土状況。下；88号遺構全景 |
| 写真6 | 140号瓦層 | 写真31 | 左；157号遺構 右；30号遺構 |
| 写真7 | 左；200号遺構 右；11,150号遺構 | 写真32 | 上；39号遺構 右；49号遺構 |
| 写真8 | 150号遺構 | 写真33 | 上；山上御殿基礎 下；同廊下部分 |
| 写真9 | 上；11号遺構 下；317区礎石 | 写真34 | 150号遺構石垣刻印 |
| 写真10 | 100・202号遺構 | 写真35 | 陶磁器類(1) |
| 写真11 | 上；202号遺構 下；1号遺構 | 写真36 | 陶磁器類(2) |
| 写真12 | 上；105号遺構発掘状況 下；105号遺構 | 写真37 | 陶磁器類(3) |
| 写真13 | 左；105号遺構北部分 右；105号遺構南部分 | 写真38 | 陶磁器類(4) |
| 写真14 | 上；発掘区北端 下；155・199号遺構 | 写真39 | 陶磁器類(5) |
| 写真15 | 上；97・6号遺構など 下；117・118号遺構 | 写真40 | 陶磁器類(6) |
| 写真16 | 上；36号遺構 下；36号遺構 | 写真41 | 陶磁器類(7) |
| 写真17 | 上；76号遺構 下；76号遺構土瓦堆積状況 | 写真42 | 陶磁器類(8) |
| 写真18 | 上；3・4号遺構 下；3号遺構砂利面 | 写真43 | 陶磁器類(9) |
| 写真19 | 左；122号遺構 右；3号遺構 | 写真44 | 陶磁器類(10) |
| 写真20 | 上；3, 4号遺構 下；124号遺構 | 写真45 | 陶磁器類(11) |
| 写真21 | 上；3号遺構石垣 下；136号遺構 | 写真46 | 陶磁器類(12) |
| 写真22 | 上；21号遺構 下；21号遺構底面 | 写真47 | 陶磁器類(13) |
| 写真23 | 上；93号遺構井戸側 下；21号遺構 | 写真48 | 陶磁器類(14) |
| 写真24 | 5号遺構 | 写真49 | 陶磁器類(15) |
| 写真25 | 上；69号遺構 下；69号遺構底面 | 写真50 | 陶磁器類(16) |
| | | 写真51 | 金属製品 |

第2分冊目次

第2部 御殿下記念館の発掘調査

| | |
|-----------|-----|
| 第1章 調査の経過 | 1 |
| 第2章 遺構 | 5 |
| 第3章 遺物 | 94 |
| 第1節 陶磁器類 | 94 |
| 第2節 瓦類 | 476 |
| 第3節 金属製品 | 614 |
| 第4節 木製品 | 636 |
| 第5節 石製品 | 643 |

あとがき

写真図版

第3分冊目次

第3部 考察

| | |
|----------------------------|-----|
| 第1章 文献・絵図史料から見た加賀藩本郷邸 | 1 |
| はじめに 文献・絵図史料調査の経過 | 1 |
| 第1節 加賀藩本郷邸とその周辺 | 5 |
| 第2節 加賀藩本郷邸の全体図について | 24 |
| 第3節 育徳園 | 47 |
| 第4節 梅之御殿 | 60 |
| 資料1 加賀藩歴代藩主表・前田家系図 | 74 |
| 資料2 加賀藩藩主参勤交代表 | 76 |
| 資料3 『加賀藩資料』江戸藩邸関係綱文抄 | 81 |
| 資料4 加賀藩江戸藩邸絵図目録 | 128 |
| 第2章 瓦 | 140 |
| 第3章 土人形について | 204 |
| 第4章 東大構内御殿下記念館地点焼土の考古地磁気測定 | 215 |
| 第5章 御殿下記念館地点出土木製品の調査 | 221 |
| 第6章 ガラス製品の研究 | 229 |
| 第7章 山上会館地点出土の青磁片のPIXE分析 | 238 |
| 第8章 山上会館・御殿下記念館出土の動物遺存体 | 244 |
| 第9章 「梅之御殿」厠跡から検出されたPbについて | 362 |

後記

写真図版

I 調査に至る経過

1. 調査に至る経過

東京大学創立百年記念事業後援会は、記念事業の一環として、体育館と学会館の建設を計画した。このうち体育館は御殿下グラウンド北半部の地下に、また学会館は山上会議所を取り壊して建設することが決定され、1983年5月に設計が完成、8月から着工の予定であった。

ところが、東京大学本郷キャンパスは、本郷台地の東端に位置することから、遺跡の立地に適した場所であり、明治時代以降構内の数か所で遺物が採集されている。このうち体育館建設予定地近くの附属病院正面玄関近くでは、弥生式土器が発見されたと言われており、東京都の遺跡地図にも記載されている。

このため、東京都などと協議した結果、工事に先立って試掘調査を行うこととなった。

調査は8月に文京区教育委員会のもとで実施された。御殿下グラウンド北半部には2×2mのトレンチを6箇所設定して試掘を行ったところ、予想された弥生時代の遺物包含層に達する以前に、江戸時代の陶磁器・瓦や礎石が検出され、この時期の生活面が良好な状態で保存されていることが確認された。

この結果、東京都と文京区教育委員会は建設地全域の本調査を実施することを大学に勧告した。

また、9月には山上会議所の取り壊しと相前後して2回の試掘調査が行われた。その結果グラウンド地区と同様に、江戸時代の陶磁器や金箔瓦が出土し、石垣の一部も確認された。このため、この地点についても本調査の必要性が認められた。

これをうけて大学は11月に総長を委員長とする臨時遺跡調査委員会を設け、その下に遺跡調査室を組織して、84年から本調査を開始することが決定された。

本調査は、まず学会館（山上会館）地点を行い、終了後ただちに体育館（御殿下記念館）地点の調査を実施することとなった。

2. 調査室発足以前の本郷構内の遺跡調査

東京大学が設置された後、これまで本郷構内では次のような調査及び遺物採集がなされている。それぞれの番号は第1図中の番号に対応する。

| | | |
|----------|----------------------------|-----|
| 1885 (?) | 椿山調査 | |
| 1924 | 人類学教室倉庫跡より有角石斧出土 | 9 |
| 1963 (?) | 言問通り拡幅に伴う農学部塀改修の際遺物出土 | 7 |
| 1974 | 看護学校ケーブル埋設工事中地下室発見, 保存埋め戻し | 15 |
| 1975 | 向ヶ岡貝塚調査, 理学部3号館南遺跡確認 | 6.8 |
| | 大講堂前生協食堂工事に伴い遺物出土 | 10 |
| | 看護婦宿舎2号棟付近遺物表採 | 11 |
| 1977 | 史料編纂所前共同溝工事中地下室発見, 遺物採集 | 12 |
| 1982 | 経済学部試掘 | 13 |
| | 医学部3号館立ち会い調査 | |
| 1983 | 理学部9号館前試掘 | |

このほか正確な位置が分らないが、1928年の日本石器時代遺物発見地名表には帝国大学構内で石錘、打製石斧が採取されたことが記録されている。

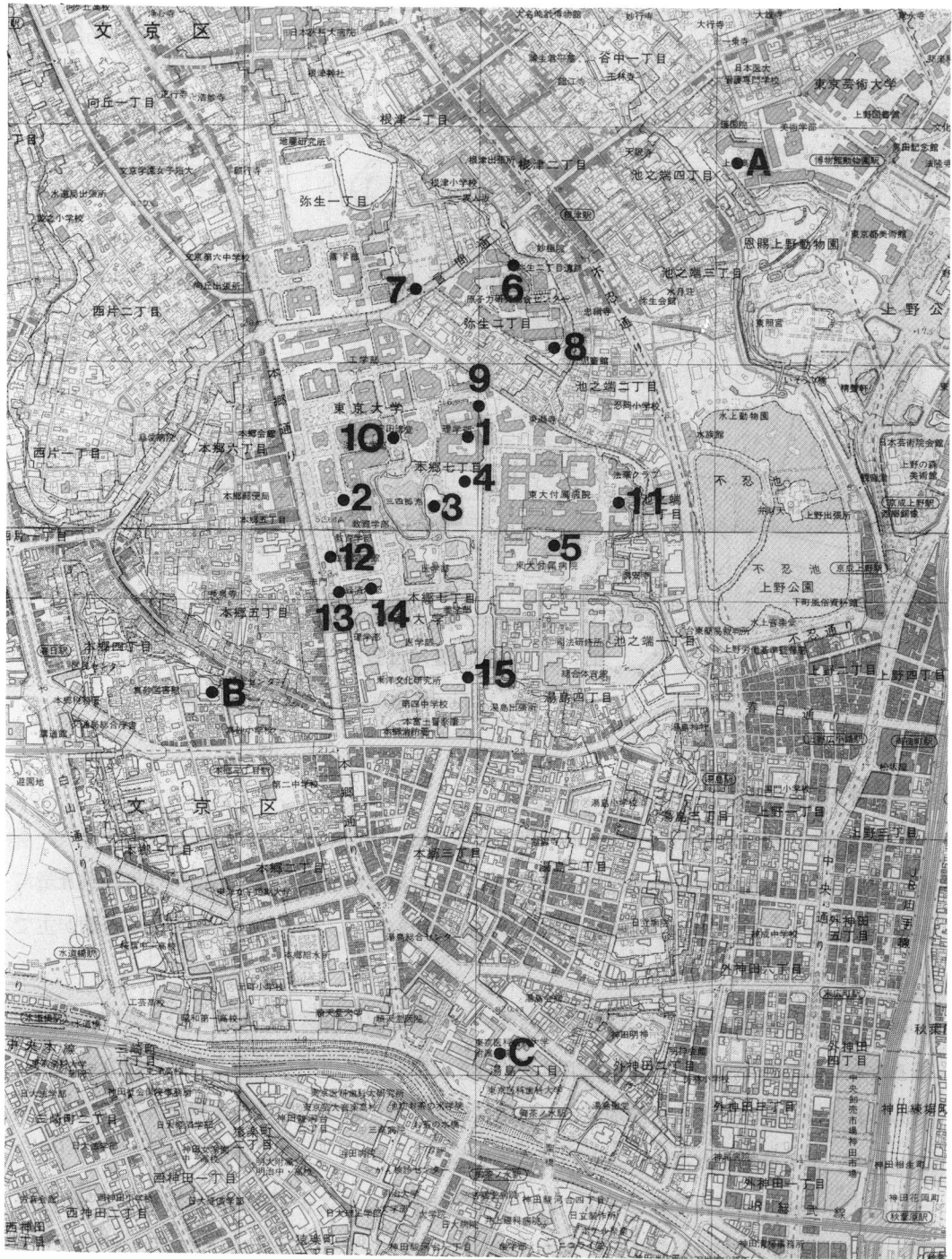
有坂の記録によれば1885年の椿山の調査は学生が申し出たもので、夏休みに古墳であるという思い込みで掘ったが、切り石が数個出ただけでなにも出土せず、その石も昔の神社のものであろうという結論に至ったという。断面の観察について何も記されていないので、築山であったのかどうかもわからない。

1924年の有角石斧の出土については中谷治宇二郎の詳細な報告があり、新聞報道もされたようである。工事中に土坑が発見されたという報を受け、中谷らが現場に立ち寄った際にたまたま土工の一人がその数日前に出土した石斧を見せたことで知られるに至った。ともに出土したが土工が破棄してしまったという「赤焼の土器」は結局見つからなかった。この発見地点は理学部7号館地点に近接する。文化庁の遺跡地図に記された病院正門前の遺物包含地はこの地点の誤記であろうか。なおこの発見の契機となった土坑は記述から判断して江戸時代の地下室であることは間違いない。鳥居龍蔵も1925年の著作の中で小石川植物園内などで発見された同種の遺構とあわせて地下室的倉庫ではないかと考察している。

1963年頃の言問通り沿いの塀改修時の遺物の採集は伝聞であり、遺物の所存、性格共に今のところ不明である。因みに現在、農学部キャンパス南西角の交番の東にあるイチョウはそれまで農学部の敷地内にあった。

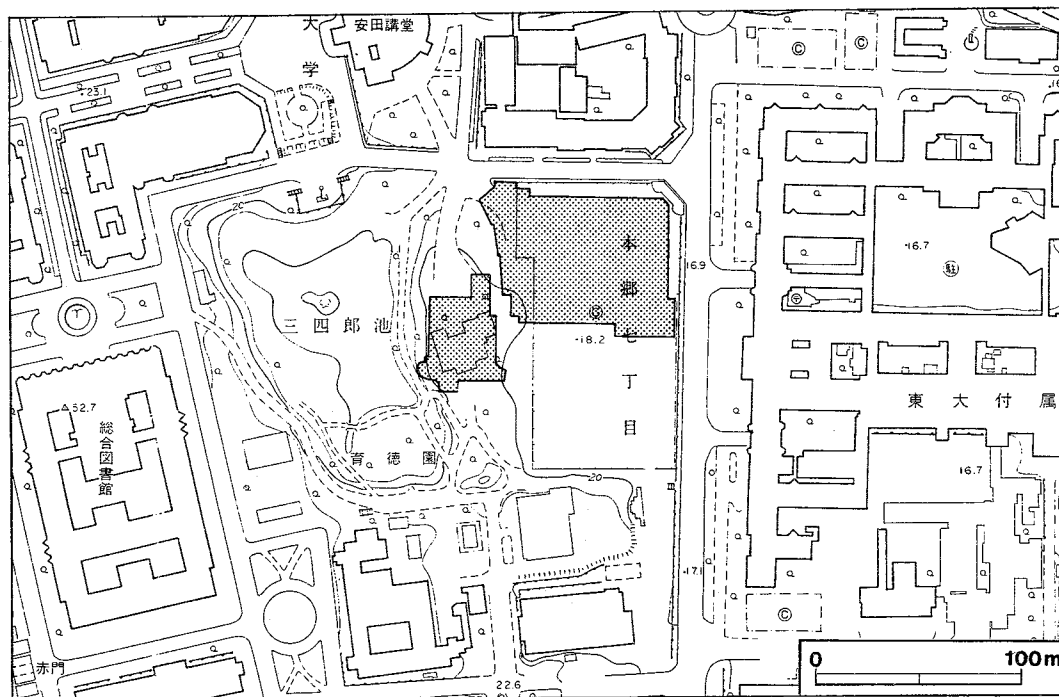
1974年の地下室検出は東京都教育委員会発行の「都心部の遺跡」には看護婦寮ケーブル埋設工事の際となっているが、地図の位置や大学側の工期の記録から看護学校の工事の際と考えられる。文京区の遺跡No.43として登録されている。

向ヶ岡貝塚の調査については報告書も刊行されているので多言を要しないであろう。弥生2



第1図 遺跡位置図

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1 理学部7号館地点 | 5 病院中央診療棟地点その他 |
| 2 法学部4号館・文学部3号館地点 | A 上野高校遺跡 |
| 3 山上会館地点 | B 真砂遺跡 |
| 4 御殿下記念館地点 | C 湯島一丁目遺跡 |



第2図 発掘調査地位位置図

(左：山上会館地点，右：御殿下記念館地点)

丁目遺跡として史跡指定をうけている。

大講堂前の工事での遺物出土状況は不明である。18、19世紀代の陶磁器類が採集されている。看護婦宿舍脇では縄文土器片が採集されている。史料編纂所前共同溝出土遺物は現在調査室に保管されており、地下室からの採集で出土状況の写真が残る。18世紀代の陶器、土器類が主である。

1982年からは新築工事に伴い試掘や立ち会いが相次いだ。経済学部増設部分は赤門の隣地であるために行われたらしいが、試掘では若干の瓦、陶磁器が出土したのみで、本調査の必要が認められなかった。1983年浅野地区での試掘は工学部の実験施設用電源室建設のためのものであったが、何も発見されなかったということである。

このように82年からは周知の遺跡に近い地点では工事に先立って試掘が行われることが多くなったが、建物の建設地に限られており、共同溝工事に先立っては行われていない。調査室発足時には、加賀藩邸時代の区画と現在の区画を知る上で重要であったであろうグラウンドと理学部化学館の間の道路部分と、心字池から北へ延びる水路があったはずの大講堂と理学部化学館の間の道路部分で共同溝の工事がすでに進められており、掘削が終了していた。大講堂東側の掘削の終了した面に降りることが出来たが、現地表から約3m下でなお黒土が堆積しており、

相当に深い溝あるいは谷があったことが推測された。

加賀藩邸の建物の中で赤門以外で最後まで残っていたのは竜岡門東の通称「盲長屋」であった。その一部は関東大地震にも耐え、内部が改装されて住居としても使用されていたが、昭和6年の火災後取り壊しが決定され、昭和8年内田祥三による御殿下グラウンドでの火災実験に使用された。

参考文献

- 有坂紹蔵 1935 「弥生式土器発見の頃の思出」『ドルメン』4-6
中谷治宇二郎 1924 「東大人類学倉庫跡より発見されし二個の石器に就て」『人類学雑誌』39-7・8・9
鳥居龍蔵 1925 『先史，原始時代の上伊那』
東京都教育委員会 1985 『都心部の遺跡』
東京大学文学部考古学研究室編 1979 『向ヶ岡貝塚』
東京帝国大学 1928 『日本石器時代遺物発見地名表 第5版』
内田祥三 1935 「木造家屋の災害実験に就いて」『建築雑誌』49-4

3. 発掘調査の組織

今回の調査地を含めた東大本郷キャンパスは、江戸時代に加賀藩の江戸屋敷であったことは周知の事実である。しかし、藩邸内が具体的にどのような構成であったかの知識が皆無であり、また藩邸の歴史的な変遷を知ることが、調査を行ってゆくために不可欠な要素であった。このため、国史学研究室・史料編纂所から委嘱して文献班を組織し、発掘調査と並行して、絵図・文献史料などの収集・研究を行った。これについての組織・日程については、第3部第1章の「はじめに一文獻・絵図史料による調査の経過」を参照されたい。

山上会館および御殿下記念館地点の発掘調査体制は以下の通りである。

| | |
|--------|----------|
| 顧問 | 齊藤 忠 |
| 室長 | 上野 佳也 |
| 山上会館地点 | |
| 調査担当者 | 谷 豊信 |
| | 西田 泰民 |
| | 大貫(小川)静夫 |
| 調査員 | 武藤 康弘 |
| | 黒田 晃 |
| | 渡辺 ますみ |
| | 大貫(鶴田)浩子 |
| 事務員 | 武智 優子 |

岩 岡 明 子

御殿下記念館地点

調 査 担 当 者 寺 島 孝 一

大貫(小川)静夫

倉 林 真砂斗

調 査 員 武 藤 康 弘

黒 田 晃

渡 辺 ますみ

大貫(鶴田)浩子

鈴 木 裕 子

事 務 員 安 芸 毬 子

調査補助員としては下記の方々の参加を得た（両地点共通）。

高井佳弘，西秋良宏，西村早苗，浦野宗一郎，上田 真，石川律子，徳岡暁波，岩崎貞明，箕輪顕量，石橋 丈，周藤芳幸，佐藤文泰，平山裕之，加藤 晃，川田まり，小松栄美，佃 京子，佐藤玲美，千葉 寛，小林 裕，馬場誠二，市原弘之，尾崎光伸，鍋木 顕，網 伸也，伊藤太佳彦，西股総生，土田至子，西田かほる，佐野博朗，清水一哉，杉山裕之，福岡直良，山口淳子，渡辺幸子，藤田有美子，水野敏典，藤谷昌則，平田重之，猪又 健，武藤聡子，永野義昭，池埜美代子，飛田千尋，藤咲香澄，竹内千早，村上晴彦

また，整理作業では上記の補助員のほかに下記の方々の参加を得た。

東本さとみ，鈴木マサ，坂田豊子，清水あさ子，伊藤寶子，加藤照子，富田佳代子，佐野みゆき，金子 智，大木洋一，寺本好孝，永田琴子，並木 豊，松野武彦，安原典子，千葉祥子，佐藤智子，勝 悦子，國府田たま子，今井雅子

発掘調査中，および整理作業に際して，次の方々の協力・教示を得た。厚く謝意を表示する。

赤井みさよ，足立順司，穴沢義功，安孫子昭二，荒川正明，飯島武次，池田萬助，伊藤郁太郎，稲垣正宏，井上喜久男，今井 敦，内田祐治，遠藤健治郎，大川 清，大槻信次，大西重太郎，大橋康二，扇浦正義，岡崎完樹，岡田茂弘，小田静夫，乙益重隆，金沢 陽，上敷領久，亀田駿一，亀井明德，川口宏海，川崎義雄，倉田芳郎，栗田彰常，河野一也，北原直喜，香本不苦治，小島一夫，小島幸雄，小長谷正治，小林 克，小林謙一，小林すみ江，小林達雄，小日置晴展，後藤 直，後藤宏樹，古泉 弘，惟村忠志，阪口宏司，坂口 豊，佐久間重男，佐久間貴士，桜井英治，佐々木達夫，佐々木洋治，佐藤公保，佐藤 洋，佐原 真，塩見嘉久，重松和男，清水芳裕，品川裕昭，島谷和彦，十菱駿武，正田陽一，白石太一郎，水藤 真，末崎真澄，菅谷文則，鋤柄俊夫，鈴木重治，高杉尚宏，鷹野光行，高山 優，田代郁夫，棚橋淳

二、玉井哲夫、田村晃一、手塚直樹、辻 真人、土屋良雄、鄭 漢徳、富樫雅彦、中井さやか、中島広頭、永田信一、仲野泰裕、中西眞也、永松 実、成瀬正和、西田宏子、西沢形一、新田栄治、長谷川孝徳、長谷部楽爾、服部 郁、平勢隆郎、平田天秋、藤井純夫、藤田邦雄、古山学、前川 要、松井忠春、松浦宥一郎、松尾信裕、松本 健、三上次男、宮本一夫、松井文彦、村上泰樹、森 伸一、森 達也、森本伊知郎、矢部良明、山浦 清、弓場紀知、吉岡康暢、吉田 孝、吉田 豊、Oliver Impey, Jan Baart

また、遺跡調査室の設置および発掘調査・整理作業の運営にあたって、平野龍一、森亙、有馬朗人歴代総長を始め、本学事務局および文学部の方々には多大な御尽力を頂いている。さらに、創立百年記念事業後援会とその窓口になって頂いた庶務部広報企画課には、長期間に涉ってお世話を頂いた。ここに篤く感謝の意を表する次第である。

最後になったが、山上会館地点では㈱清水建設と作本工務店に、御殿下記念館地点では㈱大成建設と豊成工業・三浦工業の方々に、機材および作業員の手配等をして頂いた。雨の中、また雪の中でも我々の指示にしたがって黙々と働いて頂いた作業員の力によって、数メートルにも及ぶ江戸時代の堆積層を掘下げ、調査することが出来た。

上記した各位の御努力・御協力のもとで発掘調査が実施され、報告書刊行にまで至ったことを銘記したい。尚、調査担当者のうち谷、小川、倉林が退職した。このため整理作業は、山上会館地点は西田が、御殿下記念館地点は寺島、武藤康弘が中心となって行った。

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と周辺の遺跡

東京大学本郷キャンパスは、武蔵野台地の東端に位置する本郷台地の南端近くにある。本郷台地は、西に谷端川をはさんで小石川台地と対し、北は石神井川を北限として赤羽台地を望んでいる。東は藍染川の流路であった根津の谷をはさんで上野台地になり、これより東は沖積平野の下町低地へ移行する。

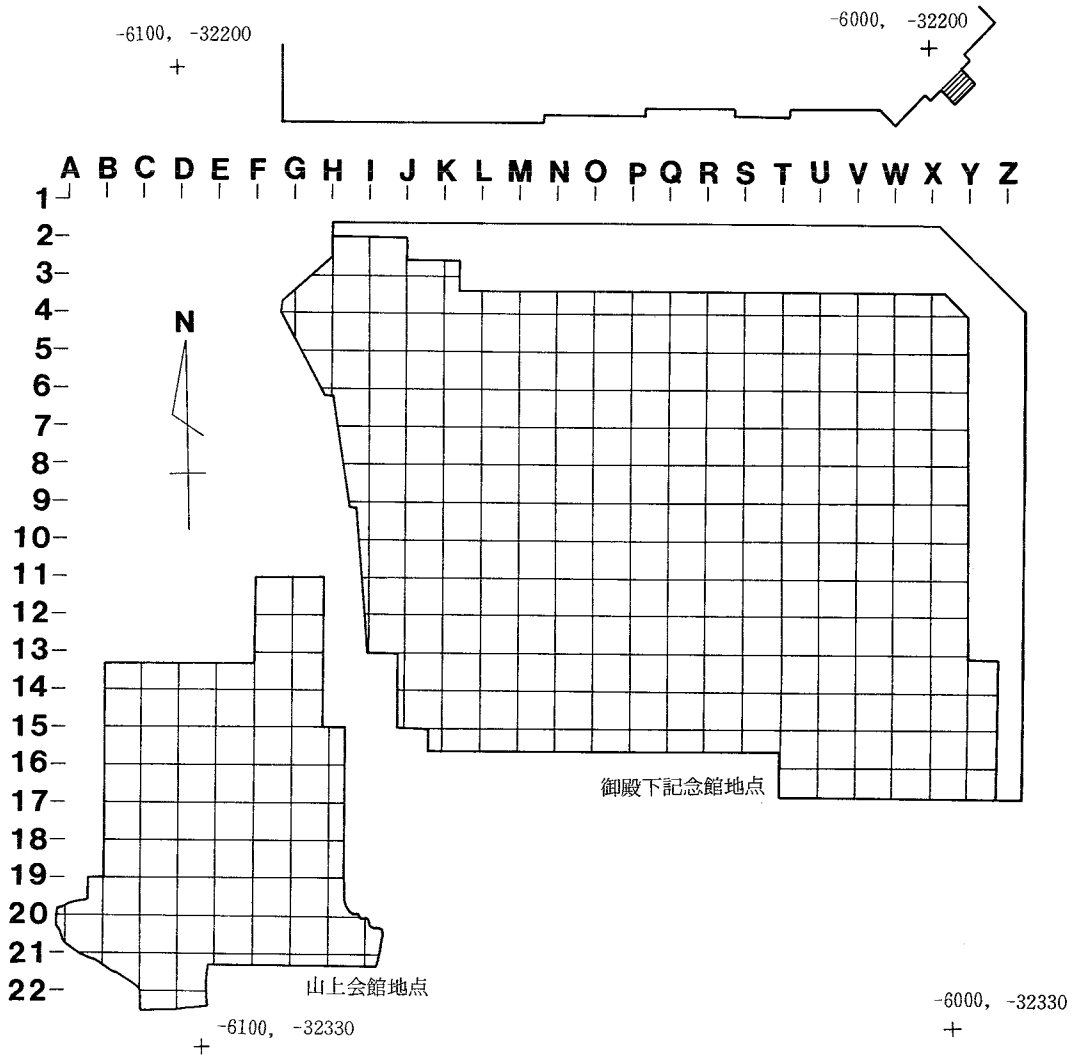
この東京大学本郷キャンパスの立地する本郷台地では、東京大学理学部3号館南立川ローム層中から黒曜石の剥片が出土しており、先土器時代からの人間の生活の痕跡が確認されている。

縄文時代の遺跡としてはお茶の水貝塚、湯島貝塚、動坂遺跡などが良く知られている。特に縄文時代後期になると、周辺の上野台地などと同じく遺跡の数が増大する傾向が認められる。この頃には藍染川の上流は陸化しはじめたといわれている。遺跡の立地は台地南半部の台地縁が多い。縄文時代後期も、お茶の水、湯島などの貝塚で土器が発見されており、弥生時代へと続く。

本郷台地周辺での弥生時代遺跡の立地は、いずれも台地の周縁部に求められている。本郷台地では、これまで10か所近い弥生時代の遺跡が発見されているが、もっとも著名で学史上も重要な遺跡は「向ヶ丘貝塚」であろう。

向ヶ丘貝塚は、明治17年(1884)に有坂鋁蔵らによって発見され、ここから出土した壺形土器(総合研究資料館蔵)が、発見地である向ヶ丘弥生町という地名から「弥生土器」と名づけられ、考古学における時代区分の標識遺跡となっていることは良く知られている。ところがこの貝塚の位置については、有坂鋁蔵らの記事や坪井正五郎のスケッチなどが残されているにもかかわらず、必ずしも明確ではなかった。

昭和50年(1985)、浅野地区において工学部高密度エネルギー実験棟の建設に伴って発掘調査が行われ、弥生時代の遺構とともに明治17年に発見された壺形土器と同形式の土器が数個体発見された。これらの土器および、有坂・坪井らの文献の検討から、この地点が「向ヶ丘貝塚」である可能性がきわめて高いと考えられたのである。なお、この地点は昭和51年に「弥生三丁目遺跡」として国の史跡に指定されている。

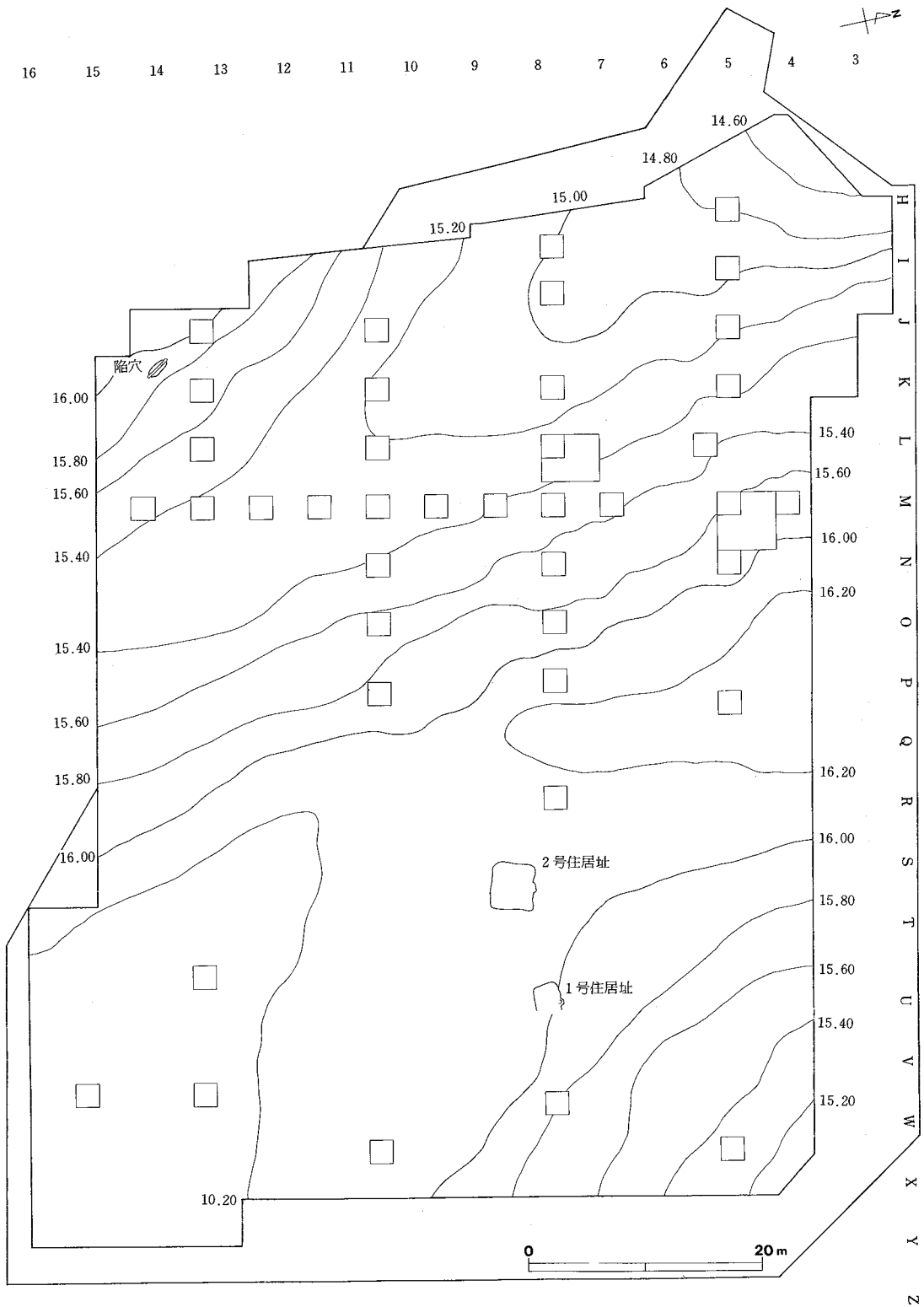


第3図 発掘区設定図

(IX座標系)

2. 調査区の旧地形および層序

調査区内は江戸時代の元和年間に加賀藩の下屋敷が建設される以前は、西半分は緩い傾斜の谷になっていたことがローム層上面の等高線図の作成によって明らかになった。調査区内の地形は本郷構内を南北に走る小さな段丘状の地形のすぐ下にあたる。この段丘状の地形は本郷台ののる武蔵野面をさらにM1面とM2面の区分する崖線と考えられる。育徳園内の心字池（通称三四郎池）はこの崖線部分に湧出した自然湧泉を巧みにとりこんで庭園としたものと考えられる。三四郎池は北側に流路を解析して、北の方向へ流れている。この川は現在の大講堂の裏をとお

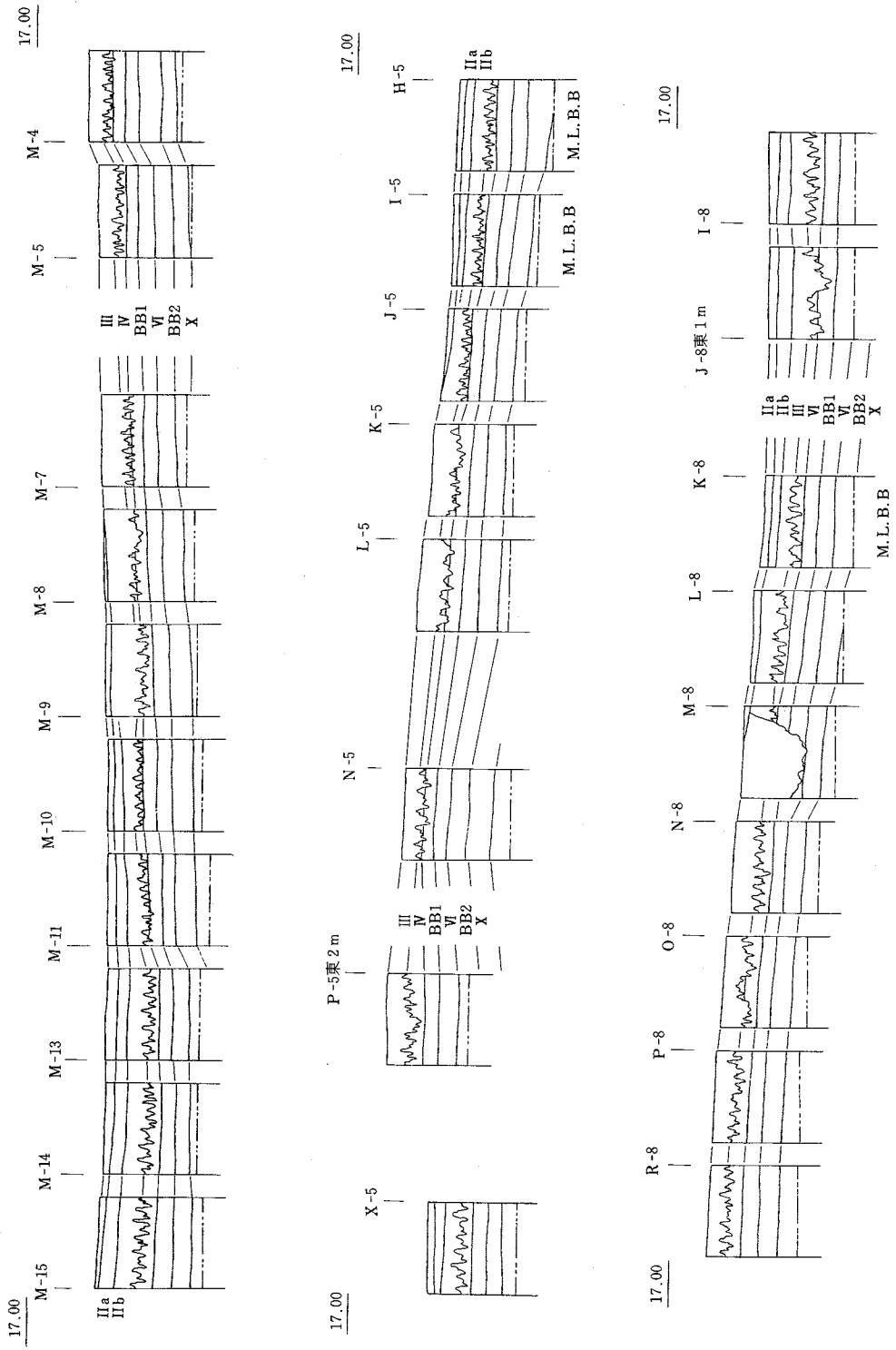


第4図 御殿下記念館地点旧地表面測量図，遺構分布図

り、藩邸の北の外れ現在の弥生門の辺りで向きを東に大きくかえて台地の緑の池之端を通って不忍池へ流れ込んでいる。調査区の西側から山上会館地区にかけての地形は、この湧泉と流路によって解析された半島状の残存丘陵になっている。この状況は山上会館地区のG19区、D14区、D15区の試掘坑で、立川ローム層が緩く東側に傾斜していることから裏付けられる。また、調査区内の谷はこの流路に向かって緩く傾斜して開口している。この谷地形は天和三年(1683年)に当地が加賀藩の上屋敷となって大規模な造成が行われ、元禄元年(1688年)に描かれた「御上屋敷殿閣図」にみられるように谷が埋めたてられ育徳園の境界の部分まで建物が分布するようになるまで存在したと推定される。元禄時代以前はこの谷は沼沢地となっていたことを旧表土の黒色土に含まれる斑状褐鉄が示しており、御殿下記記念館地点のI期でこの地域に溝状遺構が集中するのもこのような要因によるものと考えられる。さらに、この谷地形は縄文時代においても同様であったことが発掘の結果明らかになっている。それは、谷の部分にだけ黒色土の間に褐色土が堆積していることが根拠となる。この土壌はスコリアなどが確認されないものの東京都多摩ニュータウン遺跡群でII a層とされているような新期テフラが土壌化したものが谷などの凹地に限って堆積しているものと推定される。この層を境にして上層からは後期の堀之内2式土器や晩期の安行3c式土器を出土し、下層からは黒浜式が出土している他、J-14区では陥穴が確認されている。また、同様の土層の堆積状況は医学部付属病院中央診療棟地区でも確認される。付属病院地区は段丘の縁辺部に位置するために解析谷の規模が大きく、水性堆積のローム層より厚く堆積している。

それではこのような谷地形はいつ頃から形成されたのであろうか、次にローム層の堆積状況を検討してみたい。ローム層の調査は江戸時代の巨大土坑の678号遺構や532号遺構をさけて、調査中央のMラインにそって南北に、谷地形にかけて5、8、11、14の各ラインのグリッドポイントをふくむ2m四方を試掘坑として設定した。

調査区内の基本層序は次のように設定される(第5図)。旧表土の黒色土をI層に、谷部分に分布する褐色土をII a層、II a層下部の暗褐色土をII b層、ソフトロームをIII層、ハードロームをIV層、立川ロームの第1黒色帯をV層、始良丹沢パミス(AT)を含む暗黄褐色ロームをVI層とする。また、立川ローム層第2黒色帯は通常VIII層をはさんだ上下のVII層とIX層に区分されるが、本調査区では第2黒色帯の色調が淡く全く区分できなかったため第2黒色帯として一括した。さらに、第2黒色帯の直下の黄褐色土をX層、X層直下の赤色スコリアを大量に含む層をXI層とする。試掘坑の深度は2mを限度にしたため、立川ローム以下の土層は江戸時代の井戸や大形の土坑の壁面で観察した。武蔵野ローム層の上半部は調査区全域で安定した状態で観察されるが下部の東京パミス層は山上会館地区では検出されているが本調査区内では西側の残存丘陵に近い部分では確認されるものの調査区東側では粘土化したローム層のなかに分散して



第 5 図 口一ム試掘坑断面図

おり層としては確認されなかった。また、武蔵野ローム下部はそのまま基底礫層である本郷礫層に移行しており不安定な堆積状態である。武蔵野ロームの上半部は比較的堆積状態が安定しており黒色帯も水平に3帯確認された。しかし、第5図の東西方向の土層断面図に図示したように、武蔵野ロームの最上部の黒色帯の上部に堆積した黄褐色ロームは西の方向に大きく傾斜しており、その上の立川ローム層も同じ傾きで傾斜して堆積している。そして西端部のI-5区やJ-5区では武蔵野ロームの黒色帯の上に立川ロームのX層ないし第2黒色帯が直接堆積している部分がある。このことから、現在の谷地形は武蔵野ロームの堆積直後の今から約3万年前から開析が始まり、第2黒色帯の堆積時の2万8千年～2万7千年前に寒冷化と乾燥化によって開析が停止し埋没したものと推定される。このように、調査区を含む本郷地区は段丘の端部を開析する浅い谷がいく筋も入り込んだ複雑な地形となっていたものと考えられる。江戸時代以降はこのような地形を大規模な造成によって平坦にし藩邸の規模を拡張していった過程が発掘調査によって明らかになった。

III 江戸時代以前の遺構と遺物

1. 先土器時代

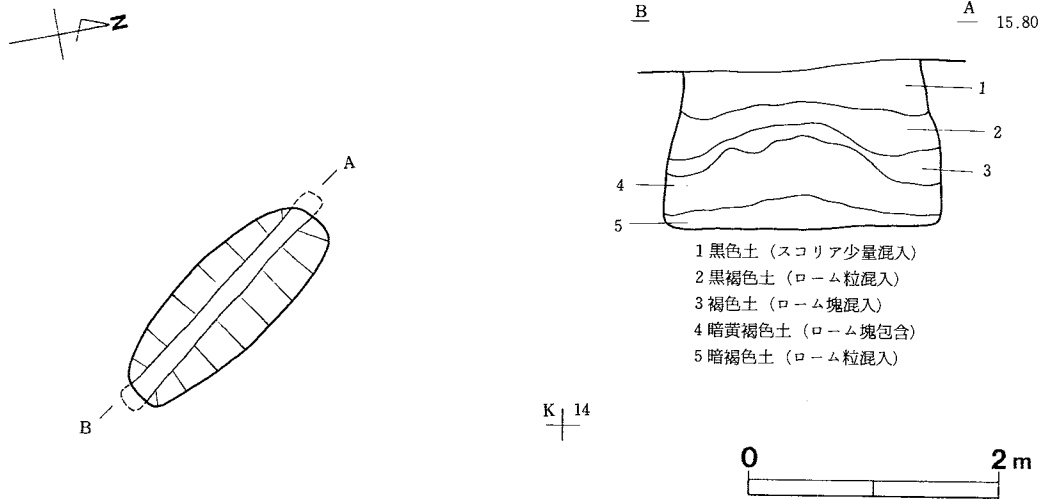
先土器時代の調査は土層観察の試掘坑の掘り上げと同時に行われた。この作業ではM-4区、L-7区、J-13区で先土器時代の剥片が数点出土した。そこで、それぞれの地区で調査面積を拡張してブロックの確認に努めたがいずれも散発的に黒曜石製の剥片が数点発見されただけに止まった。各区の出土遺物と層準はM-4区ではIII層から黒曜石の原礫面で背面が覆われた剥片が1点、L-7区ではVI層から黒曜石製の縦長剥片が1点、J-13区ではIII層から黒曜石の剥片が2点出土している。図7-1はL-7区VI層から出土した黒曜石製の剥片である。調整打面をもつ石刃状の剥片である。両側縁には使用痕と推定される刃コボレが確認される。

本郷構内では浅野地区で黒曜石の剥片が発見されている（東京大学文学部，1979）他、医学部付属病院ではソフトロームから切出形石器と剥片が、文学部3号館地区ではIII～V層で礫群と遺物集中区が確認されている。また、東京大学に隣接する文京区真砂遺跡では先土器時代の文化層が2期確認され、石器集中区と礫群が検出されている。このように従来遺跡の発見が殆どなかった台地縁辺部でも、今後は再開発によって先土器時代の石器群が発見されることが予想される。

2. 縄文時代・弥生時代

(1) 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構と遺物は主に調査区西側で検出されている。これは調査区東側に比高が高く江戸時代の造成と建築遺構によって江戸時代以前の遺物包含層が殆ど失われているのに対して、西側は谷地形のために旧表土の上面に厚く盛土がなされて包含層がよく保存されていたためである。このなかで調査区南西角にあたるJ-14区では縄文時代の陥穴が1基検出されている（第6図）。陥穴が検出された本郷記念館地区から山上会館地区との境界にあたり、残存丘陵の東斜面にあたる場所である。埋土から遺物が出土していないため時期の特定ができないが、II a層の下で確認されていることから縄文時代前期ないしは早期のものと推定される。細長い溝状の平面形をもち、長軸側の断面は台形状になる。



第6図 陥穴実測図

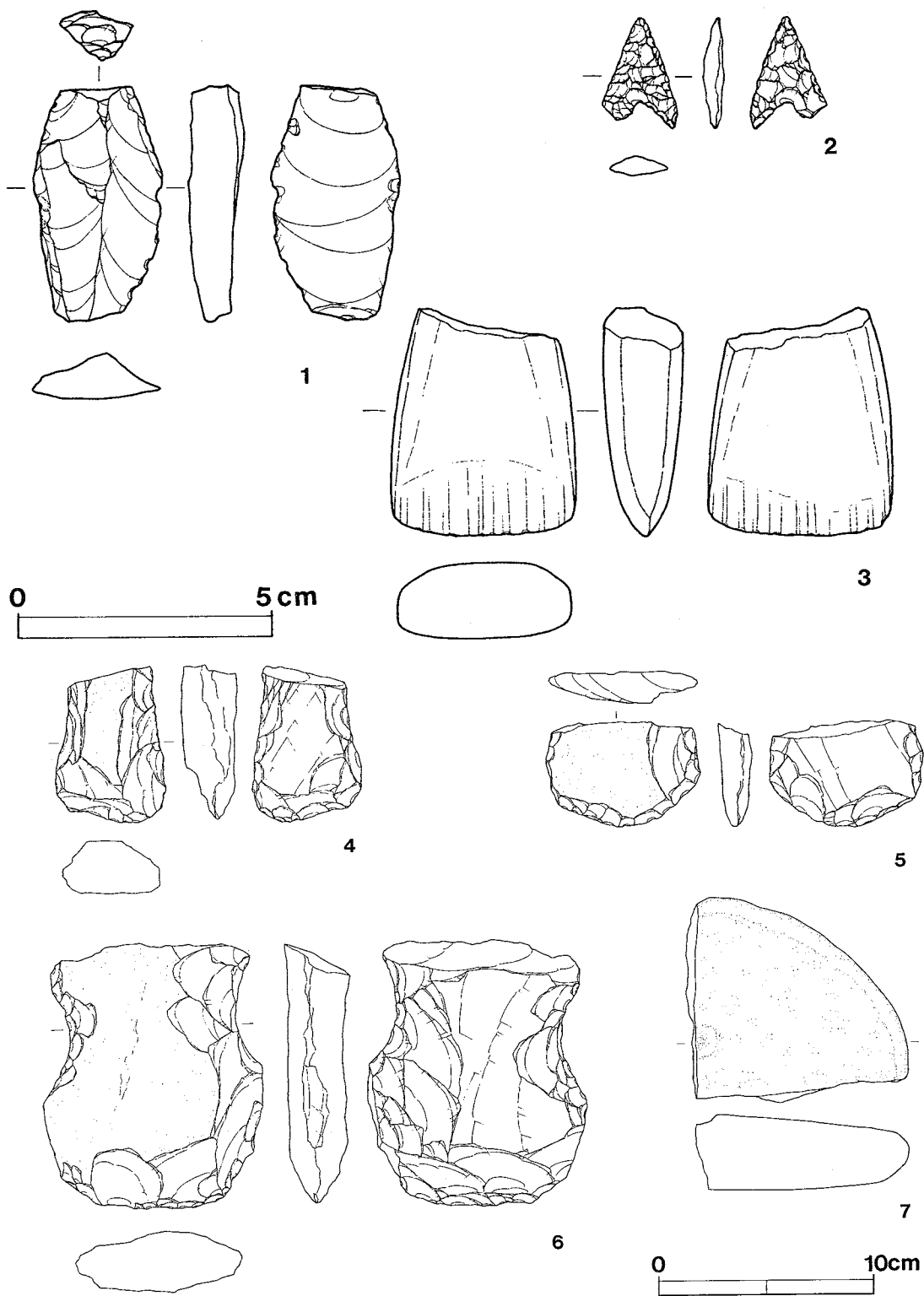
(2) 縄文時代の石器

縄文時代の石器としては、石鏃、磨製石斧、打製石斧、磨石等が出土している。第7図2はJ—12区の谷中央部の遺物集中区で堀之内2式土器等と共に出土したチャート製の小形の石鏃である。3は調査区北西部の江戸時代の遺構の埋土から出土した閃緑岩製小形定角式の磨製石斧。4～6は打製石斧である。いずれも江戸時代の遺構の埋土から単独で出土したものである。7は砂岩製の磨石で調査区南西の谷の遺物集中区から堀之内2式土器等と共に出土している。全形の1/4ほどが遺存し、中央部には浅い凹みがある。

(3) 縄文時代および弥生時代の土器

調査区内からは旧表土上面や南西に谷の部分などから縄文土器が出土している。全体の出土量は遺物収納箱で4箱程度であるが、縄文早期から晩期までの各型式が網羅的に出土している。このうち出土量がまとまっているのは、縄文時代後期と晩期の土器である。この時期、遺跡の位置する本郷台地は東京湾に面しており多くの貝塚が残されている。同時期の遺物は東京大学本郷構内では浅野地区にある国指定史跡弥生2丁目遺跡（東京大学文学部、1979）や法学部3号館・文学部4号館地区や医学部付属病院中央診療棟地区で出土している。また、東京大学周辺部では文京区湯島切通し貝塚やお茶の水貝塚等から出土している（文京区、1967）（東京都教育委員会、1985）。

第8図1は縄文時代早期の撚糸文土器の夏島式である。細砂を含む胎土で、L撚りの撚糸文が密接して施文されている。2と3は同一個体と推定される尖底土器の破片である。無文の土器



第7图 石器

で口唇部には浅い刻みがいいる。胎土の特徴から早期後半の子母口式と考えられる。4は尖底部の破片である。赤褐色で胎土に砂粒を含むことから田戸下層式と考えられる。この他に、山上会館地区や向ヶ岡貝塚でも早期末の条痕文土器が出土している。

5は縄文時代前期の黒浜式である。破片は南西部の谷からまとまって出土しており、同一個体と推定される。RL撚りの0段多条の縄文が全面に施文されている。器面はよく調整されている。底部に近い部分では、接合帯で大きく剝離した痕跡が確認される。

6～10は縄文時代中期前半の土器である。6～7は砂粒を含む赤褐色の胎土で全面的に角押し文が施文された土器である。7は口縁部に三角区画の一部が確認されるので新道式と考えられる。9は阿玉台式の胴部の破片である。10・11は勝坂式である。

12～15は中期後半の曽利式である。14・15は篋目状の沈線の上にS字状の粘土紐が貼り付けられている。

第8図16～第9図8は中期後半の加曾利E式である。第8図16～第9図1・2・4はE1式、3・5はE2式、6はE3式、7はE4式である。8はE1式の胴部破片を利用した土器片錘である。この時期には動坂遺跡などの東京湾に面した遺跡では土器片錘が多出する傾向がある。

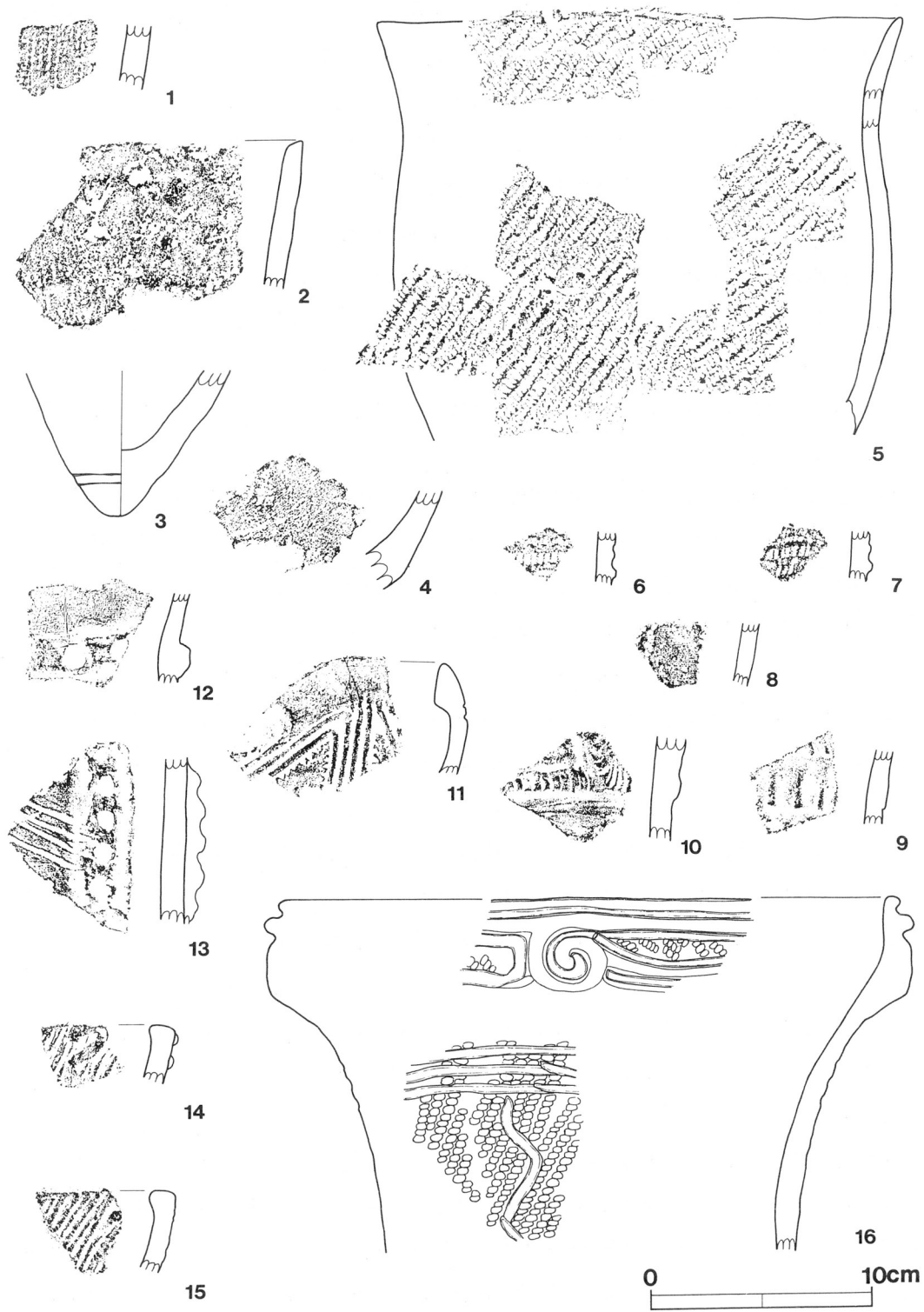
9～11は後期の堀之内2式である。口縁部には8字状の貼付けがあり、胴部には幾何学的な磨消縄文が施される。11は南西部の谷から集中して出土した土器で略完形に復元される。4単位の波状口縁をもつ土器で、胴部の文様帯は長方形の区画を斜めに区切った磨消縄文が4単位配置されている。しかし、上下の区画線は途中でずれてしまい裏側では斜めになっている。また、長方形を斜めに区切る区画も途中で向きが逆転している。

12～15は後期の加曾利B2式である。12は胴部の破片で格子目状の沈線文が施文されている。13, 14は曲線的な磨消縄文の土器である。15は南西部の谷の遺物集中区から出土した土器で器形が復元可能である。口縁部が大きく開いた深鉢形土器で、胴部には矢羽状の沈線が施文されている。

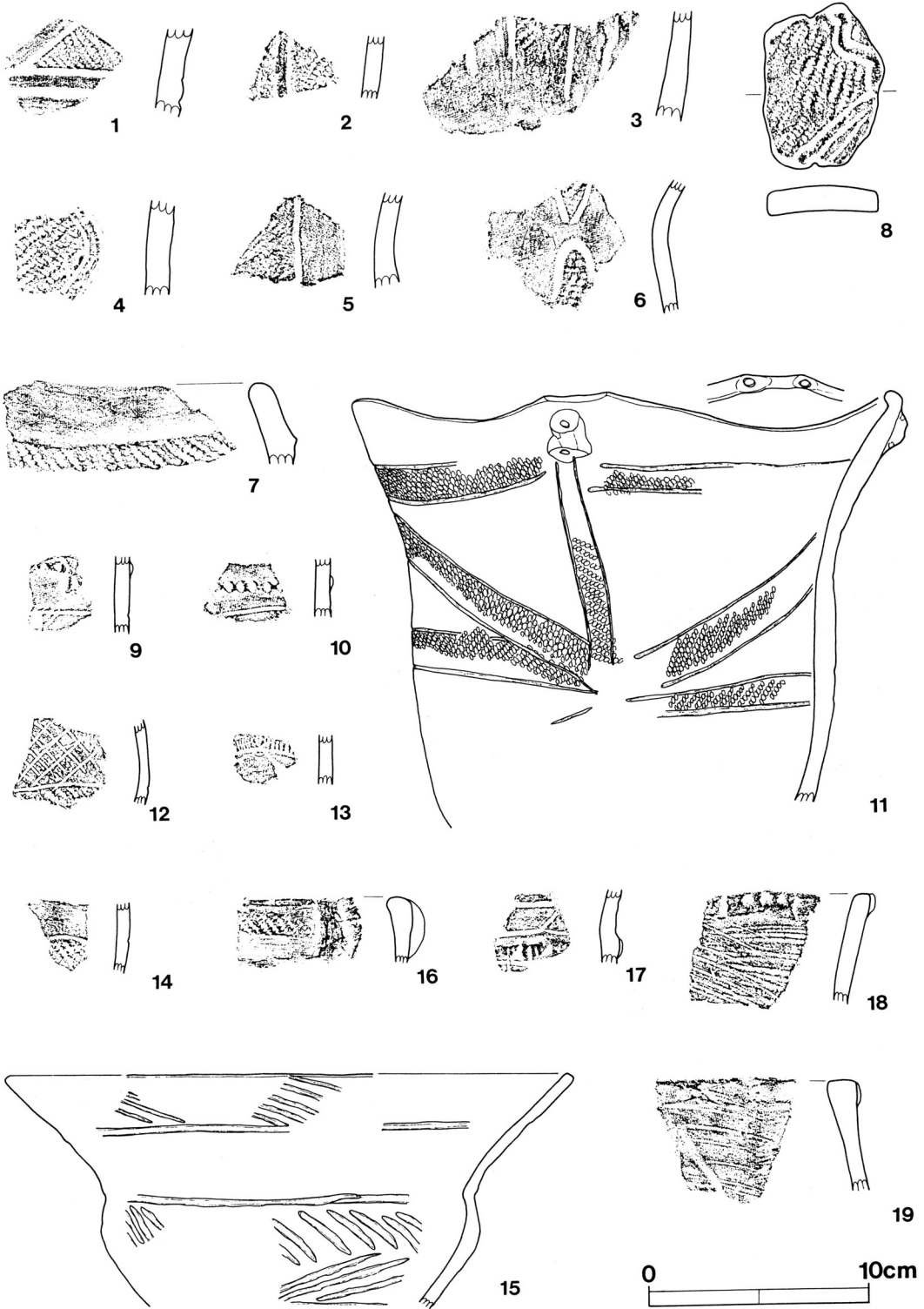
16～19は後期後半の土器である。16は安行1式、17は安行2式、19もこの時期の粗製土器の口縁部の破片である。18はこれらよりもやや古式で、加曾利B3式か曾谷式の粗製土器の口縁部破片である。

第10図と11図には晩期の土器と弥生土器を図示した。

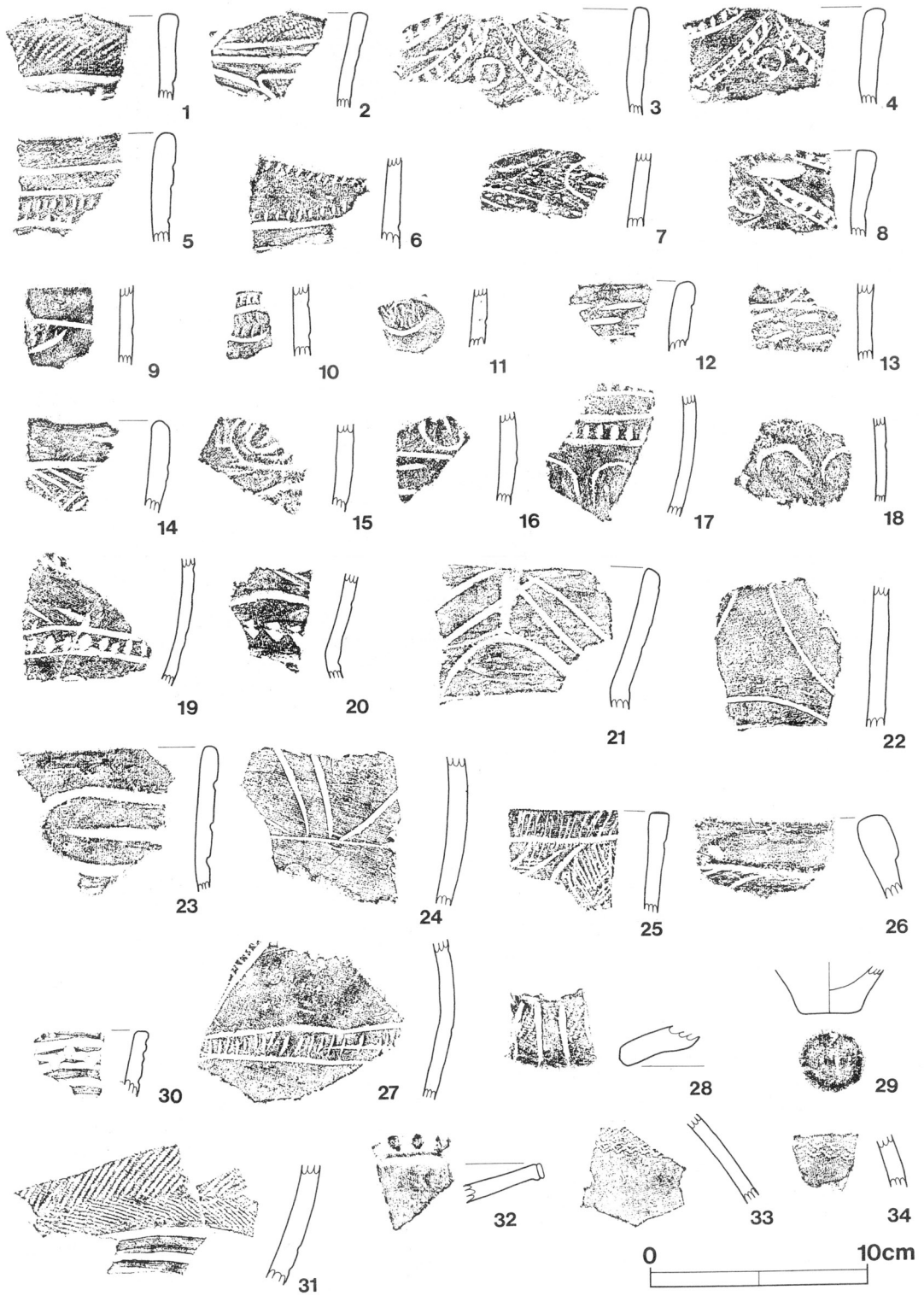
1は安行3a式、2は安行3b式の口縁部破片である。3・4・8は安行3c式の口縁部破片である。梯子状の沈線文で三角形に区画された内部に円文が施文されている。5～7, 9～11は横に長く延びて組み合った入組み文で、沈線の区画に沿って刺突文が施文される。12・13は沈線の区画の内部に列点文が、14は矢羽状の沈線が施文される。17・18は文様帯の下部に連弧状の沈線文が施文される。19・20は異種工具による刺突文が施文されている。21・22・24・27は沈



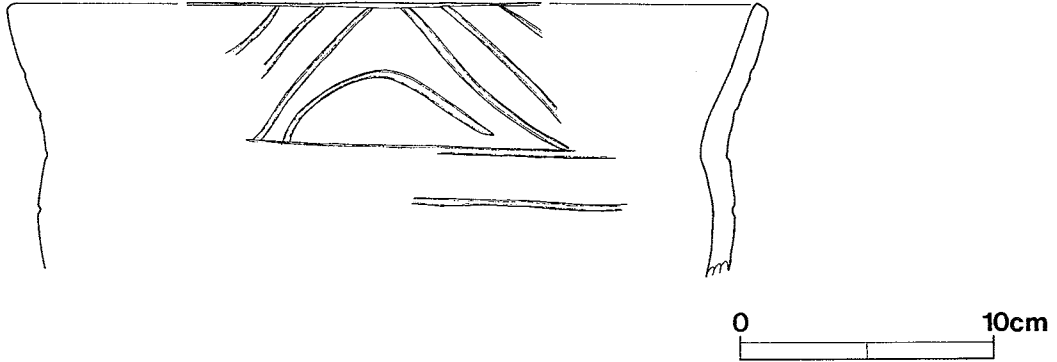
第8図 縄文土器 (1)



第9図 縄文土器 (2)



第10図 縄文土器 (3), 弥生土器



第11図 縄文土器（4）

線文で口縁部に三角区画状の文様を形成するもの。25は細密沈線文が施文された安行3b式。28も同型式の台付き鉢の脚部破片と考えられる。26は晩期安行式前半の粗製土器も口縁破片である。29には深鉢の底部を示した。

30・31は亀ヶ岡系統の土器であるが、東北地方の製品ではなく中間地帯で製作された土器と推定される。30は口縁部の破片で沈線を3条引いたあとに円形の刺突文を施文して羊歯状文に類似した効果を出していることから大洞C1式と考えられる。31は細い羽状縄文帯の下に沈線が2条施文されており、台付き鉢の破片と推定される。

32～34は弥生土器である。32は壺の口縁部破片で、口唇部には円形浮文が貼り付けられている。器面は丁寧にヘラミガキされている。33はハケメ調整された器面に結節回転文を施文している。34は結節回転文が2条施文されている。

第11図はQ-9区から出土した安行3c式の深鉢である。胴部上半で緩く屈曲し、口縁部には沈線で三角状の文様が描かれている。

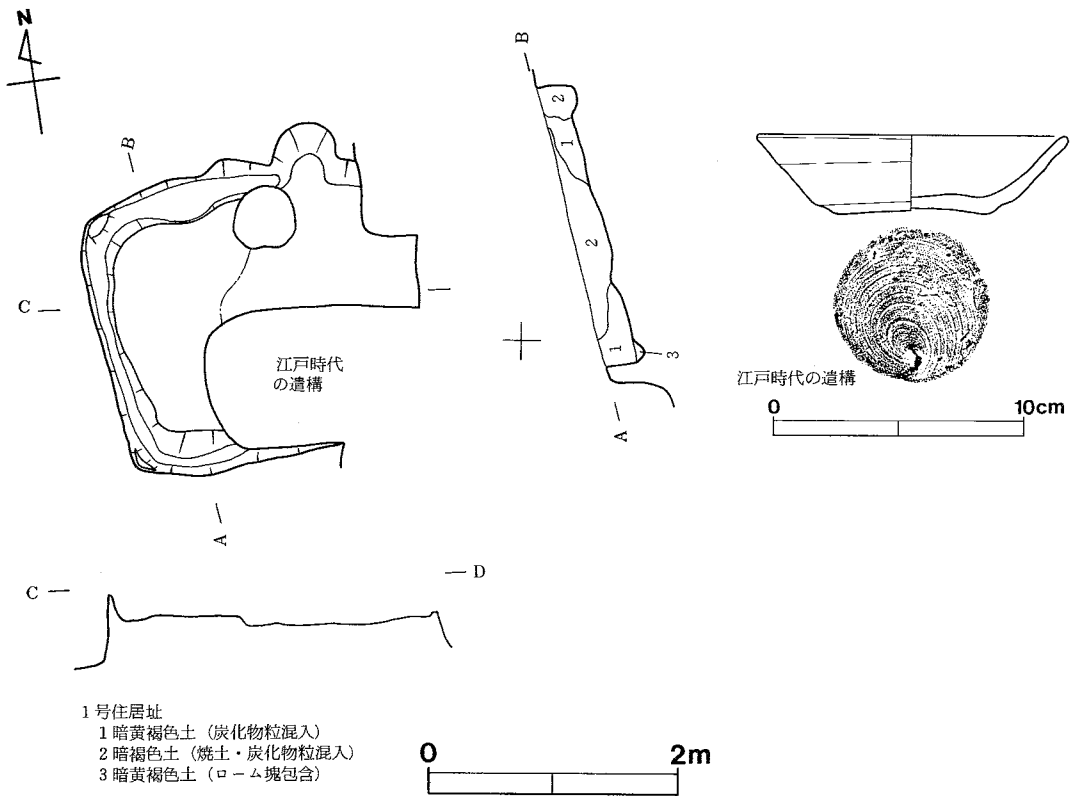
参考文献

- 東京大学文学部考古学研究室編 1979 『向ヶ岡貝塚』
 文京区 1967 『文京区史』
 東京都教育委員会 1985 『都心部の遺跡』

3. 古墳時代以降の遺構と遺物

(1) 1号住居址（第12図）

本遺構は調査区東寄りのU-7, 8区にて検出された。確認面はローム面で、上層および東側を江戸時代の遺構によって切られる。平面形は方形を呈すると思われるが、規模がわかるの



第12図 1号住居址地及び出土遺物

は西壁のみ（2mを測る）である。主軸はN-8°-Eをさす。北・西・南壁際には幅15~36cm、深さ10cmの周溝が巡る。床は地山床である。竈は北壁に構築されるが、検出されたのは掘方のみであった。

出土遺物は総数14点で、すべて覆土中のもので小片が多い。須恵器杯・甕、土師器杯・甕が検出されているが、図示し得たのは1点のみである。須恵器杯で完形である。緑灰色を呈し、1~3mm大の小石を多く含む。焼成は良好で堅緻。底部は回転糸切り痕である。

(2) 2号住居址（第13図）

1号住居地から東へ7m、S-8区に位置する。確認面はローム面で、上部・内外を江戸時代の遺構によって切られており、遺存状況は悪い。主軸はN-18°-Eで、平面形は一辺3.6mの方形を呈す。床はロームと暗褐色土の混合土によって厚さ10cmの貼床がほぼ全面にわたって施される。竈の前方、住居址中央部から南壁寄りの床面は、踏み固められていた。竈は北壁中央部に構築される。付近の覆土からは焼土混じりの砂質土が検出されており、竈構築土の手がかり

になると思われるが、遺存状態が悪く、地山のよく焼けた部分が確認されたのみである。

出土遺物は総数50点で、床面直上遺物は12点あるものの小片がほとんどである。内訳は須恵器杯3点、土師器・ロクロ土師器の杯・高台付皿・甕47点で、この中には「コ」の字状口縁の甕、南武蔵型の杯が含まれる。

第14図1は、須恵器の杯である。灰色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好で軽い感じに焼き上がる。底部回転糸切りのまま。2はロクロ土師器の高台付皿である。燈色を呈し、胎土中には金雲母を多く、白色針状物質・1mm大の赤色粒を含む。焼成は良好で、緻密で堅緻。付高台で高台内中央部には糸切り痕が残る。内面には主に一定方向のミガキが施される。

(3) 包含層出土の遺物

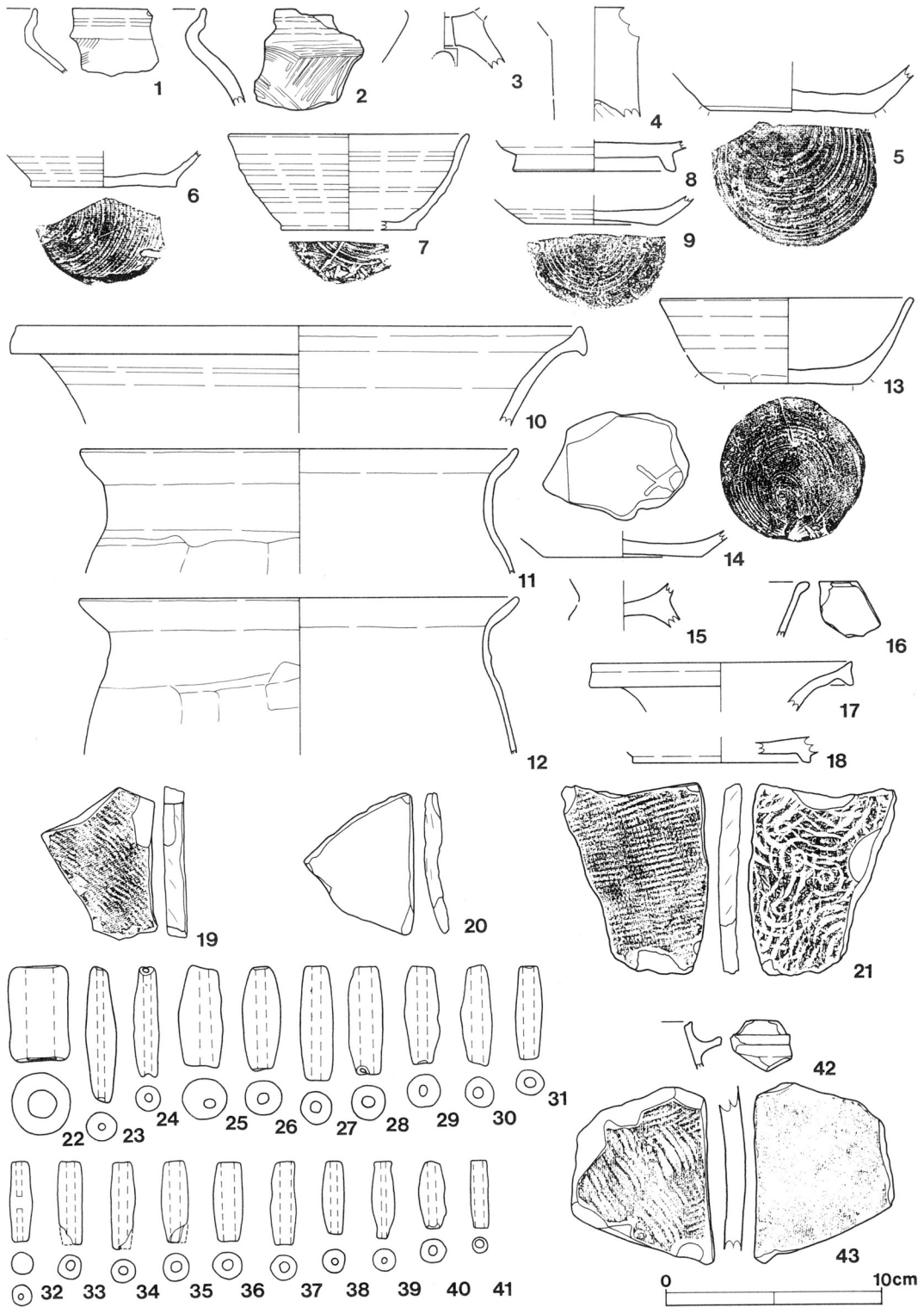
山上会館地点と御殿下記念館地点で出土した古墳時代～室町時代の遺物は総数597点で、このうち587点は御殿下記念館地点出土のものである。前者では旧表土中から、後者では旧表土中と遺構覆土から大部分が検出されている。

以下図示した遺物を中心に述べてみたい。第15図1・2はS字状口縁台付甕である。1は器面の磨滅が激しいが、肩部外面に斜位のハケメがうすく残る。2は肩部外面に斜位のハケメの後、口縁部直下に横位のハケメが施される。3は器台の脚台部片である。底部と脚台部中位に穿孔(後者は残存部では2箇所)。脚台部外面は縦位のケズリ。弥生時代後期～古墳時代前期の土器は106点出土しており、台付甕・壺が認められる。

4は円柱作りの高坏の脚部である。坏部内面はミガキ、脚部外面はナデ。またその部分には赤彩が施される。古墳時代後期のもの。該期の遺物は17点発見されており、他に長胴甕・球胴甕・杯(いわゆる須恵器模倣杯)の器種がある。

5～7は須恵器杯である。5は青灰色を呈し、焼成良好で堅緻。底部回転糸切りで周囲ヘラケズリ。6は青灰色、7は灰褐色で、ともに焼成良好で緻密で堅緻である。底部回転糸切りで、6は「×」形のヘラ記号、7にもヘラ記号の一部が残る。8は高台付碗。灰褐色で、焼成良好で緻密で堅緻である。5～8は胎土中には1mm以下の砂粒を多く含む。10は須恵器甕の口縁部片である。灰色で焼成はややあまい。胎土中には白色針状物質・1mm以下の砂粒を多く含む。口唇部付近には自然釉がかかる。本遺跡では須恵器は125点検出されている。杯・甕が大部分をしめており、他には蓋・高台付碗がみられる。

9・13・14はロクロ土師器坏、9は橙色で、1mm大の赤色粒・砂粒を大量に含有する。焼成はややあまく、軟質。底部は回転糸切りのまま。13は胎土はにぶい橙色を呈し、1mm大の赤色粒、砂粒を大量に含む。焼成は良好で、堅緻。底部は回転糸切りで周囲手持ちヘラケズリ。14は内部にミガキを施し、黒色処理している。にぶい橙色を呈し、焼成はあまく軟質。粉質で白色針状物質を含む。底部内面には焼成後に「×」のヘラ記号がつけられる。



第15図 古墳時代～室町時代の遺物

11・12は土師器甕。口縁部は「コ」の字状を呈し、器厚はうすい。肩部外面横位のヘラケスリの後、口縁部ヨコナデ調整。体部内面横位のヘラナデ。12の内面は煤けている。15は土師器台付甕の接合部。土師器はロクロ土師器も含めて総数85点出土している。杯（内面黒色処理のものもある）・甕がその内訳である。

16は緑釉陶器碗の口縁部。口唇部は外反する。胎土は白色で粉質。細かい砂粒を多く含む。緑釉は黄緑色で細かい貫入が入る。

17は灰釉陶器瓶の口縁部片、18は底部片である。後者は内面を二次使用したのが平滑になっている。灰釉陶器は瓶・長頸瓶の破片が12点検出されている。

19～21は須恵器転用砥石である。どれも割れ口の1面を利用しているが、使用痕はさほど顕著ではない。18は外面に平行タタキ目、内面はナデ。胎土は灰白色で、焼成良好。19は内外面ともナデ調整で、色は青灰色、胎土中には1mm大の砂粒・白色針状物質を多く含む。焼成は良好。21は外面格子状の、内面は同心円状のタタキ目、19は甕から、20・21は瓶からの転用と考えられる。

22～41は管状土錘である。22は太い円筒状であるが、その他は管状あるいは細長い紡錘形である。橙色からにぶい橙色で、焼成はややあまく軟質のものもあるが（24・26・27・30）多くは良好で堅緻である。なお32は穴は貫通していない。図版に掲載したのは法量のわかるものだけであるが、他にも17点確認されている。

42は土師器の羽釜の口縁部片である。胎土は灰白色で、0.5mm以下の砂粒を含む。焼成良好だが粉質。羽釜は他にも2点破片が出土している。

43は常滑産と思われる大甕の胴部片である。胎土は灰白色を呈し、1mm以下の砂粒を含む。焼成は良好。内面は平行タタキ目、外面は赤褐色で平行タタキ目の痕がかすかに残る。この他に中世の陶器は常滑産と考えられる破片が4点出土している。

このように本遺跡で検出された土器は断絶はあるものの長期間にわたっているが、ここでは住居地の検出された平安時代と、本郷構内の遺跡では他に類例のない中世の遺物についてふれ、まとめにかえたい。

まず奈良・平安時代の土器様相に関してであるが、現在須恵器の供膳形態を中心に編年が進められており、本遺跡の位置する荒川下流地域のその供給源は埼玉県内の窯址群に求められている。それをふまえれば、1号住居地の須恵器杯は新久A-1・2号窯の時期と考えられる。遺構外の須恵器杯でも第15図7は1号住居地のものより体部の立ち上がり方が急であるが底径は6cmである。5は底部周囲回転ヘラケズリで底径も7.5cmと大きい。破片中にも類似のものがみられ、これらは新久A-1・2号窯より先行する八坂前窯の時期となろう。当地点で出土した須恵器杯の底部片はすべて回転糸切りっぱなしのものと周囲ヘラケズリのものである。2号住

宅址2や13のロクロ土師器、18の灰釉陶器瓶は黒笹14号窯式期のもので9世紀後半に位置づけられる¹⁾。また「コ」の字状口縁の甕も須恵器の時期とほぼ合致し、遺跡の継続期間も同様と考えてよいと思われる。

なお、2号住居址2の高台付皿、13の杯は胎土・焼成からみて搬入品である可能性が考えられることを付記しておく。

また、管状土錘についても、これらの遺物と大方同じ時期と考えておきたい。ただし、21は円筒形で穴自体も大きく、他のものより廻りうる資料であろう。

年代観については1・2号住居址とも9世紀第3四半期、また遺構外の遺物は9世紀代としておく。

本遺跡周辺では、付属病院中央診療棟地点で井戸、同じく設備管理棟地点では住居址が検出されており、ともに9世紀代と考えられる。また、不忍池を挟んで北東1kmの上野台上に位置する都立上野高等学校遺跡²⁾でも9世紀後半に位置づけられる住居址が検出されている。さらに北方2.1kmの台地上に田端不動坂遺跡³⁾、北西4kmに武蔵国豊島郡衛地とする御殿前遺跡⁴⁾があり、前者は8世紀中頃から10世紀前半の集落址、後者は7世紀後半から10世紀前半に機能したとされる。

このように近年本遺跡周辺では当該期の遺跡がわずかずつではあるが着実に増えつつある。特に郡衙とされる御殿前遺跡とは交通路たりえる谷田川を挟んで近距離にあり、東京低地へと直結する台地上に立地する本遺跡にとって無視できない関係があったと思われる。また土錘が多く出土していることも本遺跡を特徴づけよう。

最後に中世の遺物についてであるが、羽釜は市内では出土例は少ないが、その時期は14、15世紀代とされており⁵⁾、それに従っておきたい。また陶器大甕片もほぼ同様の年代をあたえることが可能と思われる。

東京大学構内には本郷城があったとされるが、その根拠は明らかではない⁶⁾。近辺の台地上には城地・館地といわれる場所は数箇所存在するが、遺構として確認されているものはなく、ここでは遺物を呈示するだけに留めておく。

註

- 1) 前川要氏御教示による。
- 2) 都立上野高等学校遺跡調査会 1988 「東叡山寛永寺護国院 都立上野高等学校改築に伴う第一次調査概報」
- 3) 田端不動坂遺跡調査団 1985 「北区田端不動坂遺跡」
- 4) 東京都北区教育委員会 1988 「御殿前遺跡」
- 5) 後藤宏樹 1986 「羽釜について」『平河町遺跡』、千代田区教育委員会 1988 「中世」『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書』千代田区紀尾井町遺跡調査会
- 6) 新人物往来社 1979 「日本城郭大系5 埼玉・東京」

第1部 山上会館地点の発掘調査

第1章 調査の経緯

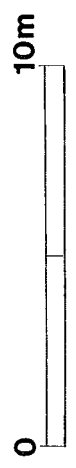
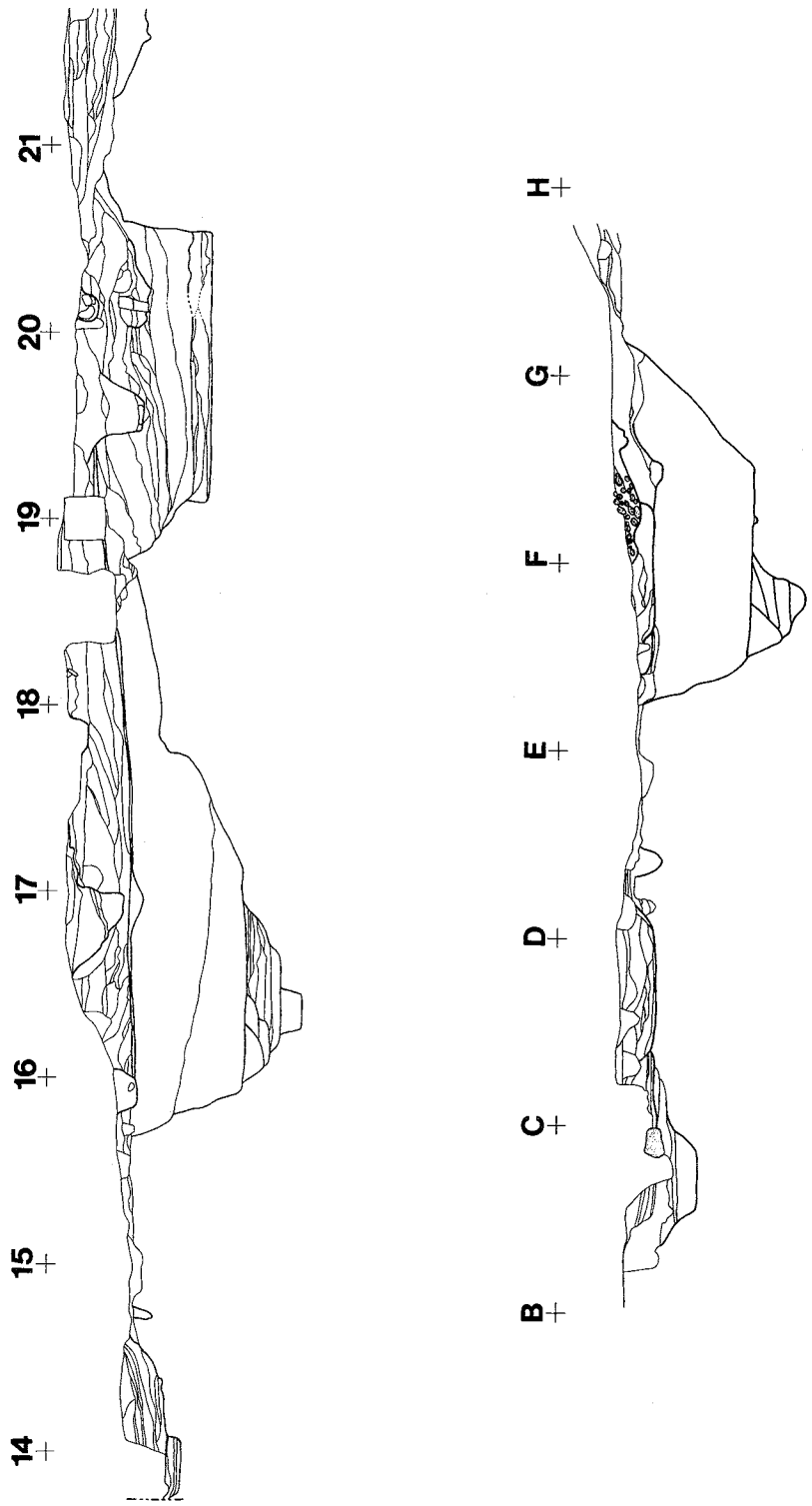
山上会館地点の調査は85年3月7日から、86年7月17日まで行われた。調査面積は約1500㎡である。基本的にはグリッド単位で掘り下げを行い、東西南北に数本のセクションベルトを設定した。東南部の浄化槽部分には植木が有り、移植の際に攪乱を受けることが確実であり、地山のレベルから判断して調査を断念した。また、グラウンドとの境界の地山部分約150㎡が事前協議の不備のため調査すること無く破壊されたのは残念である。

山上会議所取り壊し以前の試掘調査により石垣、苑路、築山のそれぞれ部分が検出されたが、全体像がつかめなかったため、会議所取り壊しの後、再度重機をつかって東西方向にトレンチを設けたところ、溝が数条南北方向に走っていること、また地山までは地区によってはかなりの深さがあることがわかった。第16・17図に発掘区全体の断面図を示した。調査区の中央付近には東西方向の段差があり、会議所取り壊しの際に舗装の除去、植木の移植などが行われたため近現代とそれ以前の盛り土とを厳密に区別することは出来ず、表土と遺構埋土の区別が曖昧なまま掘り下げを行わざるを得なかった。そのため調査は試掘段階で明らかになっていた、大正12年に焼失した大学本部の基礎をグリッド毎に出すことから始めた。

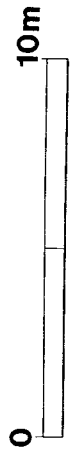
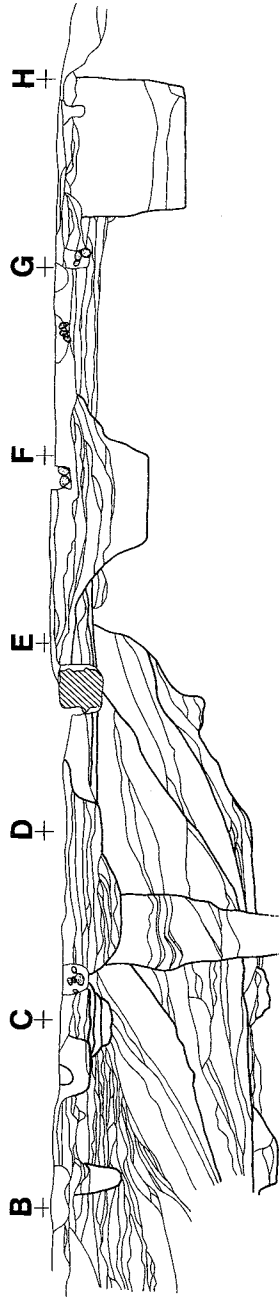
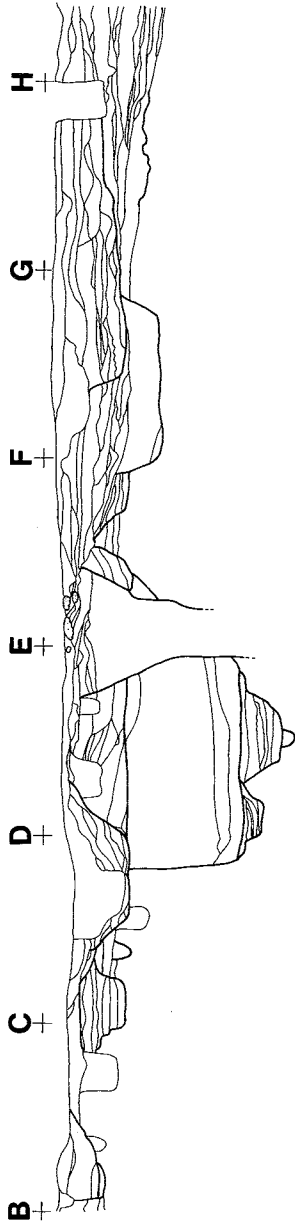
3月－5月 近代遺構の検出と上層の除去を終え、大まかな遺構の配置が捉えられた。発掘区南側から本格的に近世の遺構の調査を進め、何も遺構の痕跡が捉えられなかった北東端の4グリッドは地山面まで一気に掘り下げた。これにより本来の地形が発掘区の南西から北東へ傾斜していたこと、4mから5mの盛り土をして築山を構築していることが判明した。3号遺構などの苑路には面が複数認められたため、各々の面で平面図を取りながら調査を進めた。

6月－9月 夏休みには補助員が多くなり、34号遺構や69号遺構など貝や焼土の詰ったやや特殊な遺構の手間のかかる調査作業をこなすことができた。69号遺構の貝層部分はそのまま1cm目のふるいにかけて貝とそれ以外の遺物を分離した。また69号遺構の壁と井戸である93号遺構の壁の様子から発掘区中央に巨大な溝があることが判明した。

10月－12月 後にⅢ期とした17世紀末から18世紀初めの遺構の調査がほぼ終了した11月に空撮を行った。南部分で苑路の検出を終え、ようやくその下の石垣の配列をつかむことが出来た。



第16図 E-1 mライン, 15ライン断面図 (水糸高23.0m)



第17図 17ライン、19ライン断面図 (水糸高23.0m)

1月－3月 発掘区東側の拡張部分を主に調査し、またII期の97号遺構を埋める盛り土を除去した。

4月－7月 36号遺構完掘後、I期の遺構の調査に入り、石垣（150号・200号遺構）・105号遺構・100号遺構など大型遺構の検出が相次いだ。地山面の出た数箇所では深掘りを行い、ローム層を調査したが、何も発見されなかった。立面図作成中に石垣に刻印があることが判明した。また石垣を中心とした部分のステレオ撮影を行った。

なお、石垣は150号遺構の一部が山上会館南に東向きに向きを替えて移築された。

第2章 遺構と遺物

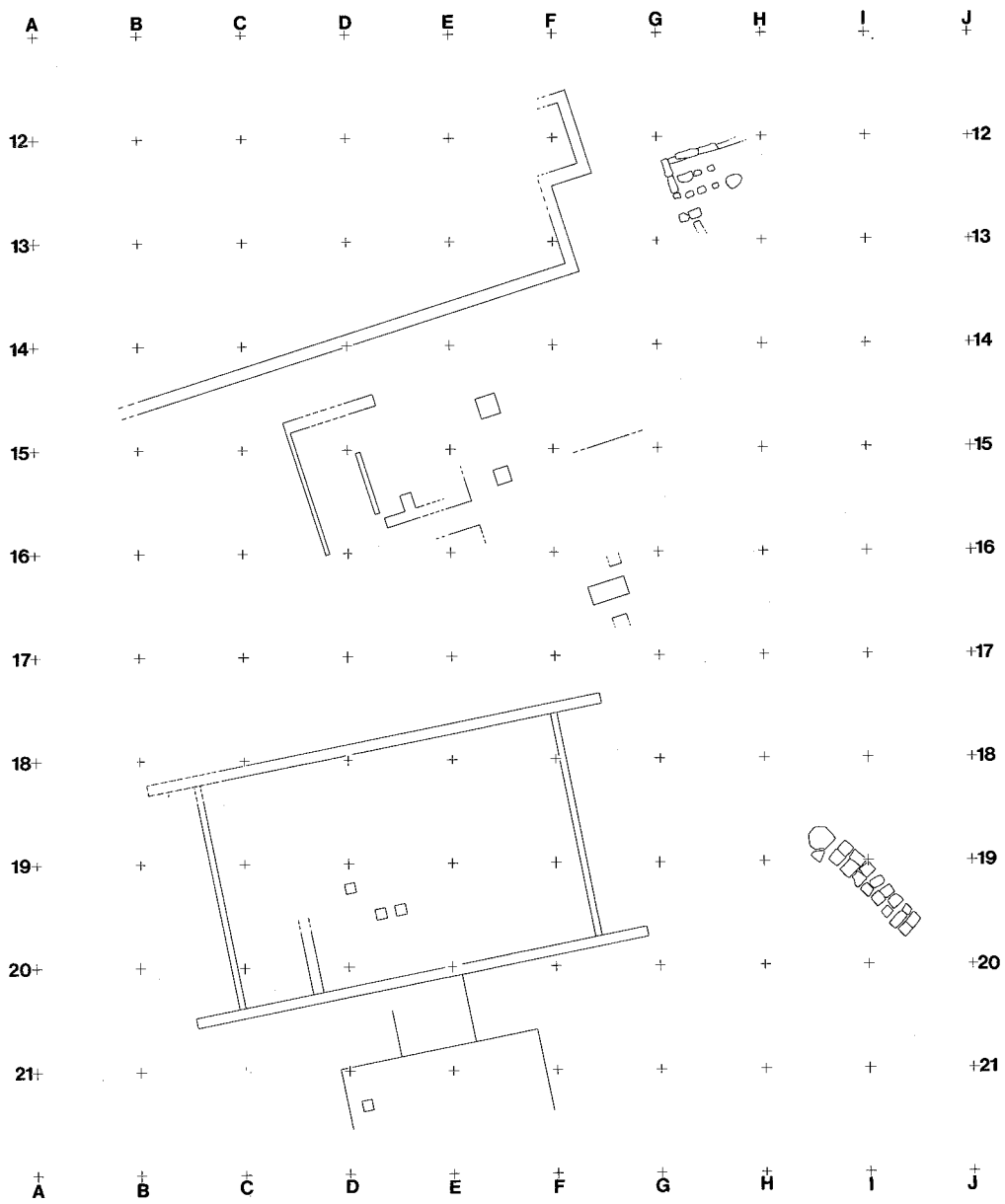
第1節 近代の遺構

運動場を見下ろすこの地点にはながく建造物が立てられなかったが、明治26年になって仮本部が置かれた。これは旧富山藩邸内にあった建物の玄関部分を移築したもので、山上御殿と呼ばれ、御殿下グラウンドの名称の由来となったと言われる。この経緯は『中外医事新報』1136号の入沢達吉氏の「明治十年以後の東大医学部回顧談」により知ることができる。それによると当時無縁坂に門があり、入ると向かいに日本館があったが、濱尾総長時代にその建物を山上に引き揚げたとある。その日本館のあったところは、後に婦人科皮膚科のできたところということなので、明治14年の建物配置図中の黒塗りにした医学教室がそれであることがわかる（第21図）。入沢氏はこれを大聖寺藩の御殿としているが、位置からみて富山藩の建物であり、現存する富山藩邸の絵図とも共通性が認められるので、入沢氏の誤認と思われる。

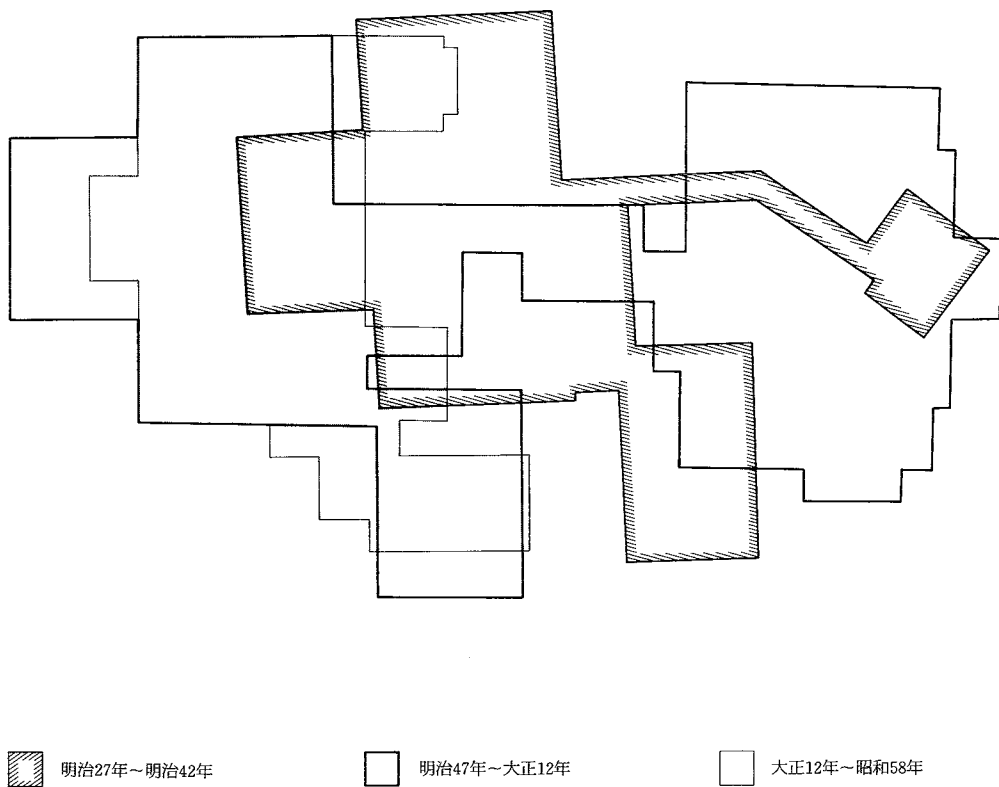
まもなく仮本部の建物は集会所、会議所と名称を変え、小規模な増築が行われた。そして大正元年から2年に煉瓦造りの本部が元々の建物を引き移した上で北側に建設された。この時連結部分に段差が設けられたようである。第19図に変遷を示す。この本部建物については詳細な図面が残っており、その威容をうかがい知ることが出来る。発掘調査では本部の煉瓦基礎の南側の一部と連結部分の切石の基礎、及び会議所の石積みの基礎が検出された。この時期の基礎の特徴はほとんどのりを取ることなく、ほぼ基礎そのものの幅で溝を掘っていることである。煉瓦には桜の刻印のあるものがあった。建築後わずか10年で関東大震災のため本部は焼失する。直ちに仮設の会議場が建てられ、昭和11年の配置図には山上会議所という名称が見える。調査の始めの段階で調査区北側で大量の被災した遺物が出土したが、これらは震災後の廃棄物と考えられる。

近代の遺構は大正期の大学本部の他に、北東部に小規模な建物跡と南東部に石段が検出された。北東の建物は明治後半から大正期にかけての本郷構内配置図に見られる会議所付属施設と考えられる。また石段が上記の配置図に描かれているのは昭和10・11年のみであり、昭和12年には苑路が変更されている。石段の設置時期については確証がないが、埋められたのは昭和12年と考えてよいであろう。

B19グリッドからB20グリッドにかけて近代のごみ穴が検出された。割れた洋食器類、ガラス

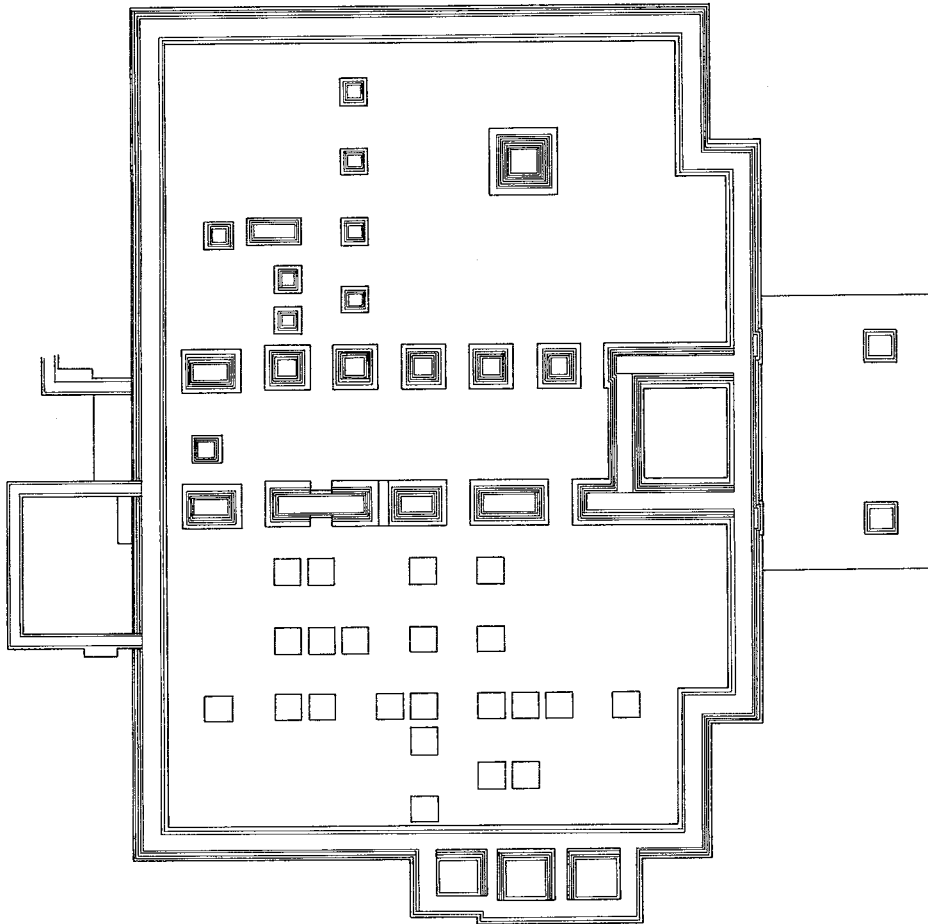


第18图 近代遺構実測図

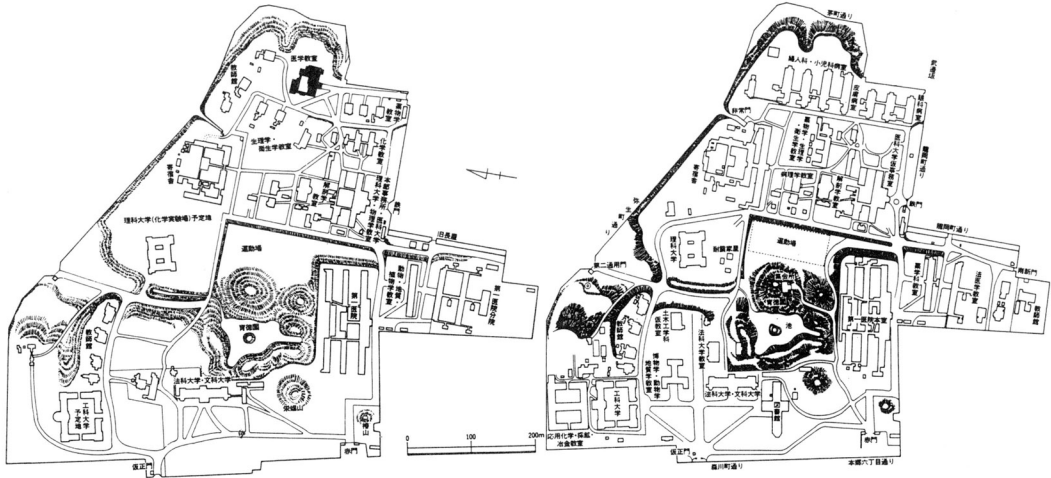


第19図 山上会議所・御殿の変遷

地業伏箇



第20図 山上御殿基礎



第21図 明治期の本郷キャンパス

(「東京大学本郷キャンパスの百年」より)

コップなどがほとんどであるが特に被災の跡が見られないため、震災の廃棄物である確証はない。注目すべきなのはこの中に大量に「燕楽軒」と記された皿類が含まれていたことである。燕楽軒は大正4年から昭和初年まで本郷3丁目交差点近くにあった三階建の西洋料理店で宇野千代が一時ウェイトレスとして働いたこともあった。大学でも会合の際に出前を取ることがあったのであろう。

大学が設置されたのち今日まで敷地内の大きな区画の変更が行われたのは、関東大震災と大講堂の建設を契機とするものであり、日本庭園史大系によれば育徳園自体も大がかりな改修が昭和になって行われたということである。したがって今日の育徳園の苑路は必ずしも藩邸時代の苑路と一致するわけではない。

参考文献

- 入沢達吉 1928 「明治十年以後の東大医学部回顧談」『中外医事新報』1136
 文京区教育委員会 1988 『ぶんきょうの歴史物語』
 1974 『日本庭園史大系』18

第2節 近世の遺構

(1) 概要

近世の遺構は大まかに3期に分けられ、古い方からⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期と呼ぶ。時期の区分には発掘区の大部分を覆うような遺構ないし面を基準としたため、このような区分となったが、Ⅲ期は実際にはさらに細分されるべきである。しかしながらⅢ期の遺構群の中から同時期のものを選定することが極めて困難であるため、あえて区分することをしなかった。切り合い関係及び年代は後にまとめて示す。

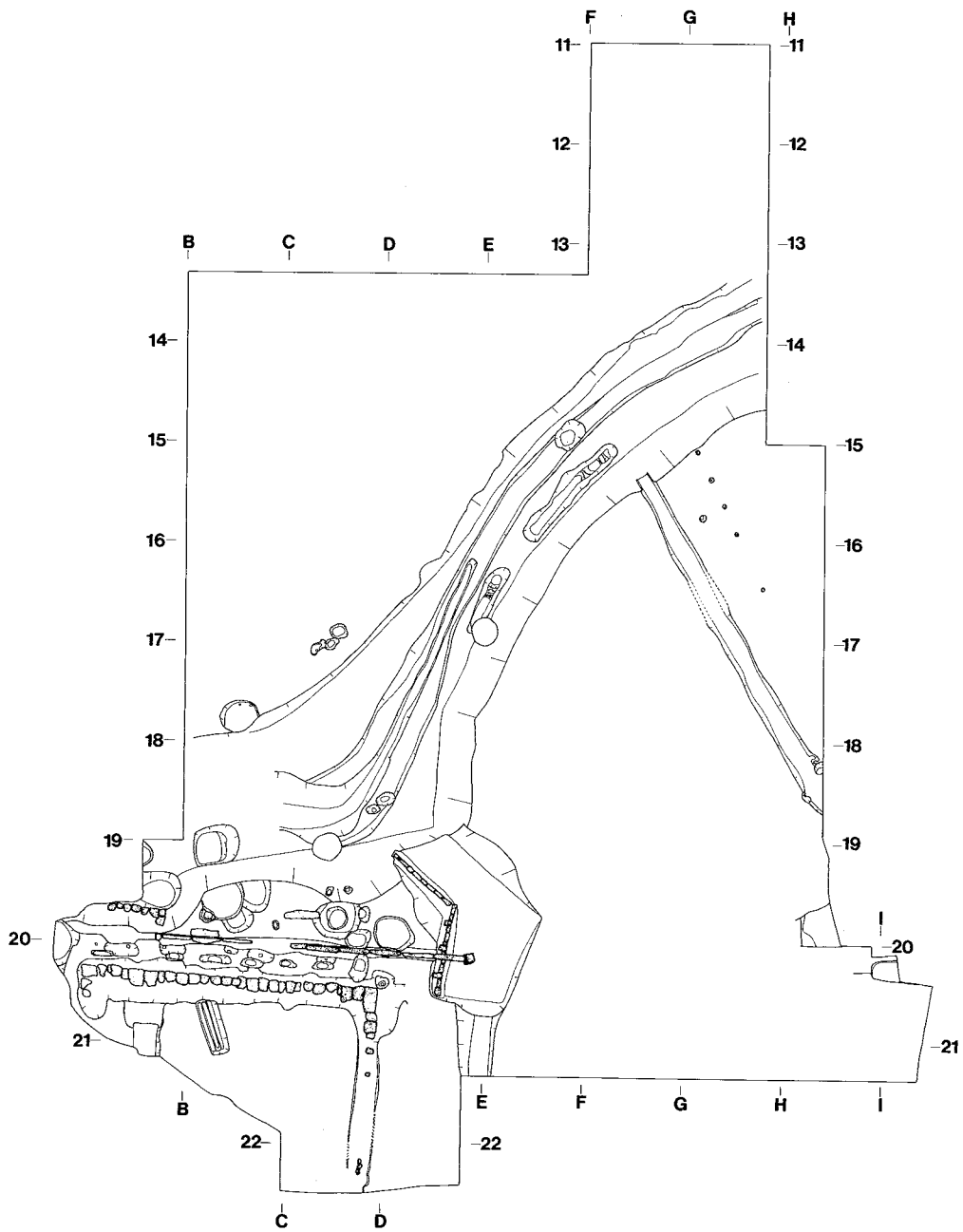
この地点は庭園址であるため遺構のほとんどは苑路と植栽痕である。明確な建物跡は礎石が僅かに検出されたほか、石垣が数列確認されたに留まる。しかしながら庭園の改修の頻度と規模の大きさは当初の予想を大きく上回るものがあり、調査者の大名屋敷内庭園に対するイメージを一変させた。以下、時期毎の遺構の解説を行う。なお以下の部分に限って、煩雑さを避けるため遺構名を数字のみで示した。

(2) Ⅰ期の遺構 (第22図)

150, 105築造までの古い段階の遺構群を一括する。この中でも155, 199は初期の築山層の下に掘り込み面があり、17世紀前半の遺構であることが考えられ、当地点では最古期に属する。発掘区南側では旧表土がほとんど残っていないため、対比が難しいが、100は埋土中の遺物からみて上記の最古期の遺構よりはやや時代が下るものと判断される。

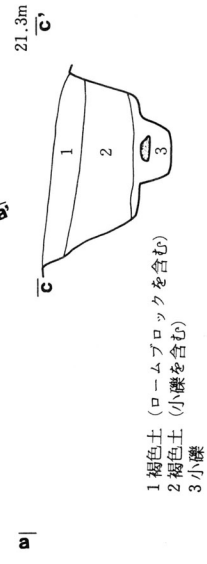
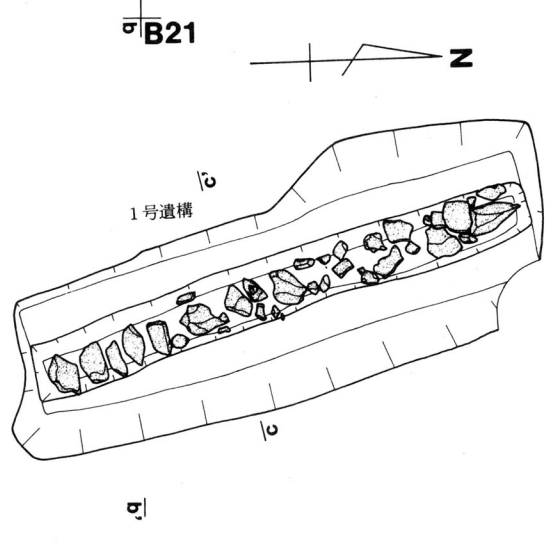
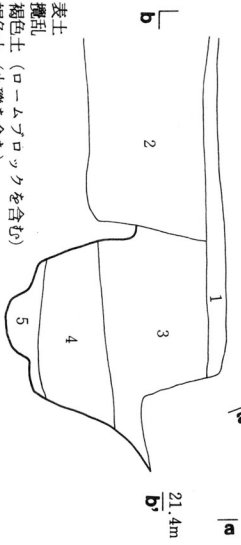
1号遺構 (第23図) ほぼ南北に長軸をもつ溝状遺構で、B20区西壁よりに位置する。北端は、石垣、集石遺構2によって破壊されている。掘り込み面は削平されているため定かではないが、遺構開口部は3×1mの大きさを持つ。充填されていた堆積物は専ら、僅かなローム塊と小礫を含む褐色土である。底面はほぼ平坦で約60cmの幅をもち、厚さ約5cmの砂利層が敷かれている。この層の下はローム面であるが、中央部には一本の石列が遺構長軸にそって埋めこまれている。この石列も当遺構の一部と考えられる。(西秋良宏)

11号遺構 (第26・27図) 発掘区中央105によって形成されたテラス前面に位置する石垣。200を切り、140の瓦溜りに覆われている。石垣は長さ約180cm、高さ約30cm、奥行き20—35cmの短冊形の石材(輝石安山岩)を用いている。石材には切り出しあるいは運搬の際に切り込まれたほぞ穴が見られるのみで他に造作は認められない。石垣の構築はまずローム地山面に溝を掘削し、

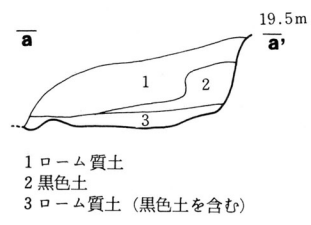
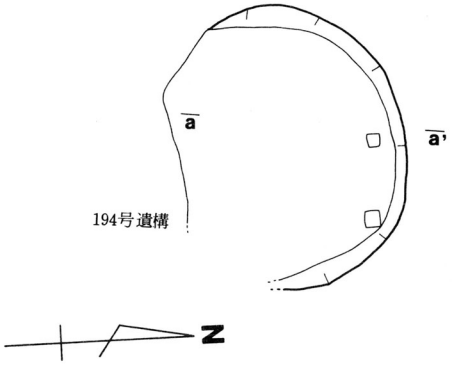
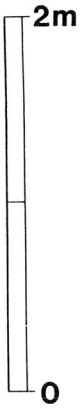


第22図 I期全体図

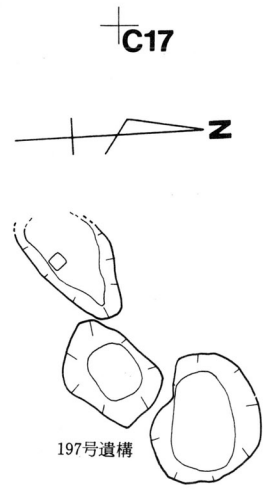
- 1 表土
- 2 擾乱
- 3 褐色土 (ロームゾロツクを含む)
- 4 褐色土 (小礫を含む)
- 5 小礫



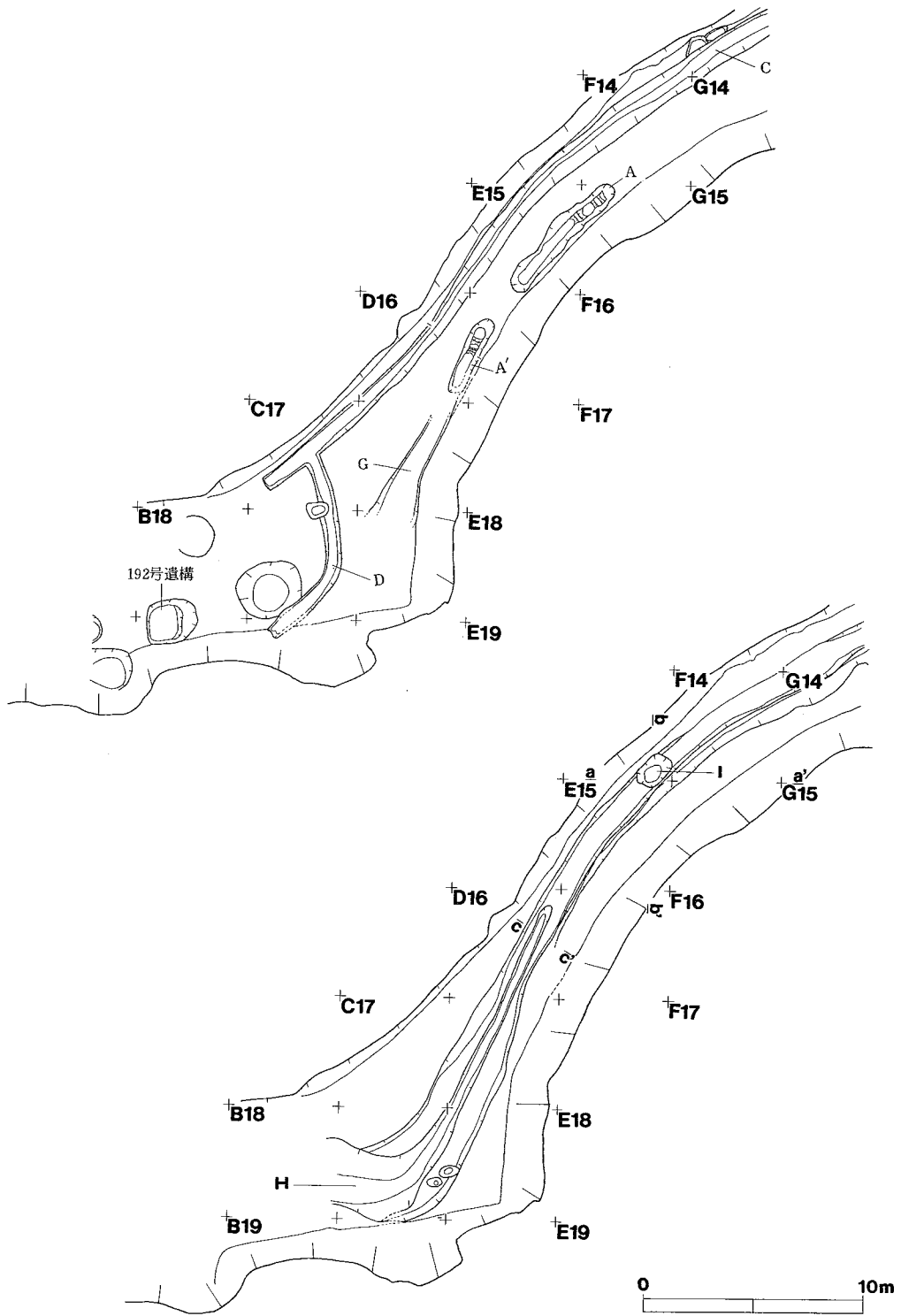
- 1 褐色土 (小礫を含む)
- 2 褐色土 (ロームゾロツクを含む)
- 3 小礫



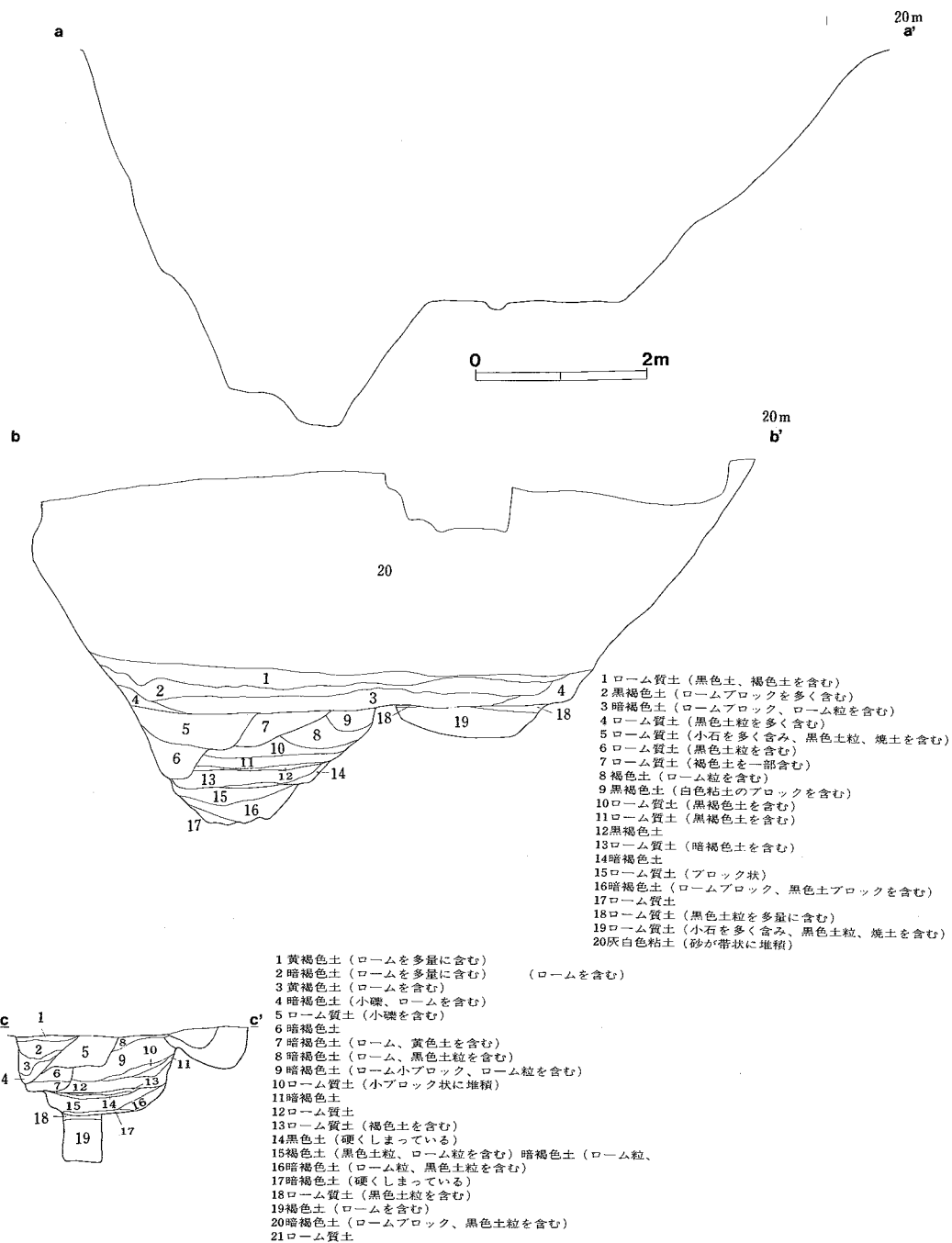
- 1 ローム質土
- 2 黒色土
- 3 ローム質土 (黒色土を含む)



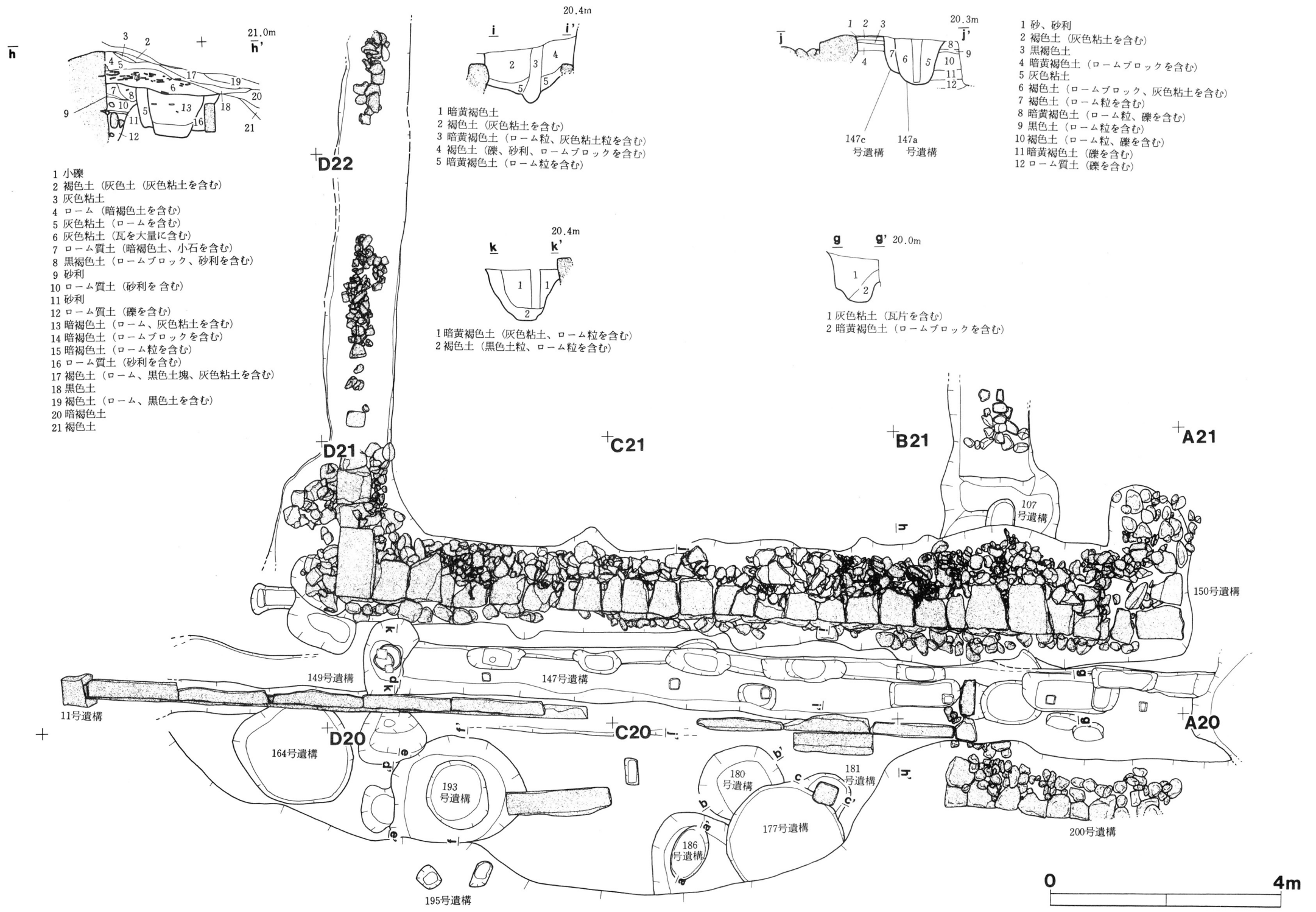
第23図 1・194・197号遺構実測図



第24图 192号・105号遺構実測図



第25図 105号遺構実測図



- 1 小礫
- 2 褐色土 (灰色粘土を含む)
- 3 灰色粘土
- 4 ローム (暗褐色土を含む)
- 5 灰色粘土 (ロームを含む)
- 6 灰色粘土 (瓦を大量に含む)
- 7 ローム質土 (暗褐色土、小石を含む)
- 8 黒褐色土 (ロームブロック、砂利を含む)
- 9 砂利
- 10 ローム質土 (砂利を含む)
- 11 砂利
- 12 ローム質土 (礫を含む)
- 13 暗褐色土 (ローム、灰色粘土を含む)
- 14 暗褐色土 (ロームブロックを含む)
- 15 暗褐色土 (ローム粒を含む)
- 16 ローム質土 (砂利を含む)
- 17 褐色土 (ローム、黒色土塊、灰色粘土を含む)
- 18 黒色土
- 19 褐色土 (ローム、黒色土を含む)
- 20 暗褐色土
- 21 褐色土

- 1 暗黄褐色土
- 2 褐色土 (灰色粘土を含む)
- 3 暗黄褐色土 (ローム粒、灰色粘土粒を含む)
- 4 褐色土 (礫、砂利、ロームブロックを含む)
- 5 暗黄褐色土 (ローム粒を含む)

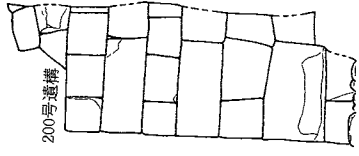
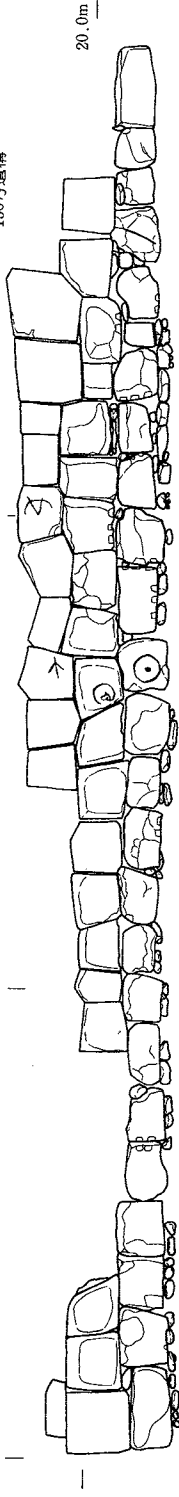
- 1 暗黄褐色土 (灰色粘土、ローム粒を含む)
- 2 褐色土 (黒色土粒、ローム粒を含む)

- 1 砂、砂利
- 2 褐色土 (灰色粘土を含む)
- 3 黒褐色土
- 4 暗黄褐色土 (ロームブロックを含む)
- 5 灰色粘土
- 6 褐色土 (ロームブロック、灰色粘土を含む)
- 7 褐色土 (ローム粒を含む)
- 8 暗黄褐色土 (ローム粒、礫を含む)
- 9 黒色土 (ローム粒を含む)
- 10 褐色土 (ローム粒、礫を含む)
- 11 暗黄褐色土 (礫を含む)
- 12 ローム質土 (礫を含む)

- 1 灰色粘土 (瓦片を含む)
- 2 暗黄褐色土 (ロームブロックを含む)

第26図 11・107・147・149・150・164・177・180・181・182・186・191・193・195号遺構実測図

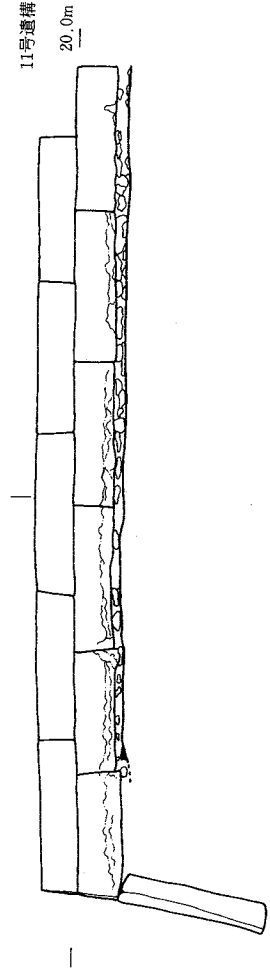
150号遺構



200号遺構

18.0m

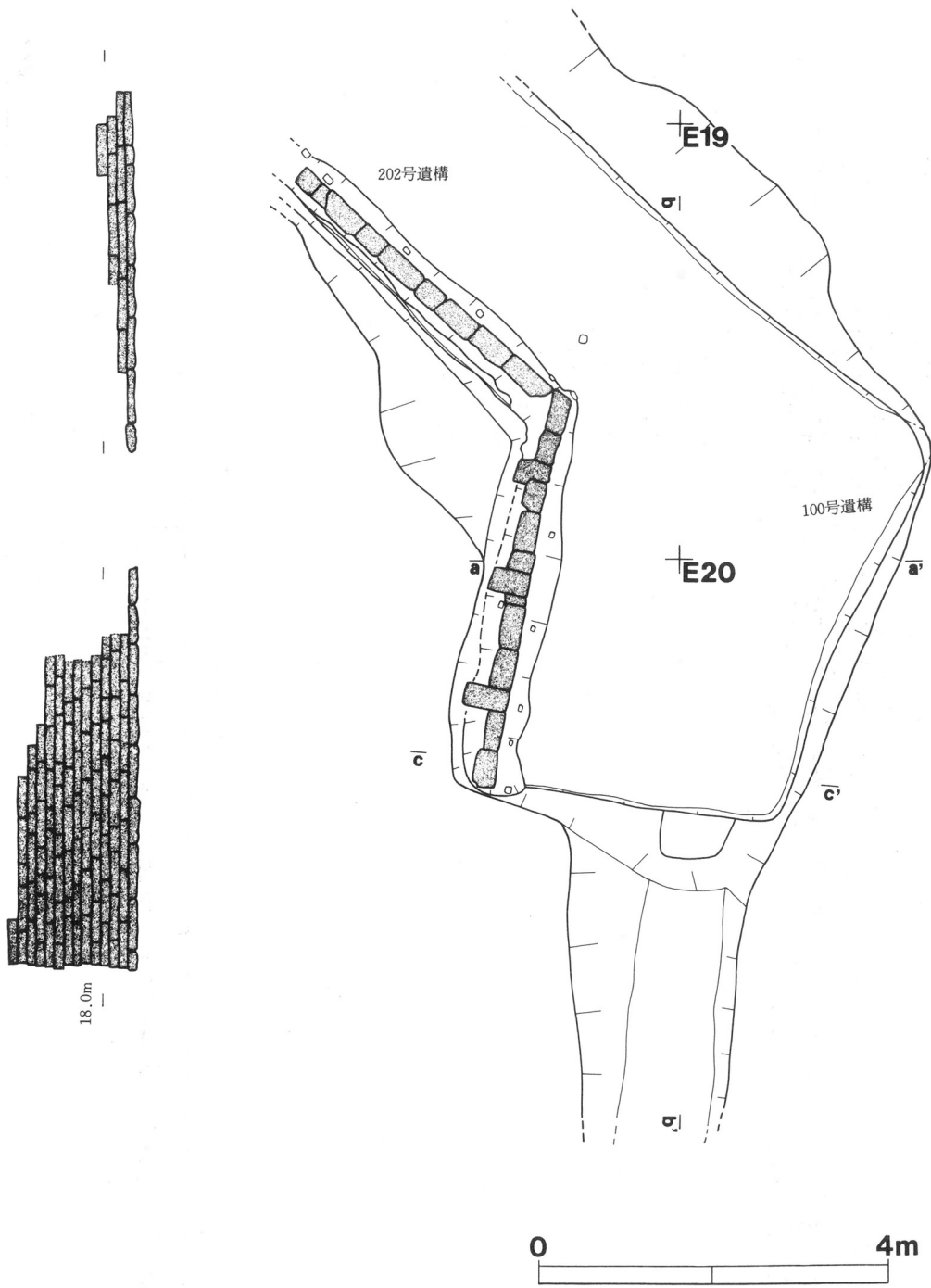
11号遺構



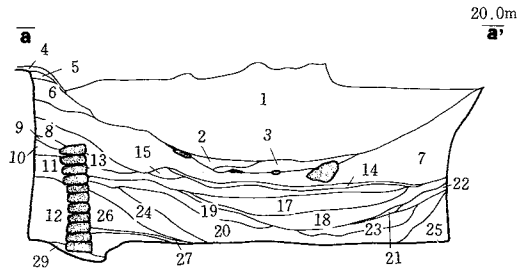
20.0m



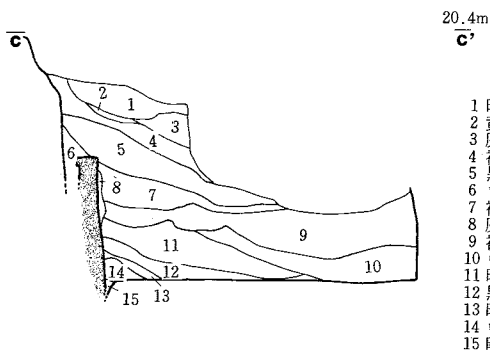
第27图 150・11・200号遺構実測図



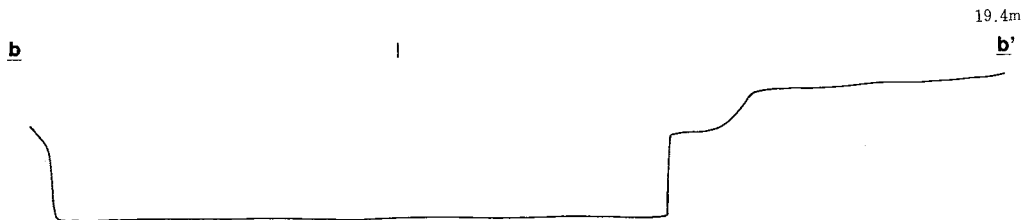
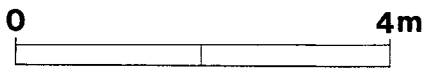
第28図 100・202号遺構実測図



- 1 灰白色粘土
- 2 黒褐色土 (炭化物、粘土、ローム粒を含む)
- 3 暗褐色土 (砂利を含む)
- 4 明褐色土 (青灰色粘土、黒色土粒を含む)
- 5 暗褐色土 (灰白色粘土、黒色土粒を含む)
- 6 黒褐色土 (黒色土粒を多量に含む)
- 7 褐色土 (ロームブロックを含む)
- 8 暗黄褐色土 (バランスを含む)
- 9 褐色土
- 10 ローム質土
- 11 暗黄褐色土 (粘性に富む)
- 12 黒褐色土 (バランスを含む、ローム質土と互層)
- 13 暗褐色土 (灰色粘土粒、ローム粒、黒色土粒を含む)
- 14 褐色土
- 15 黒褐色土
- 16 黒色土 (ロームを多量に含む)
- 17 黒褐色土 (ローム、黒色土を含む)
- 18 暗褐色土 (砂を含む)
- 20 明褐色土 (バランスを含む)
- 21 暗褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
- 22 ローム質土 (ブロック状)
- 23 暗褐色土 (黒色土を含む)
- 24 暗黄褐色土 (ロームブロックを含む)
- 25 褐色土 (暗褐色土粒を少量含む)
- 26 褐色土 (暗褐色土と互層)
- 27 黒色土
- 28 暗黄褐色土 (バランスを含む)
- 29 ローム質土



- 1 暗褐色土 (灰色砂を含む)
- 2 黄褐色砂
- 3 灰白色粘土 (黒色土、褐色砂を含む)
- 4 褐色土 (黒色土、ロームを含む)
- 5 黒色土 (ロームブロックを含む)
- 6 ローム質土 (砂を含む)
- 7 褐色土 (ロームブロックを含む)
- 8 灰褐色土
- 9 褐色土 (ローム、粘土ブロックを含む)
- 10 ローム質土 (暗褐色土、黒褐色土ブロックを含む)
- 11 暗褐色土 (ロームブロックを含む)
- 12 黒褐色土 (ロームブロックを含む)
- 13 暗褐色土 (ローム粒を含む)
- 14 ローム質土
- 15 暗褐色土



第29図 100・202号遺構断面図

碎石を含むローム質土を充填し突き固めた上で、石材を据え付けるという工法をとっている。また、石垣東端部は、据え付け面が200の埋土内に位置しており、軟弱な地盤に対処するために特殊な基礎工法がとられている。それは、東端部の石垣が自重で沈下するのを防ぐためにとられたもので、軟弱な遺構埋土の中に、碎石を裏込めした40cm角、高さ200cm程の石材を垂直に立てて基礎とし、その上部に石垣の石材を乗せている。北側のローム面上に石垣の石材が幾つか本来の位置からはずれて検出されたが、それらを含めても石垣の高さは二段までであったと推測される。

(武藤康弘)

100号遺構、202号遺構 (第28・29図) D, E-18, 20区の遺構。105・106・11号遺構より古い。現状では平面形が「く」の字状の掘り込みであるが、北側を105号遺構に切られているため本来の形態は不明である。西側の壁に沿って202号遺構の切り石積みの石垣がめぐらされていて、据付け用の浅い溝が掘られている。溝の中には構築に際し用いられたのであろう方形の杭穴列が並んでいる。底の幅で見ると、北端の掘り込み幅は約280cm、積み石までの幅約230cmであり、南端の掘り込み幅約380cm、積み石までの幅約330cmである。

切り合い関係からこの遺跡では最も古い段階の遺構の一つと捉えられる。他の石造遺構と同様に発掘区南西側の高台を区画する性格のものであり、その中で最も古い段階のものと思われる。すでにないが、202号遺構と共に北側を区画し、南側の細い溝が東側を区画していたのであろう。

底の硬化面から50—70cm上にもう一枚硬化面があり、掘り直されている。これらの底面はそれぞれ硬化した平坦な面である。南側の幅1m程の細い溝は更に未発掘区にのびている。区画する溝であると共に道としても機能していたのであろうか。11号遺構はこの新しい面から掘り込んでおり、側石を立てて後、100・202号遺構を一気に埋めたようである。11号遺構の構築に際し、積み石の上部が壊されたようである。

(大貫静夫)

105号遺構 (第24・25図) 発掘区域を北東から南西に向けてほぼ二分する大型溝状遺構。G13, G14区から南西に伸び、C・D18区付近で大きく西に方向を変える。遺構内に溝が8本、土坑が1基みられる。192・200号遺構はこの遺構に付属する施設である。育徳園では最も古い遺構の一つであり、100・202号遺構のみを切る。大溝の上半は灰白色粘土で一気に埋められ、下半部はローム質土を主体に暗褐色土、黒褐色土等を埋土としている。大溝底のレベルはGライン周辺では標高16.3m前後であり、南西に向かって下る。掘り上がりの形から見ると溝の集合体とも見えるが、本来は道として利用されたのではないかと考えられる。各々の溝は切り合っており、同時に存在したと考えられるのは溝Aと溝Cのみである。溝B・C・E・F・G・Hは16ライ

ンより北では大溝に沿うようにして南西に伸び、大溝の南壁付近で急に西に向きを変える。19ライン沿いC、D区周辺の大溝南壁の屈曲部は掘削直後の本来の平面形は直角に近い角度を持っているが、土を斜面に盛り、なだらかなものに作り直されている。

溝A D16区からF15区にかけて大溝の東壁沿いに二本並ぶ溝である。北側のものをA、南側をA'とする。溝Aは長軸6.25m短軸0.7—1.1m、深さ30—40cmで底は起伏が激しい。溝A'は長軸3.65m短軸0.6—0.9m深さ40—50cmでやはり底の起伏が激しい。埋土には小石が多く含まれ、遺構105の中では溝Cと共に最も新しく掘られた溝であり、溝Bを切っている。形状から見て水路や道ではない。石あるいは植木を掘上げた後と考えるのが妥当であると思われる。

溝B G13区から大溝に沿って伸びる溝である。溝Fを切り、溝A、C、Eに切られる。ローム質土、黒褐色土を埋土に持ち緻密に堆積している。溝Fとの境界は南に行くにしたがってはつきりなくなり、16ラインの南で溝Fと一緒にになる。これは溝Fの部分的な修復ともみることができる。

溝C 溝B、E、Fに沿って伸びる溝である。溝D、B、E、Fを切る。溝Aと共に105号遺構の中では最も新しい溝であるが、17ライン以南では溝Dとの境が不明瞭になる。小石を含むローム質土を埋土とする。大溝との位置関係から側溝、あるいは排水施設と考えられる。

溝D 溝Cの直下にある溝である。溝Bを切り、溝Eに切られる。17ラインより北では検出されなかった。C17区で2方向に枝分かれするが双方とも途中でとぎれる。暗褐色土を埋土とし、砂が数層薄く堆積している。溝Cと同じような機能を持っていた可能性がある。

溝E F14区からD16区にかけて溝Bの東壁に一部残っている。溝B・Dを切り溝A・Cに切られる。

溝F 溝Bの直下にある溝である。G13区から大溝の西壁に沿って南西に伸びC18区で西に方向を変える。溝B、Cに切られ北端はほとんど壁が残っていない。溝H、土坑Iを切る。ローム質土を埋土とし、極めて密に堆積している。D17区から幅をひろげるが、掘り方は浅くなりCライン以西では確認することが難しい。

溝G D16区から南西へ直線的に伸び、C18区から急に幅を広げ西へ向かう溝である。C18区までは幅は50—60cm、深さは南に行くにしたがい深くなっていく。105号遺構の中では最も古く、溝Fに切られる。埋土はロームを含む褐色土でぼそぼそした堆積である。床面が傾斜していること、溝の幅が狭いことなどから心字池方面へ流れる排水路とも考えられるが、溝の北端になんら施設を伴わないこと、大溝を横切ることなどそれを否定する要素も多い。

土坑I E14区と15区の境界にある土坑である。溝Fに切られる。長軸1.6m短軸1.3m深さ30—40cm。暗褐色土を含むローム質土がブロック状に堆積している。底には工具痕が残り起伏が激しい。

105号遺構の中の溝，土坑の新旧関係は古い方から，

H・I—F—B—D—E—A・C・G

となる。

このうち溝Hと溝F・B・E・G，または溝Dと溝Cはそれぞれ同一の機能を持つ溝の修復あるいは掘り直しであると考えられる。(黒田晃)

107号遺構 (第26図) A20区心字池に面したテラス上に位置し，150号遺構の石垣に切られた溝状遺構。150号遺構の石垣に直交して，池側におちる斜面の傾斜変換線に沿ってのびている。遺構の形状は溝状で内部に石垣の裏込めと考えられる碎石が残存していた。このことからこの遺構は150号遺構より古期にぞくする石垣の掘り方と考えられる。(武藤康弘)

140号瓦層 (写真6) A20区からD20区を中心に150号遺構の石垣を覆う瓦層。石垣の北側にのみ認められた。灰色の粘質土に特殊な形態の大量の瓦を含む。(西田泰民)

147号遺構 (第26図) 発掘区中央よりに位置する溝状遺構。A20区からC20区まで150と11の2列の石垣の間を東西にのびている。この溝状遺構は柱穴列の存在から布掘り柱列に伴う溝であると考えられる。また，断面図の観察によって柱列は4度立て替えられていることが判明した。したがって，この遺構にも4段階の切り合いがある。これらをそれぞれ，a～dとする。いずれの遺構も140号瓦層に覆われていることから，140号瓦層よりは古期に属する。上記遺構群の変遷過程は次のようにまとめられる。最も古期に属するのは147d号遺構である。147c号遺構は，2列の石垣の間のテラスに位置する掘立柱で楕円形の掘り方と16cm角の柱痕が検出された。147c号遺構は147d号遺構を切って構築された布掘り掘立柱列である。新規の遺構群によって破壊されているため，掘り方の壁面が部分的に検出されるのみである。147b号遺構は，U字形の断面を持つ掘り方の溝と18cm角の柱痕から構成される遺構で，A20杭付近から東側は平坦なテラスを形成して心字池へと続いている。構築はまずU字形の溝を掘削し，1間おきに柱となる角材を立て，柱を据えた溝に粘土を充填し根がためをするという順で行われている。147a号遺構は，A20区において147b号遺構を切って構築されている溝状遺構。遺構そのものは植栽痕で破壊されているため全体像は不明であるが，他の遺構と同様に布掘り柱列に伴う溝と考えられる。(武藤康弘)

149号遺構 (第26図) D20区の掘立柱跡。単独であるため性格がはっきりしない。150号遺構の石垣を覆う瓦層を切っている。柱痕は確認できたが，礎石は検出されなかった。(西田泰民)

150号遺構（第26・27図） 発掘区南西に位置する石垣。3・5に切られている。東西方向に約15m続き、B20・D20区でいずれも南方向に曲がる。東側角から南方向に約3m行ったところで約1.2mの高まりがみられる。東西方向には大石が最高3段目まで残存しており、南方向はその高まりのところまで大石が残存している。南側の段の上の部分には裏込めの石と思われる径20～40cmの石が残存している。西側角からは南方向に約3mいったところで心字池へ続くやや急な傾斜があり、そこで終わっている。また、西側角から東へ約4mのところに南北方向へ曲がる石の抜き跡と思われる痕跡がある。形態は東側のものと同じで、やはり南方向へ3mのところで約1.2mの高まりがみられる。南方向へ約5mのところまでは確認できたが、続きは調査区外へのびている。つくり直しが行われたことも考えられる。

石の表面は切込みハギで横目地が通る布積みである。2段目、3段目は表面を丁寧にのみで調整しているが、1段目は断面のまま据えられている。

大石の大きさは、南東角にある角石が1段目は55cm×90cm×40cm、2段目は120cm×60cm×60cmである。他の石については表面は大小のばらつきがかなりあるが奥行きは60cm～80cmである。残存している大石は62個で、そのうち刻印のあるものが21個ある。刻印は大まかにみて12種類に分けられる。

（大貫浩子）

155号遺構（第31図） 発掘区東側E—H、15—18区をはしる浅い溝状の遺構であり、6に切られている。東へゆるやかに下降しているソフトロームを掘り込んでおり、その平面プランは地山の上面で確認できる。覆土は地山を覆う黒色土である。溝底の幅は75～90cmで南へ行くにしたがって若干広くなっているが中央部には一様に覆土の硬化がみられる。この溝がどう機能していたかは不明であるが、G15区に本遺構と並ぶようにしてピット列199が存在することは注意されよう。

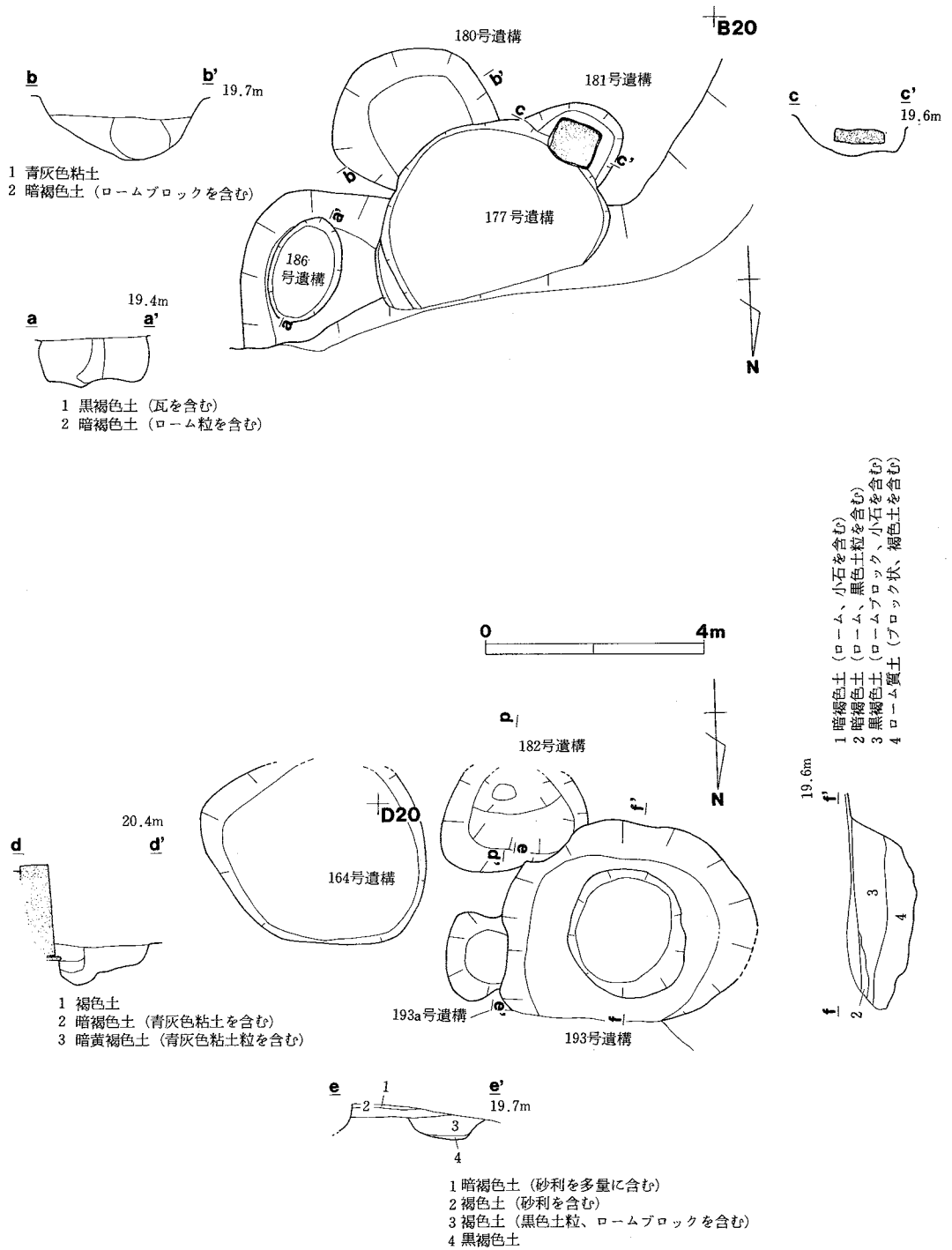
（渡辺ますみ）

164号遺構（第30図） D19区の土坑。11北側の面から掘り込まれている。平面形は南側が11によって途切れている。植栽痕かと思われる。

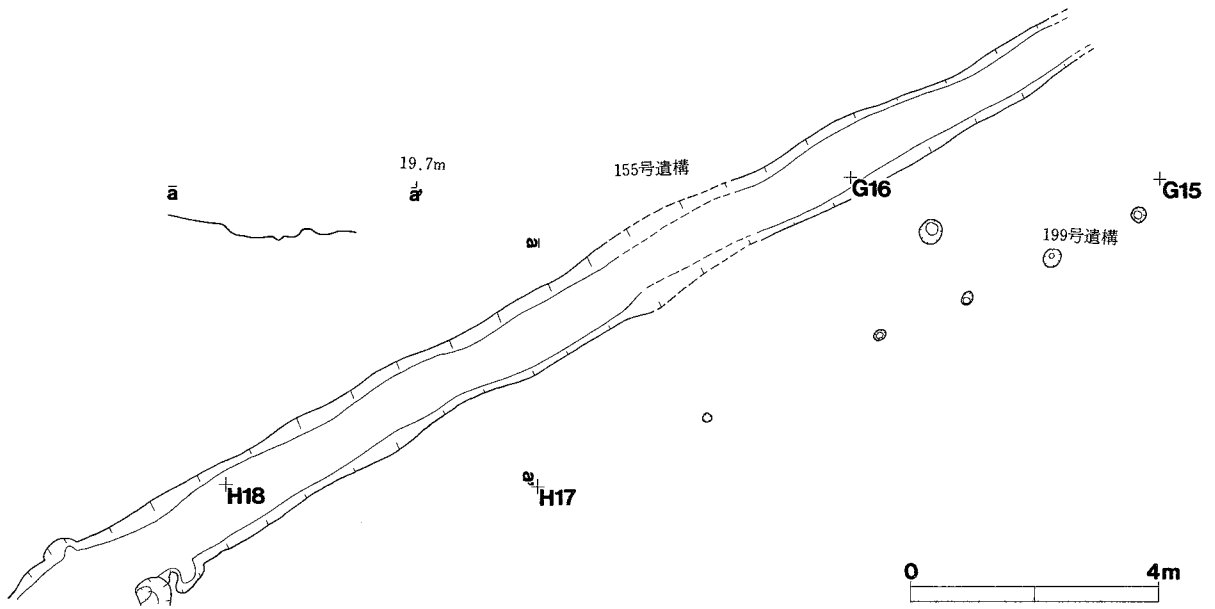
（西田泰民）

177号遺構（第30図） B19区の大型土坑。11・150号遺構の石垣がのるテラスの面から掘り込まれており36号遺構に切られていることから、古期のグループに属する遺構である。平面形はほぼ正円形で深さは1.6mである。全体の形状は截頂円錐形を呈する。埋土は二層に分かれ、下層が堆積した後36号遺構が造成され、さらに36号遺構の埋没後新たに堀込みが形成されて、上層が堆積する。埋土の状態から植栽痕と考えられる。

（武藤康弘）



第30図 164・177・180・181・182・186・193・193a号遺構実測図



第31図 155・199号遺構実測図

180号遺構（第26・30図） B19区の土坑。地山整地表面上に薄く堆積した黒色土から掘り込まれている。177号遺構を切っている。埋土は単一層で短時間で埋没したことを示している。

（武藤康弘）

181号遺構（第26・30図） B19区，180号遺構に隣接する皿形の土坑。177号遺構を切っており，180号遺構とほぼ同時期の遺構と考えられる。礎石様の石が据え付けられていたが底面は安定しておらず柱穴とは考えられない。

（武藤康弘）

182号遺構（第26図） D20区，11号遺構に隣接する不整形，皿状の土坑。南側を11号遺構とその掘り方によって切られている。形状から150号遺構に伴う植栽痕と考えられる。（武藤康弘）

186号遺構（第26・30図） B19区，177号遺構に隣接する小判形の土坑。191号遺構の土坑の覆土に入れ子状に掘り込まれている。埋土は粘性の少ない黒色土で中央部に根茎状の空洞が存在し

たことから植栽痕と考えられる。

(武藤康弘)

188号遺構(第26図) 調査区南側, 11号遺構と150号遺構の石垣の間に位置する柱穴列。柱穴は15cm角の角柱で, 一問間隔で6本検出されている。掘り方は147号遺構の溝で布掘りとなっている。11号遺構の石垣の後面に位置することから石垣の後方の塀などの基礎と考えられる。

(武藤康弘)

191号遺構(第26図) 調査区中央150・11号遺構の石垣がのるテラスの先端に位置する植栽痕。186号遺構が埋土中に掘り込まれている。円形で皿形を呈している。比較的古期のグループに属すると考えられる。

(武藤康弘)

192号遺構(第24図) B18・19区の境に位置する105号遺構中の土坑。東西に2基が切り合って存在する。105号遺構中の遺構の中では新しいものに属する。東側の土坑はローム小ブロック, 小石を含む黄褐色土を覆土とし, 西側の土坑よりも新しいと思われる。壁はゆるやかに立ち上がっている。西側の土坑の壁はほぼ垂直に立ち上がっており, 平面プランは隅丸の方形であると思われる。覆土は東側のものによく似ているが, こちらの方が小石の含有率が低い。

(黒田晃)

193号遺構(第26・30図) D19区, 11号遺構の石垣の前面のテラス地山面上から掘り込まれた不整形の土坑。埋土は砂利を含む黒褐色土である。全体の形状が不整形であることと底面が安定していないことから, 182号遺構と同様の植栽痕と考えられる。

(武藤康弘)

194号遺構(第23図) C16・C17区の土坑。不定形で底部も起伏があり人為的遺構であるか確定的でない。

(西田泰民)

195号遺構, 195a号遺構(第26図) C19区, 105号遺構の南側斜面斜めに掘り込まれた土坑。角柱状を呈し底面には柱当りが確認された。105号遺構の埋土が含まれていないことから105よりも古期に属することがわかるが, 性格は不明である。

(武藤康弘)

197号遺構(第23図) B17区の土坑。34号遺構の柱穴が北東部を貫通し, 105号遺構が南側を切っている。全形は不明だが直径約1.5mの円形を呈するものと思われる。深さは北側で40cmと浅い。遺物はほとんど出土しなかった。

(高井佳弘)

199号遺構(第31図) G15区地山の黒褐色土から掘り込まれている土坑列。155号遺構と平行している点に注意され、関連する遺構と考えられる。確認面からみて105より古い時期の遺構である。(西田泰民)

200号遺構(第27図) 発掘区南西に位置する石垣。150号遺構より一段下がったところにあるが150号遺構と同時期のものとおもわれる。東西方向に1.35m検出され、西側はさらに調査区外に伸びている。大石は最高9段目まで残存している。150号遺構と同じように石の表面は切込みハギで横目地の通る布積みである。残存している大石は調査区外の石垣の大石も含めて69個、内刻印のあるものが4個ある。いずれも150号遺構で検出されているものである。150号遺構に比べて刻印の含まれている割合は少ない。(大貫浩子)

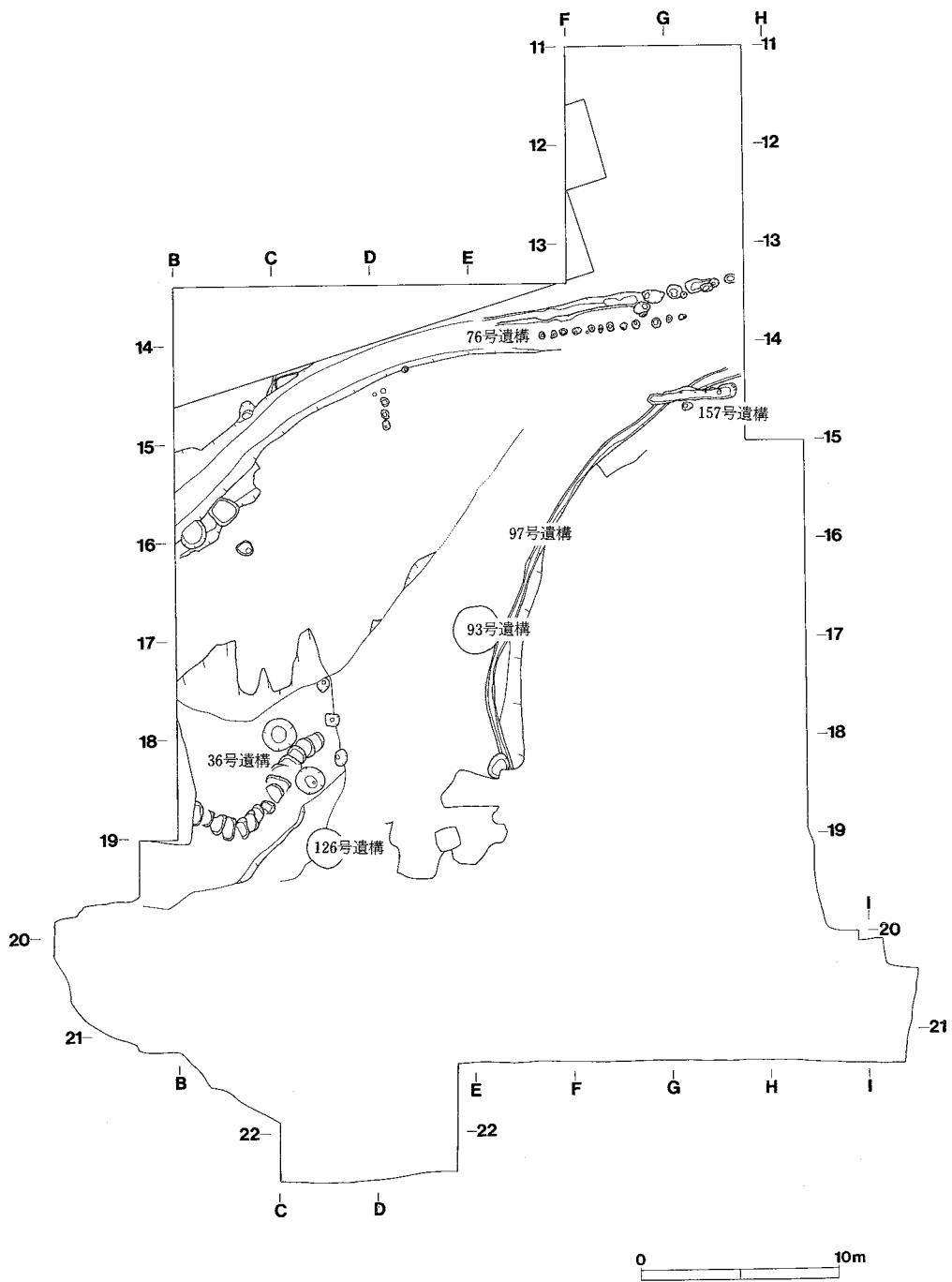
(3) II期の遺構(第32図)

97号遺構の砂利面の時期を中心とし、南北方向の複数の苑路が作られる以前の遺構群を一括する。1688年(元禄元年)前後と推定される。

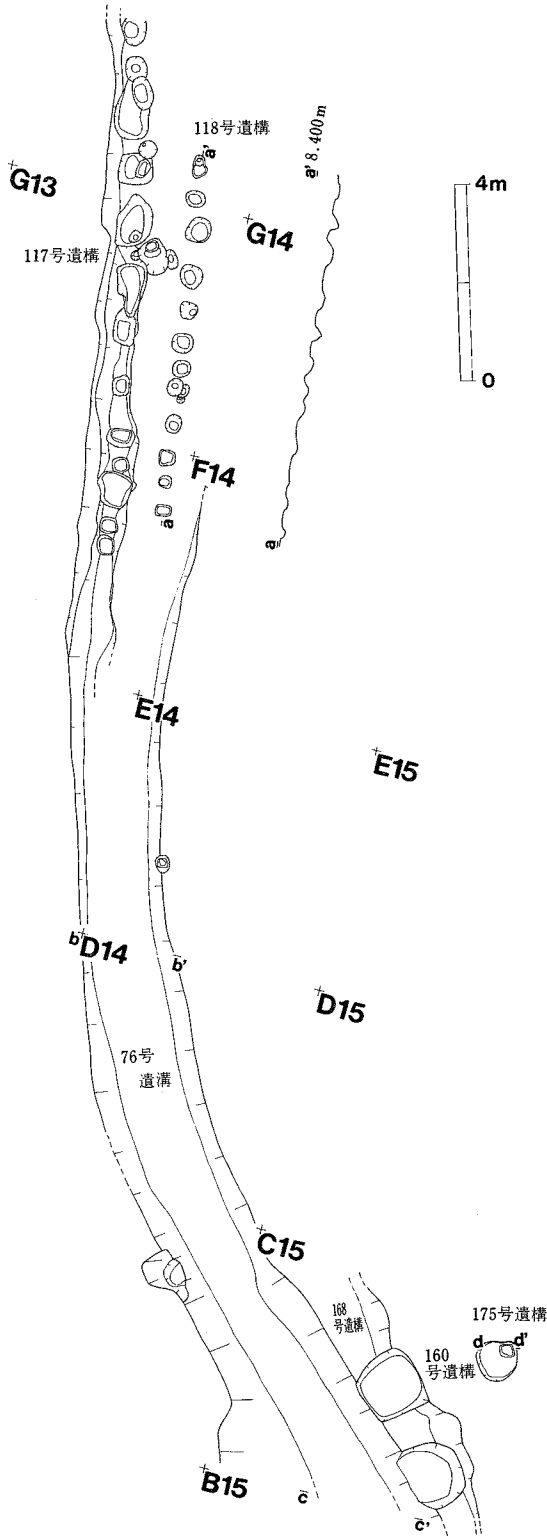
36号遺構(第35図) 発掘区中央西寄り、心字池に面した谷に形成された整地面。整地面には谷頭から谷底に降りる階段が作り出されている。南側の立ち上がりは140号遺構の瓦層に覆われており、140号遺構よりは古期に属する。整地面は谷を埋めた土壌の上面を青灰色の粘土で覆って形成されている。整地面には、土留めに用いられたと考えられる矢板と杭の痕が認められる他、谷頭の傾斜変換線に沿って柵の基礎と考えられる柱痕、門跡(183・184号遺構)も検出されている。階段は、斜面を削り込んで作られており、幅80cm、奥行き25cm、深さ10cmを計る。調査範囲内では、15段確認されているが、心字池の方向に更に続くものと考えられる。

(武藤康弘)

76号遺構(第33・34図) 発掘区北西(B15区)から東へ伸びる道と考えられる溝状の遺構。168号遺構を切り、発掘区内で比較的古い時期の遺構と考えられる。32号石垣、3号遺構の構築時にB15区の部分が埋められた。また49号遺構に切られており、F14区では完全に削平されてしまっている。B15区では南側から埋められた様子が堆積状況からうかがえる。遺物は僅かである。遺構の壁は上部ではなだらかであるが、途中から稜をなし急角度で底面にいたる。稜から底面までの深さは1.2mであるが、第5面形成時の深さは0.8m程しかなくなる。面の形成は5回見られる。基礎地業(砂利混じりの暗褐色土、粘土)の上に山砂を敷き、面を形成している。山砂の厚さは1cmから10cmまで層ごとに異なっている。第5面以外は砂は壁際までは敷かれて



第32図 II期全体図



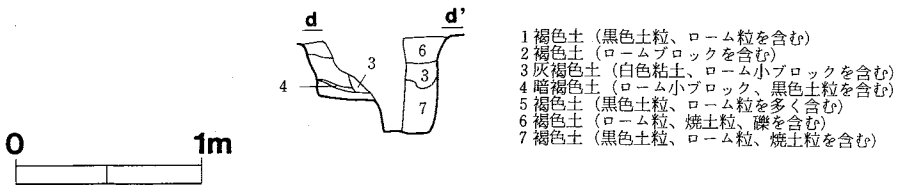
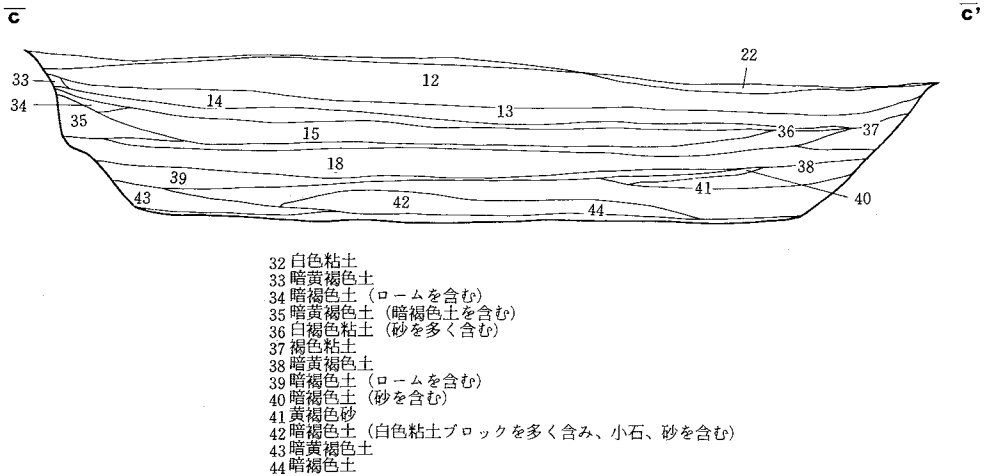
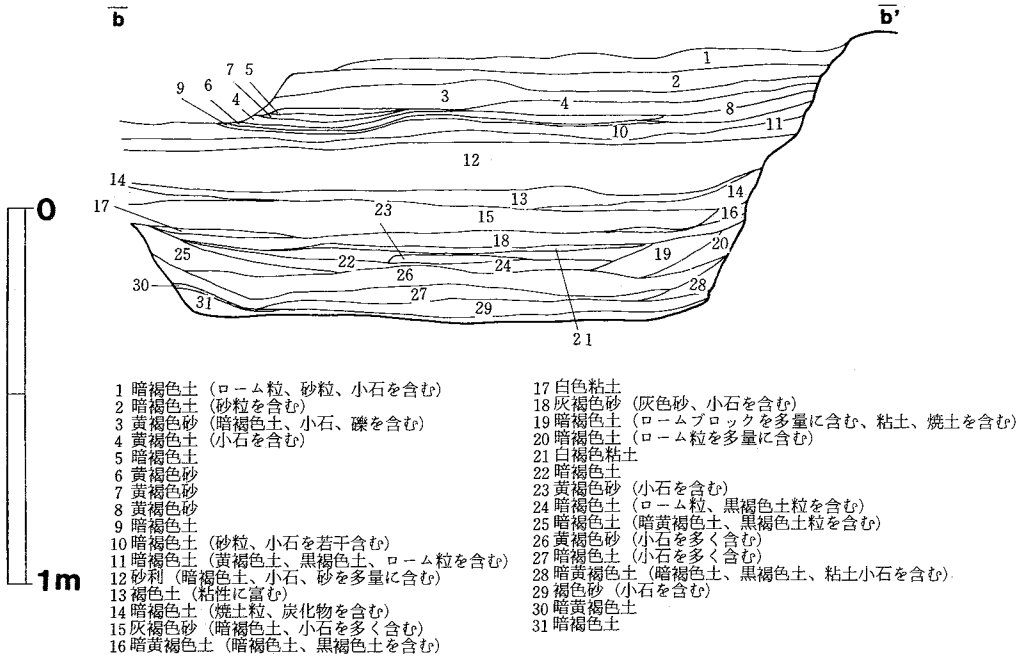
第33図 76・117・118・160・161・168・175号遺構実測図

いない。遺物は細片のみであった。

(加藤晃)

97号遺構 (第32図) F14, E14区からD19区へのびる砂利敷面。36号遺構の斜面と同じ時期に存在していた。105号遺構を埋め立てて作られている。北の末端は49号遺構に切られているがさらにカーブを描きながら東へのびていたと推測される。南側はレベルが上がっているために後の時期に削平されてしまっており、本来の範囲がわからなくなっている。東西側部にわずかに残った立ち上がりからみて築山の中の切り通しのような景観を呈していたものらしい。東側壁の下には浅い側溝が掘られている。御殿下記念館地区の硬化面と対応するものと考えられ、17世紀後半の遺構であろう。(西田泰民)

117号遺構 (第33図) F-H, 13区をほぼ東西にのびる遺構。49号遺構に切られている。溝の中に土坑が掘り込まれている。土坑の大きさ、形状などに規則性はみられないが、各土坑の中心間の距離はほぼ1mで比較的一定である。覆土は暗褐色土一層で底壁ぎわは混入物が少なくなる。植樹帯かと思われる遺構である。



第34図 76・175号遺構断面図

(渡辺ますみ)

118号遺構(第33図) E—G13区の土坑列。117号遺構の南にほぼ平行しており、105号遺構の覆土を切っている。検出された土坑は12で直径約30～50cmのものが約30～50cm間隔で並んでいる。深さは20cm前後のものが多く、その覆土は小礫混じりの暗褐色である。柱穴列を想定できる遺構である。

(渡辺ますみ)

126号遺構(第35図) C18区とC19区の境に位置する井戸。36号遺構を切り、4号遺構に切られている。4号遺構の底から測って約3.3mより下では直径約1.2mのかなり整った円形となるが、それより上部では直径約1.8～2.0mの不整形円形を呈し、壁の凹凸もひどい。壁に沿って薄く灰色の砂が貼り付いていた。井戸側は確認できなかった。湧水のため途中で掘り下げを中止した。

(高井佳弘)

137号遺構(第36図) C14区南東端にみられる柱穴列であり溝4を切っている。49号遺構より古い。ほぼ南北に4つ並んでおり、北から柱穴a～dとしている。b—c間、c—d間は共に60cmであるが、a—b間は70cmである。いずれも底辺20×20cmの角材を埋め込んだ掘立柱であり底に根石はみられない。

(黒田晃)

157号遺構(第36図) G14区の東西方向に細長くのびた土坑。97号遺構を切り、144・122号遺構に切られている。掘り込みに142号遺構の柱穴が打ち込まれている。但し、142号遺構の柱穴のうちの一部だけであることから、142号遺構の関連遺構とは考えにくい。類似の遺構は検出されていない。遺物はごくわずかであった。

(西田泰民)

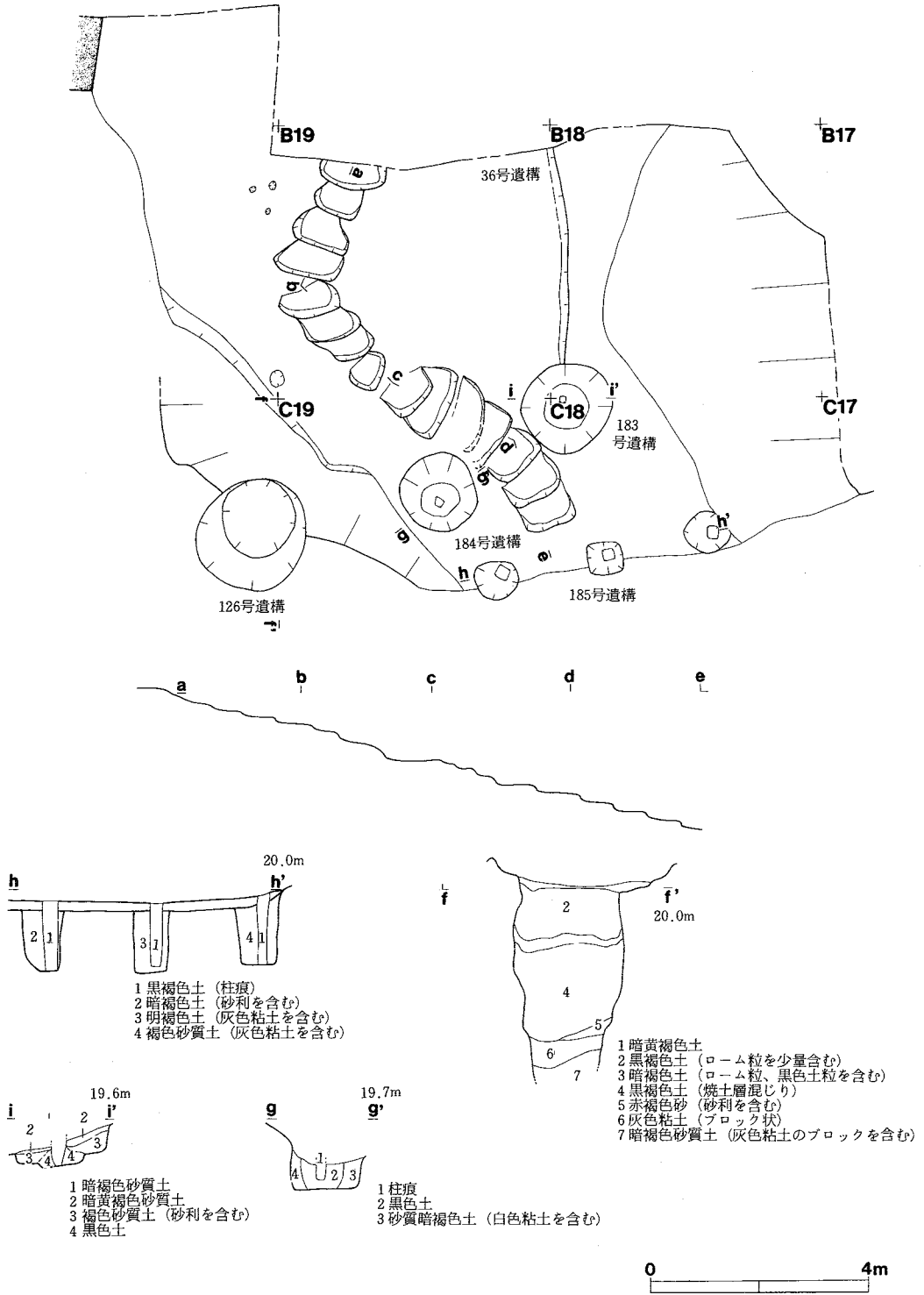
158号遺構(第36図) G14区の土坑。97号遺構を切っている。遺物はほとんどなかった。

(西田泰民)

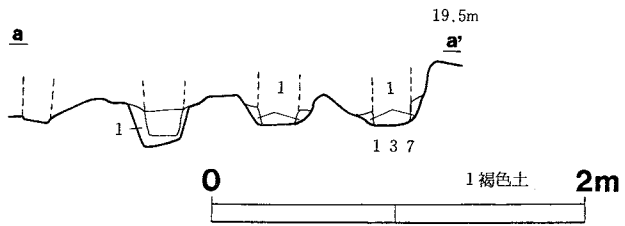
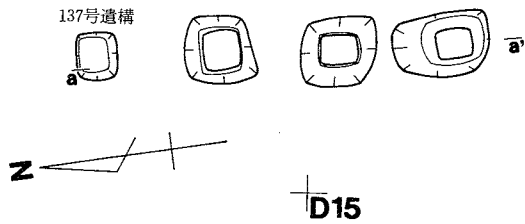
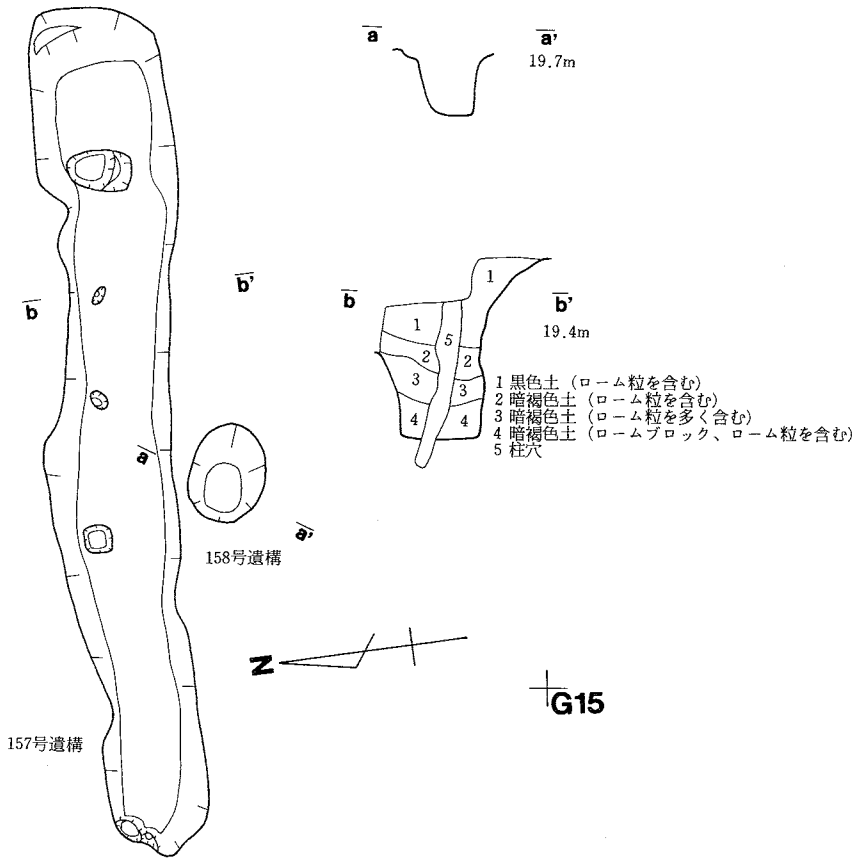
160号遺構, 161号遺構(第33図) B15区中程よりやや南西に約1mの間隔で並ぶ2つの土坑で、共に168号遺構を切り、北西側立ち上がりは76号遺構に切られている。いずれも径1.5m、深さ1m前後で平面は円形に近く底面は鍋底状である。形状及び覆土の状態より植栽痕と判断される。

(西股総生)

168号遺構(第33図) 調査区西限のB16杭付近より北東方向にのびる幅60～80cmの道路状遺構



第35図 36・126・183・184・185号遺構実測図



第36図 137・157・158号遺構実測図

で、長さ5.5m程で32号遺構（石垣）裏側の掘り込みに切られ、また中途でも160号遺構及び161号遺構の二つの土坑に切られている。地山のうえに20～30cmの厚さで盛土を施し道路表面は礫の多い硬化面を形成しているが、後世植物根の侵入が著しく硬化面の枚数や広がりなど不明瞭な部分が多い。（西股総生）

175号遺構（第33図） B15区の掘立柱跡と考えられる土坑。底面は平坦ではなく、一部が掘り込まれており、その部分に柱が立てられたらしい。礎石はなかった。（西田泰民）

176号遺構（第32図） E18区の土坑。97号遺構硬化面直下から掘り込まれ、97号遺構の側溝によって切られている。形状は不整形円形を呈するものと思われるが、南側を試掘溝によって破壊されているため全体の形状は不明である。埋土は3層から構成される。砂利を含む黒褐色土がまず堆積し、その後ローム質土で一気に埋められくぼ地となったところに97号遺構の整地にともない砂利が流れ込んだものと考えられる。（武藤康弘）

183号遺構、184号遺構（第35図） C18区、36号遺構直下から掘り込まれた柱穴とその掘り方。径1.2mの椀型の掘り方に15cm角の柱痕をもつ。柱穴は36の整地面の階段状遺構をはさんで対置していることから、階段を挟んだ門のような構造物を形成していたものと考えられる。（武藤康弘）

185号遺構（第35図） D17区、97号遺構硬化面直下から掘り込まれた柱穴列。柱は角柱で、97号遺構と36号遺構の硬化面との境の稜線にそって1間間隔で配置されている。掘り方は円筒形を呈し、柱は15cm角である。柱穴は3基検出されている。その配置から36号遺構硬化面と97号遺構硬化面の苑路とを区画する柵列と推定される。（武藤康弘）

（4） III期の遺構（第37図）

発掘区を南北に縦断する苑路の築造以降を一括する。少なくとも3段階が想定できるが、所属の不明な遺構も多いため細分を行わなかった。17世紀末から19世紀初めまでを含む。

3号遺構（第38・39図） 発掘区の南端B21区からCラインに沿って北にのび、C15区付近で東へ折れる道と考えられる溝状の遺構。東に折れた部分は49に壊されほとんど残っていない。C15・C16区の西側縁には切り石列がある。3号遺構が105号遺構を壊して作られているので、その際に出てきたものを再利用したものであろう。同じ方向にのびる遺構に29・4号遺構があり、

3→29→4号遺構と新しくなるにつれ東に移動している。34・101・119号遺構に切られている。

断面観察によれば各層の上面の硬化した面が幾重にも重なっているのがわかる。大きくA—G面及び最下面があり、発掘区中央では全ての面が認められるが、北・南側では新しい段階の面は確認できなかった。

平面プランとして確認できる、基本的な大きな段階はF・G・最下面の3段階であり、最も古い段階では底の幅が110cm前後であるが、新しくなるにつれ浅くなり幅が広がっている。ただし、切り通し状の深い溝となる南側ではほとんど変化がなく、中央部の改修段階と完全には対応していない。

F面には幾条もの轍の跡が残っていた。Gとした段階では溝状の掘り込み中に間層を挟んで2度砂利が敷かれている。最下面の段階では度重なる補修により、砂と土が互層をなしており、それぞれ硬化面を形成している。小礫の混じった砂は補修として敷かれたもので、そのあいだの土は使用時に順次堆積したものが多いと考えられる。途中、砂が厚く堆積している部分は大きな補修を示しているよう。

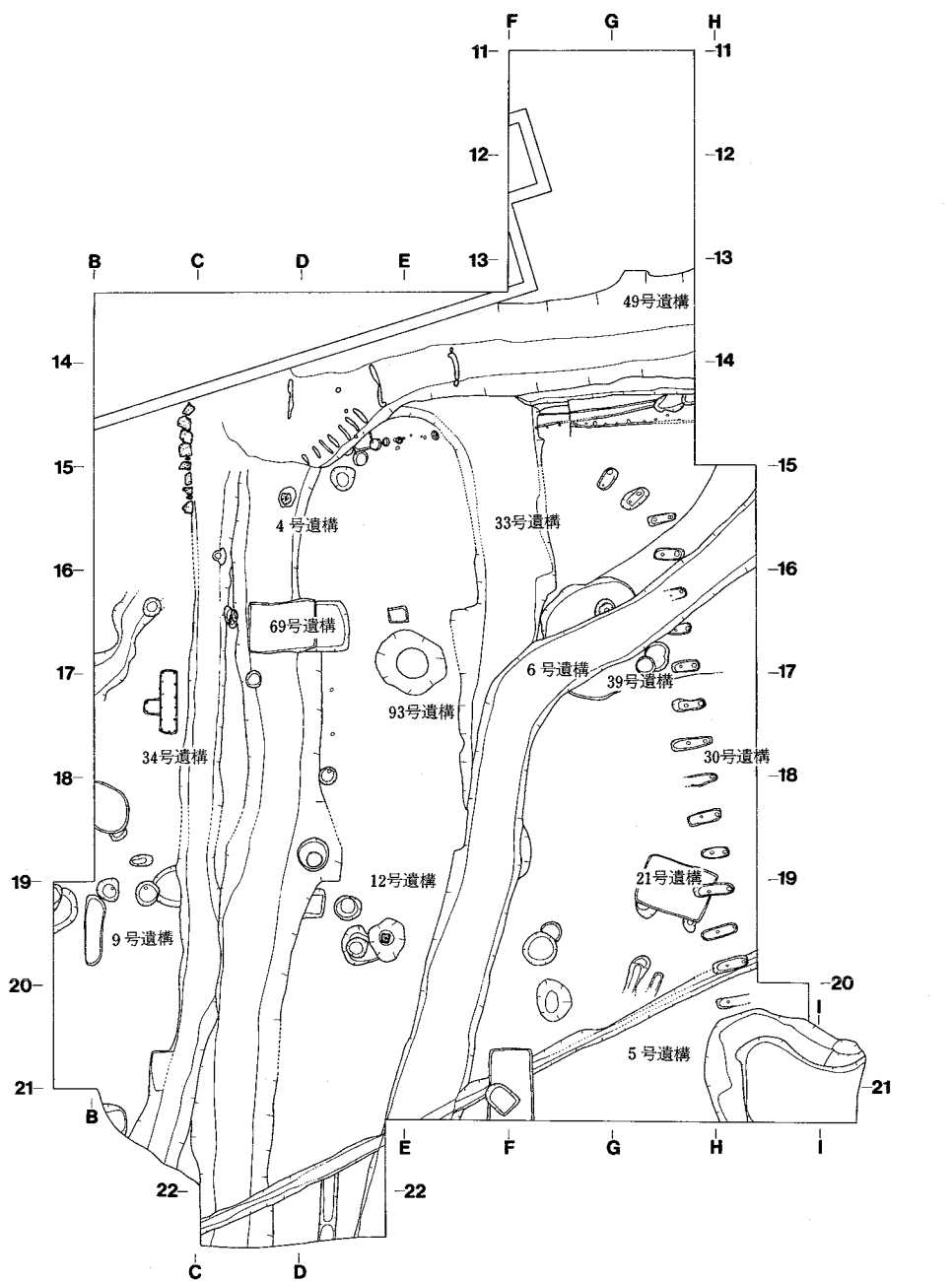
全体に、中央部が高く南北が低くなっている。ただし、新しい段階の面の南北はすでに失われているが断面観察によれば南側がかなり高くなっていたらしい。

以上、3号遺構はほぼ同一経路にある道が大・小規模の補修を繰り返しながら反復利用されてきたことを示し、それに伴って最下部のレベルが上昇した。その後若干東に移り4号遺構の道になるが、4号遺構では再び3号遺構の最下部のレベルに戻る。 (大貫静夫)

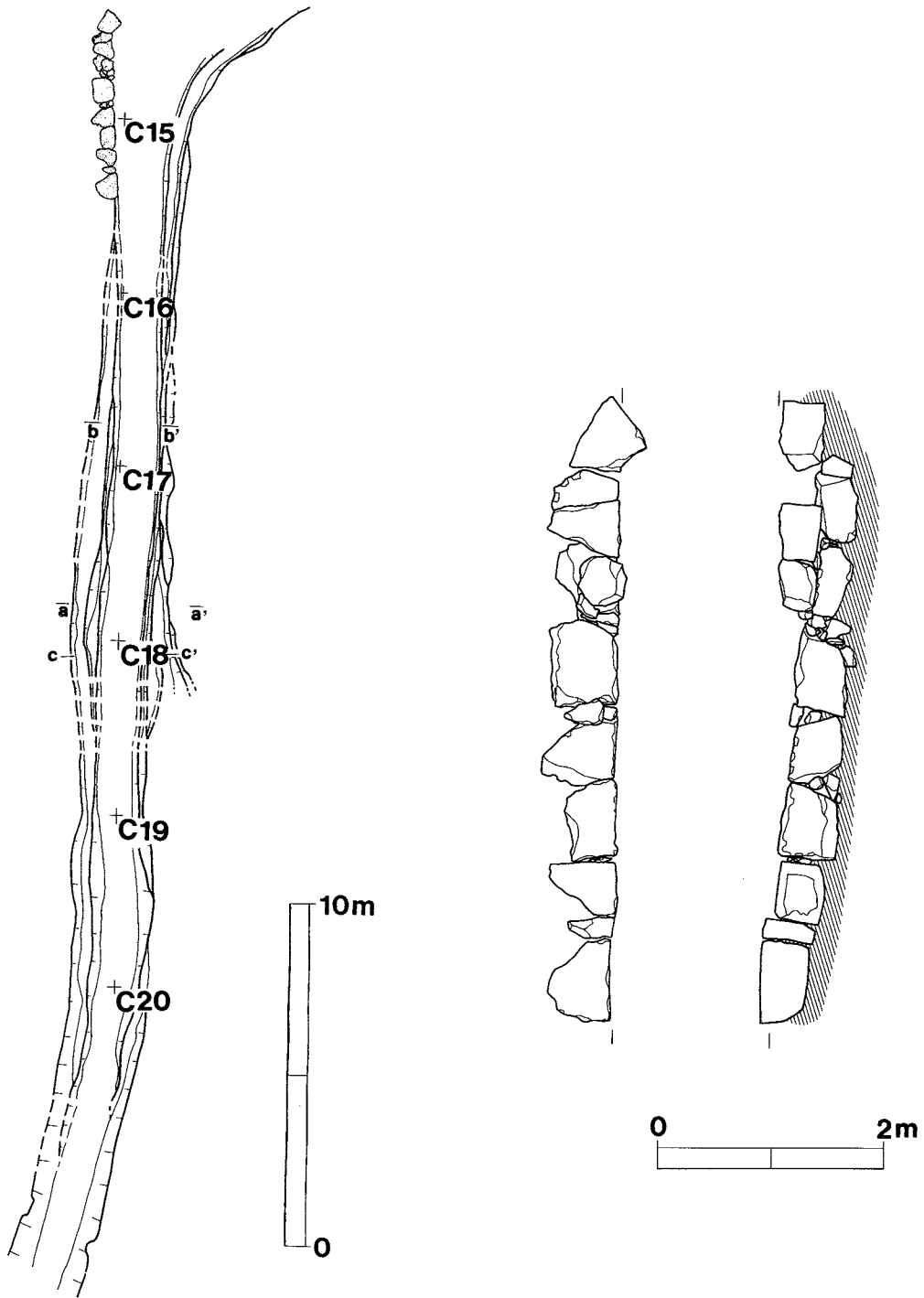
4号遺構 (第40図) 発掘区の西を南北に走る道と考えられる溝状の遺構。3・5・69号遺構などを切り、49号遺構に切られている。壁・底ともにおおむね直線的に仕上げられている。底は幅2m内外で、溝の掘り方の底と最終的な道の上面との間には厚さ数cm以下の薄い層が重なっていた。細部の状況はC19区の北と南でやや異なる。C19区以南では溝の壁、底とも直線的で、壁の立ち上がりは明瞭な稜をなし、底はほぼ水平である。壁面と道の最上面に粘質土が貼られており、一見ロームの地山に掘り込んだような外観を呈していた。この層の下に、粘土小塊、焼土などを含む締りのない暗褐色土層と、混じりけのない締まった土層とが交互に重なっていた。多いところでは最上面を含めて、堅く締まった褐色土の層が3枚確認された。

C19区以北では、溝の壁、底ともやや曲線的になり、溝の立ち上がりも丸みを帯びている。下り坂となり、20mで約90cm下がる。底の最上面はローム粒混じりの暗褐色土層で、小石を含む箇所もある。最上面と溝の掘り方の底の間の土層はC19区以南ほど規則的ではなく、また場所によって違いがあるが、堅く締まった土層がおおむね全面で2枚確認された。

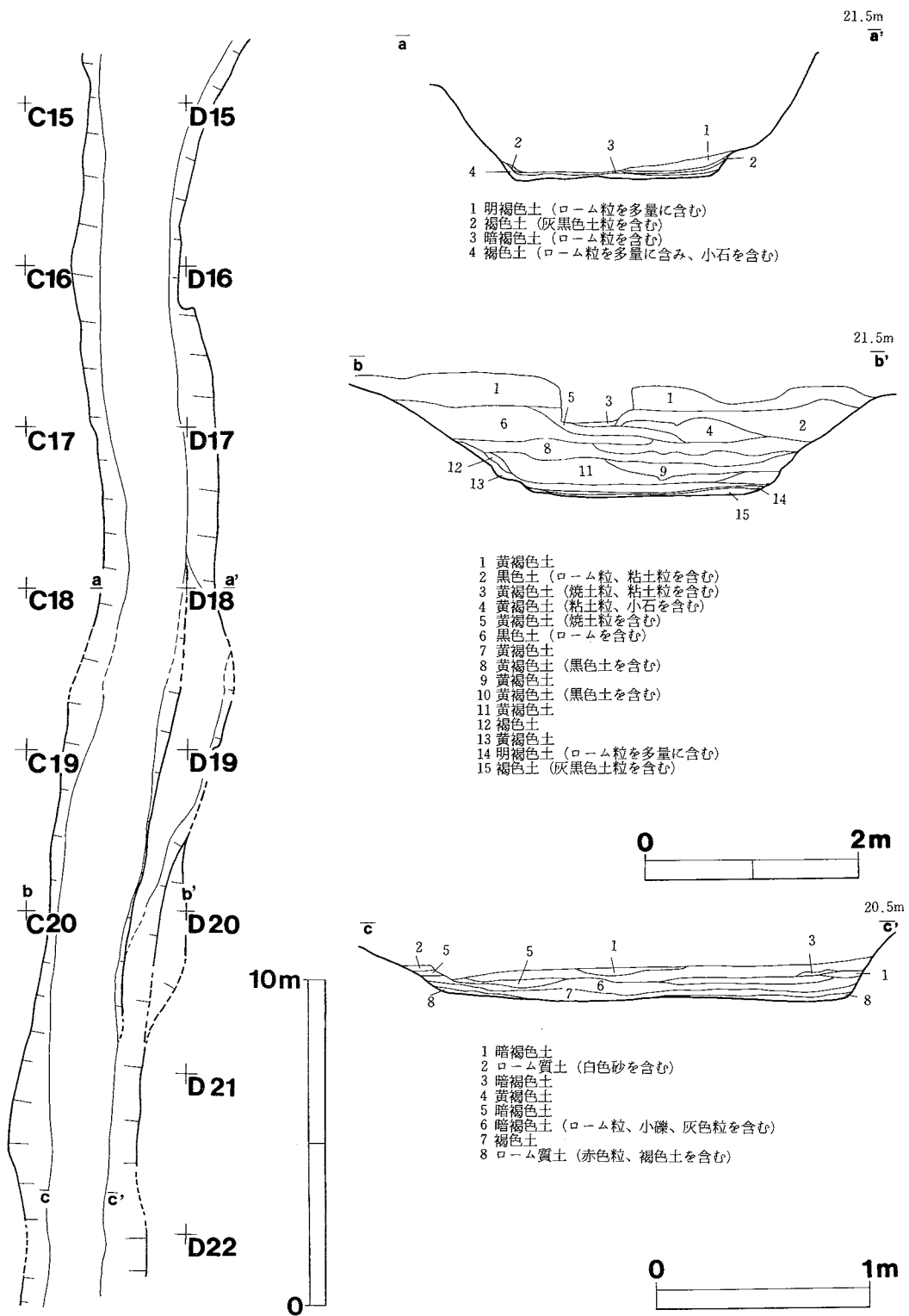
溝の底の層位は、堆積の状況からみて、自然のものではなく、工事の結果と思われる。堅く



第37图 III期全体图



第38图 3号遺構・石垣実測図



第40図 4号遺構実測図

締まった層が複数認められるのは、一度の工事で繰り返し土を固めたためか、道として使用しながら盛土して改修したためか、よくわからない。覆土の堆積の状態からみると短時間に埋め立てられたようである。

覆土中からは瓦、陶磁器の破片が少量、または寛永通宝が出土した。C21・C22区では覆土の中に貝層が数カ所あった。貝層はカキを主体とし、ハマグリなどが少量含まれていた。貝層からは鉄釘や寛永通宝も見いだされた。貝層の状態から4号遺構が埋まりきらない段階で投棄されたものと推測された。(谷豊信)

5号遺構(第49図) 発掘区南部C-H, 20-21区を北東にのびる水道と考えられる溝状の遺構である。150号遺構を切り4・18・30・35に切られている。覆土は白・灰・青色の粘土ブロックと砂質土であるが中に樋管を埋設したと思われる円形の痕跡が空洞となって検出されており、和釘の大量の出土を考えあわせると、木管をつなぎ合わせたものの設置を想定できる。溝の断面形は全体的にU字形であるが、図に示すように壁の下半がややオーバーハング気味であったり、急な立ち上がりで上方でゆるやかになったりする箇所がある。また、溝底や壁にはかなりの工具痕が見出されたり、両壁一対と見なせるような小さなくぼみが壁にみられたりする。このくぼみはほぼ標高19.70~19.80mのところ2~4m間隔で並んでいる。溝底の標高は南西端19.25m、北東端19.37mでその差は小さく、水流方向は不明であるが、この南西端先には心字池がある。(渡辺ますみ)

6号遺構(第41図) 発掘区南中央から北へのび16ライン付近で北東へ折れる道と考えられる溝状の遺構。5・33・100号遺構などを切り、30号遺構および39a・b号遺構のみに切られている。覆土の下層は粘質の灰褐色土で還元状態にあったことを示しているようであるが、特に有機物の出土はみられなかった。堆積状況からみて、この下層は一気に埋め立てられたようである。壁の上方はなだらかであり、途中から稜をなして急角度で底にいたる。底面は一面だけで、火を受けているのか赤褐色を呈し、硬化している。底面での遺構の幅は3m~2mで北に向かうにつれて狭まっている。同時にレベルも北に行くにしたがって下がっており、南端と北東端では60cm程の差がある。遺物はごく僅かしか出土せず、直接遺構に伴うと言えるものはなかった。切り合いや掘り込みのレベルからみて比較的新しい遺構と考えられるが、絵図との対照は出ていない。(西田泰民)

9号遺構(第44図) A・B19区にまたがる長方形の土坑。南北方向にのびる。上層に焼土層があり、かわらけ、焼塩壺の細かな破片が多く出土した。下層は砂層と粘土層の互層となってお

り、水が溜っていたような痕跡を残している。底部は特に硬化していなかった。(西田泰民)

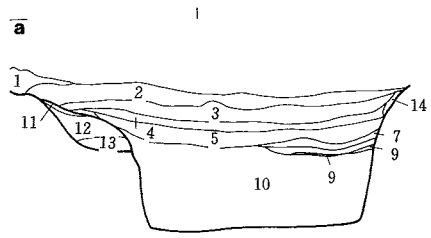
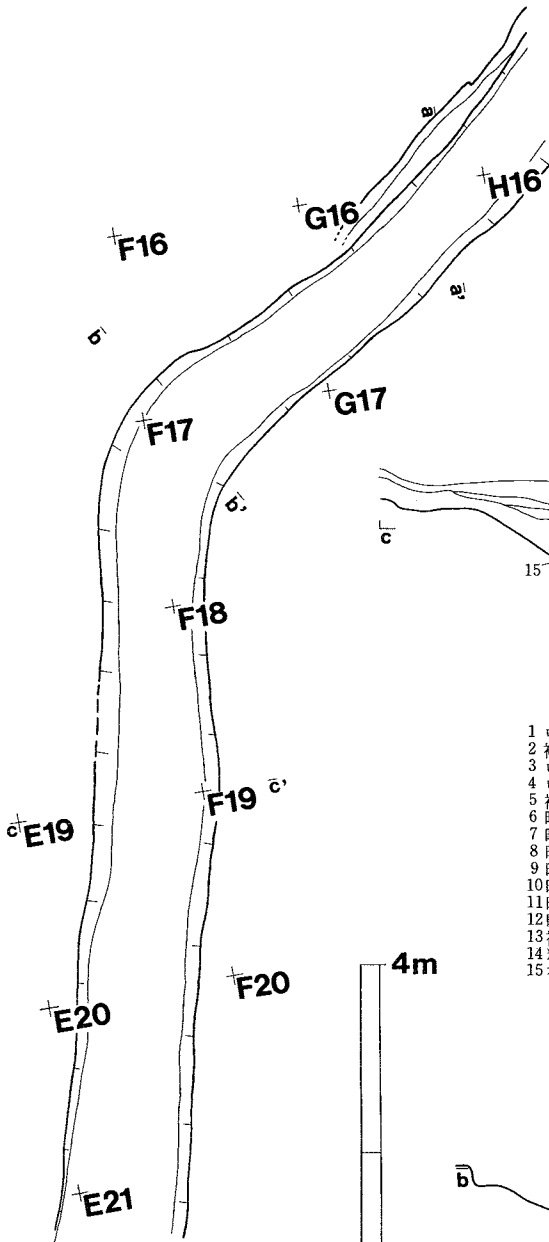
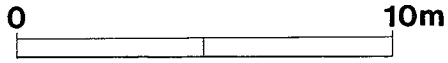
12号遺構 (第51図) D19区の埋め桶土坑。97号遺構を切る他は明確な切り合い関係は認められない。掘り込み確認面は4号遺構とほぼ同じである。桶を埋め込んだ掘り方は長円形を呈し、桶跡も長円形である。桶の中の上部40cm程はカキを主体とする貝、焼土が堆積しその中に復元可能な鉢の破片と大量の釘が混じる。下層は粘質土で動物骨が出土した。火を受けたとみられ、桶の一部が炭化して壁に残っていた。桶に使われた板の幅は10～13cmであり、3寸から4寸の板を用いたかと考えられる。たがの跡が3本見られる。一本は遺構の中位にあり、他の二本は下部に近接して見られ、底部は硬化しているが特に材の痕跡は残っていなかった。廁かと考えられる。(西田泰民)

15号遺構, 16号遺構 (第52図) F19・F20区の土坑。共に遺構の上部は削られ、地山に掘り込まれた部分がかろうじて残っていた。15号遺構は直径約1.6m、深さ約30cmの丸底の土坑で16号遺構を切っている。16号遺構は直径約1m、深さ約15cmの丸底の土坑である。覆土の中に少量の瓦片、陶磁器片が含まれていた。(谷豊信)

17号遺構 (第52図) F20区中央の土坑。遺構の上部は失われ西側の一部も建物の基礎によって破壊されている。残されている遺構は地山に掘り込まれた直径約1.5m、深さ約40cmの円形丸底の土坑である。覆土から寛永通宝1枚と瓦片、陶磁器片若干が出土した。(谷豊信)

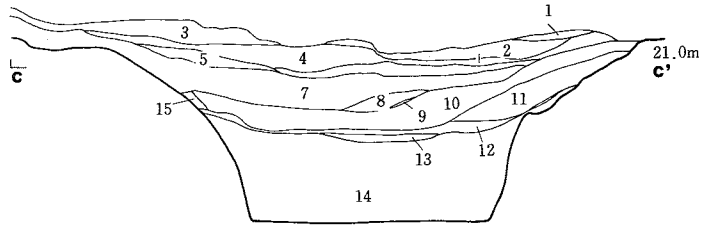
18号遺構 (第52図) 5号遺構を切り、35a・b号遺構に切られた遺構である。確認されたのはFラインを主軸とするようにして発掘区南限から約4mのところまでのびる、平面形が隅丸長方形の幅約2mの溝である。遺構の底には細かい凹凸があるが全体として南下がりの傾斜をなす。残っている遺構の深さは21ライン上で約40cmである。覆土中から瓦片、陶磁器片が少量出土したが、遺構の性格は不明である。(谷豊信)

21号遺構 (第46図) G18・19区の地下室。30mに切られ、178・179号遺構を切っている。平面形態は南北約2.5m、東西約3.4m、深さ約2.7mの方形である。覆土は2層に分けられ、下層はロームブロック、礫の混入している赤褐色土、上層はロームブロックが6cm程の幅でサンドイッチ上に水平堆積している黄褐色土である。天井の崩落した跡とは考えにくく、一度に埋められたものと思われる。底面には10×6cmの角材を打ち込んだ跡が東側に3箇所、西側に3箇所見られ東西ほぼ対に並んでいる。中央北側に60×30cmの楕円形の土坑とその南側に20×20cmの角材



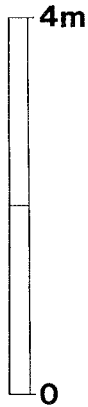
- 1 暗褐色土
- 2 ローム質土 (ブロック状、小礫を含む)
- 3 褐色土 (赤色粒を含む)
- 4 褐色土 (ローム小ブロックを含む)
- 5 暗灰褐色土 (ローム小ブロックを含む)
- 6 暗灰褐色土 (ローム小ブロック、赤色粒を含む)
- 7 暗灰褐色土 (小礫を含む)
- 8 暗褐色土 (ロームブロックを含む)
- 9 褐色土
- 10 ローム質土
- 11 ローム質土 (赤色粒を含む)
- 12 褐色土 (ロームを多量に含む)
- 13 灰色粘土 (礫を多く含む)
- 14 暗灰褐色土 (礫を含む)

21.0m
a'

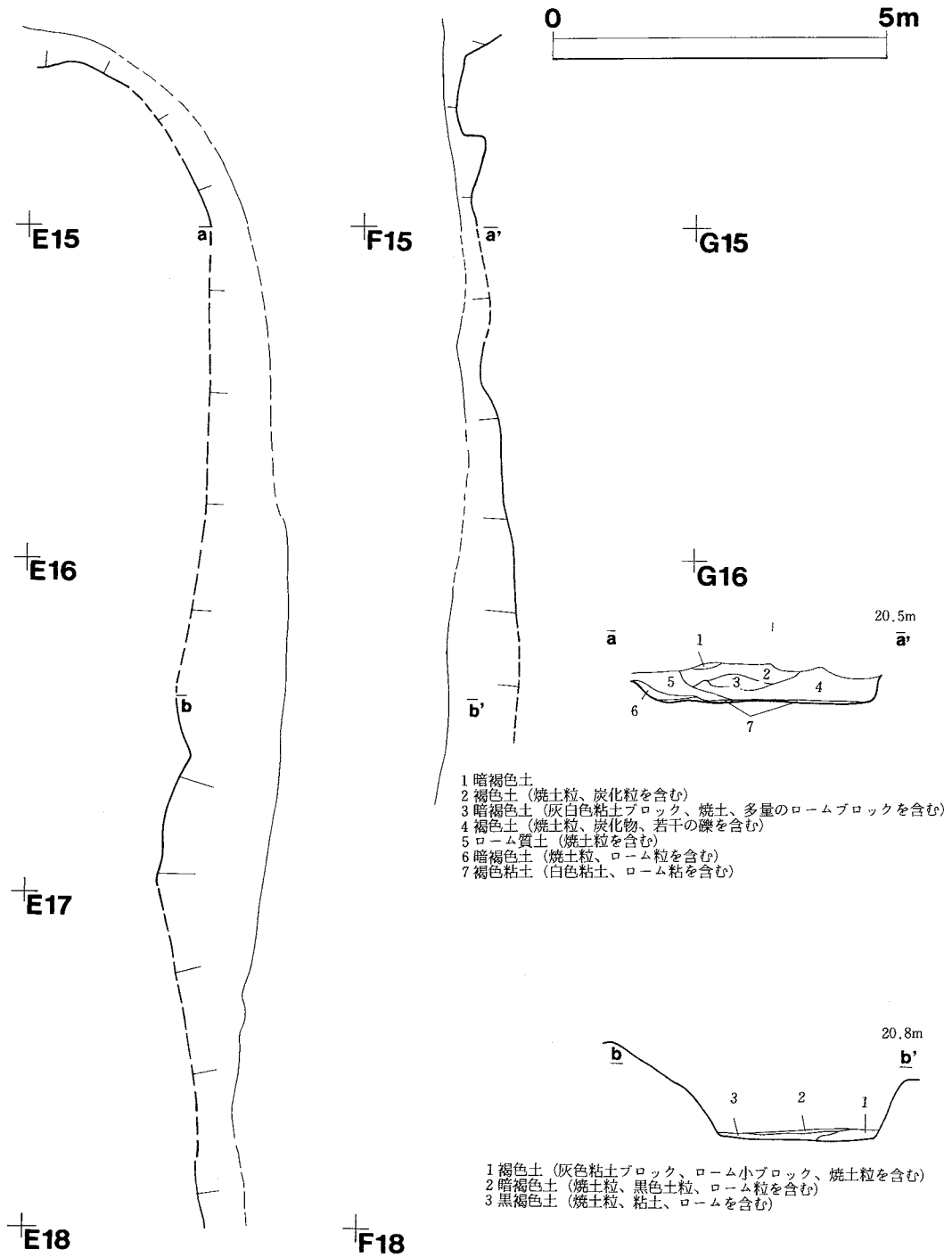


- 1 ローム質土
- 2 褐色土 (ローム小ブロック、白色ブロック、礫を含む)
- 3 ローム質土 (ブロック状、粘土ブロック、礫を含む)
- 4 ローム質土 (ブロック状)
- 5 褐色土 (ローム小ブロック、小礫を含む)
- 6 暗褐色土 (赤色粒を含む)
- 7 暗褐色土 (粘土小ブロック、小礫を含む)
- 8 暗褐色土 (ローム小ブロック、小礫を含む)
- 9 暗褐色土 (粘性に富む)
- 10 暗灰褐色土 (礫を含む、粘性に富む)
- 11 暗褐色粘土
- 12 暗褐色土 (ローム粒を含む)
- 13 褐色土 (ローム粒を多く含む)
- 14 粘質暗褐色土
- 15 褐色土 (ローム粒を含む)

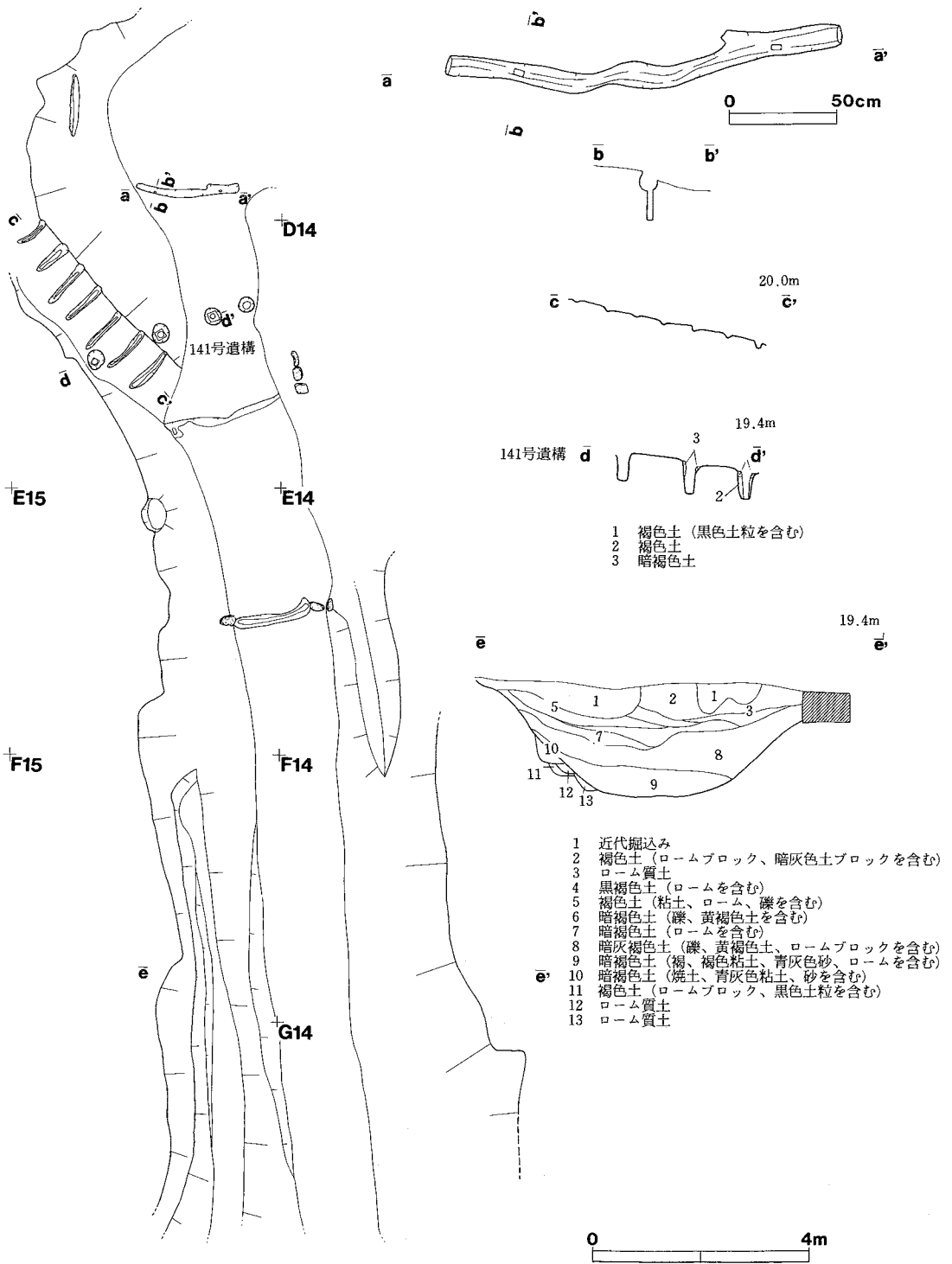
21.0m
b'



第41図 6号遺構実測図



第42図 33号遺構実測図



第43図 141号・49号遺構実測図

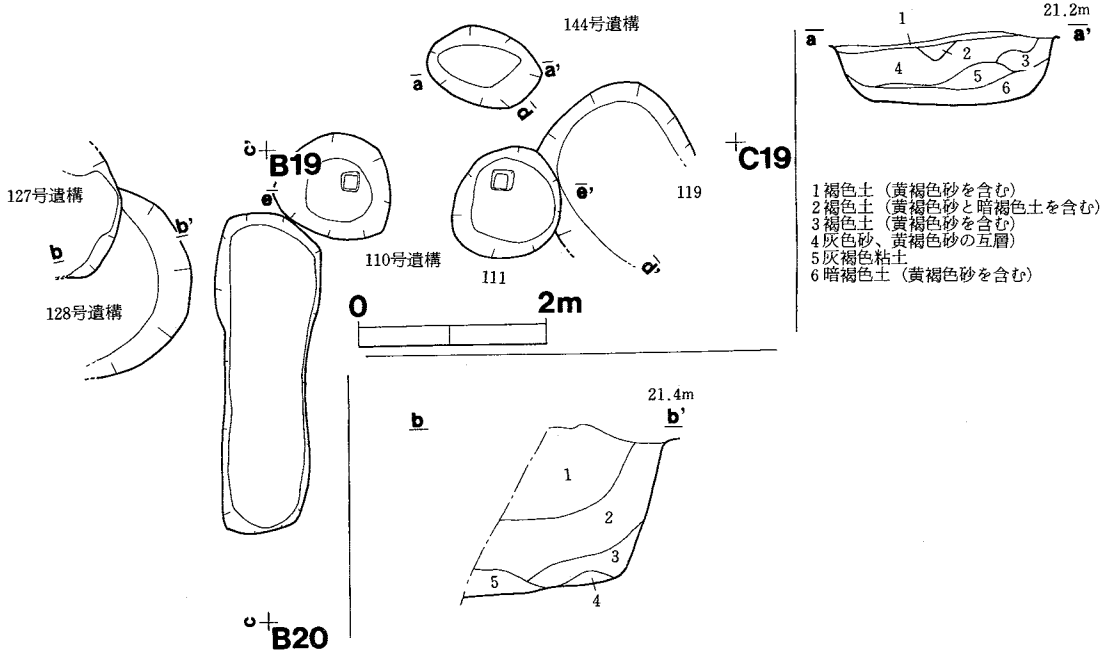
痕が検出されている。北壁と南壁に沿って覆土に30×30cmの空洞がみられ、角材痕と思われる。東壁、西壁にもそれに伴うくぼみが検出されている。東壁に沿っても木材痕が見られる。これらの木材を利用した何らかの下部施設があったと思われる。建物のような上部施設は確認されなかった。遺物は特に検出されていない。(大貫浩子)

22号遺構、24号遺構 (第37図) B16区の東北―南西の対角線の西側で近現代の攪乱層の直下で検出された硬化面。東側は緩やかに30cm程立ち上がるが、その上はすでに削られていた。76・65号遺構を切っている。園路の一部と考えられる。49号遺構との関連も考えられるが、明らかではない。24号遺構は22号遺構の東側の立ち上がりで部分で確認された円形の土坑である。遺物はなかった。上部は攪乱されており、22号遺構との関係は厳密に言えば明かとは言えないが、22号遺構に伴う何らかの施設であった可能性がある。(谷豊信)

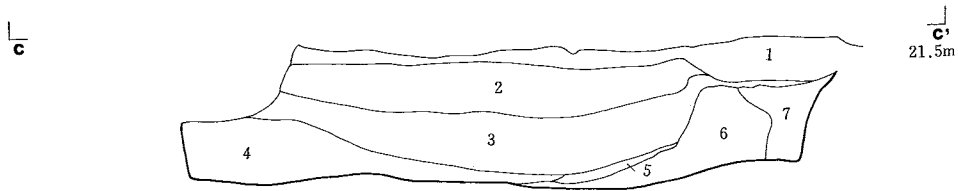
29号遺構 (第37図) 3・4号遺構と平行して南北に走る溝状遺構。3号遺構より新しく、4号遺構より古い。3・4号遺構の間の時期に介在した同様の性格の道と考えられるが、4号遺構によりほとんどが壊されていて、西側の壁の一部が残るのみである。(大貫静夫)

30号遺構 (第50図) 発掘区東側に並ぶ柵列の基礎と思われる遺構。30a号遺構から30p号遺構まで16確認されているが、南北にさらに続いていたと思われる。それぞれの間隔は約2間である。3・6・21・39・198を切っている。a～pまでの規模、形態はほぼ同様で平面形態は長径1.4～1.7m、短径0.5mの方形を呈しており、深さは確認面から1m程である。坑底東側には径30cm程の石が据えられており、西側には杭痕と思われる径10cm程のピットが検出されている。石の上には20cm角の角材が立てられていた形跡があり、覆土中から鋸も検出されているため何本かの木材が鋸によって組み合わされて使われていたと考えられる。覆土はほぼ一層で一度に埋められたと思われる。遺物は4つの土坑から鋸が計7本、そのほか和釘が出土している。(大貫浩子)

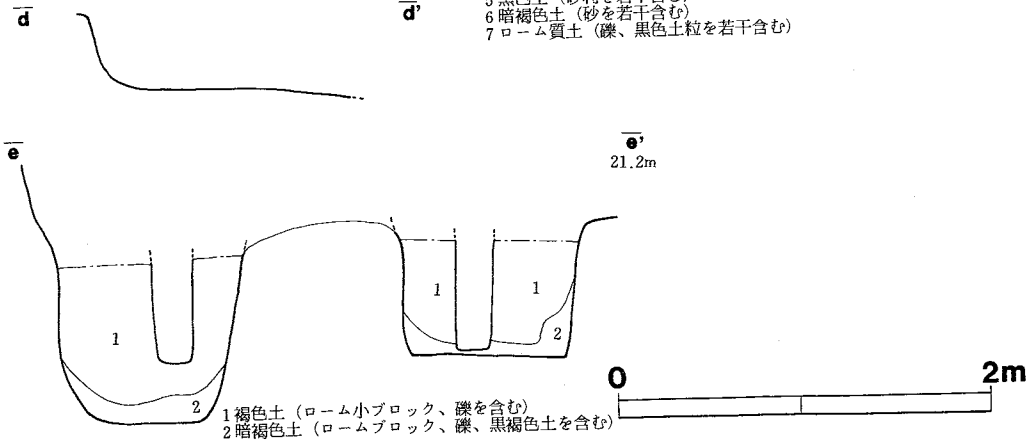
33号遺構 (第42図) E～F、14～18区にかけての苑路と考えられる遺構。F19の6号遺構の東壁にある浅い掘り込みも33号遺構の一部と思われる。南は6号遺構に切られ、北は49号遺構に切られている。北部へ向かうにつれて幅が広くなり西へ大きくカーブを描く。4号遺構と対応していたのであろうか。97・122号遺構より新しい。側縁部以外はローム質土を突き固めて面を作っている。焼土を含む層が覆土中にあり比較的多く遺物が出土した。(西田泰民)



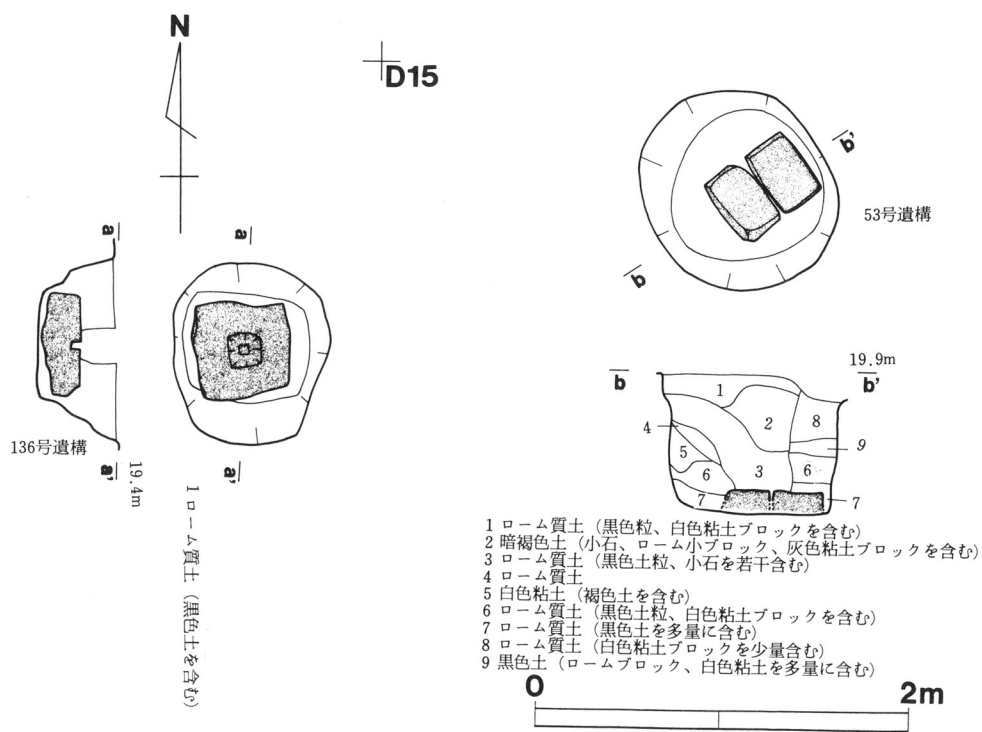
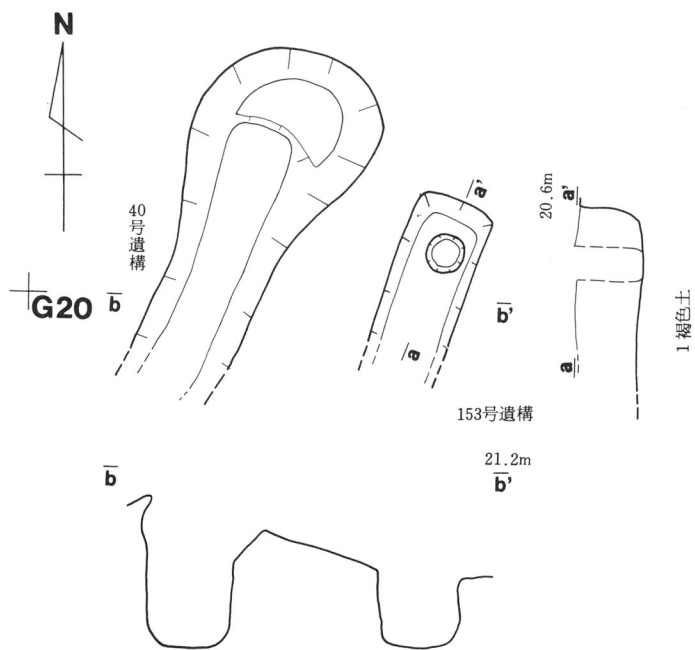
- 1 黄褐色土 (ロームブロック、ローム粒を多量に含む)
2 褐色土 (ローム、焼土、炭化物を多量に含む)
3 暗褐色土 (焼土、炭化物を含む)
4 黄褐色土 (ロームブロック、ローム粒を含む)
5 褐色土 (ローム粒、焼土、炭化物を僅かに含む)



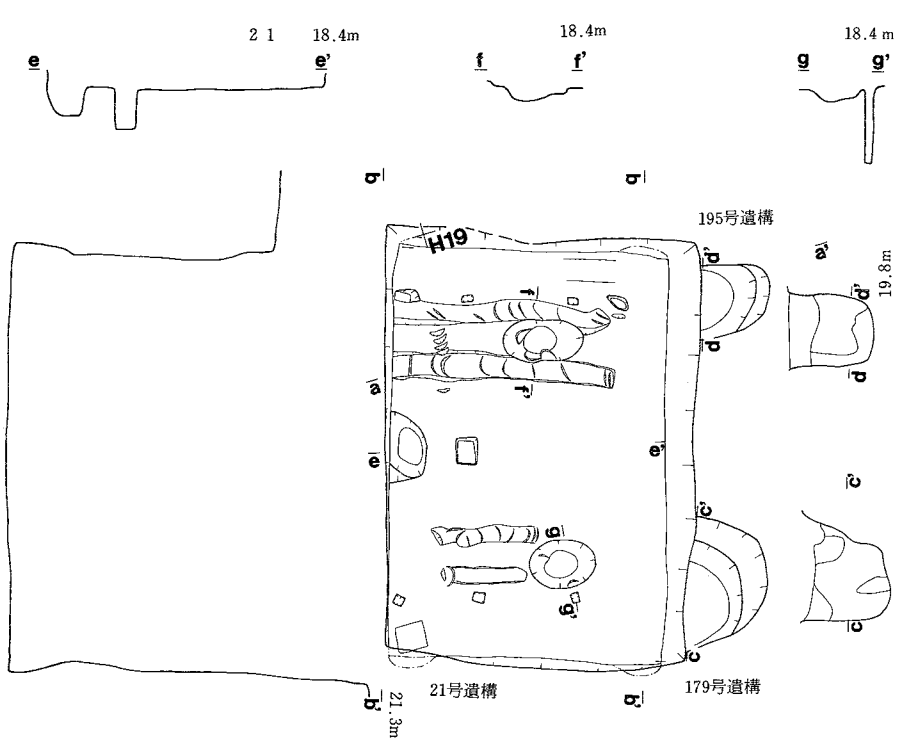
- 1 焼土
2 砂利
3 黄色土 (灰色土を含む)
4 暗褐色土 (砂利を含む)
5 黒色土 (砂利を若干含む)
6 暗褐色土 (砂を若干含む)
7 ローム質土 (礫、黒色土粒を若干含む)
- 21.2m d d'



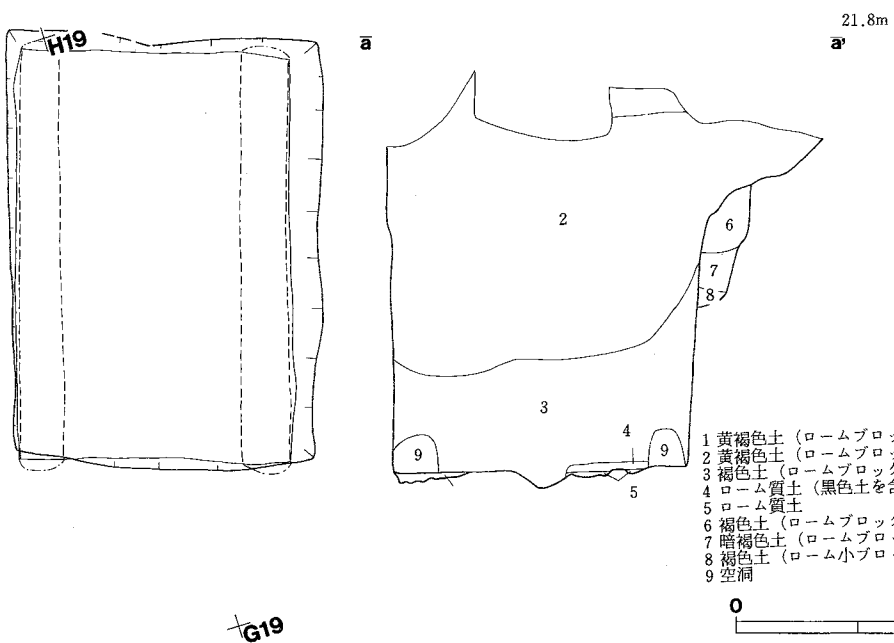
第44図 9・110・111・119・127・128・144号遺構実測図



第45図 40・153・53・136号遺構実測図



- 1 褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
 2 暗褐色土 (ローム小ブロック、黒色土を含む)
 3 褐色土 (ローム小ブロック、ローム粒を含む)
- 1 褐色土 (ローム小ブロックを多量に含む)
 2 暗褐色土 (ローム小ブロックを多量に含む)
 3 暗褐色土 (ローム小ブロックを多量に含む、小礫を含む)
 4 暗褐色土 (ローム小ブロックを若干含む)
 5 褐色土 (ローム小ブロックを多量に含む)



- 1 黄褐色土 (ロームブロックを含む)
 2 黄褐色土 (ロームブロック、灰色土が水平堆積する)
 3 褐色土 (ロームブロック、礫を含む)
 4 ローム質土 (黒色土を含む)
 5 ローム質土
 6 褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
 7 暗褐色土 (ロームブロックを多量に含む、黒色土を含む)
 8 褐色土 (ローム小ブロック、ローム粒を含む)
 9 空洞

第46図 21・178・179号遺構実測図

34号遺構（第48図） B16・B17区にある長辺が約3m、短辺が約90cmの土坑。西側に張り出しがある。主軸は南北方向より約10度西にずれている。29号遺構につながるとみられる硬化面である検出面からの深さは約1mである。3号遺構より新しく、29号遺構と同時かより古く、4号遺構よりは明らかに古い。

長方形の土坑より一回り小さく四壁が板で囲まれていたようで、部分的に炭化材が残っている。この板は杭で支えられていたようで、壁際に沿って深さ約1m弱で底の尖った柱穴が並んでいる。底部付近に炭化材及び腐食土の層がある。西側の張り出し部は長さ約70cm、幅約50cmである。中央に向かって段を作りながら傾斜している。底と壁に炭化材が附着している。

埋土は上部に貝層があり、その下に厚い焼土層があり、多量の鉄釘を含んでいた。完形のかかわり1点が出土している。その直下に炭化材の層があり、それから下は焼けておらず、灰層と灰褐色粘質土がある。遺構に確実に伴うと見られる遺物は炭化材層より下の底部直上である16・17層の灰層、灰褐色粘質土層から出ている。これらの層には魚骨を含んでいる。遺物は3箇所に分かれて置かれていた。西南隅にはかわりけ2点（完形1）と古銭1点があり、中央部にはかわりけ1点、銅緑釉輪剥ぎ皿1点（ほぼ完形）があり、北西隅には完形のかわりけ3点と磁器碗2点と古銭があった。

この遺構はまず掘り込んだ後に板材で四壁を囲い、底に粘土を敷き、やきものや銭をおいて、それから板材で底を覆っている。これらの板材は焼けて炭化しており、焼土が詰まっている。ただし、現在の検出面が掘り込み面なのか確認されていないし、上部が開いていたのか何らかの上屋施設があったのかも不明である。上述の遺物はこの遺構が火葬墓であり、その副葬品と考えることもできる。しかし、そのように考えるには次のような問題がある。一つは構造の問題である。西側に張り出した部分は壁の炭化材が断面にみられるようにそのまま張り出し部の底につながっていて、出入口のようになっている。また、12層の炭化材層を箱状施設の底板とみるのはその高さや弧状の堆積状況からは無理があろう。もう一つは多量の焼土である。鉄釘を多く含むのは釘の刺さった板材を燃やしたためとみられる。一度の火葬によるものとしては焼土が異常に多く、しかも底の炭化材直上が最も焼けており、二次堆積ではなくそこで焼けたものである。また最下層の粘土層から魚骨が出土している。以上のような点から、これを火葬墓と考える見方には消極的にならざるを得ない。他方、これを多次にわたり利用された火葬場のような施設とするには、周囲に可燃性の板材を用いていることや下層の遺物の存在が理解しにくい。

結局この遺構の性格については不明である。なお御殿下記念館地点で構造の似た遺構がいくつか検出されている。

（大貫静夫）

35 a・b号遺構 (第37図) F20杭の周辺に位置する土坑。35a号遺構は直径約1.6m、深さ約40cmの丸底の土坑で、35b・18・5を切っている。覆土に瓦片、陶磁器片若干が含まれていた。35b号遺構は18・5号遺構を切り、35a号遺構に北側の一部を切られている。円形の土坑で直径約1.6m、深さ約80cmである。15～17・35a・35b号遺構は遺構の形状、遺物の出土状況が似ており、同じ性格の遺構であったかもしれない。一つの可能性としては植栽痕であったと考えられる。

(谷豊信)

39号遺構 (第52図) F-G・16-17区の大型土坑。39b号遺構は不整形を呈していたらしい。39a号遺構は39b号遺構を切っているが西側は39b号遺構と共通の壁であったと考えられる。東壁は確認ができなかった。いずれも6号遺構より新しく、39a号遺構は30g号遺構を切っている。埋土はロームを主体とする層が繰り返し重なっており、築山を構築するような丁寧な方法で埋められている。床面は硬化しているが、他に何の施設も認められず用途は不明である。当地点としては珍しく徳利や灰釉茶碗など雑器が多く出土し、49号遺構と似た状況を示していた。

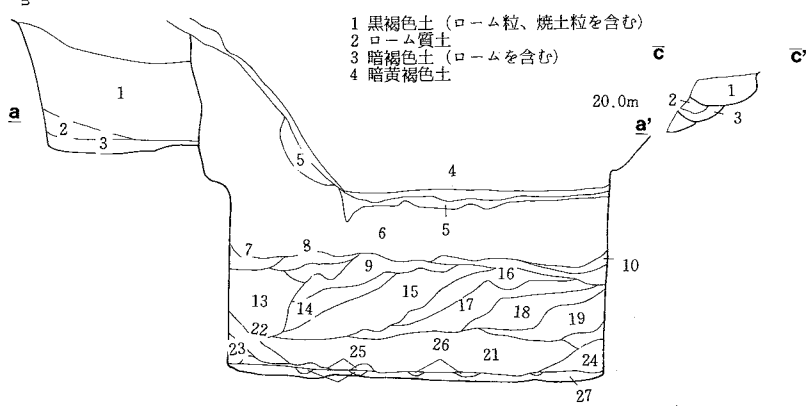
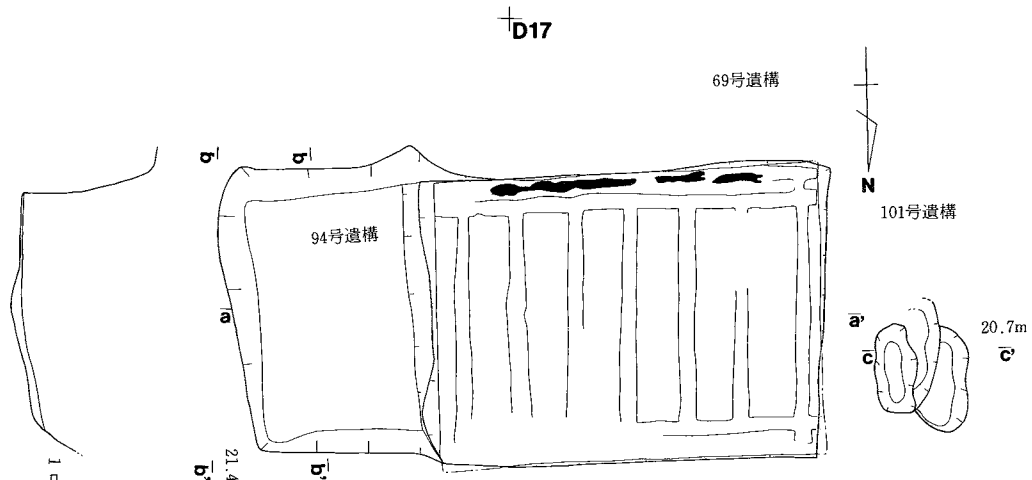
(西田泰民)

40号遺構 (第45図) G19区の南北に細長い溝状の土坑。南側は攪乱を受けており全体のプランと規模は不明である。東側に柱痕と考えられる153号遺構があるが、覆土の堆積状態からみる限り両遺構の関係は特にないようである。遺構に伴うと考えられる遺物はない。(佐藤文泰)

49号遺構 (第43図) 発掘区の北を東西に走る道と考えられる遺構。4・33などを切っている。切り合い関係からみて比較的新しい遺構と考えられる。西側は破壊、削平されていたためよくわからないが、この遺構は西からくる道と南からくる道がC14・D14区で合流し、断面U字形の切り通しとなって東に下りていく道であったようである。道の傾斜はやや急でD14区南部の発掘された道の中では最も高い地点と、そこから20m離れた遺構東端の最も低い地点とでは約2mのレベル差がある。49号遺構は22号遺構とつながっていた可能性もある。

遺構西半では荒い加工しただけの太さ10cm内外の木の枝を地面に打ちつけていた痕跡が検出された。長さ1m内外の痕跡が7箇所、長さ2m内外の3箇所を確認された。このうち最も西に位置する長さ1.85mの木の痕跡には、両端からそれぞれ約30cmの箇所に、平面が3cm×4.5cmの長方形をなす深さ約20cmの空洞が残っていた。木の枝にほぞ穴が穿たれ、木製の角材で地面に打ちつけられていたのであろう。またE13・E14区にまたがる痕跡の両端には長さ30cm、幅20cm程の礫が、北に1個、南に2個埋め込まれていた。これらはすべて坂道の滑りどめと思われる。

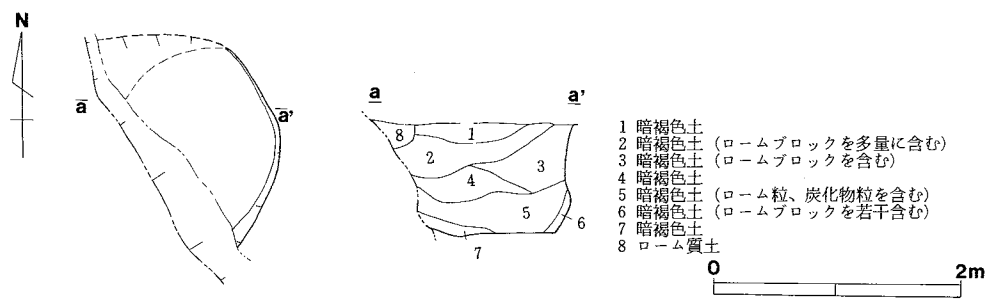
D14区では滑りどめに加えて直径15～20cm、深さ65～80cmの円形の土坑が3つ道を横切るよ



- 1 黒褐色土 (ローム粒、焼土粒を含む)
- 2 ローム質土
- 3 暗褐色土 (ロームを含む)
- 4 暗黄褐色土

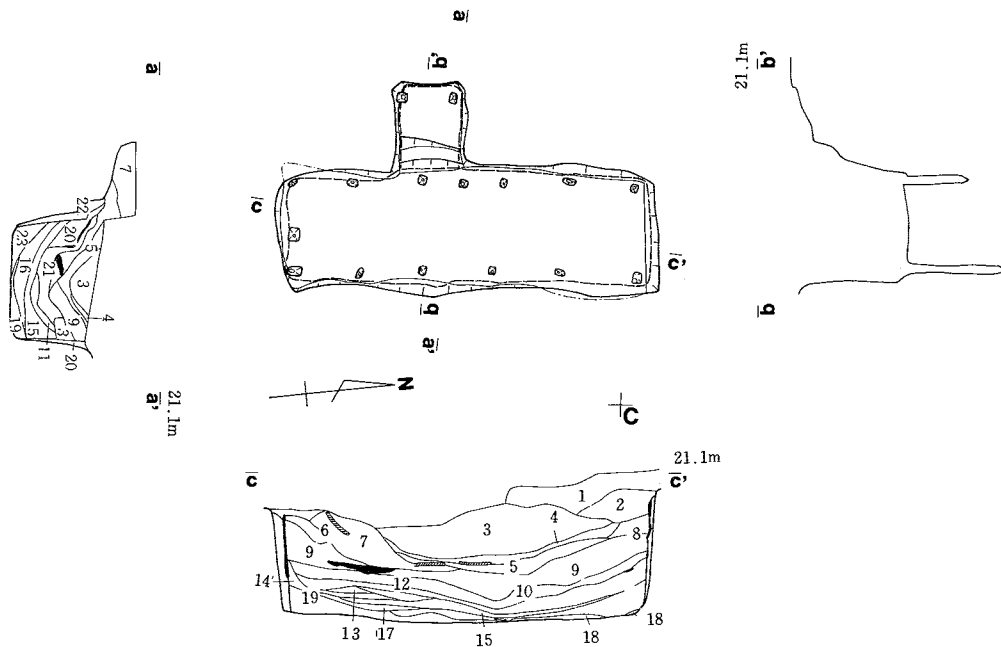
- 1 褐色土 (ロームブロック、小礫、白色粘土粒を少量含む)
- 2 褐色土 (白色粘土小ブロックを含む)
- 3 褐色土 (白色粘土小ブロック、黒色土を含む)
- 4 明褐色土 (ロームを含む)
- 5 褐色土 (ローム粒を少量含む)
- 6 貝層 (釘、瓦、焼土を含む)
- 7 ローム質土 (暗褐色土を含む)
- 8 褐色土 (焼土、炭化物、ロームを含む)
- 9 ローム質土 (暗褐色土、焼土を含む)
- 10 暗褐色土 (焼土、炭化物、ロームを含む)
- 11 ローム質土 (暗褐色土を含む)
- 12 暗褐色土 (ローム小ブロックを含む)
- 13 ローム質土 (暗褐色土、白色粘土を含む)
- 14 褐色土 (焼土、炭化物、黒褐色土、ローム小ブロックを含む)
- 15 ローム質土 (褐色土、灰白色粘土、焼土を含む)
- 16 ローム質土 (暗褐色土、黒褐色土を若干含む)
- 17 暗褐色土 (炭化物、黒褐色土、赤褐色土、ローム小ブロックを含む)
- 18 ローム質土 (褐色土、ロームブロックを含む)
- 19 暗褐色土 (炭化物、黒褐色土、灰白色粘土、ローム粒を含む)
- 20 暗褐色土 (ロームを含む)
- 21 ローム質土 (暗褐色土、灰白色粘土を含む)
- 22 ローム質土 (暗褐色土を含む)
- 23 ローム質土
- 24 ローム質土 (暗褐色土を含む)
- 25 暗褐色土 (ロームを含む)

B21 90号遺構

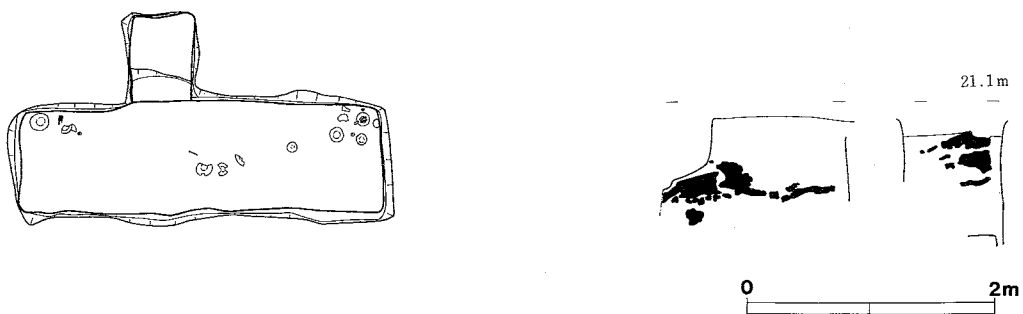


- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
- 3 暗褐色土 (ロームブロックを含む)
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土 (ローム粒、炭化物粒を含む)
- 6 暗褐色土 (ロームブロックを若干含む)
- 7 暗褐色土
- 8 ローム質土

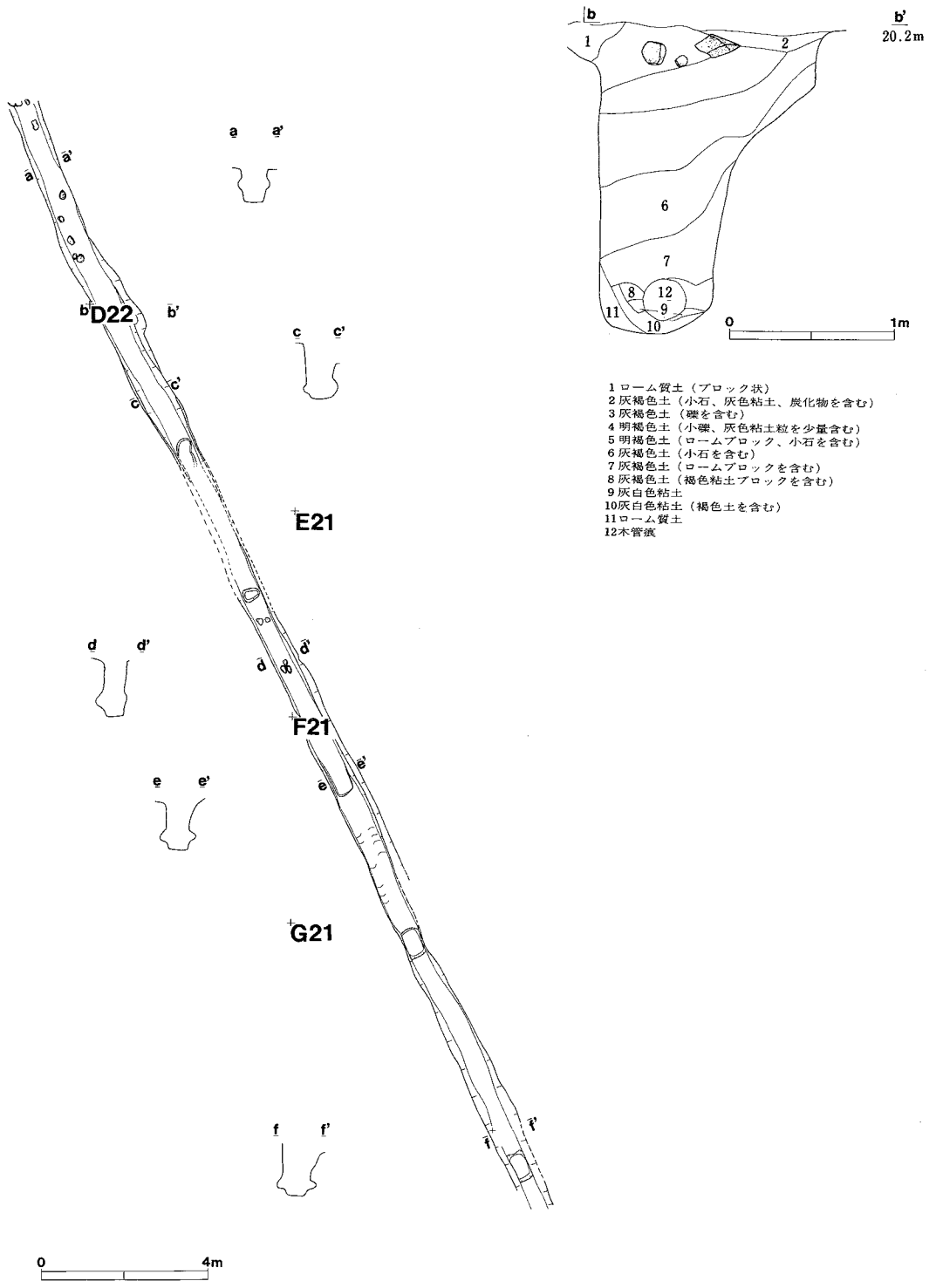
第47図 69・90・94・101号遺構実測図



- 1 黄褐色土
- 2 褐色土 (焼土粒、炭化粒、ローム粒を含む)
- 3 貝層 (瓦、釘を含む)
- 4 焼土 (炭を含む)
- 5 灰色粘土
- 6 焼土
- 7 褐色土 (焼土、炭、灰色粘土を含む所)
- 8 暗褐色土 (焼土を含む)
- 9 褐色土 (焼土を多量に含む)
- 10 焼土
- 11 黄色がかった焼土
- 12 炭化物
- 13 焼土
- 14 炭化物
- 15 炭化物
- 16 灰色粘土
- 17 灰
- 18 灰褐色粘土
- 19 灰 (焼土混じり)
- 20 褐色土 (ローム粒を含む)
- 21 灰色粘土
- 22 褐色土 (ロームを多量に含む)
- 23 灰色粘土 (炭化物を含む)

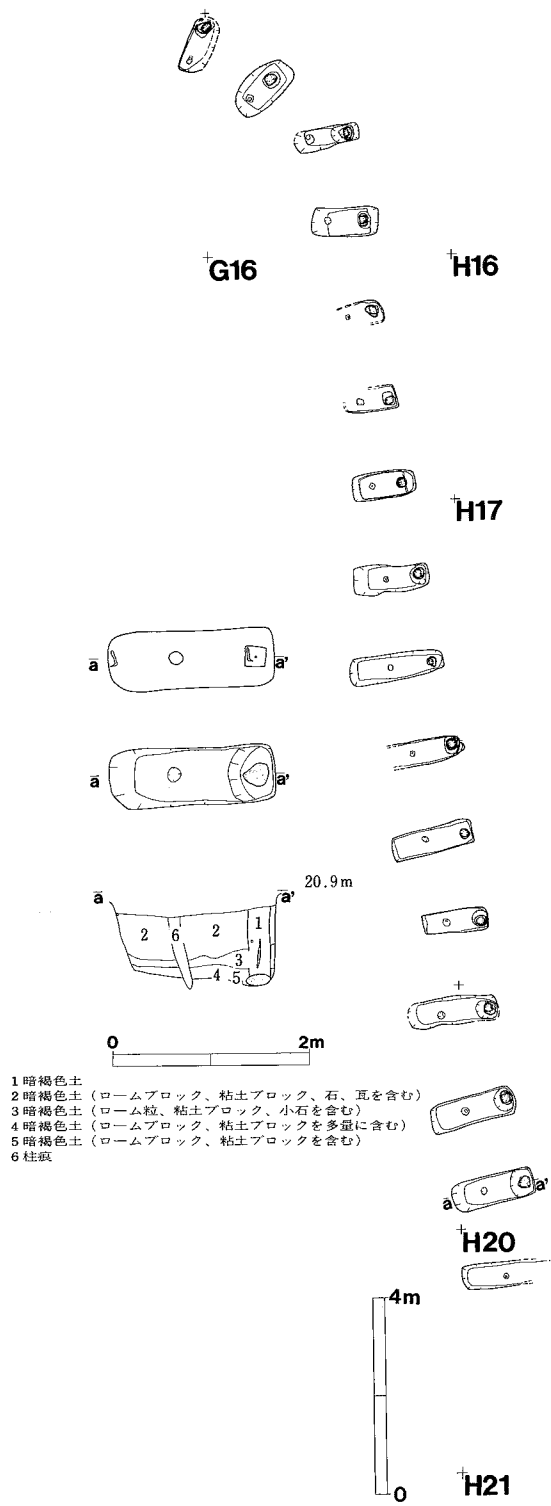


第48図 34号遺構実測図，遺物出土状況図



- 1 ローム質土 (ブロック状)
- 2 灰褐色土 (小石、灰色粘土、炭化物を含む)
- 3 灰褐色土 (礫を含む)
- 4 明褐色土 (小礫、灰色粘土粒を少量含む)
- 5 明褐色土 (ロームブロック、小石を含む)
- 6 灰褐色土 (小石を含む)
- 7 灰褐色土 (ロームブロックを含む)
- 8 灰褐色土 (褐色粘土ブロックを含む)
- 9 灰白色粘土
- 10 灰白色粘土 (褐色土を含む)
- 11 ローム質土
- 12 木管渡

第49図 5号遺構実測図



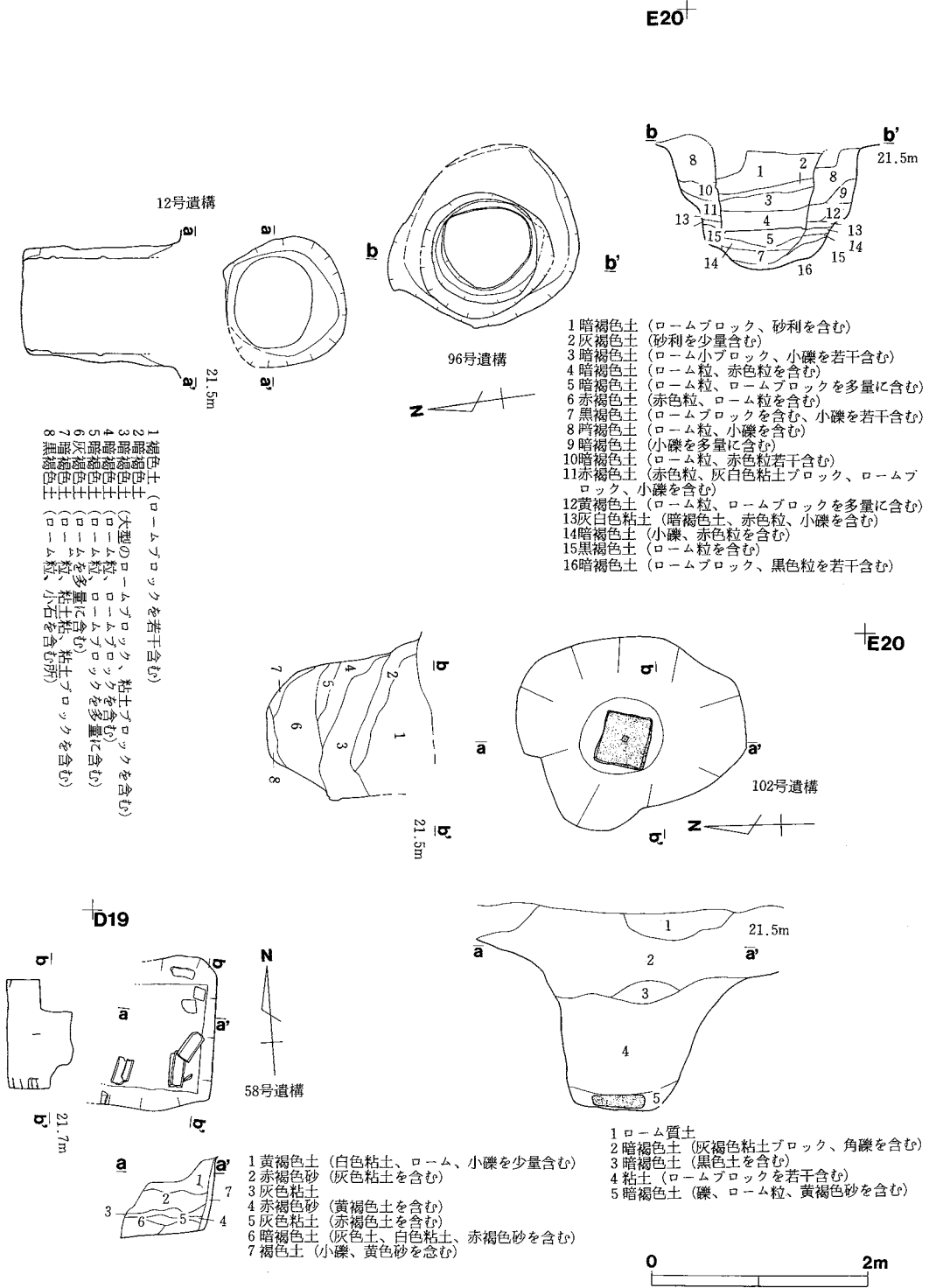
第50図 30号遺構実測図

うに並んでいた。位置からみて、簡単な門あるいは柵のような施設があったものと思われる。

遺構と直接関連すると思われる遺物はない。D14区東端で、道の面から約20cm上の覆土中から長さ約30cm、幅約15cm、厚さ1cm弱の木の板が出土したのが、滑りどめや土坑との関連で注意を引いた程度である。この他には覆土中から散漫に瓦、陶磁器の破片が出土したのみである。覆土の下層は灰色粘土を含む褐色土で、4・6号遺構の覆土と似ている。覆土の大部分は一気に埋め立てたものと思われる。覆土を掘り下げる過程で何回か硬化面を検出したが、いずれも狭い範囲の現象であった。埋め立ての作業中に踏み固められたものかと思われる。

(谷豊信)

53号遺構 (第45図) D15区北部の柱穴。底に2枚の平石を置き礎石としている。掘り方はほぼ円形を呈し直径約110cm、深さは確認された面から約75cmを測る。覆土の状態からみて西側へ柱を抜き取った



第51図 12・58・96・102号遺構実測図

ようである。礎石として使用されている石は、幅約30cm長さ約60cmのものと、幅約25cm長さ約50cmのものとの2枚で厚さは約10cmで、上面が水平になるように置かれていた。礎石上面のレベルは標高約19.27mである。この柱穴と組み合うと思われるのは、136号遺構のみである。双方の距離は掘り形心心で約2.9mあり、10尺を意識したのであろう。他に組み合う柱穴は発見されていないが、北側が49号遺構によって大きく削られた際に破壊されてしまった可能性もあり、これらの柱穴がどのような建築物のものなのかは判然としない。(高井佳弘)

58号遺構 (第51図) D19区北部のピット。西側を4号遺構に切られているため、全形はわからないが、隅丸方形の掘り方に方形の木枠を埋め込んだものようである。材はすでに失われているが、鉄釘が壁にへばりつくように残っていた。覆土は灰褐色及び黄褐色の互層をなす砂質土で、図のように完形の丸瓦4本が底面で検出された。釘の位置によって方形の枠が埋め込まれていたことが推測される点で139号遺構と共通する。(西田泰民)

69号遺構 (第47図) C16、一部D16区にかかる方形の地下室と考えられる土坑。4号遺構に切られている。覆土に特徴があり、下層はロームを主体とする土で埋められているが、上層はカキを主体とする貝殻で埋められている。この貝層には焼土が含まれており、釘が相当量出土した。セクション図を見てわかるように、貝層とローム質土層の境界は平らで、計画的に埋められたことがわかる。遺構底面には材の痕跡が残っていた。これから見ると底面には、すのこ様のものが置かれていたらしい。さらにその下からかわらけ二枚分が検出された。たまたま落ちたものか、埋められたものかはわからない。一枚は完形となるが、もう一枚は破片であった。壁には、上部を支えていた梁を留めていたと思われる窪みがあった。出入りの方法を示す痕跡は見つからなかった。(西田泰民)

72号遺構 (第54図) G14区の灰・焼土の堆積した土坑。49号遺構に切られている。(西田泰民)

84号遺構 (第37図) B18区の土坑。45号遺構に切られている。植栽痕と思われる。(西田泰民)

88号遺構 (第52図) 発掘区南東端に位置する。調査区域外にもかかっているため全体の規模、形状は不明である。図のように大きな掘り込みの内側にもう一つの掘り込みがあるような形状でテラス上の張り出しがあり、また北側の立ち上がりに4段の階段状掘り込みがみられる。西

壁に比べて北壁はなだらかな立ち上がりを示し、覆土の状態とあわせて考えると2度の掘削を想定しうる。遺構の確認面は標高21m前後の褐色土層面で、底は標高約18.2mである。覆土は基本的に3つの層で成り立っている。注意されるのは、テラスを作っている一段深い掘り込みを埋めるようにして黄褐色土が存在することである。検出作業において底面と間違えるほどの締りがあった。この上の土層には大型の石が崩れ落ちたような状態で、西壁付近に集中してみられる。大型の石は70個程で自然石、加工石が入り交じっているが建築物の基礎に使われたものの一部である可能性も考えられる。遺構の壁、底面に工具痕が顕著に見られるが、遺物の出土も少なく性格がわからない。(渡辺ますみ)

90号遺構(第47図) B21区の土坑。遺物は僅かであった。(西田泰民)

93号遺構(第53図) E17グリッド杭付近の井戸。97号遺構を切っている。遺構確認面では径3m60cm程で不整形であるが、深くなるにつれ径が狭まり、確認面から3m程のところから径約140cmの円形となる。東京パミスの下の粘土層を掘り抜いており標高11.5mあたりで水が湧き出した。更にその下、標高11m付近に壁に沿い井戸側が検出されたが、全周には及ばず西から北側にかけて残存していた。材は長さ2m弱、幅30cm程であった。遺物は上層2～3mまでで陶磁器が多く出土した。下層からは材の一部や木片が出土したが、道具や器と見られるものはなかった。(西田泰民)

94号遺構(第47図) D16区の土坑。西側を69号遺構に切られているため全体の形はよくわからないが、方形ではなかったかと考えられる。底には硬化面が出来ているが凹凸がある。遺物はほとんどなかった。(西田泰民)

96号遺構(第51図) D19区の土坑。12号遺構と同様な埋め桶遺構であったと考えられる。102号遺構に切られている。掘り方はやや不自然で途中で段が出来ている。12号遺構よりもたがの残りなど遺存状態は悪く、遺物もほとんど出土しなかった。(西田泰民)

101号遺構(第47図) C16区に位置する楕円形を呈すa・b・cの小ピットからなるものである。aが最も新しくcが最も古い。遺構3を切っている。遺構4との切り合い関係は発掘時では不明であったが、aピットより丸釘やガラス瓶などが出ていることからaは確実に、他も埋土の状況から同様のものか攪乱に準ずるものと考えられる。(大貫静夫)

102号遺構(第51図) D19区東部の土坑。96号遺構を切っている。底部中央に58号遺構と同じ様なほぞ穴のある礎石が置かれていたが、柱の跡はみられなかった。遺物はわずかである。柱穴とみるよりは、土坑を埋める際に石を一緒に入れたのではないかと思われる。(西田泰民)

110号遺構(第44図) B19区北端に並列する柱穴のうち西側のもの。119号遺構を切っている。径約120cmの円形の掘り方の中央やや北よりに一辺20cm強のほぼ正方形の柱痕が認められた。掘り方の深さは約70cmで、壁面は垂直に近くなっている。覆土はロームの小さな塊を含む褐色土が顕著である。柱痕はほぼ垂直であった。礎石はなく、遺構に伴う遺物もない。(佐藤文泰)

111号遺構(第44図) B19区北端、110号遺構と並列する柱穴。不整円形を呈する掘り方の中央やや北西よりに一辺約20cmの正方形の柱痕が認められた。壁面は比較的急角度である。遺物は多くない。直方体の石が覆土中から見つかっているが南隅から斜めに流れ込んだ様な状態であったことから、柱穴に伴う礎石であるとは認めがたい。110号遺構とは近接しており、柱痕間の距離は140cmである。掘り方の深さにやや違いはあるものの、形状、大きさが近似しており、柱痕の形状、大きさ、底部のレベルがほぼ同じであること、掘り込み面も同じであることから同時期のものであり同じ構造物の柱穴であったと考えてよいだろう。(佐藤文泰)

113号遺構(第37図) C17の土坑。4号遺構にきられている。中央に柔らかな部分があり、柱痕かとおもわれるが、礎石はなく、底部もあまり平らではなかった。遺物は特に出土しなかった。(西田泰民)

119号遺構(第44図) C18・19区にまたがる性格不明の土坑。3号遺構を切っている。遺物はごく少なかった。(西田泰民)

122号遺構(第54図) C14区、49号遺構の南の浅い溝を伴う面。49・142号遺構より古く、97号遺構より新しい。33号遺構に切られている。溝には東西方向にのびる木樋が通っていたと思われ、釘が壁にそって並んで検出された。中に数枚のかわらけが落ち込んでいた。(西田泰民)

124号遺構(第53図) D18区南西部の桶を埋設した土坑。4号遺構に切られ、その底部の土が、貼り床状に上を薄く覆っていた。掘り方は直径約1.4m、深さ約45cmの円形を呈し、南東隅に桶を埋設している。桶は、木質はほとんど失われていたが、図のようにたがの跡や底面の跡が明瞭に認められた。直径は底面で約70cmである。桶の内部には底の方に魚骨を含む粘質土が堆積

し、その上に瓦や鉄釘を大量に含んだ焼土の層が入っていた。この焼土の層からは火を受けて融着したかわらけや12号遺構から出土した陶器鉢と同一個体と思われる破片も出土している。

(高井佳弘)

127号遺構, 128号遺構 (第44図) A19区の土坑。両方とも遺構の西側は削られていて、平面形は半円状を呈している。127号遺構は直径約1.2m、深さ80cmの丸底の土坑で、128号遺構を切っている。128号遺構も127号遺構と似たプランで双方とも遺物はごく少量であった。性格は不明である。

(岩崎貞明)

129号遺構, 130号遺構, 133号遺構 (第53図) D18・17区の掘立柱跡かと考えられる遺構。いずれも97号遺構を埋めた後に掘られたものである。礎石は認められず、底面は硬化していた。掘り方は定形的でない。

(西田泰民)

136号遺構 (第45図) C15区の礎石を持つ柱穴。4号遺構に切られている。掘り方はやや歪んだ楕円形で、長径約95cm、短径約85cmを測る。深さは4号遺構の底面から約40cmである。礎石は一辺約50cmのほぼ正方形で厚さは約15cmである。上面だけ平坦に削り、中央に約5cmのほぞ穴を開ける。礎石上面のレベルは標高約19.2mである。柱の痕跡は明瞭で一辺約18cm(6寸)の四角い柱であったことがわかる。この柱穴と組み合わせると考えられるのは、53号遺構のみである。

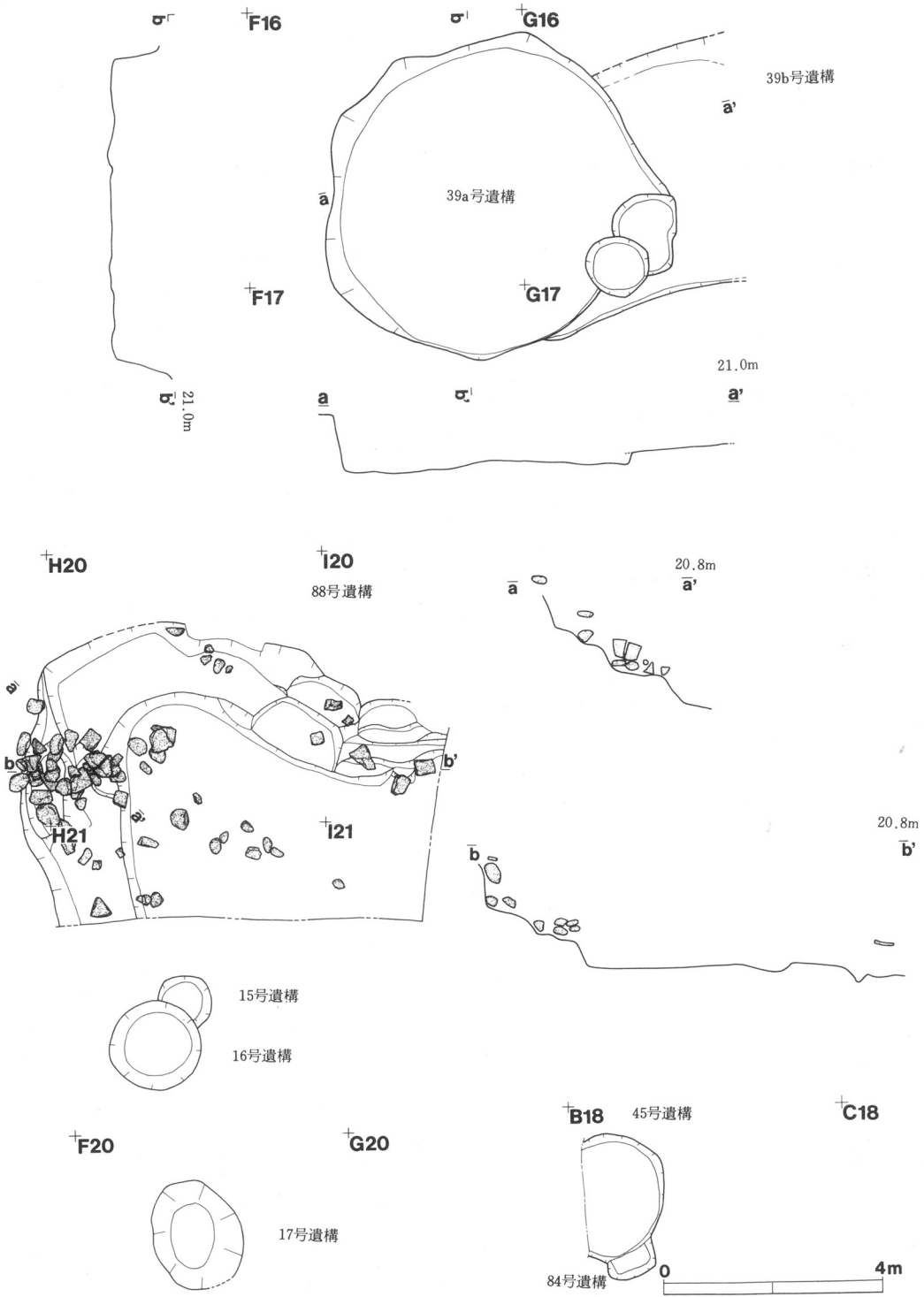
(高井佳弘)

139号遺構 (第53図) D16区の方形の木枠を埋め込んだ遺構。97号遺構の覆土中に掘り込まれて作られている。釘だけが縁部に残っており、釘と壁の間は1~2cmの間隙がある。これから考えると掘り方はさほど大きくなかったと思われる。底面には赤く染まっている部分があり、板の跡と考えられる。釘は水平方向のものは縦に3本並んでいた。遺物は確認面より下ではあまり出土しなかった。

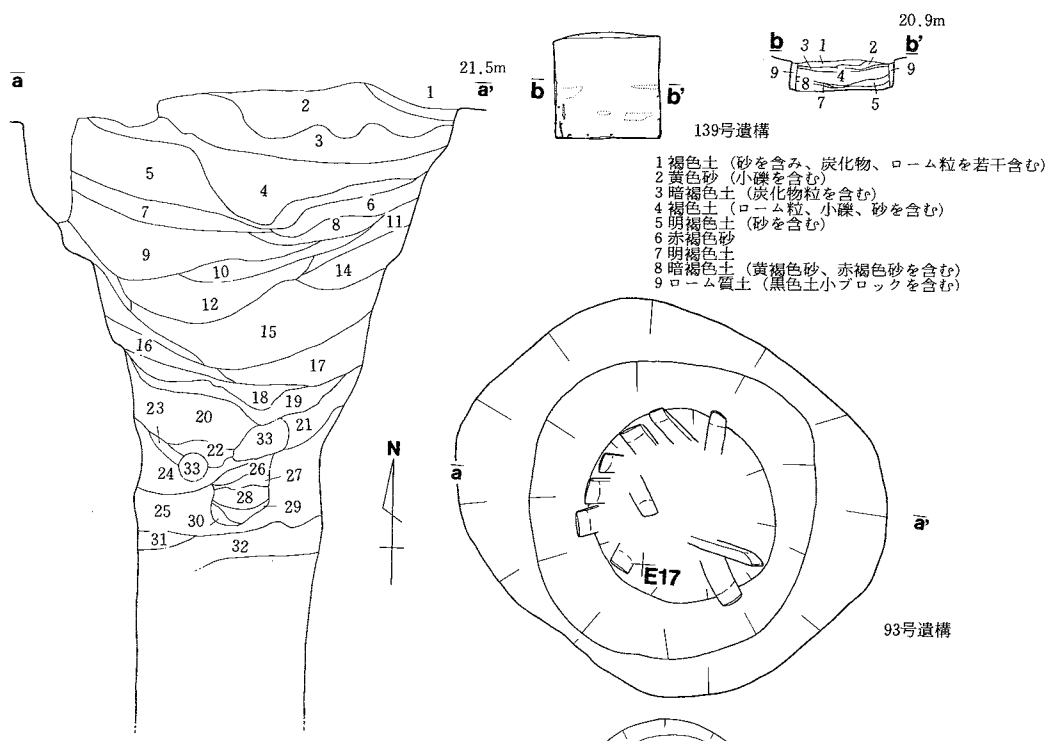
(西田泰民)

142号遺構 (第54図) F・G14区を中心に東西方向にのびる遺構。北側を49号遺構に切られ、西の部分は33号遺構に切られている。掘り込みと面が確認されたのはF・G14区のみで、南壁に並ぶ杭列跡が西へのびているのが確認された。先を鋭くした角材を打ち込んだものと考えられる。また、まっすぐに打ち込んだのではなく、南に傾斜している。摺鉢がまとまって出土した。

(西田泰民)

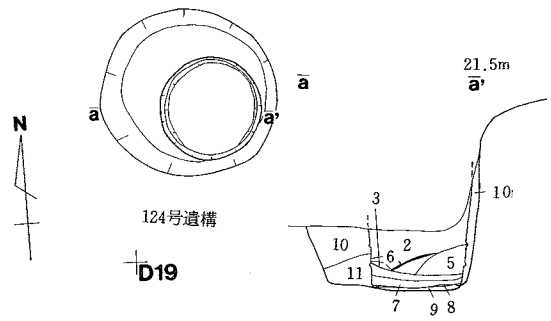
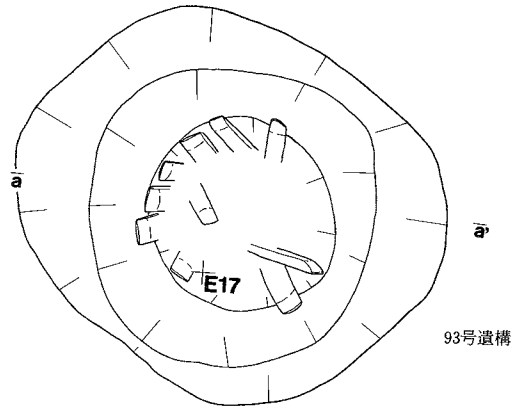


第52図 15・16・17・39・88号遺構実測図

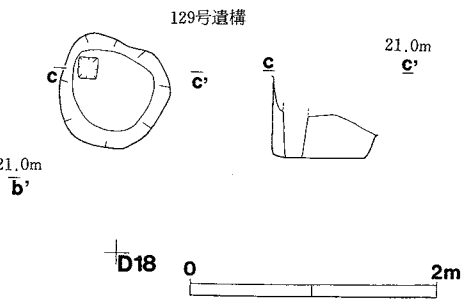
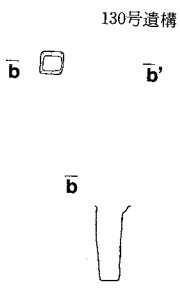
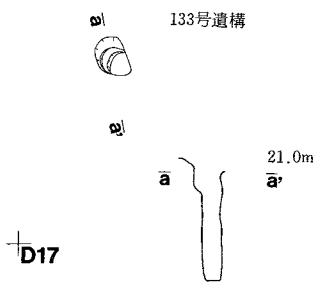


- 1 褐色土 (砂を含み、炭化物、ローム粒を若干含む)
- 2 黄色砂 (小礫を含む)
- 3 暗褐色土 (炭化物粒を含む)
- 4 褐色土 (ローム粒、小礫、砂を含む)
- 5 明褐色土 (砂を含む)
- 6 赤褐色砂
- 7 明褐色土
- 8 暗褐色土 (黄褐色砂、赤褐色砂を含む)
- 9 ローム質土 (黒色土小ブロックを含む)

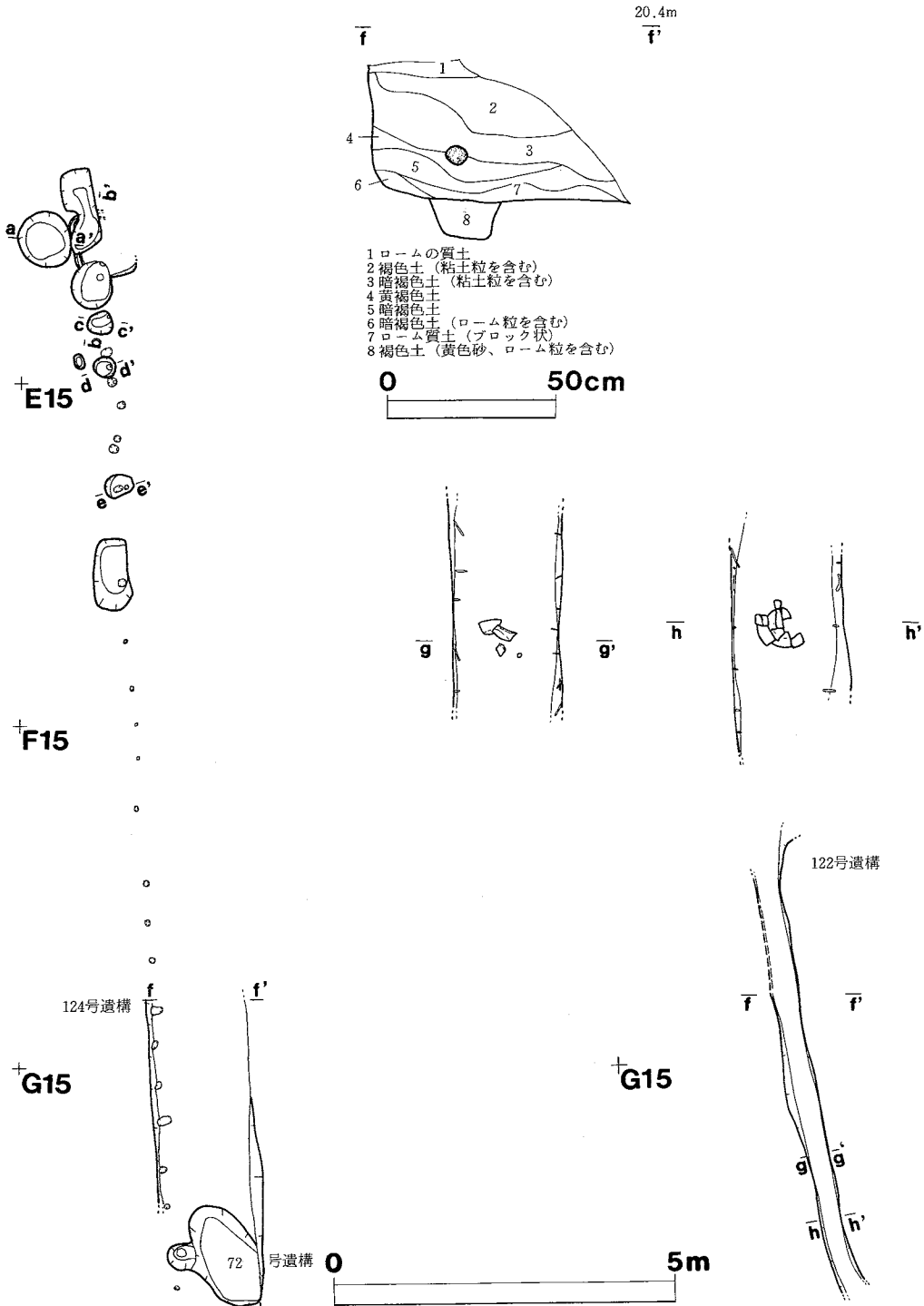
- 1 褐色土 (砂利を含む)
- 2 暗褐色土 (ロームブロックを若干含む)
- 3 ローム質土
- 4 暗褐色土 (ロームブロックを含む)
- 5 ローム質土 (ブロック状)
- 6 暗褐色土 (ロームブロック、灰白色粘土を含む)
- 7 暗褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
- 8 暗褐色土 (ローム粒、黒褐色土粒を多量に含む)
- 9 褐色土 (黒色土ブロック、ロームブロックを含む)
- 10 褐色土 (ローム粒を含む)
- 11 灰褐色土 (ローム粒を含む)
- 12 ローム質土 (ブロック状)
- 13 ローム質土
- 14 ローム質土
- 15 ローム質土 (ブロック状)
- 16 褐色土 (ローム粒を若干含む)
- 17 褐色土
- 18 暗褐色土 (ローム粒を含む)
- 19 褐色土 (ロームブロックを含む)
- 20 褐色土 (ロームブロック、灰白色粘土を含む)
- 21 赤褐色土 (ローム粒、炭、焼土粒を多量に含む)
- 22 暗褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
- 23 赤褐色土 (焼土粒を多量に含む)
- 24 暗褐色土 (焼土粒を含む)
- 25 褐色土 (灰白色粘土、小石を含む)
- 26 褐色土 (焼土粒を若干含む)
- 27 赤褐色土 (焼土粒、炭化物を多量に含む)
- 28 暗褐色土 (ロームブロックを若干含む)
- 29 赤褐色土 (焼土粒を多量に含む)
- 30 灰褐色土
- 31 灰褐色土 (灰白色粘土、炭化物を含む)
- 32 褐色土 (ロームブロック、灰白色粘土、炭化物を含む)
- 33 空洞



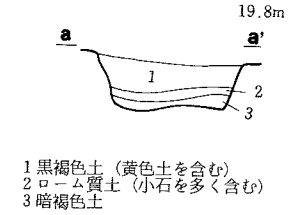
- 1 焼土 (炭化物、石を多く含み、瓦片を多量に含む)
- 2 暗灰色土 (炭化物、焼土、石、黄灰色土ブロックを含む)
- 3 黄灰色土
- 4 焼土 (上部に薄く炭化物の層がある)
- 5 焼土 (炭化物、石を多く含み、瓦片を多量に含む)
- 6 灰白色粘土 (小石を若干含む)
- 7 灰白色粘土 (灰を含む)
- 8 灰白色粘土 (黒色土を若干含む)
- 9 灰白色粘土 (褐色粘土を含む)
- 10 褐色土 (黒色ブロック、白色粘土、灰白色粘土の小ブロックを含む)
- 11 褐色土 (やや橙色がかる)



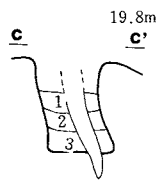
第53図 93・129・130・133・124・139号遺構実測図



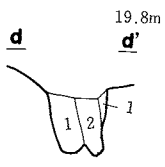
第54図 72・122・142・169・170・171・172・173号遺構実測図



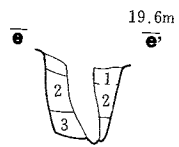
- 1 黒褐色土 (黄色土を含む)
- 2 ローム質土 (小石を多く含む)
- 3 暗褐色土



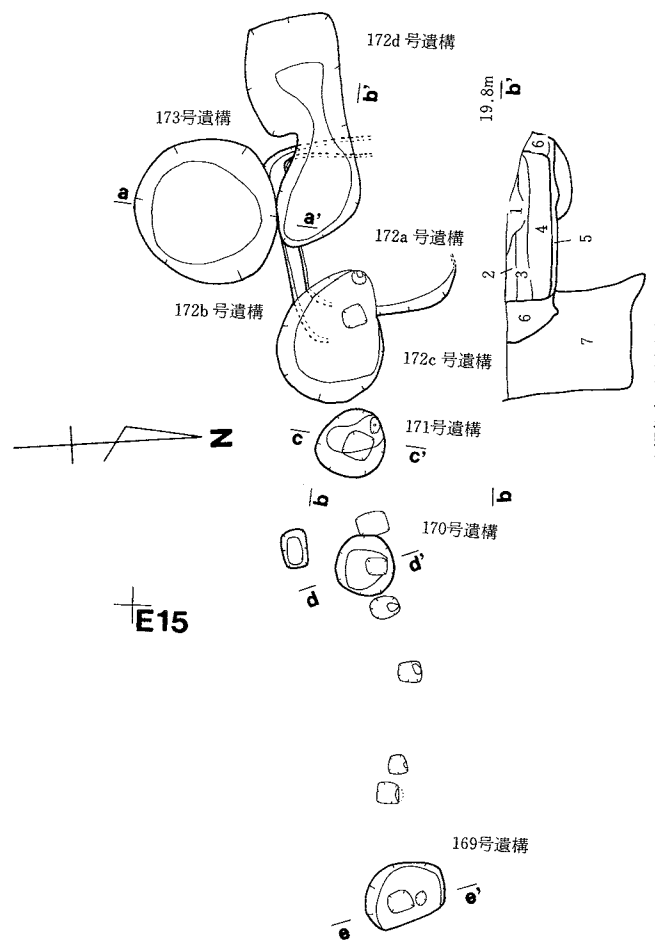
- 1 黒色土 (黄色土を含む)
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 (ロームブロックを含む)



- 1 黒褐色土 (黄色土を含む)
- 2 暗褐色土



- 1 褐色土 (黒色土粒を含む)
- 2 黒色土 (ロームブロック、礫、粘土ブロックを含む)
- 3 黄褐色土 (黒褐色土粒を含む)



- 1 灰白色粘土粒を含む (小麻を含む) 粘土 (褐色土粒を含む)
- 2 黄褐色粘土 (黄褐色粘土粒、黒色土粒を含む)
- 3 黄褐色粘土 (黄褐色粘土粒、黒色土粒を含む)
- 4 黄褐色粘土 (黄褐色粘土粒、黒色土粒を含む)
- 5 黄褐色粘土 (黄褐色粘土粒、黒色土粒を含む)
- 6 ローム質土 (黒色粘土ブロック、黒褐色土粒を含む)
- 7 ローム質土 (黒色粘土ブロック、黒褐色土粒を含む)
- 8 黒色土



第55図 169~173号遺構実測図

144号遺構(第44図) B18区南端の楕円形を呈する土坑。覆土は灰色・黄褐色・灰褐色の砂が複雑な層位を示して堆積し、その下に灰褐色粘土・暗褐色土が堆積していた。この堆積状況が埋没時のどのような事情を示すのかは興味ある点である。かわらけが床面直上から出土している。

(佐藤文泰)

152号遺構(第37図) F16区北東の土坑。南半分を6号遺構に切られているが、残存部より径80cm程の略円形の土坑とわかる。深さは約50cmで切込み面より20cm位の壁面に段を有し、底面は鍋底形に近い。この底面直上に10cm程の厚さで意図的にロームを入れ突き固めたと思われる堆積がみられ、何らかの柱状構築物に伴う遺構の可能性はある。

(西股総生)

153号遺構(第45図) G19区の南北に長い溝状の土坑で柱穴と考えられる。西側の40号遺構と同様攪乱を受けており南側の様子は不明である。隅丸長方形の掘り方の北よりの部分に径約20cmの柱痕が見られる。掘り方の壁面は垂直に近く、底面もほとんど平坦であり、かなり整った形状を呈している。柱痕と掘り方とは底部が一致しており、礎石はなかった。出土遺物はない。

(佐藤文泰)

173号遺構(第54図) D14区にあるピット状遺構。172b号遺構の南側を切っている、径約75cm、深さ約30cmの円形の浅いピットである。覆土は上から順に、黒褐色土、ロームと礫を含む土、暗褐色土となっている。遺物は認められなかった。

(佐藤文泰)

178号遺構, 179号遺構(第46図) G19区中央に位置する土坑。いずれも21号遺構に北側を切られている。平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。179号遺構には柱痕と思われるものが見られ、掘立柱の跡であった可能性も考えられる。

(大貫浩子)

169～172号遺構(第55図) D・E14区に東西に並ぶ柱穴群及び土坑群。171号遺構の東側にほぼ一直線に等間隔に並ぶ142号遺構とは、柱穴の形状(142号遺構には掘り方がない)、分布から別の構築物に伴うと考えるのが妥当であろう。

169号遺構は柱穴群の東端に位置し、径約40cmの円形を呈していたようである。掘り方のほぼ中央に径約10cmの柱痕が認められ、深さ約50cmのやや北に傾斜した先端のすぼまった堅坑になっていた。遺物、礎石とも認められなかった。

170号遺構は、169号遺構の西に142号遺構の柱穴を数個挟んで位置する。径約30cm、深さ約40cmの円形の掘り方の中央やや北よりに、一辺約10cmの隅丸方形の柱痕が深さ約40cmで北に傾斜

して掘り方の側壁に切れ込む形で認められた。遺物、礎石とも見つかっていない。

171号遺構は170号遺構の更に西、142号遺構の柱穴を挟んで位置する。径35cm強の円形の掘り方のほぼ中央に、一辺約10cmの隅丸方形の柱痕が認められた。掘り方は深さ約50cmで、全体的に北側に傾斜しており、柱痕も同じように傾斜し、掘り方の底部更に10cm程下にまで達している。遺物、礎石共にない。

172号遺構は、遺構群の西端に位置し、土坑状遺構a、b、dと柱穴cが重なっている。aは北側を49に切られ、bの覆土に掘り込まれている。bはc、dを切っており、南側を173号遺構に切られている。以上の新旧関係を図に示すと次のようになる。

c、d → b → a → 49, 173

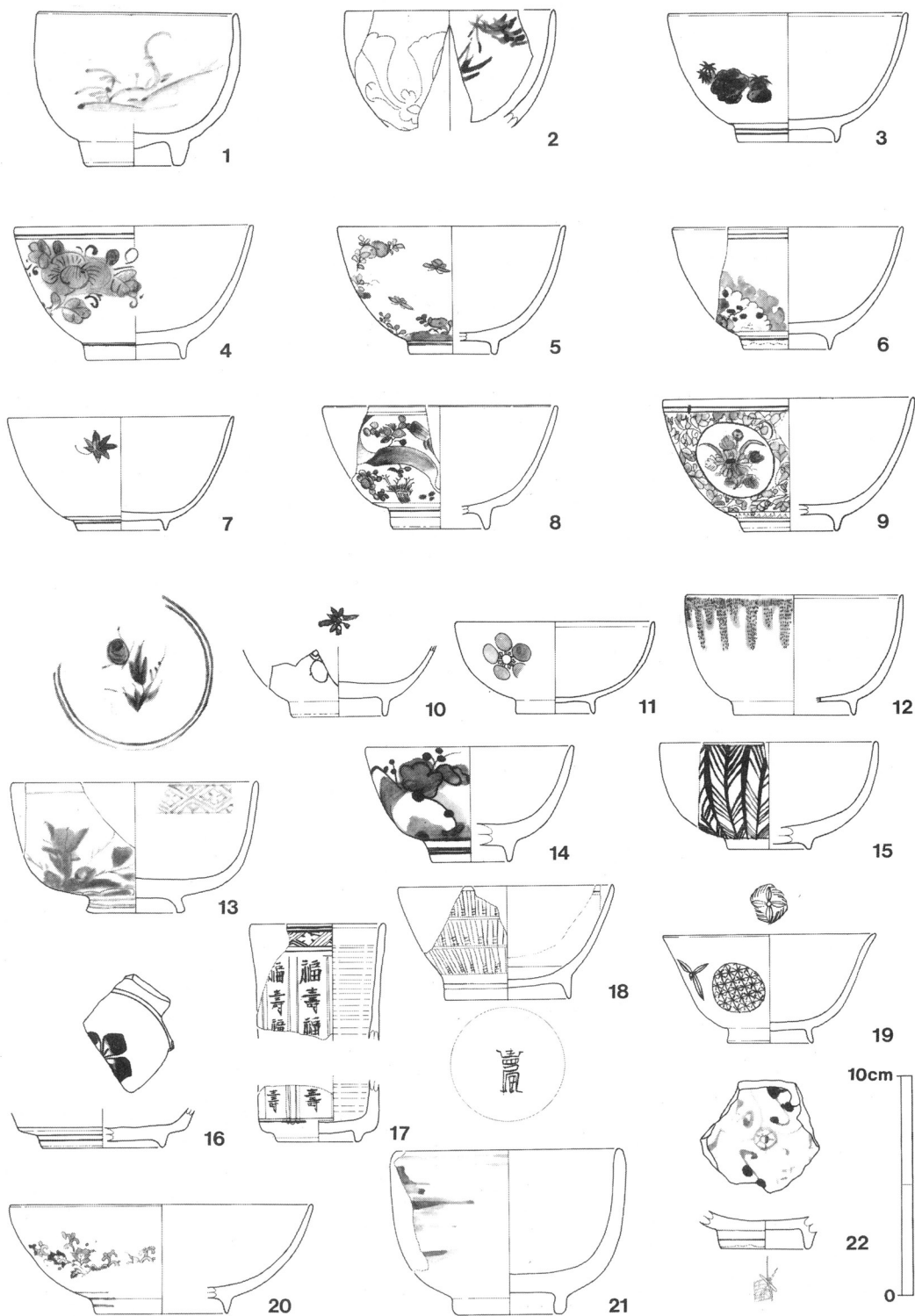
aは一辺約40cm、bは一辺1mの方形を呈していたと思われるが、全体の形状は不明である。底部は双方とも平坦である。cは径約45cmの円形を呈しており、全体的に西北西に傾斜し、西壁はかなりオーバーハングしている。遺物、礎石とも見つかっていない。dはbの西側からさらに西に広がる、ほぼ長方形を呈する土坑である。遺物はない。 (佐藤文泰)

173号遺構(第55図) D14区の土坑。172b号遺構の南側を切っている。径約75cm、深さ約30cmの円形の浅い土坑である。遺物は認められなかった。 (佐藤文泰)

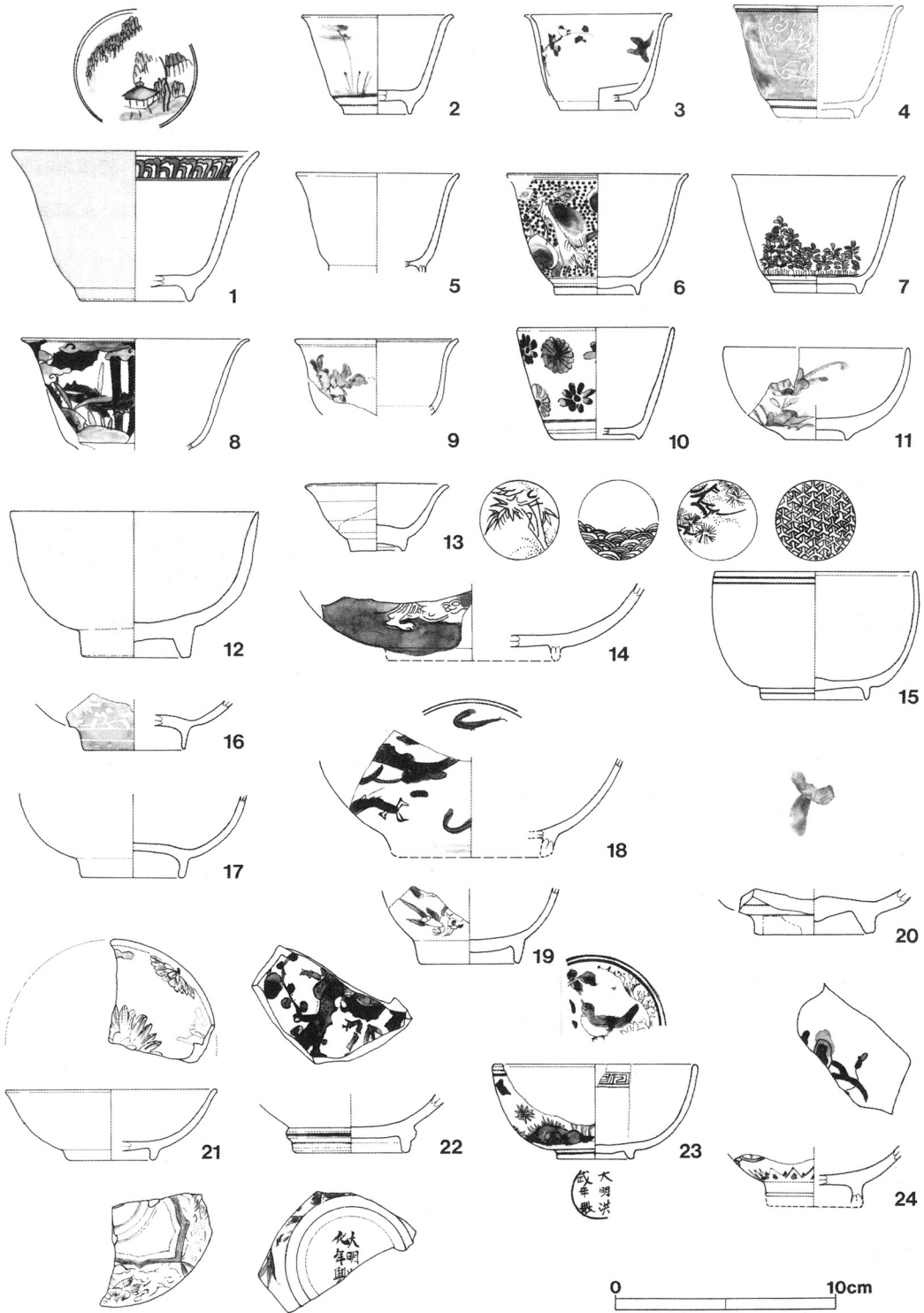
第3節 陶磁器類

当地点は居住区ではないために出土する陶磁器類にはあまり一括性を期待することは出来ない。大部分は苑路の埋土中から出土しており、投棄されたというよりも埋め立ての土の中に混ざって埋没したものである。したがって細片が多く、図示出来なかった個体も多かった。また御殿下記念館地点を含めて異なる遺構間で接合するものや、同一製品が多いためにあえて数量化することは避けた。遺構の説明で触れたように苑路底面には改修に伴う層の重なりが認められ、調査時には遺物の時期的変遷を追うことが出来るのではないかと思われたが、出土する個体数そのものも僅かであることに加えて全形を知り得る個体があまりにも少なく、また同一製品が異なる層位で出土しているためにそのような期待はもてないことが判明した。

遺跡自体は特殊であるが陶磁器の組成は遺構の年代を反映しておおまかには他の地点と類似した変化を見せており、古い遺構で舶載陶磁器や肥前磁器が多いのに対して、新しい遺構では瀬戸美濃の陶器の割合が増える傾向が認められる。土物ではかわらけ以外の器種、すなわち火鉢、ほうろく類の出土が少ないという特徴を指摘できる。



第56图 磁器碗类



第57图 磁器碗，杯類

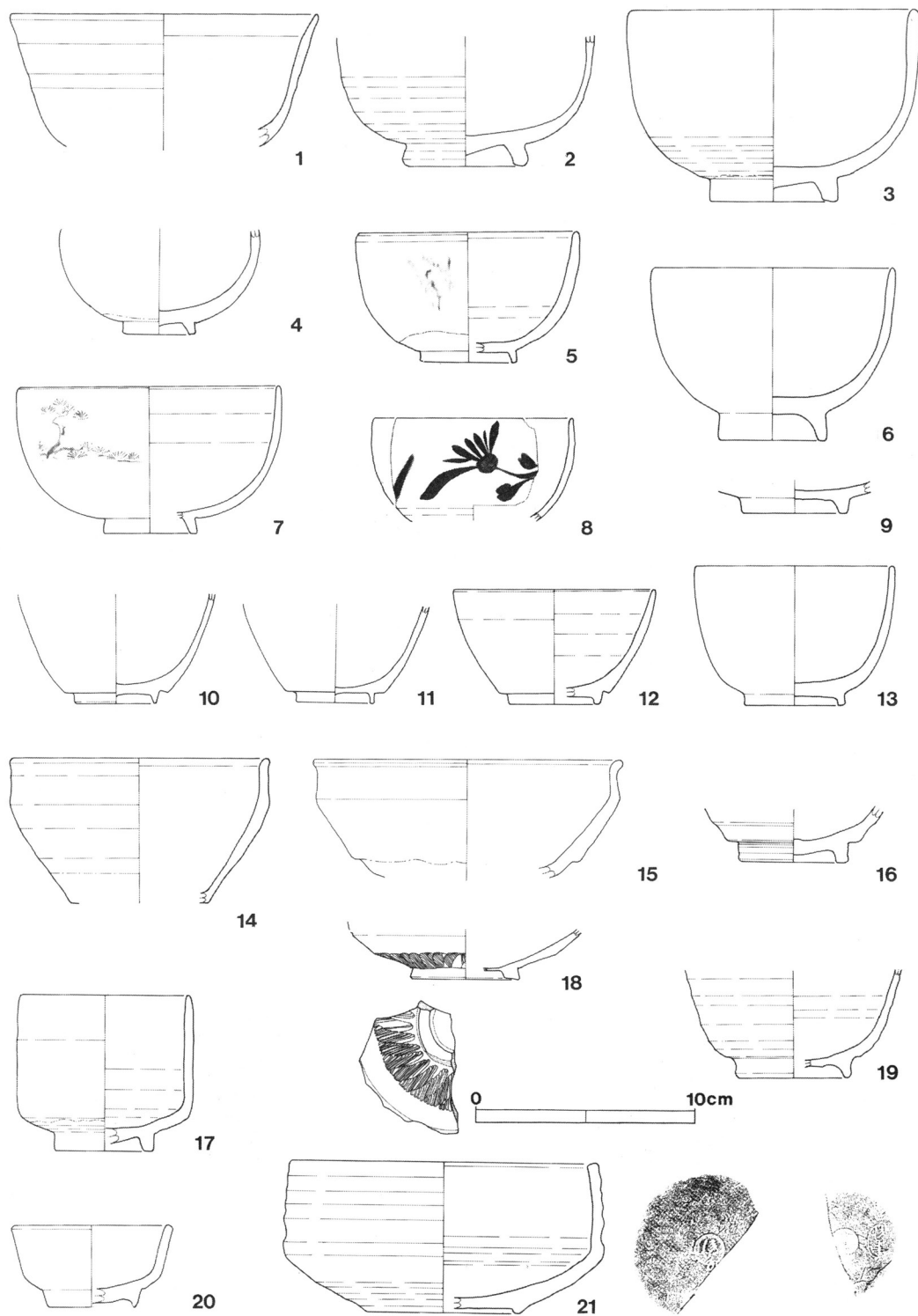
1. 磁器碗 (第56・57図)

第56図に染付碗を示す。1・2が最も古い遺構群から出土している。1は口縁の平面形が楕円形を呈している。3～9のタイプの碗類が出土磁器碗の大多数を占める。11は前田家の家紋と同じ剣梅鉢をあしらった碗で注作品であるかも知れないが、出土しているのは一個体のみである。広東碗や端反り碗の出土は僅かである。22は焼き継ぎの見られる碗で高台内に*形の印が付けられている。

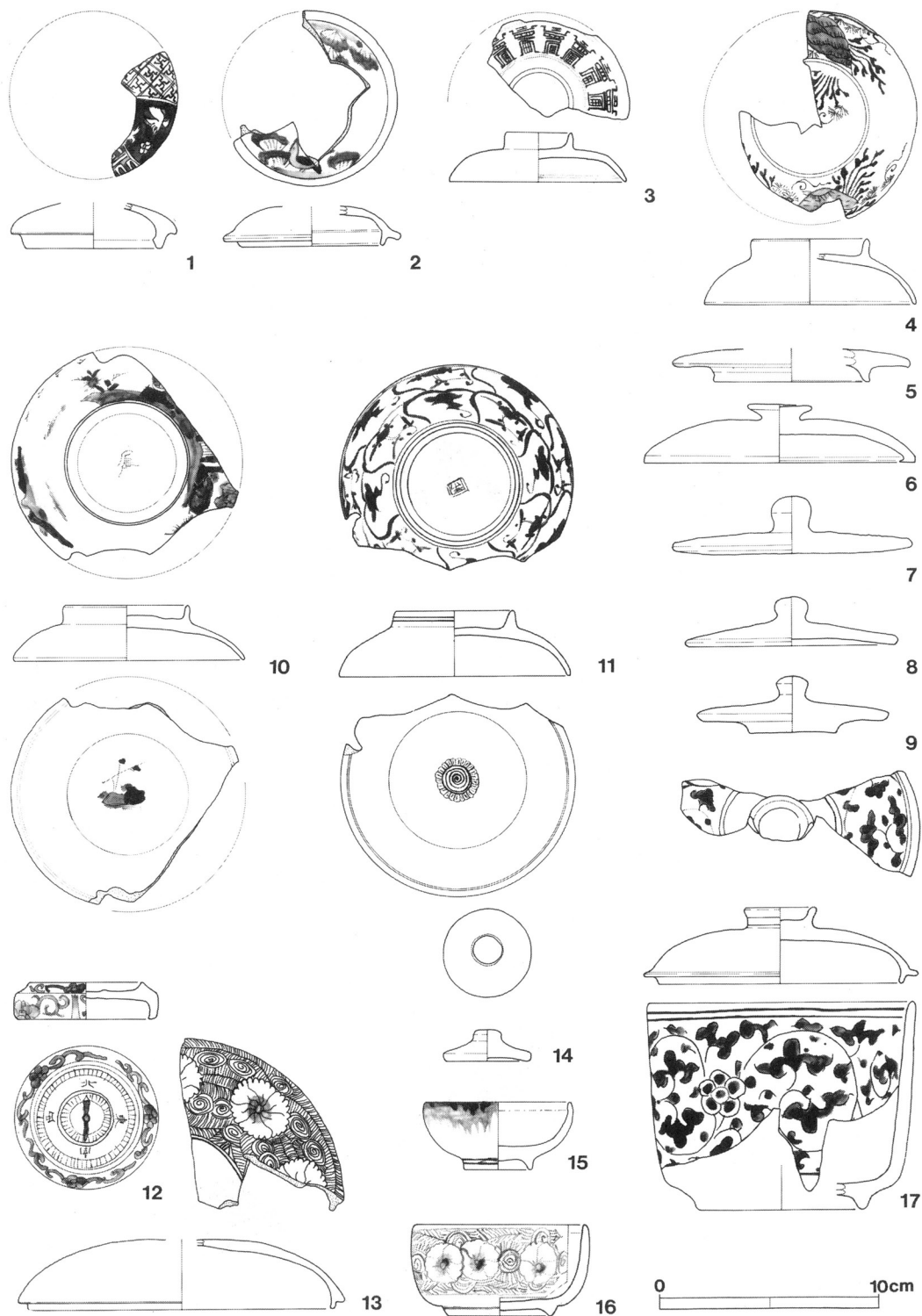
第57図に杯と色絵碗、舶載碗を示す。1の青磁染付杯は数個体分出土している。3は色絵杯で赤を基調とした絵付けであったようであるが大部分は剝落している。4は墨弾きの杯で数個体が出土している。猪口の出土は少なく実測に耐えるのは10のみであった。15の色絵碗は四つの円内に文様を埋め込むが、すべて顔料は剝落しており元の色は分からない。14、写真36-7, 8, 12は中国製と考えられる三彩でこのほかにも破片が多く出土しており、これまで他の遺跡ではあまり報じられたことのないものである。ややタイプは異なるが黄色や緑の単彩で極めて器壁の薄い皿か鉢になると思われる磁器片も出土している。16・17は紅釉の碗で、16は金で唐草文が描かれている。いずれも饅頭心形の底部である。20は中国南部の製品と思われる陶胎染付である。22は高台の張り出し部に鉄釉を塗った染付碗である。

2. 陶器碗 (第58図)

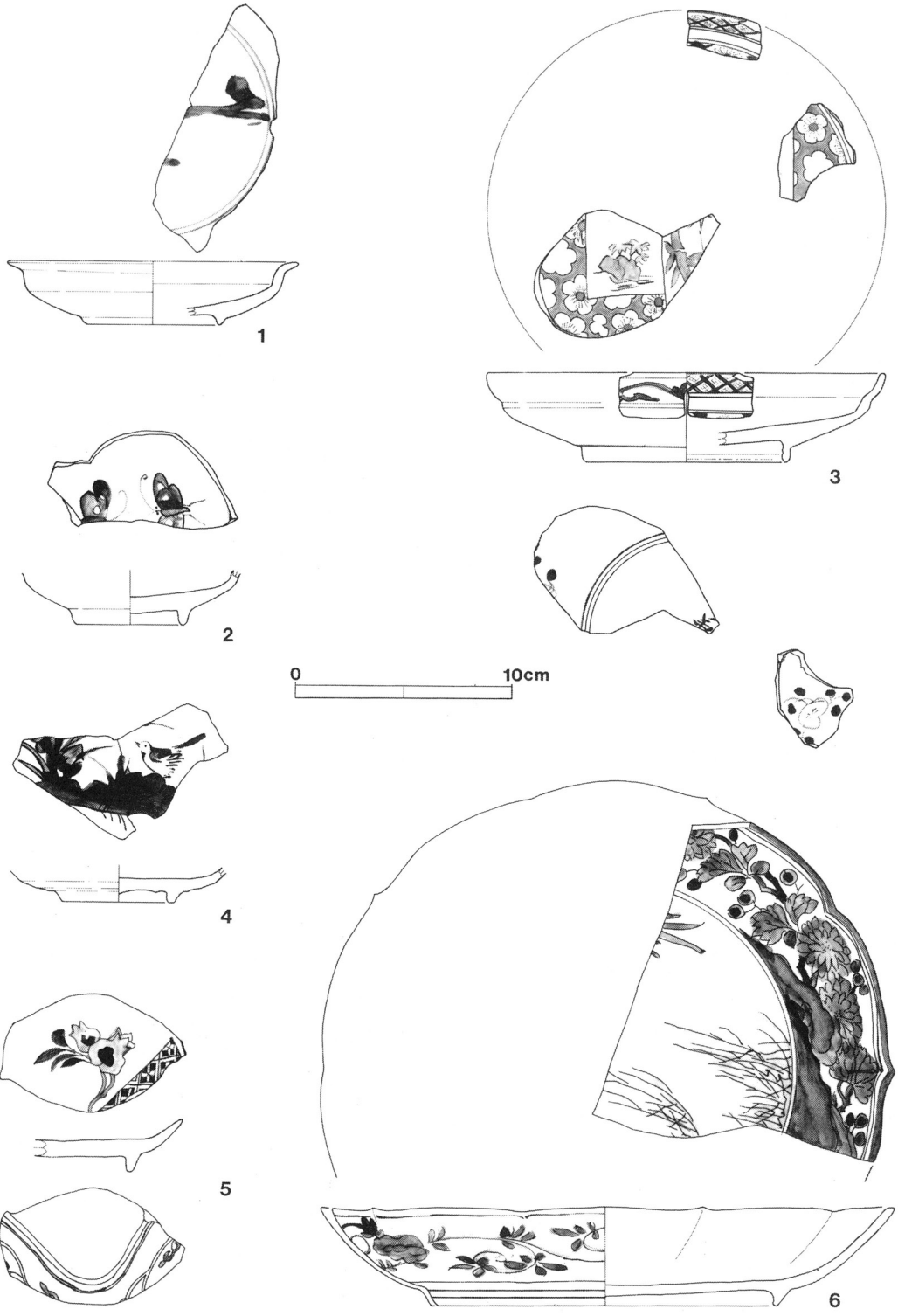
陶器碗類の1は最も古い盛り土から第77図-11とともに出土している。2・3は江戸で18世紀中頃から出土数が増える瀬戸美濃産の灰釉の碗であるが、この地点からは僅かしか出土しなかった。4も瀬戸美濃産の灰釉の丸碗である。せんじと呼ばれる胴部に溝のあるタイプは出土していない。5は対向する位置に呉須で雑な文様を描く瀬戸美濃産の碗。6は献上手の唐津碗、7～9・13は京焼風碗である。10～12は小杉茶碗であるが、いずれも文様部分が欠損している。14～16は天目茶碗で、白天目の口縁部は出土していない。17は志戸呂の製品と考えられる碗で胎土は黒褐色である。1点のみの出土である。18は胎土、高台の作りから見て信楽周辺の製品かと思われる。破損部に辛うじて胴部を巡る沈線の一部が認められ、いわゆるせんじに似た器形であることがわかる。御殿下記念館地点の墨書のある陶器碗の中に類例がある。19は産地不明の碗である。高台裏を螺旋状に仕上げている。釉は灰褐色の色調で白い斑点が混じる。20は志野釉の小杯で高台部分は鋭く削り出されている。21は鉢と言った方が良い器形で、底部の釉を一部拭きとっている。



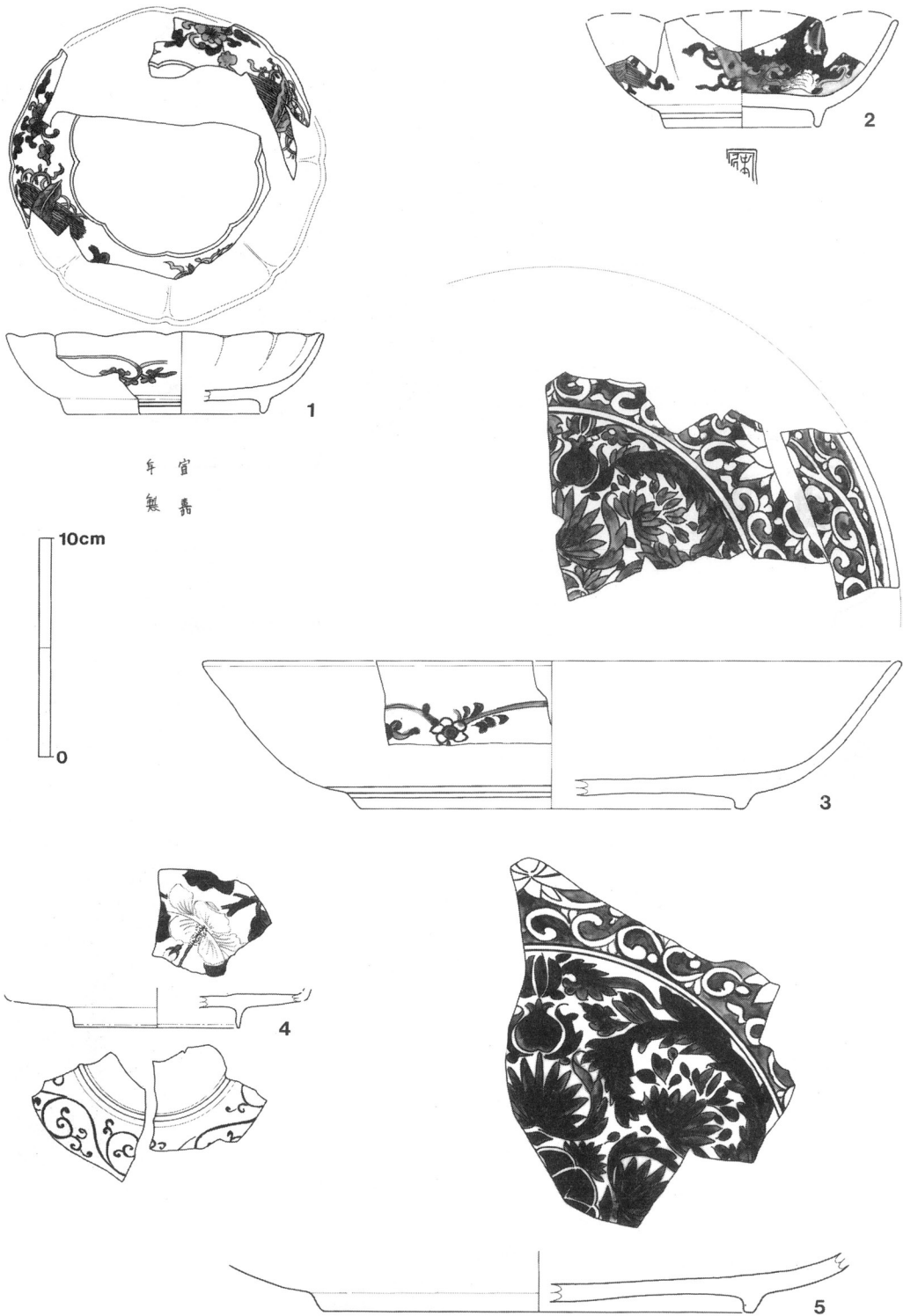
第58図 陶器碗類



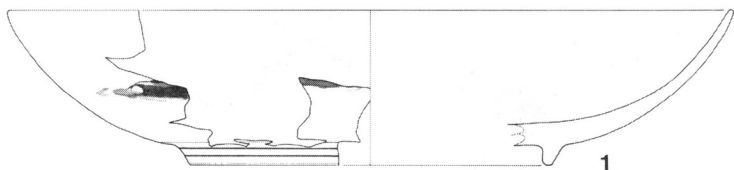
第59図 蓋物類



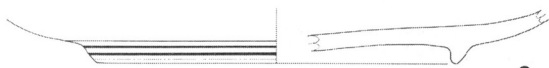
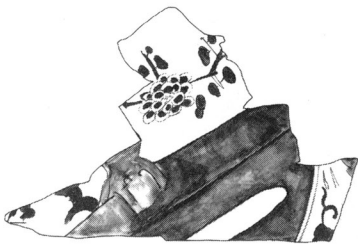
第60图 磁器皿類(1)



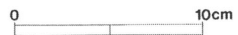
第61图 磁器皿類(2)



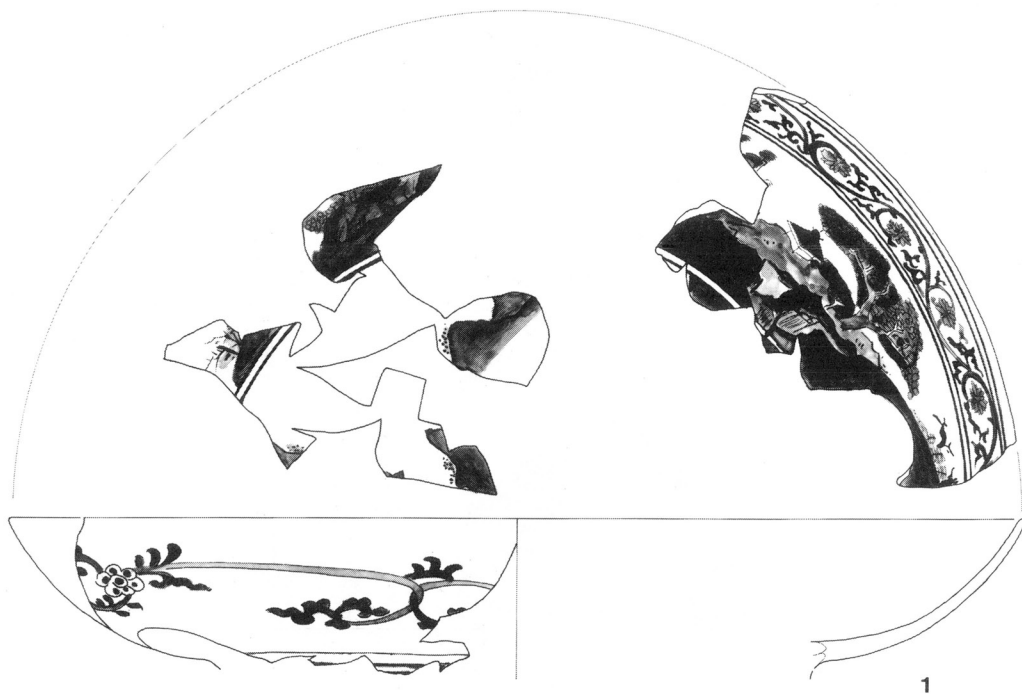
1



2

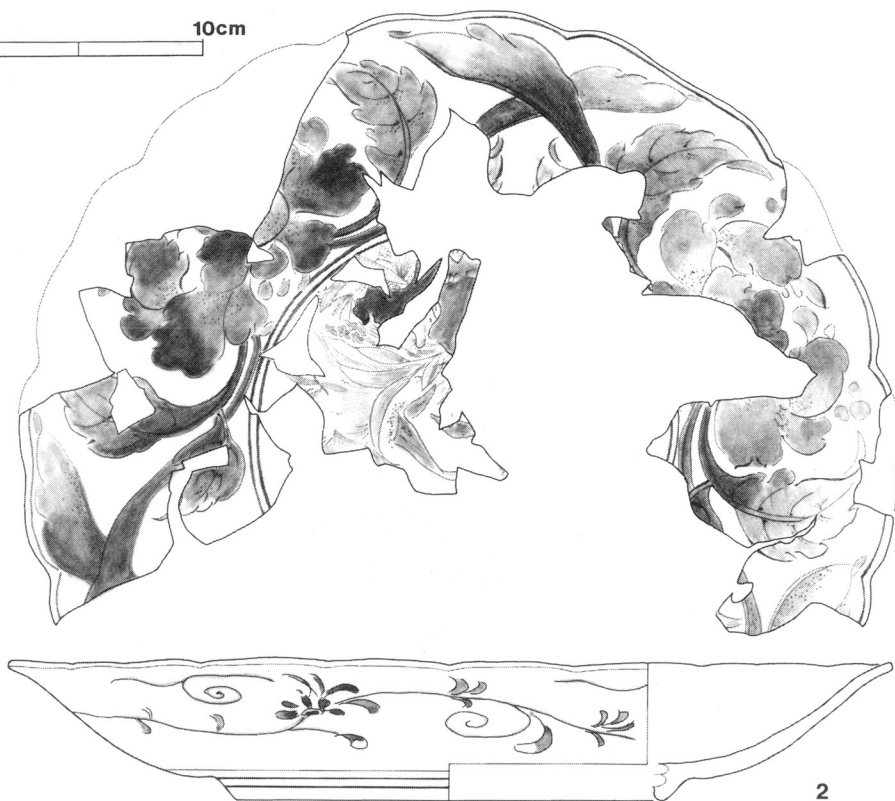


第62図 磁器皿類(3)



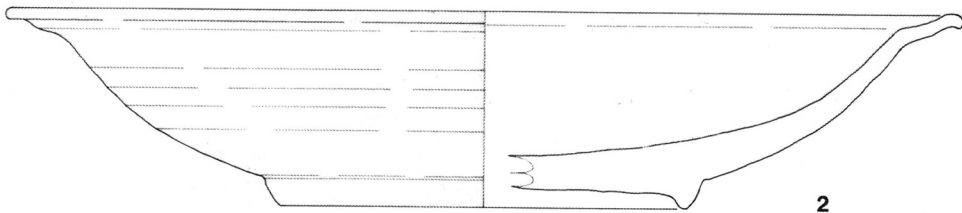
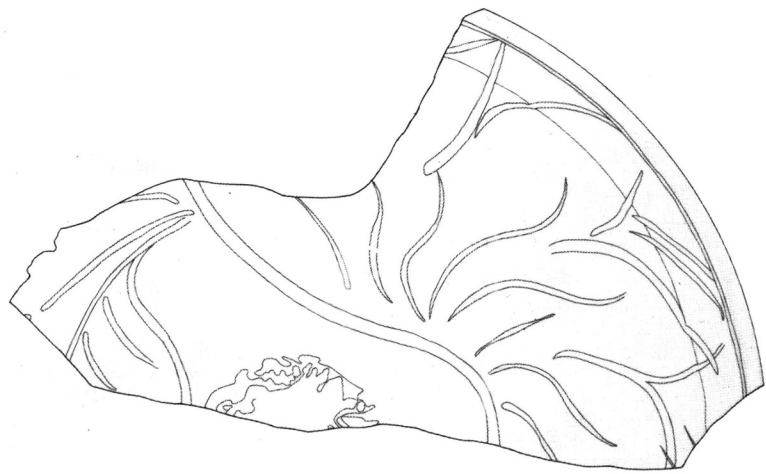
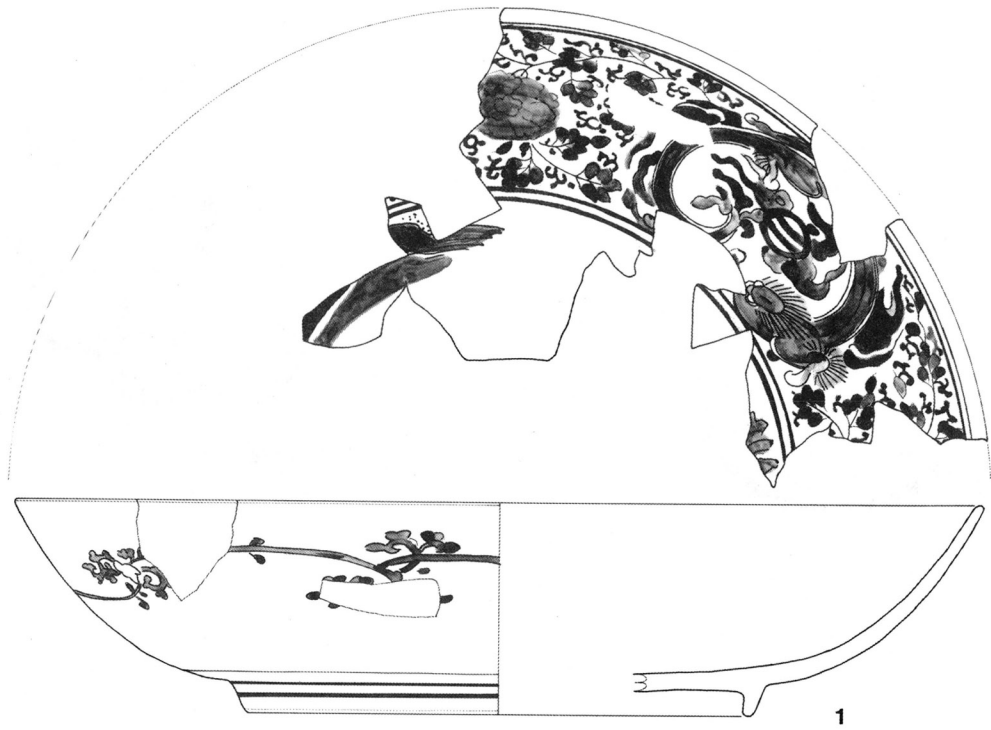
1

0 10cm

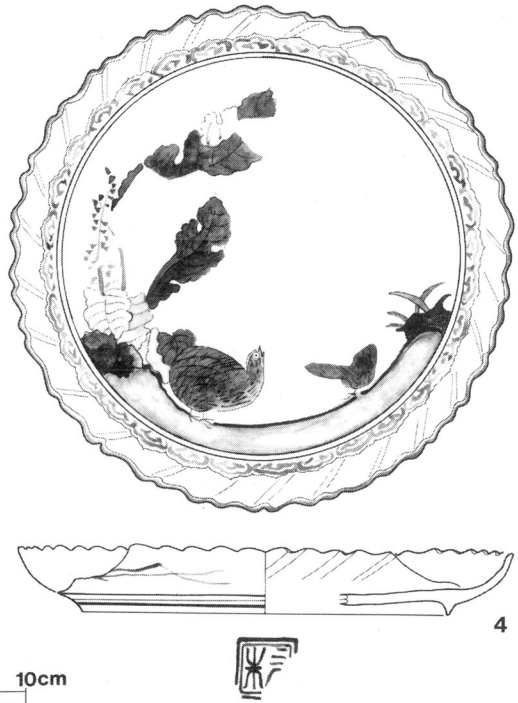
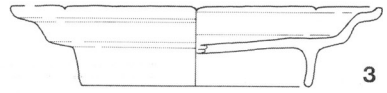
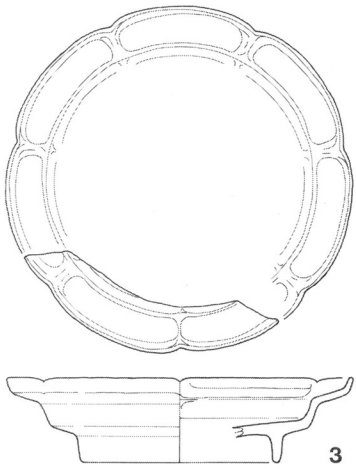
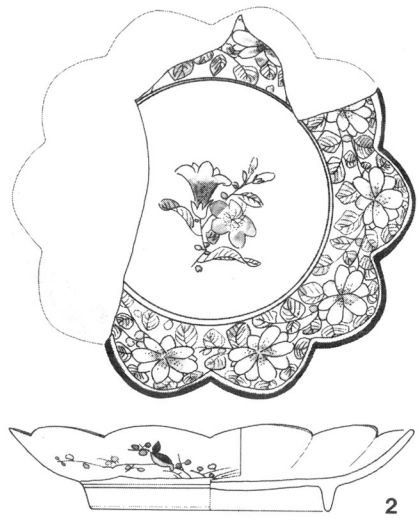
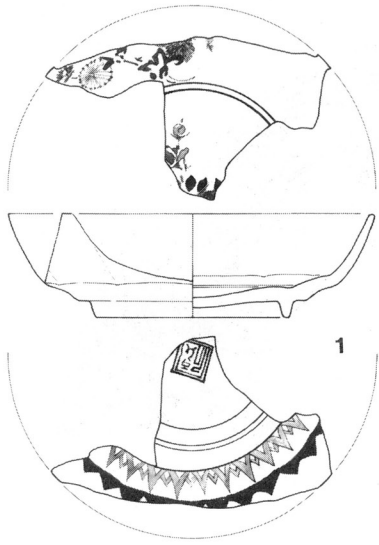


2

第63図 磁器皿類(4)



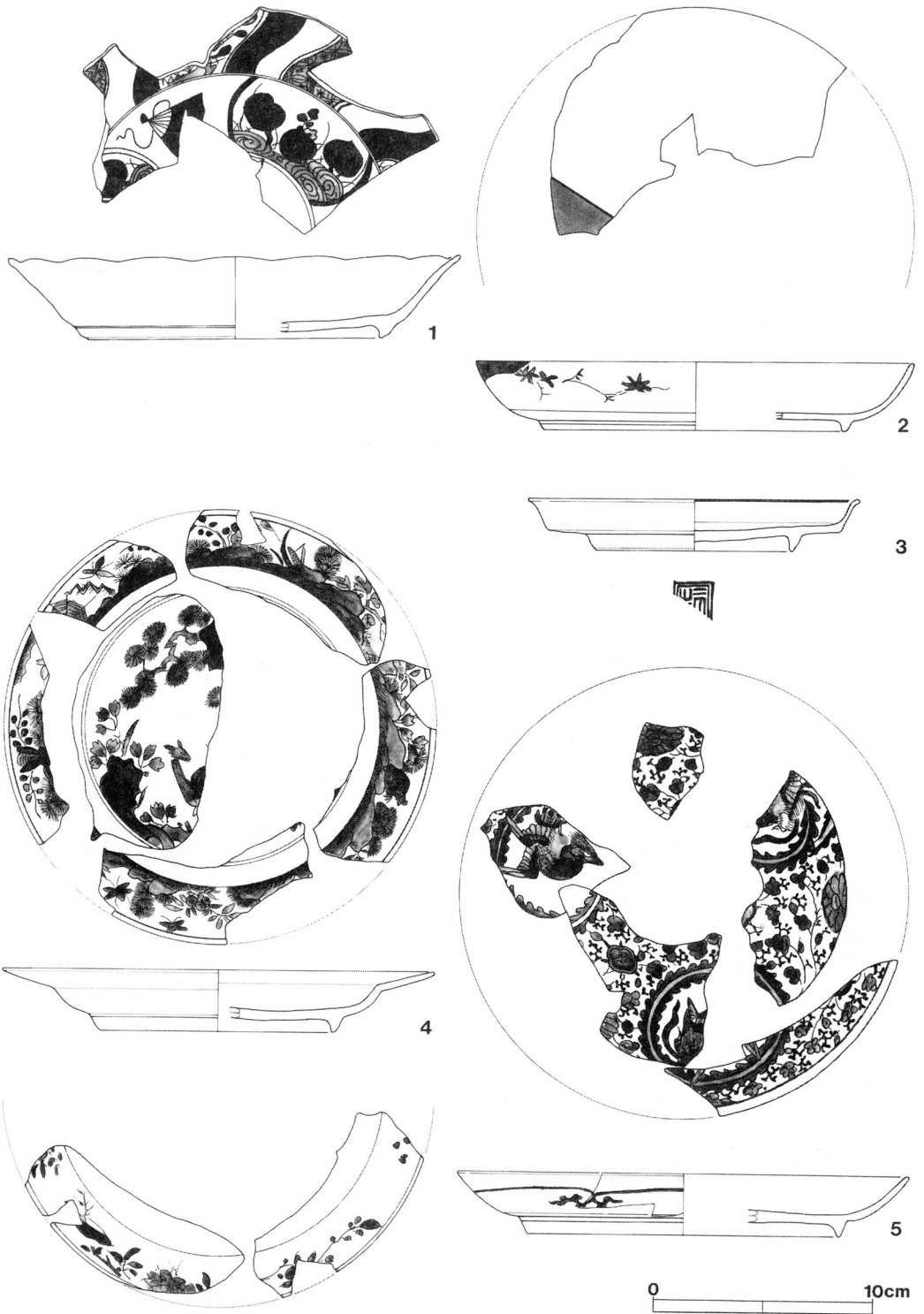
第64図 磁器皿類(5)



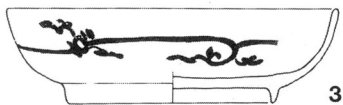
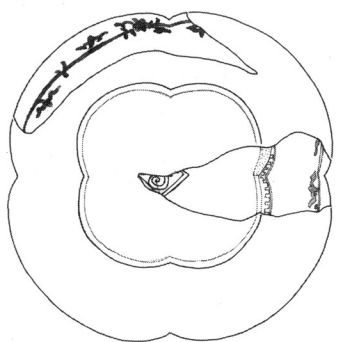
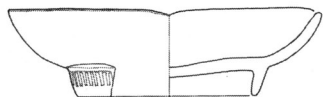
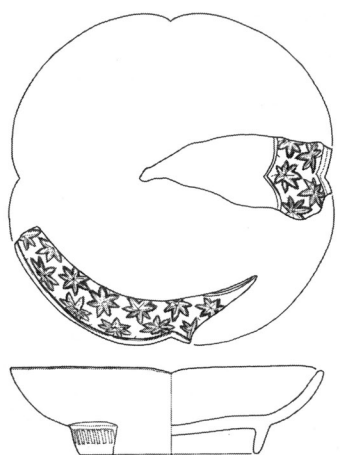
0 10cm



第65图 磁器皿類(6)

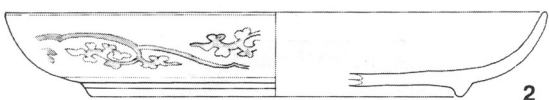
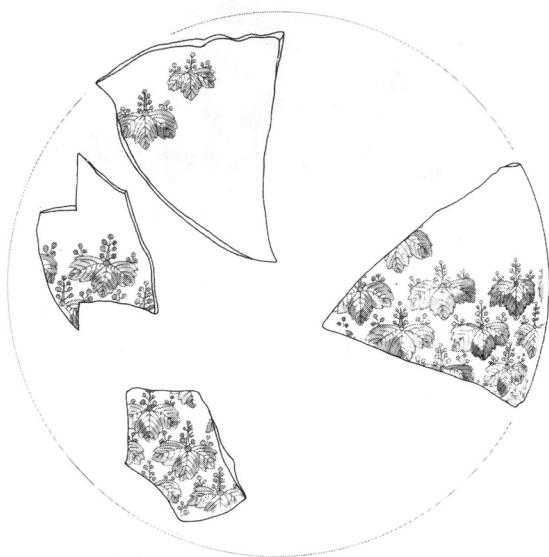


第66图 磁器皿類(7)

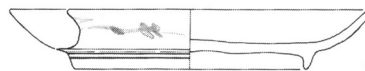


0 10cm

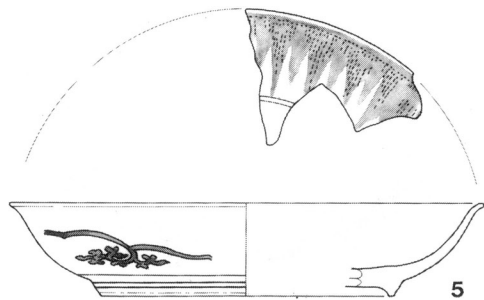
3



2

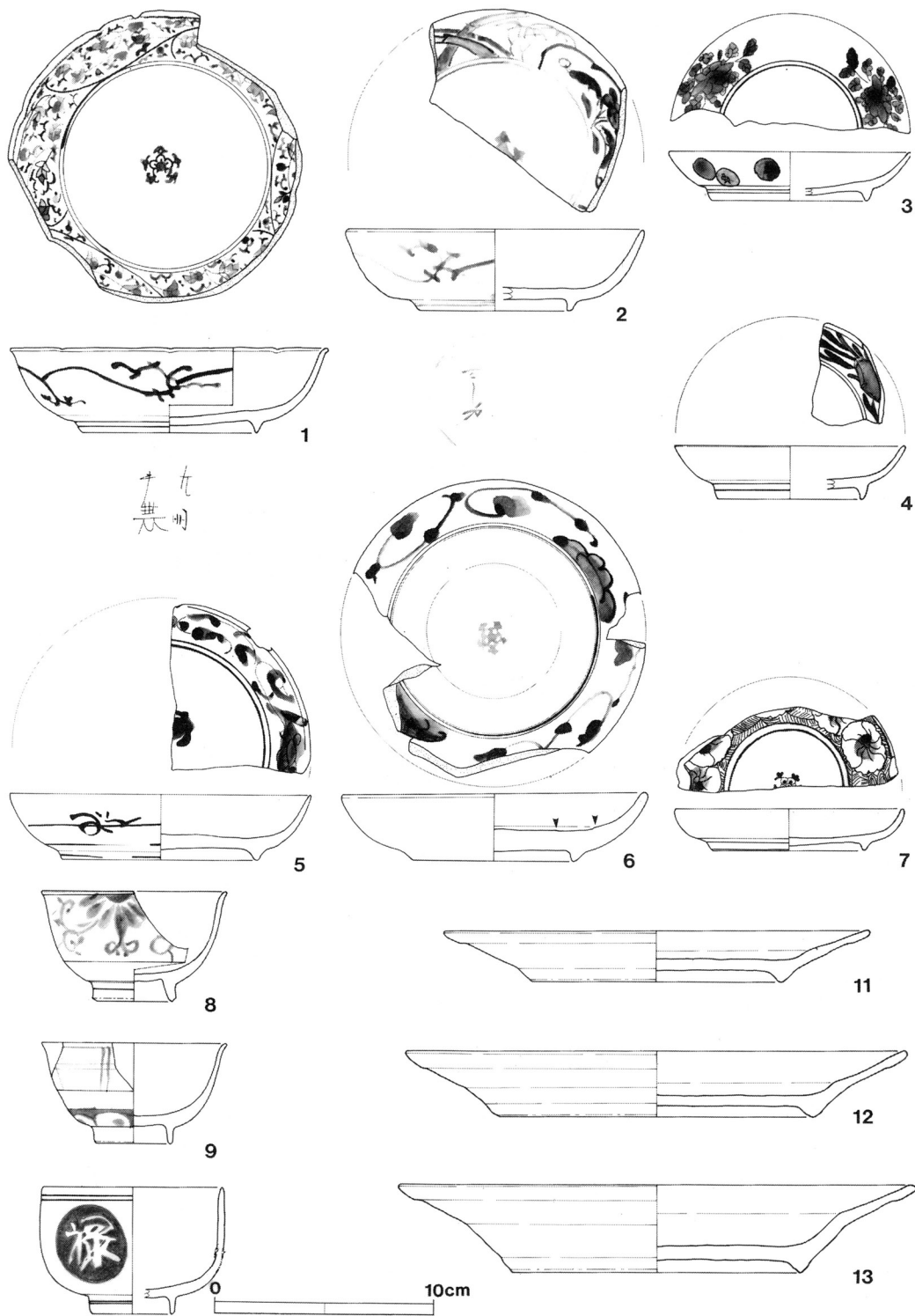


4



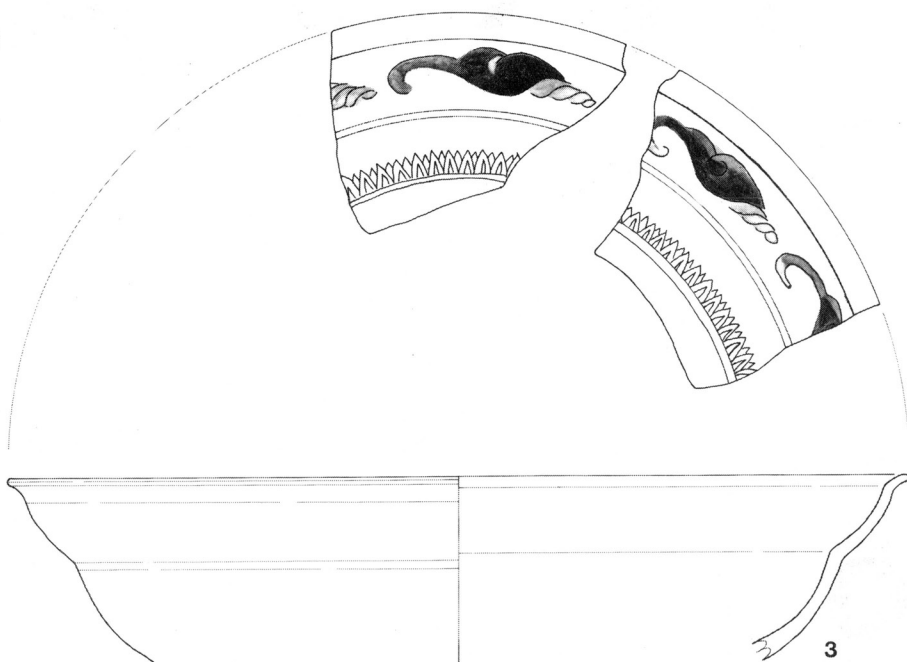
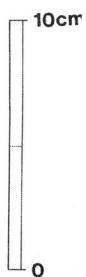
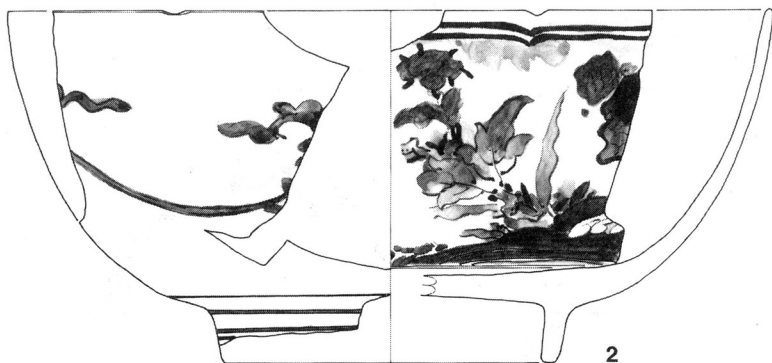
5

第67図 磁器皿類(8)

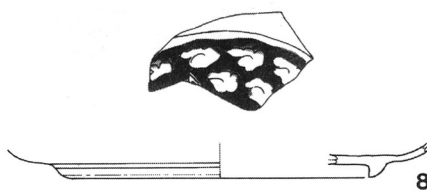
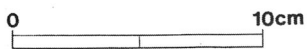
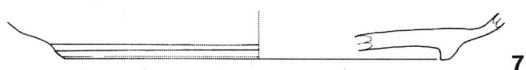
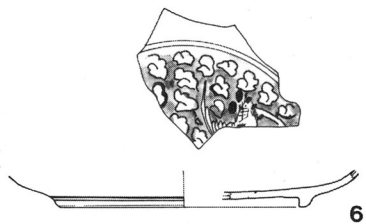
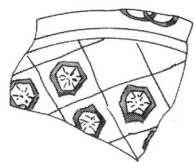
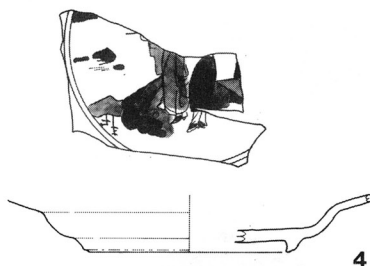
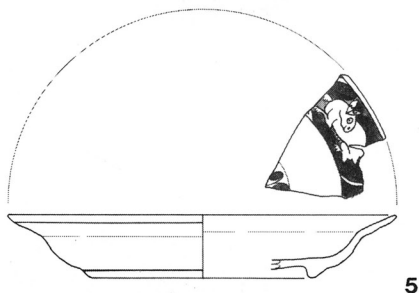
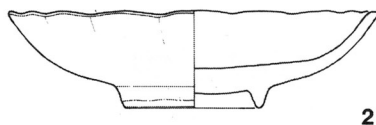
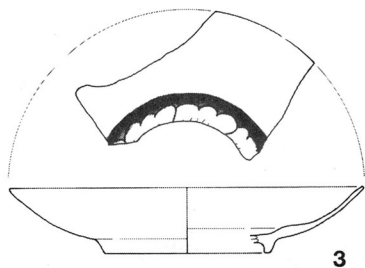
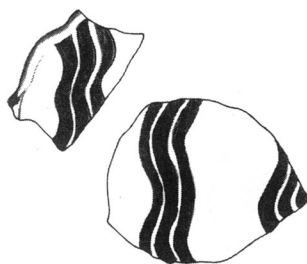
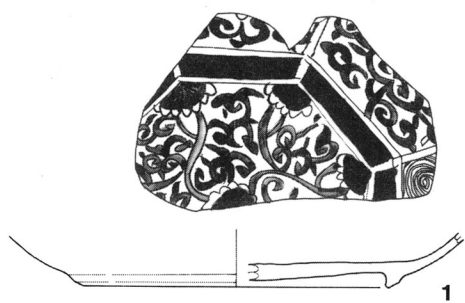


七
 井
 州

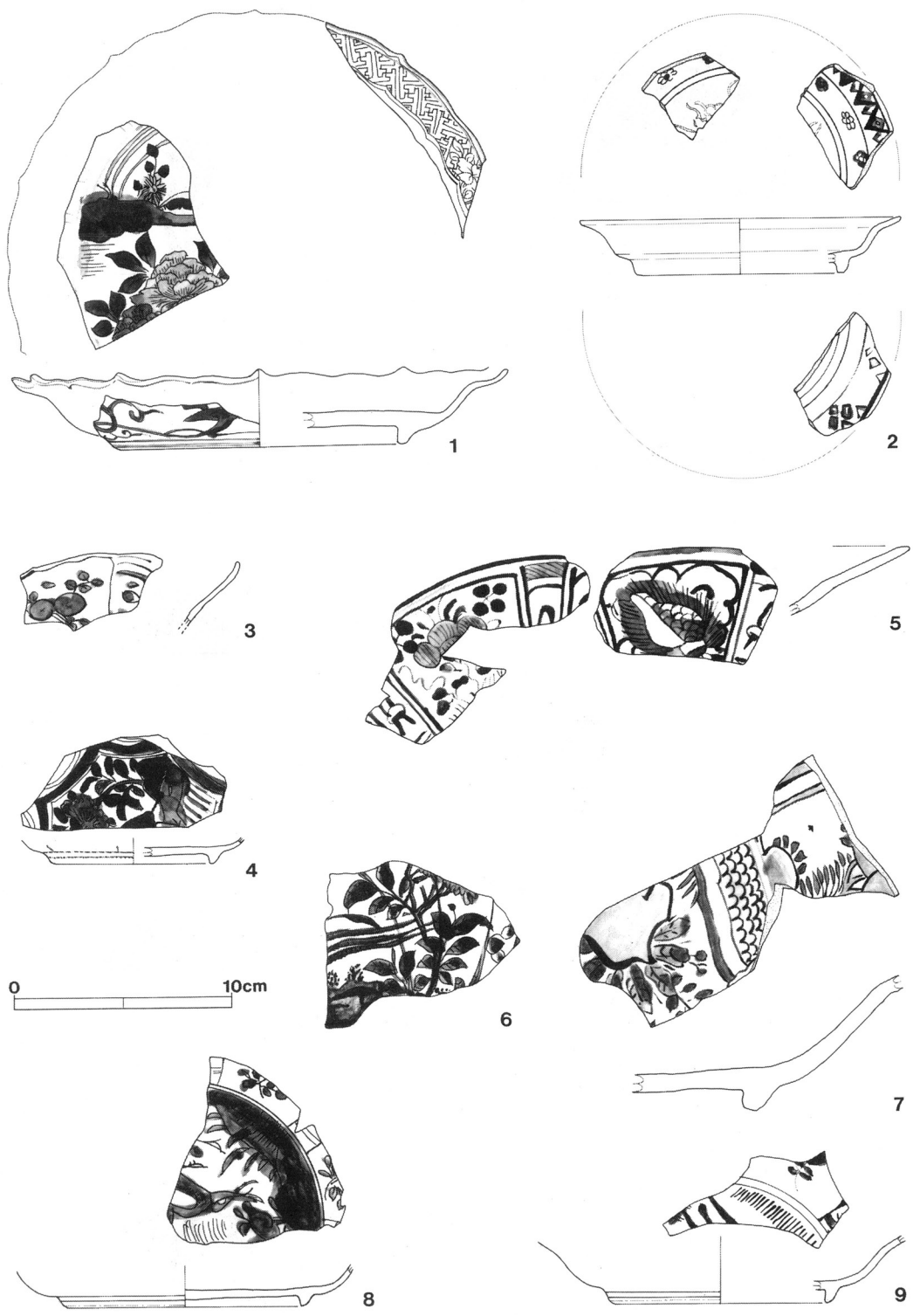
第68図 磁器皿類(9)



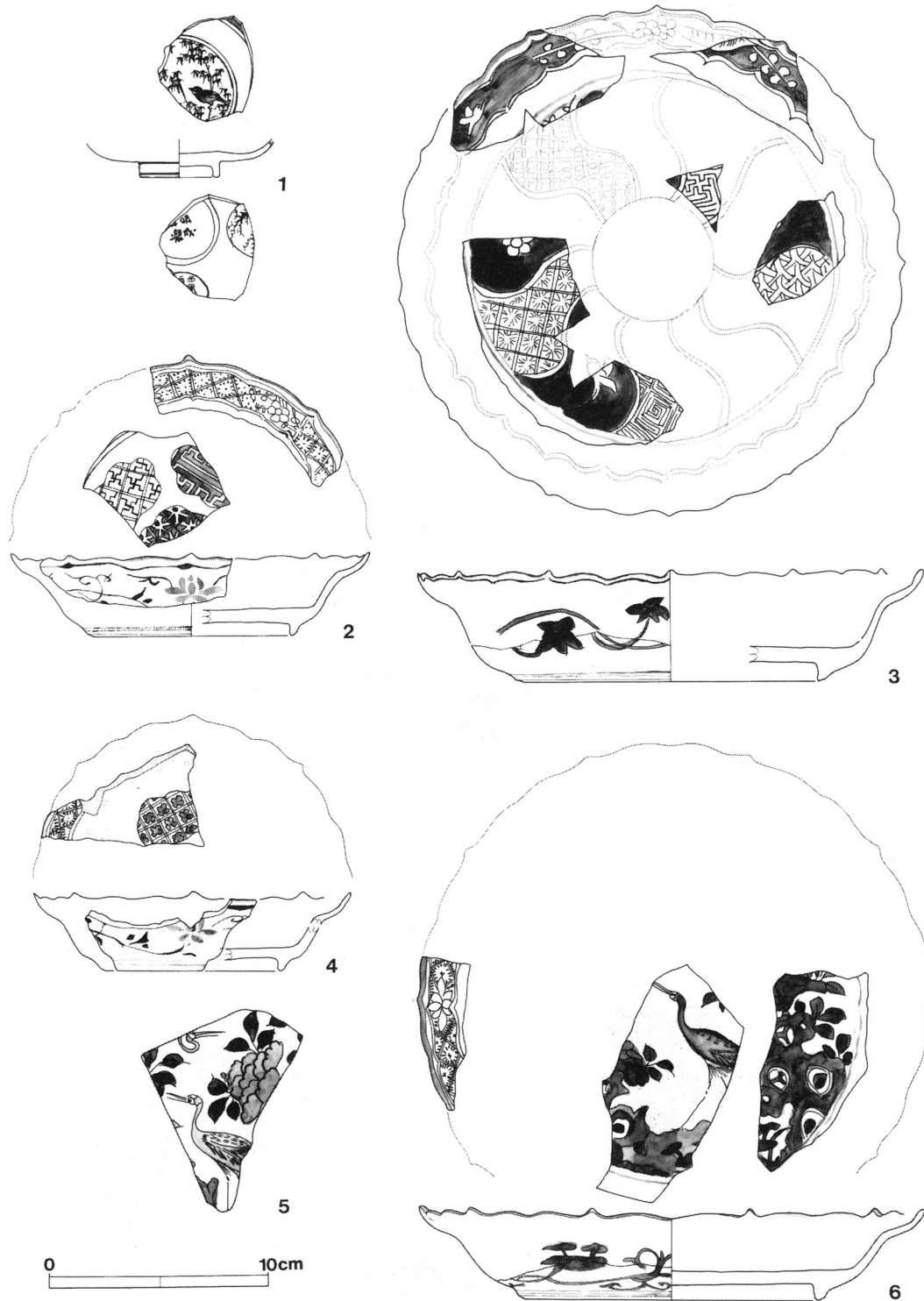
第69図 磁器鉢類



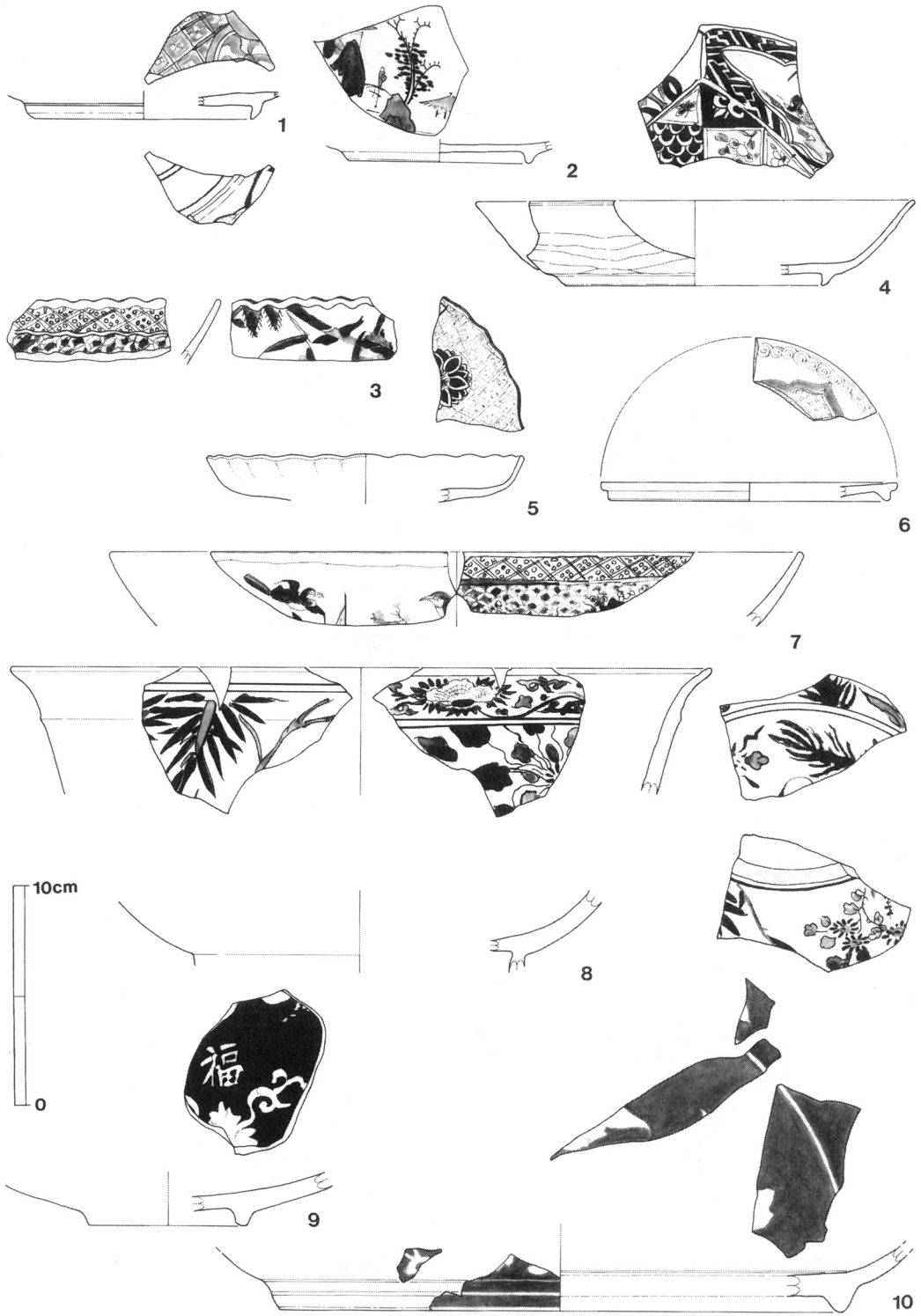
第70図 磁器皿類(10)



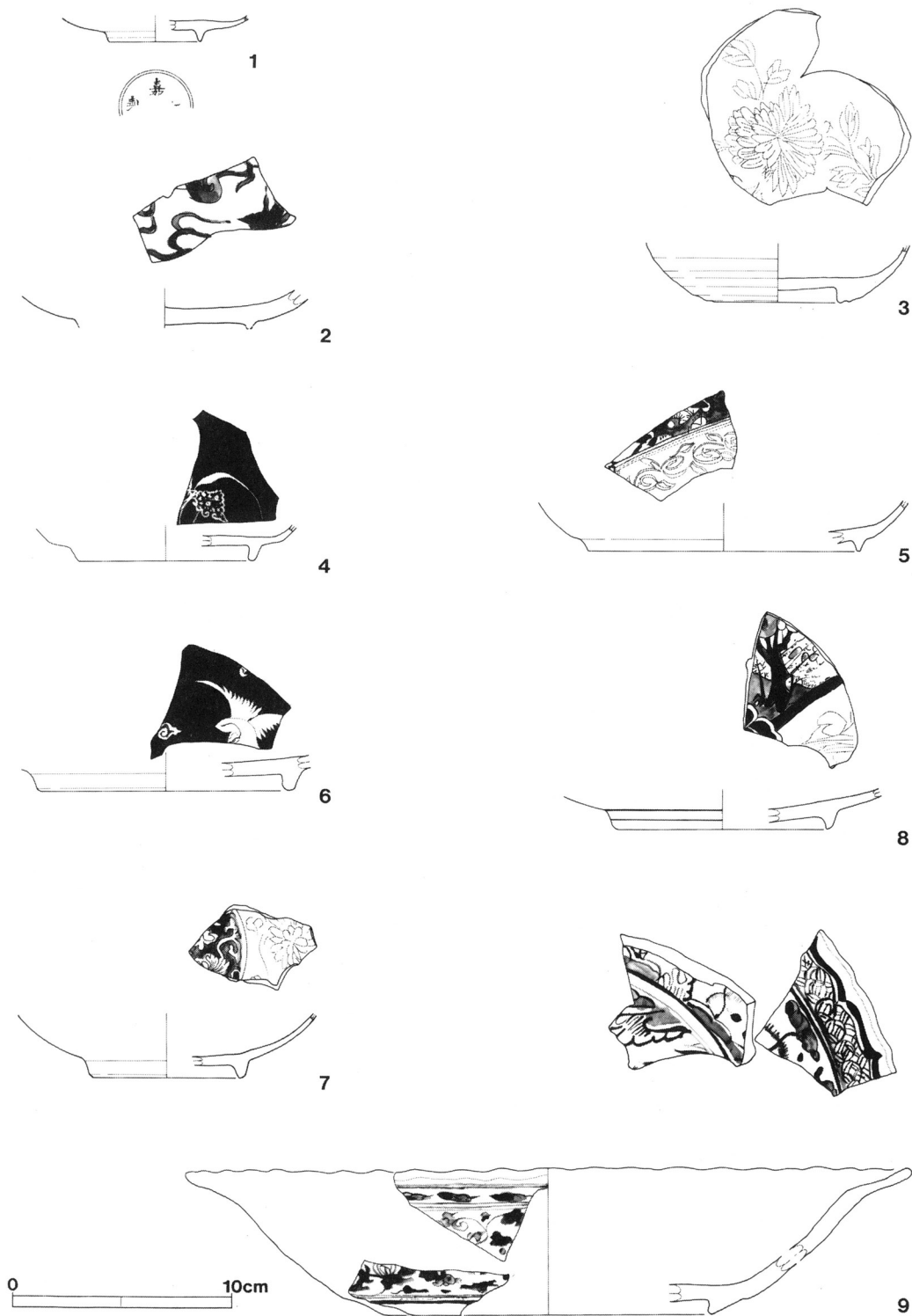
第71図 磁器皿類(11)



第72図 磁器皿類(12)



第73図 磁器皿類(13)



第74図 磁器皿類(14)

3. 蓋物 (第59図)

蓋と蓋物を一括する。磁器では1・2・5は壺類の蓋である。3は端反り碗の蓋であろう。4・10・11は高台形のつまみを持つタイプで、13は細長いつまみを貼付するタイプである。12は香合の蓋で肥前の製品ではない。新しい時期のものであると思われる。17は蓋と身があう唯一の例で御殿下記念館地点出土分を含めて3個体以上のセットものである。陶器類の内、6は縁を丁寧に仕上げたあまり見ないタイプで鉢形の身が伴うであろうと思われる。その他は壺、水差しの蓋である。

4. 磁器皿, 鉢 (第60~74図)

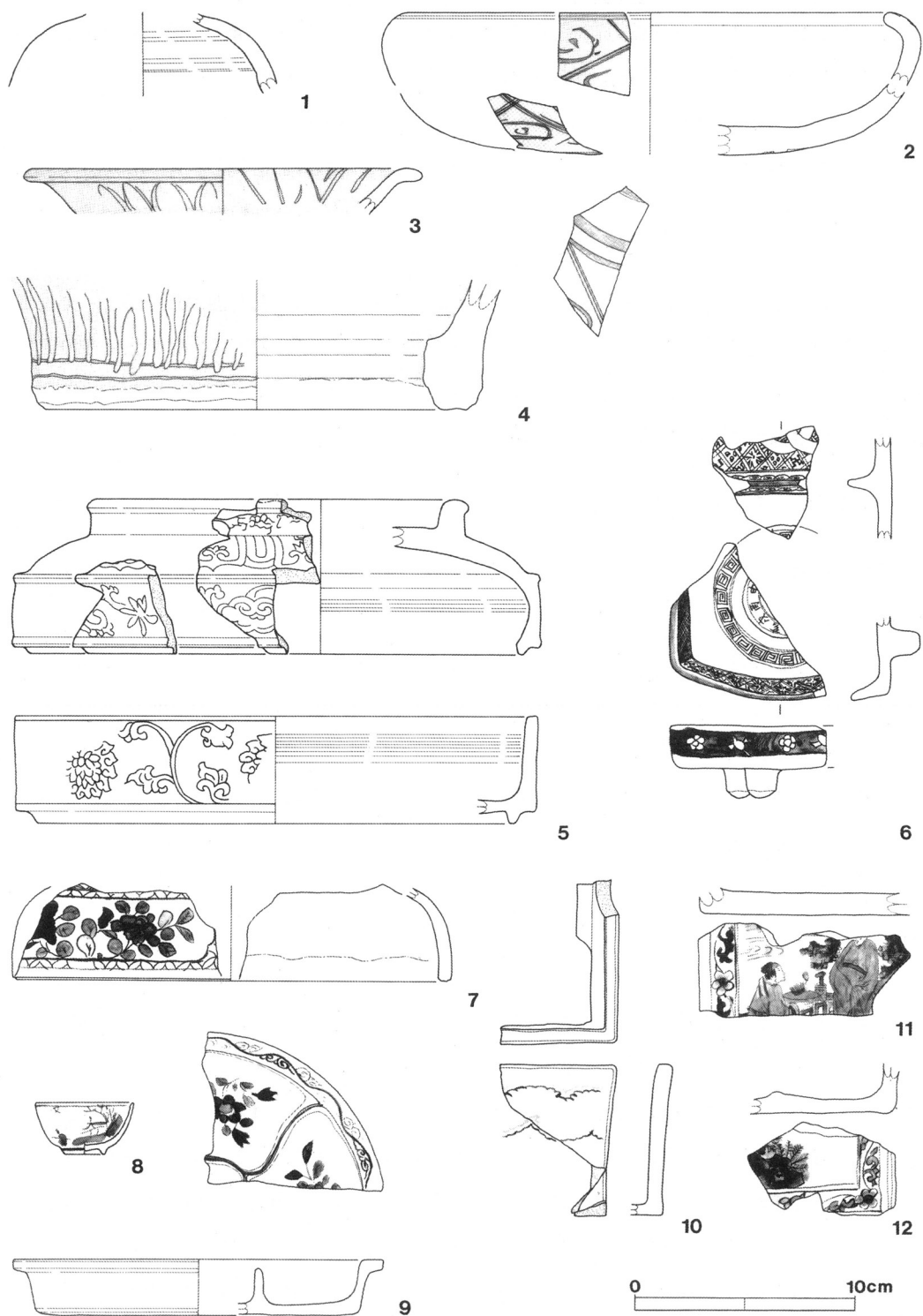
国産磁器は碗類と同じく17世紀後半から18世紀初めに属する製品が多い。17世紀前半に属する製品も少量出土している。また一部の破片のため図示しなかったが、山辺田1号窯のタイプの大皿類も出土している。第60図2は口縁部に鉄釉が塗られていたことが、わずかに残った部分でわかる。山小屋1号窯に同種製品がある。第60図5は口唇部がほとんど残っていないため全形がわからないが、17世紀中葉に属する優品である。3は銘が一部見えているが、該当するものに思い当たらない。高台内側に沈線が一条巡っている。第61図3, 5は同種の文様を持ち大きさの異なる皿である。セット物であろうか。4は見込み部分がわずかにくぼみ、おそらく高台の高さより低い口縁部の立ち上がりを持つ比較的珍しい器形の皿である。御殿下記念館地点I期の532号遺構から同一製品が出土している。セット物であろう。第62図1・2は見込みの文様が異なり、口縁の文様が同じの皿である。長吉谷窯の段階であろう。1は流水と鳥、2は梅樹を配する。第63図2は93号遺構出土の大皿類では唯一の輪花皿である。例の稀な銘を持つ。第65図1の色絵輪花皿は外面の山形部分と花に黄色、葉などに青、緑を用いている。3は陽刻の白磁である。横たわる人物、魚、樹などがみえるが、テーマが判然としない。大橋康二氏の御教示によれば二十四孝の一つではないかということである。見込みの陽刻が同じでありながら高台高、口縁部形態が異なる個体が数個出土している。第66図4は接合しないため、大きな矛盾のないように口縁を並べてあるだけであり、確定した文様構成ではない。写真42-2は底部がないが、複数個体分出土している深めの輪花皿である。器壁が薄く仕上げられている。第67図に示した染付皿はいずれも複数個体出土しているセット物である。第68図8以降は近代の磁器である。11~13は燕楽軒の3種の洋食器である。

舶載磁器皿は破片数は多いが、大型の器形はあまりない。明代末から清代にかけての製品がほとんどである。第71図に芙蓉手皿をまとめたが、そのうち5は国産である。6は舶載芙蓉手皿の底部片である。7程度の大きさの大皿であろう。1・第72図2~6は同趣の祥瑞皿である。

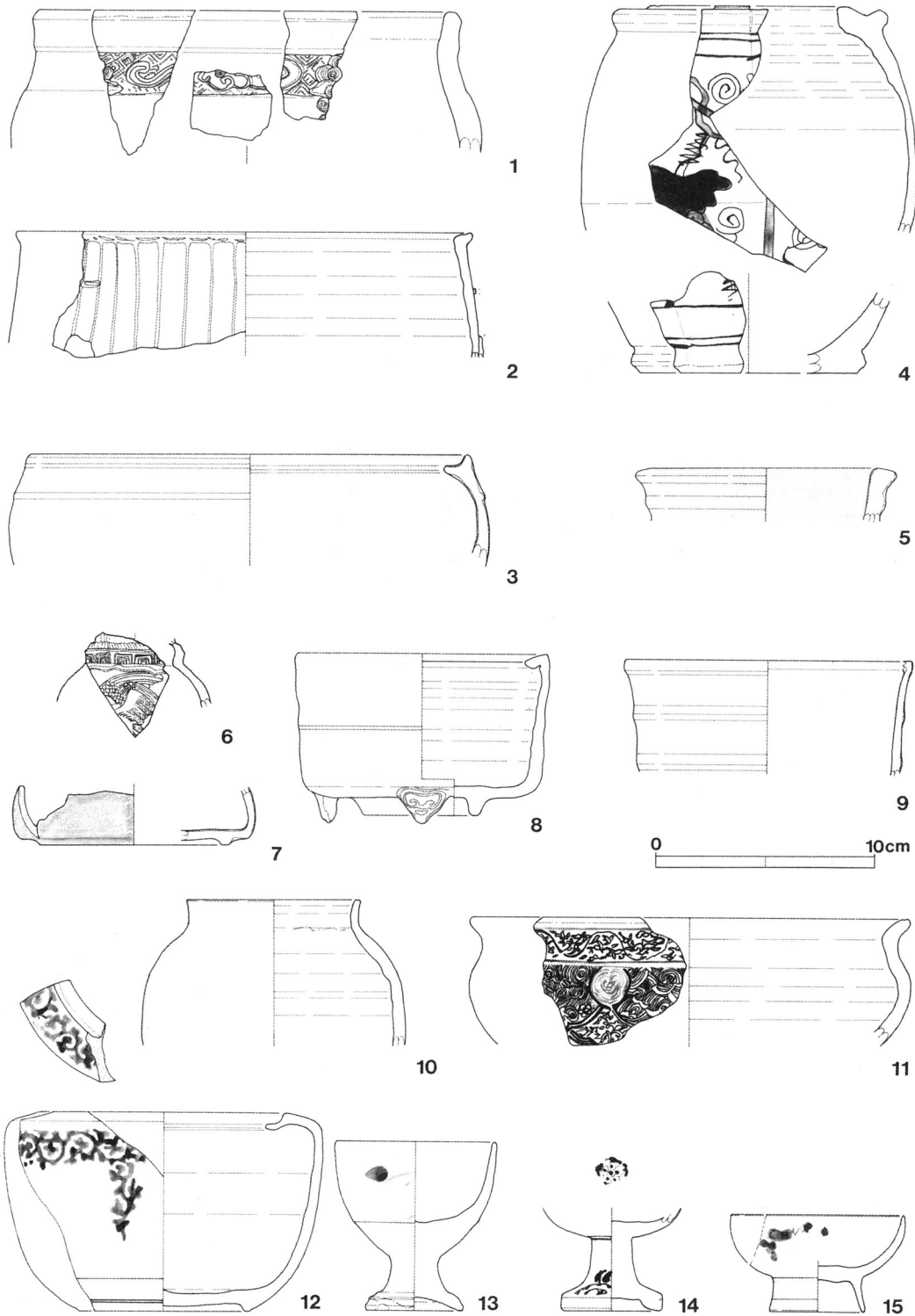
呉須が独特の鮮やかな発色をしている。3は同一個体と思われる破片から文様を復元したが、誤りがあるかもしれない。第73図に色絵皿を示した。5と同じ器形で童子を描くものも出土している。8は他の色絵とは異質な印象を受ける皿である。御殿下記念館地点で出土している同一個体と思われる底部破片をみると、高台脚部内側下半の釉を削りとっている。内面の文様のかなりの部分が赤褐色になっているが、もともとは外面の葉と同じく銅を使ったコバルトブルーを呈していたようである。9・10は瑠璃釉白花の皿である。9は瑠璃釉上に白泥をのせているために文様部分が盛り上がっている。10については後節で詳述する。第74図2は外面瑠璃釉、内面染付となっている。1は黄釉で高台裏面は透明釉で呉須で銘が書かれている。4・6には吹墨の技法が使われている。3・5・7・8は陰刻のされているもの。5は太く削り込んでおり、7の細い刻線と対称的である。9は釉が厚目で全体にやや暗い色調の大皿である。写真47-7は中国南部産の陶胎染付である。

5. 磁器, その他 (第75・76図)

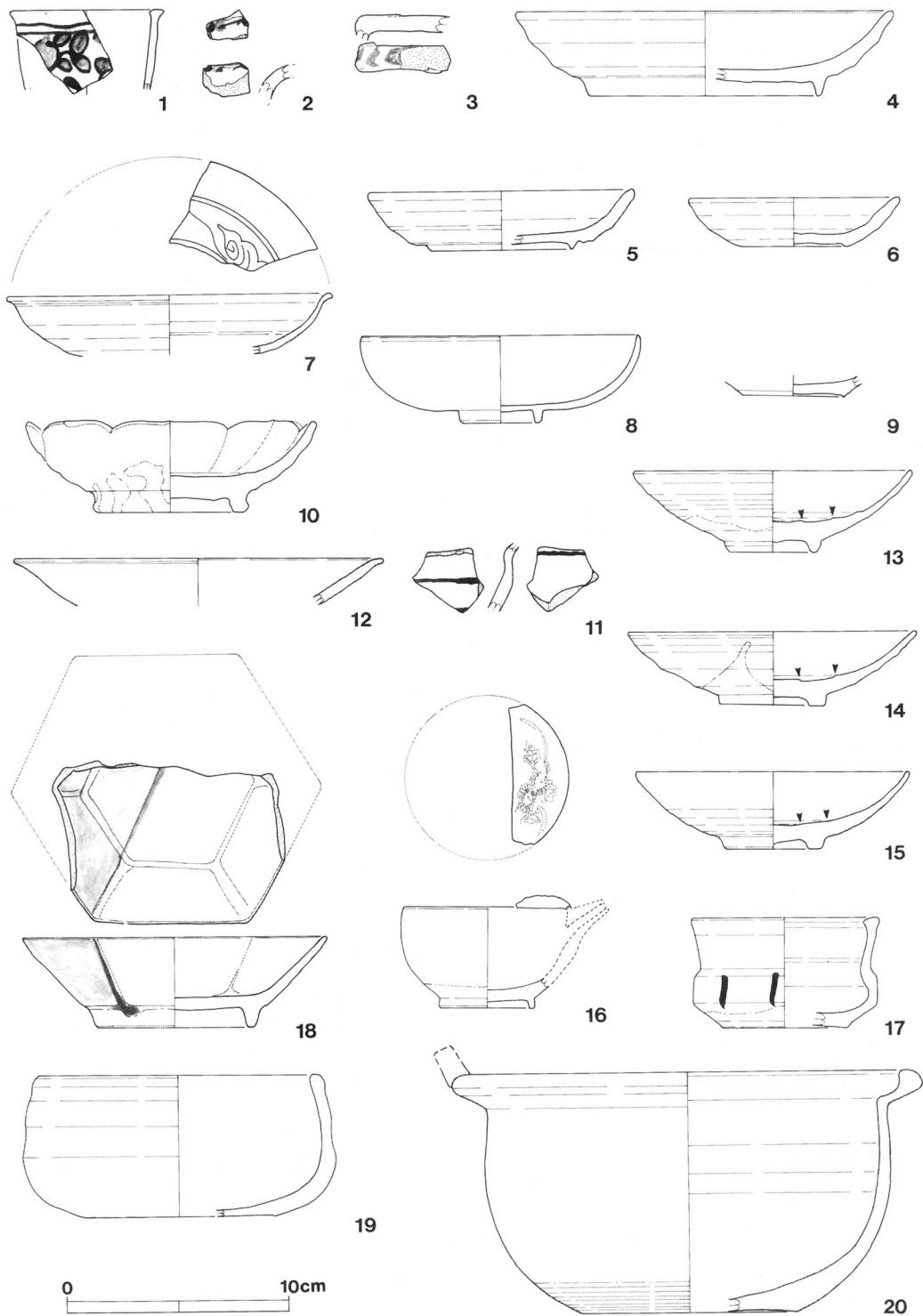
舶載の磁器にはそのほかに次のようなものがある。写真46-1は青磁の鉢の口縁部である。褐色の発色をしており、胎土も灰褐色である。第75図2は小さな高台型の底部がつくタイプの鉢である。付属病院中央診療棟地点に類例がある。3は連弁文の青磁碗である。写真46-6は香炉の一部である。文様部分は細い紐状の土を張り付けて作出している。同一個体と思われる屈曲部の破片が御殿下記念館地点で出土しており、共に示した。写真46-7は底部内面の砂の付着が著しい青磁皿である。第75図4は青磁壺の底部で、下部は鉄釉が施されている。5は多彩の蓋物である。蓋部分は御殿下記念館地点出土の破片と接合した。6は祥瑞手の向付けであろうか。大きい方の破片に脚が2本付けられている。7は明代の色絵の蓋である。写真47-2は同じく色絵の蓋物であるが、樗掛文の中心に透明感のある水色の顔料を用い螢手のような効果を出している。8は祥瑞手の小杯である。染付で釣り人などを描いている。9は果盒である。6つから8つの区画に区切られていたのであろう。11・12は全体の器形のわからない製品である。灰色がかった釉調で呉須がにじんだように見える。10は陶器であるが、11・12と同じく箱型を呈するので、ここに組み入れた。産地は不明である。第76図1は蓋物と思われる中国製品である。濃い藍色の釉が掛けられている。類例を知らない。2はしのぎのある器面に灰釉系の淡黄色の釉の掛かった製品である。精良な胎土を用いているが、陶器に分類すべきかも知れない。3・5は中国産の青磁である。5は淡青色の発色の香炉である。他の中国青磁に比べ釉厚は薄い。4は古染付で葡萄棚文様の芋頭水差しである。出光美術館などに類例がある。蓋は見つかっていない。9は黄褐色の釉を掛けた香炉と思われる中国磁器である。口唇部を欠く。11は口唇部の釉を拭き取った染付鉢で、呉須は祥瑞独特の鮮やかな発色をしている。



第75図 磁器, その他(1)



第76図 磁器, その他(2)



第77図 陶器皿，その他

6は鳥の陽刻のある白磁の壺である。国産であろう。以下の製品も肥前の製品である。7は瑠璃釉の袋物である。外面に文様の痕跡が白く残る。本来は赤かったと考えられる。8・10は共に青磁である。12は銚子の体部である。14は見込みに五弁花のある珍しい18世紀代の仏具である。15は脚付杯ともいうべき器形で、文様から17世紀後半代のものと考えられる。

6. 陶器皿 (第77図)

1～3はヨーロッパ製品である。後節で詳述する。4は志野織部皿である。鉄絵が描かれているが、欠損しているため見込みの図柄はわからない。5・6は志野皿である。I期の築山から出土した。7は施釉後、文様を刻み込んだ薄手の皿である。あまり類例をみない。9・11ともに、I期の築山から出土した。11は石英粒が比較的多い暗灰色の胎土で、灰釉上に銅緑で横走る文様を描く。井上喜久男氏によれば瀬戸ではないということであるが、他の産地は思い当たらない。12は三島手の皿である。舶載品である。13～15は見込み部分に輪状の釉剥ぎのある皿で13は染付である。18は掛け分けの皿で鉄釉の後灰釉を掛け、高台部分は釉を拭き取っている。

写真47-9は型で花卉状に器壁を成形した陶器皿で口唇を玉縁状に作る。底部が出土していないので全体の大きさは不明である。また器面に細かな起伏を施している。産地不明である。

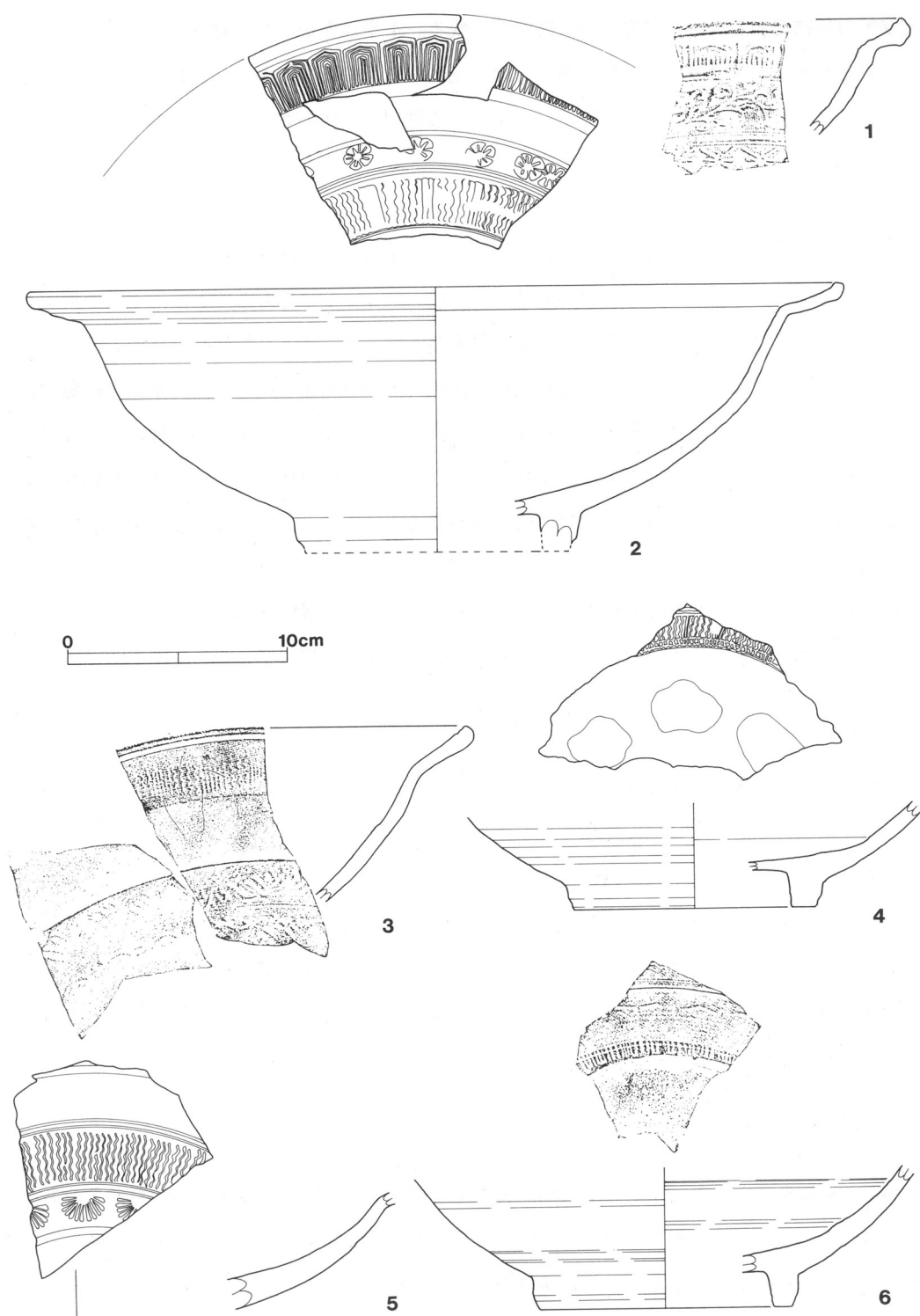
7. 陶器鉢 (第78・79図)

第78図に肥前の象眼の製品を示した。内面を3つないし4つの区画に分け印刻を施した後化粧土を埋め込む。5のみは丁寧な作りで文様部分も平滑に仕上げられている。ほとんどが円形の目痕を複数持つが、一団体のみ輪状になるものがある。

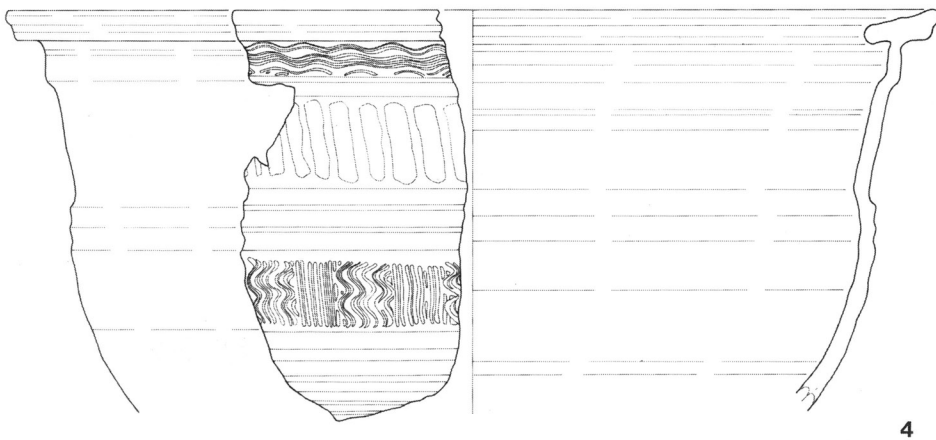
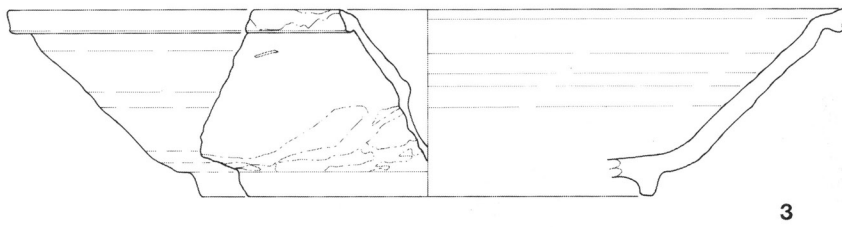
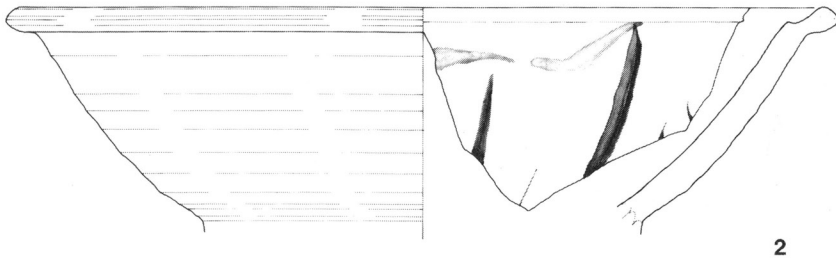
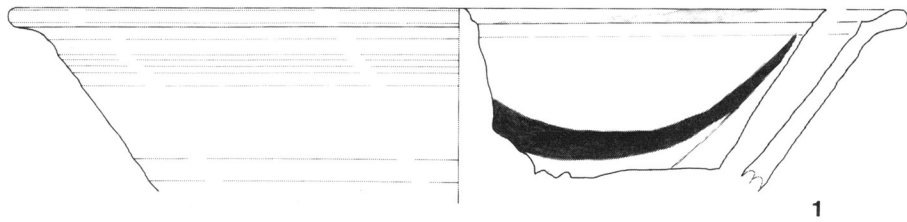
第79図1～3は瀬戸美濃産の鉢である。1と2は鉄絵と銅緑釉で内面を飾るタイプで、3は灰釉のみである。馬の目皿は出土していない。4と第84図3は九州産の鉢であろう。4は白泥で文様を描いた後に緑釉を掛けたものである。第84図3は錆釉上に白や緑の釉を掛けたもので、沈線文と獅子頭が対になっている。

8. 瓶類 (第80図)

陶器と磁器をまとめた。1から7は瀬戸美濃産の徳利である。完形品はない。釘書きのある破片も若干出土したが、釘書きの一部しか残っていないので図示しなかった。1は初期の築山から出土した古いタイプである。7は淡黄色の器面に鉄絵を描くもので、やはり古い築山から出土している。8は志戸呂の徳利で、釉は褐色に発色している。9・10は肥前の製品である。10は表面に灰がかっており、呉須は黒っぽく発色している。11は中国製の青磁瓶である。釉上

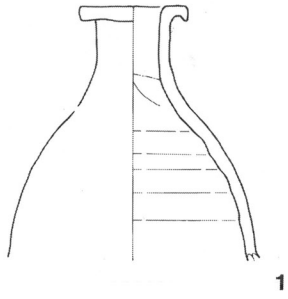


第78図 陶器鉢類(1)

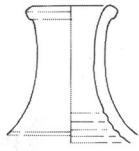


0 10cm

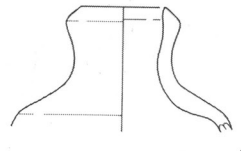
第79図 陶器鉢類(2)



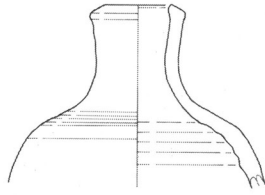
1



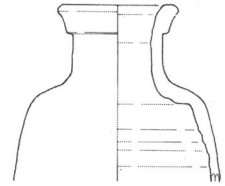
2



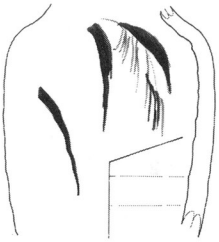
3



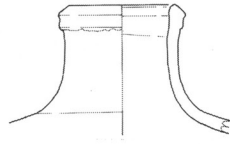
4



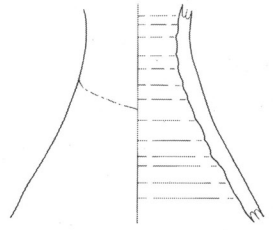
5



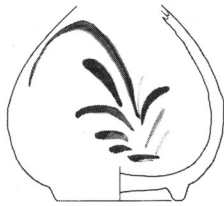
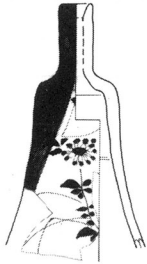
7



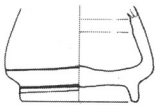
6



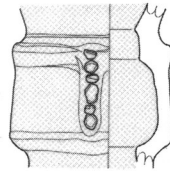
8



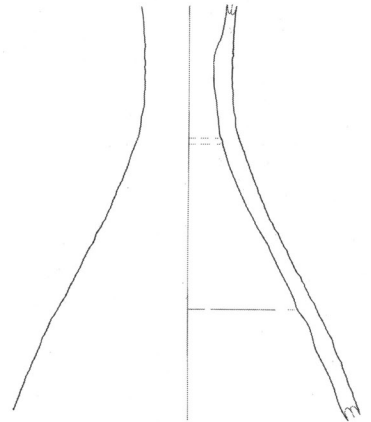
10



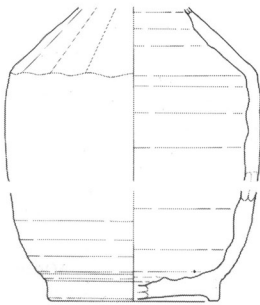
9



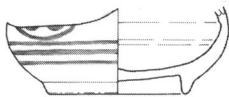
11



12



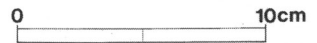
13



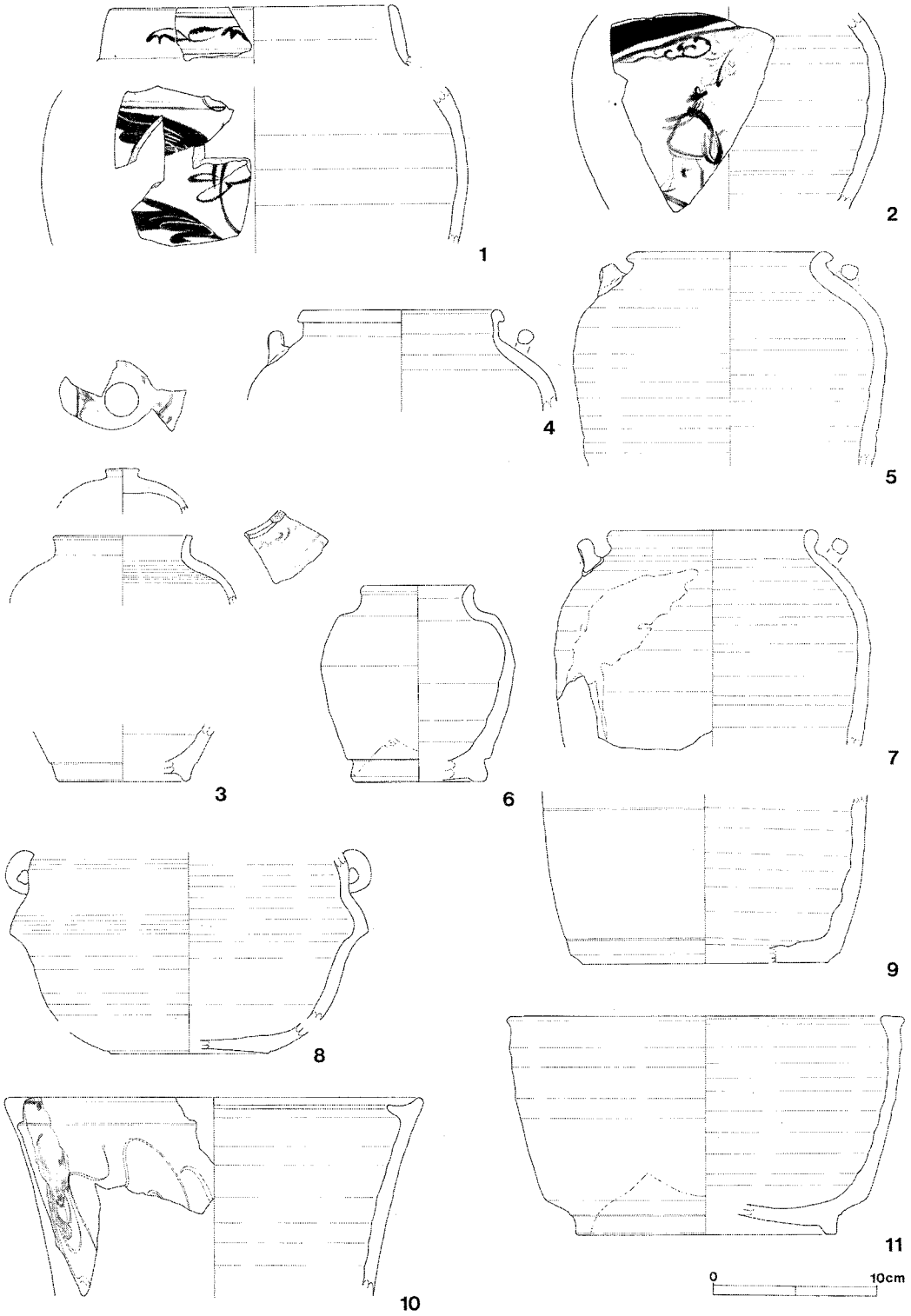
14



15



第80图 瓶類



第81図 陶器壺, その他

に径1ミリ程度の小さな穴がいくつか開けられており、そのうちの一つは鉄錆で覆われている。なんらかの金属の飾りを取り付けたものであろうか。12は李朝の刷毛目文の瓶である。首のあたりに指の跡が残る。13は瀬戸美濃製の瓶で内面も釉が掛けられている。14は肥前製の赤絵の油壺である。15は中国製の大型の瓶で破片の上部割れ口は製作時の接合部にあたり、断面は中央が盛り上がった凸の字状を呈する。

写真46-10・11は高麗青磁の梅瓶である。香本不苦治氏より13世紀のものという御教示を戴いた。今のところ当地の輸入陶磁器では最も古い。

9. 陶器, その他 (第75・77・81図)

第75図1 (巻頭写真H-5) は袋物かと思われる。赤褐色の粒子の細かい胎土で内面にろくろ目が見られる。一度白の化粧土を塗った後に藍や青の釉を施しているようである。産地不明である。巻頭写真H-4も同様の技法を用いた皿もしくは鉢の底部である。

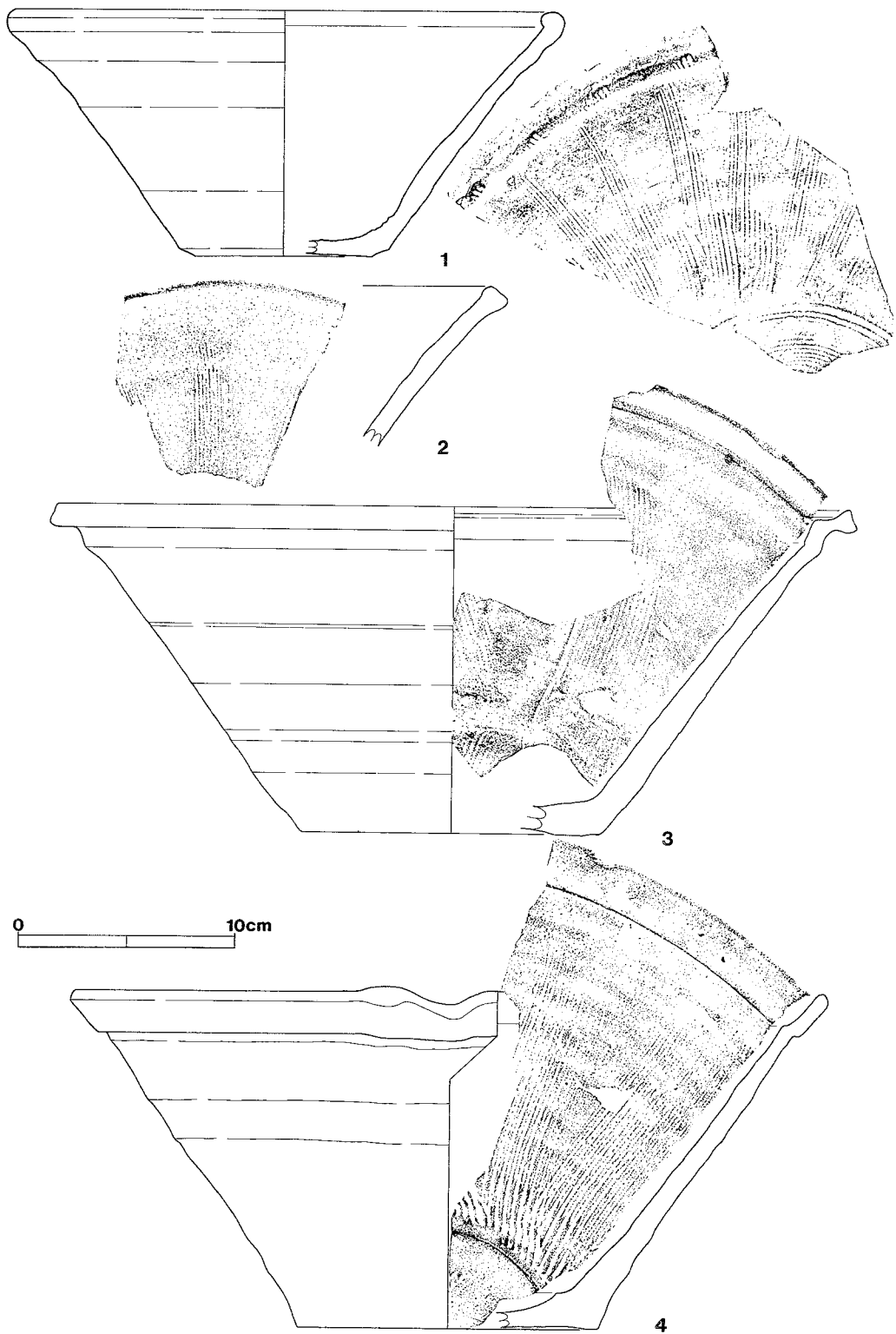
第77図16は水飲み, 17は香炉である。20は鉄釉を掛けた土鍋で底面の断面を観察すると、この部分には炭素が吸着し、付近の胎土は明褐色を呈する。胴上部の胎土は灰褐色である。これらは瀬戸美濃製品であろう。

第81図1～5・7は壺である。1・2は鉄絵を描くものでそれぞれ磁州窯, 吉州窯の製品と考えられる。1は裏面にも褐色の釉がかけられているが, 2は還元炎焼成の灰色の露胎である。3は肥前の染付壺, 4は信楽産と思われる。他は瀬戸美濃産であろう。

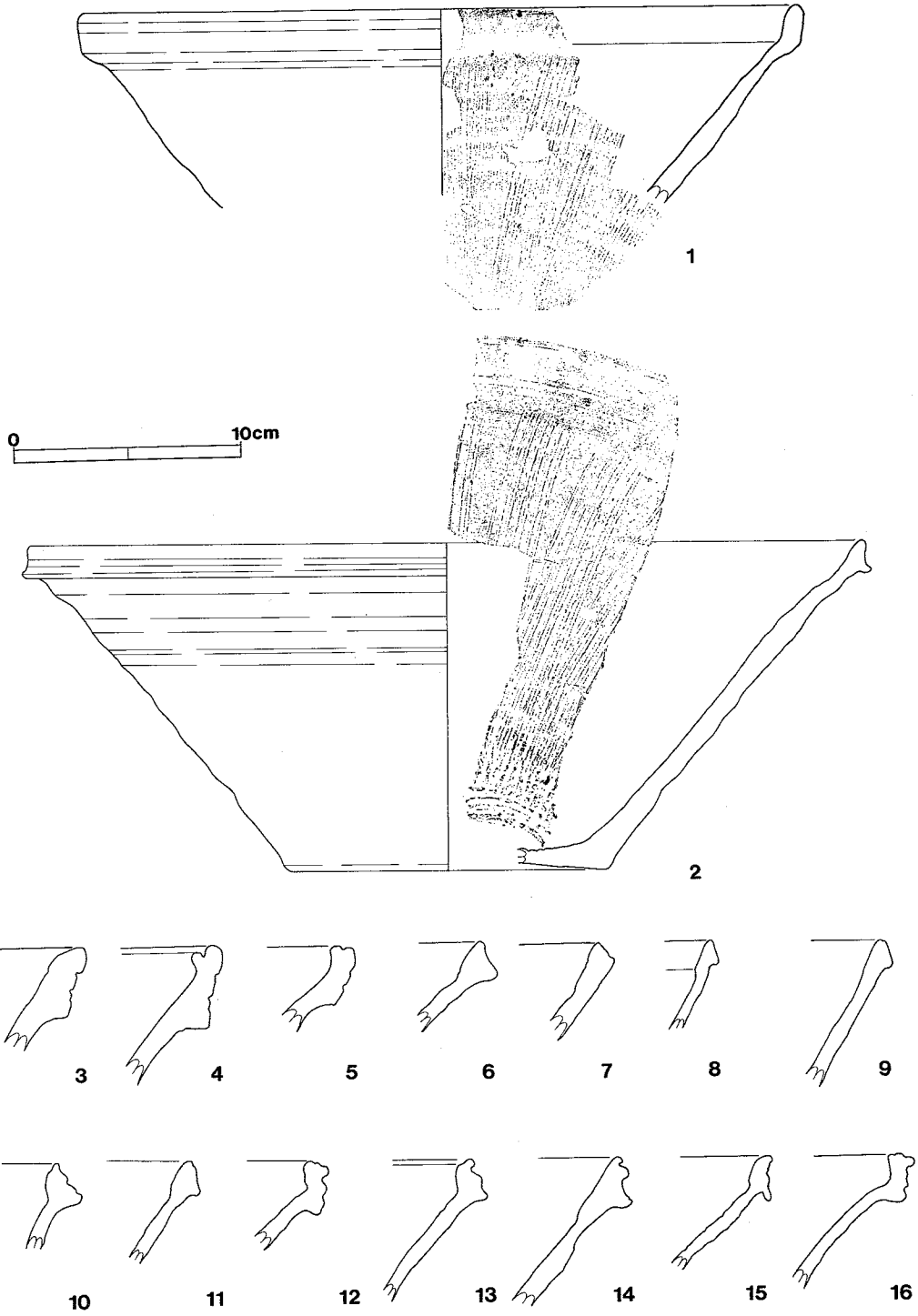
8は錆釉のかかった瀬戸美濃産の茶釜である。10は瀬戸美濃産の水甕で2, 3個体分の出土を見た。

10. 摺鉢 (第82～84図)

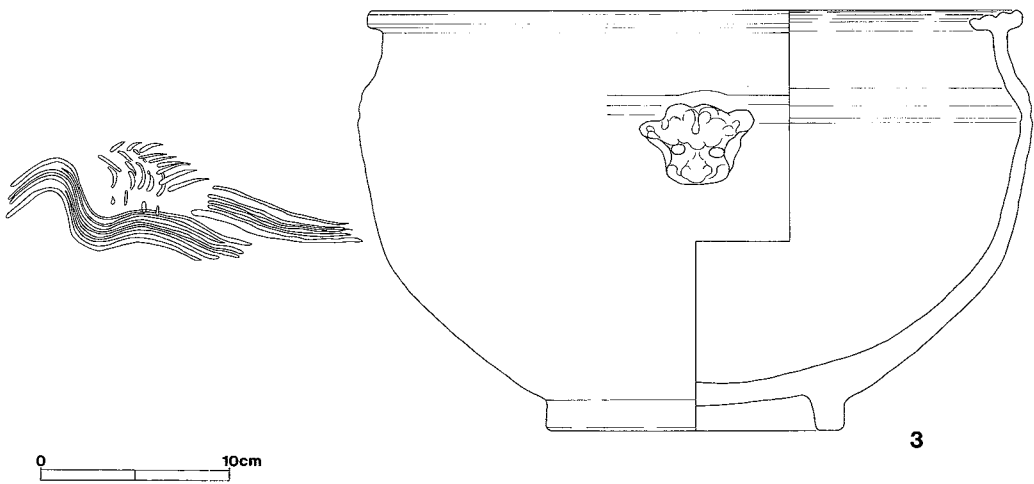
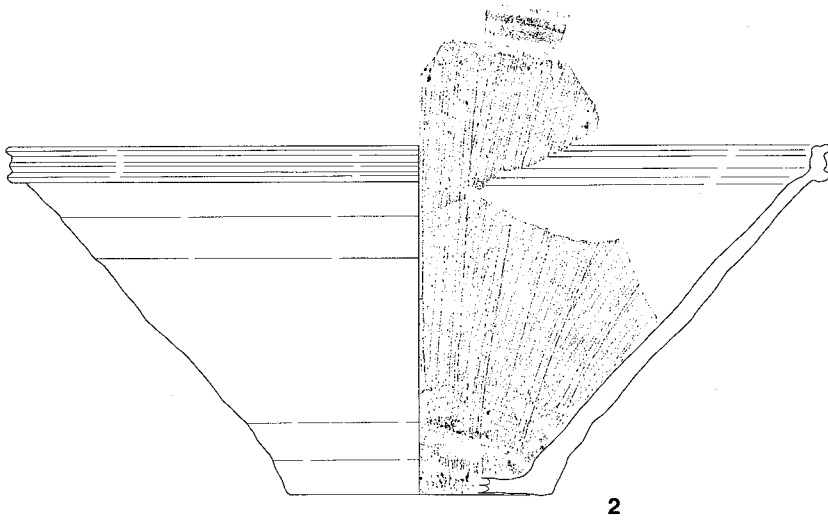
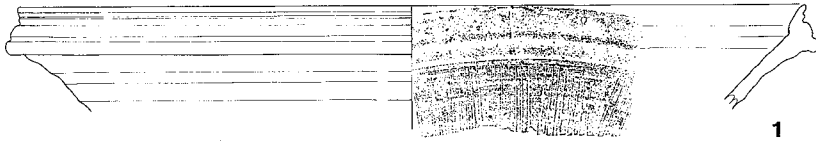
観察表のうち、回転とは櫛目をつけた方向である。第82図1は瀬戸美濃産の摺鉢で後の一般的なものとは異なり、胎土は灰色で硬質である。2は口唇部形態と櫛目が密である点特徴的であるが、今のところ産地不明である。3・4はそれぞれ口唇部の形態は異なるが、瀬戸美濃産の摺鉢である。第83図1・2, 第84図1・2は丹波信楽系の摺鉢である。また第83図3～16に破片の断面を示した。3～5は堺系摺鉢, その他は丹波信楽系摺鉢の口縁部である。7は古いタイプであろう。全体の量からみると、丹波信楽系の摺鉢が多く、次いで瀬戸美濃系, 堺系となる。丹波信楽系摺鉢では櫛目の数は7本が圧倒的で、6本がそれに次ぎ、5本, 8本, 9本は少数である。6本のは口唇部形態が第83図10のように外側に2本の溝があり、上端に16のような平らな部分を持たないタイプが殆どであった。逆に7本のもものでは8割近くが16のようなタイプの口唇であった。また堺系では11本が主で、瀬戸美濃系では10本から17本とさら



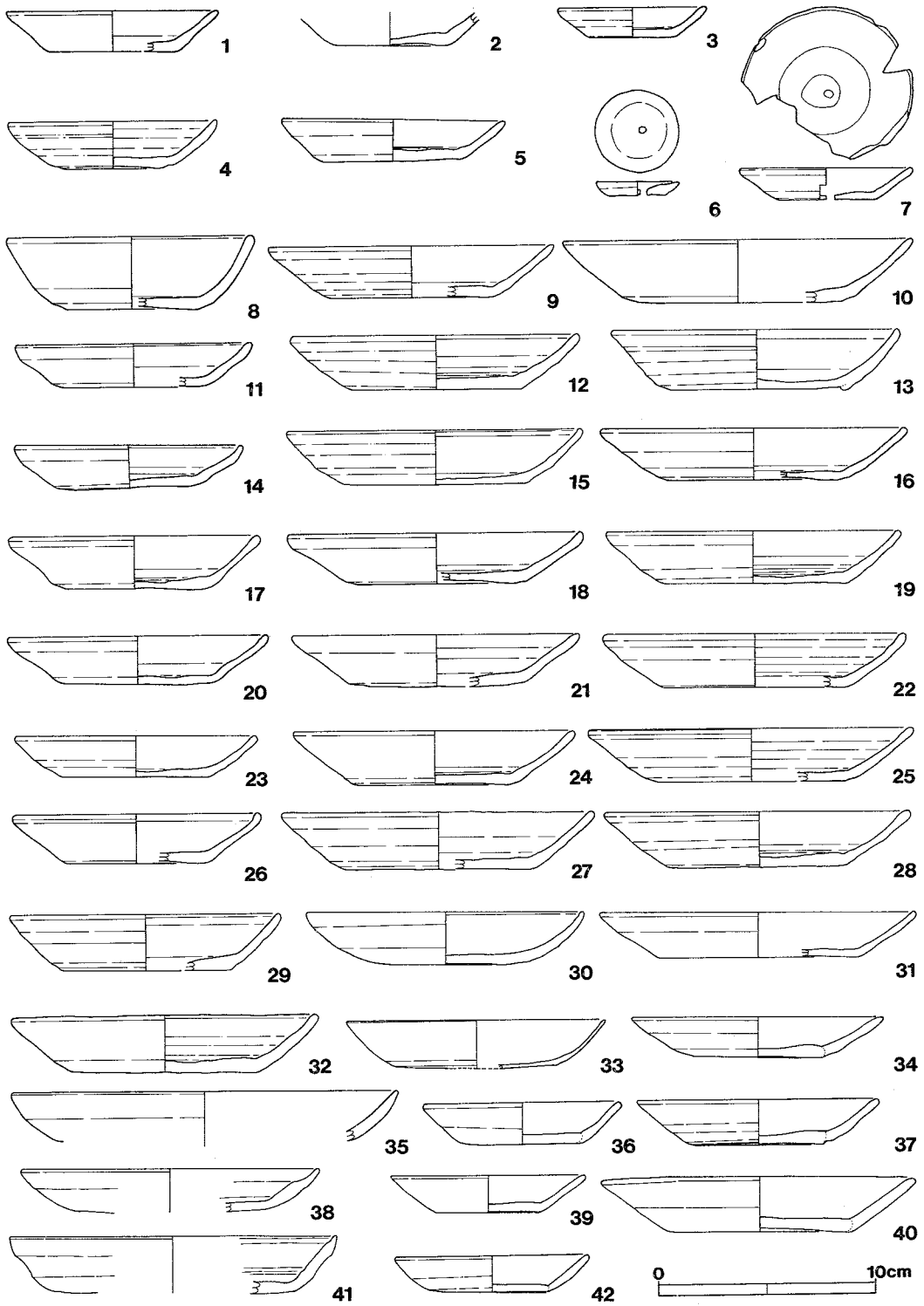
第82図 摺鉢(1)



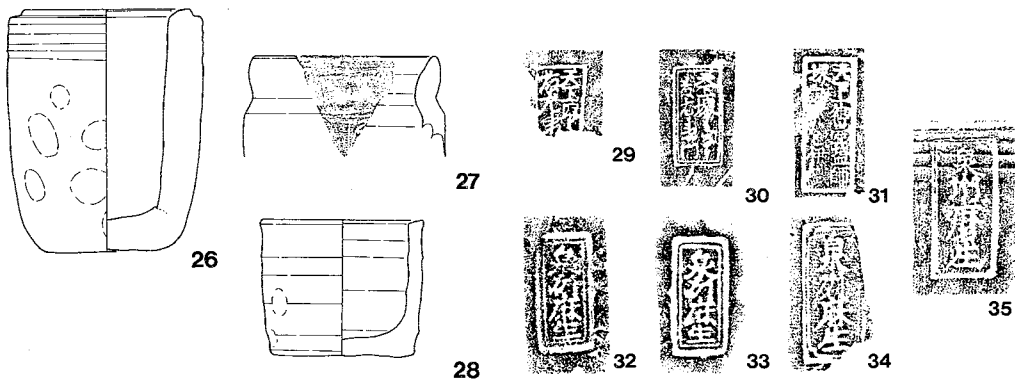
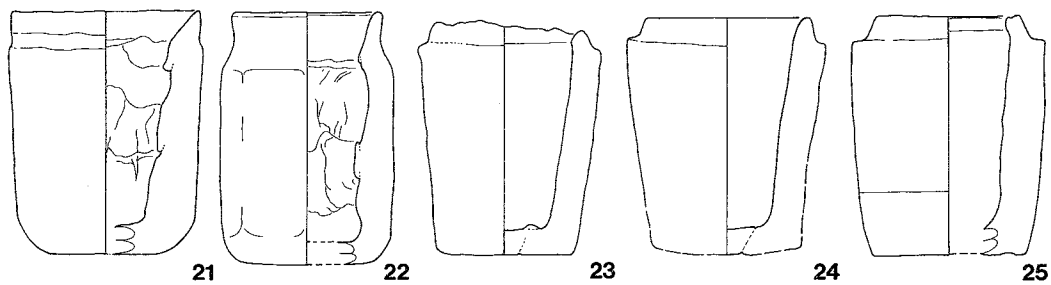
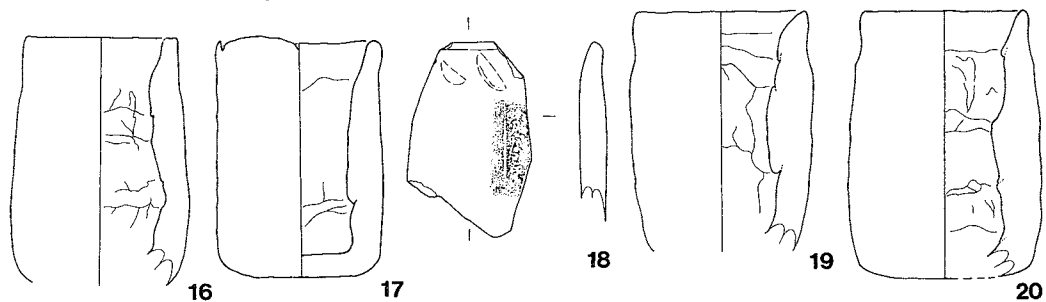
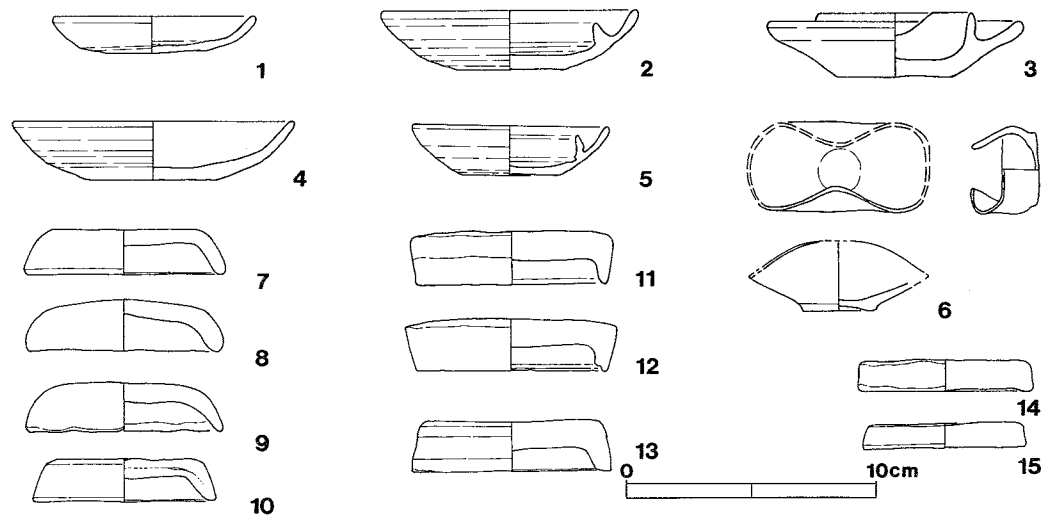
第83図 摺鉢(2)



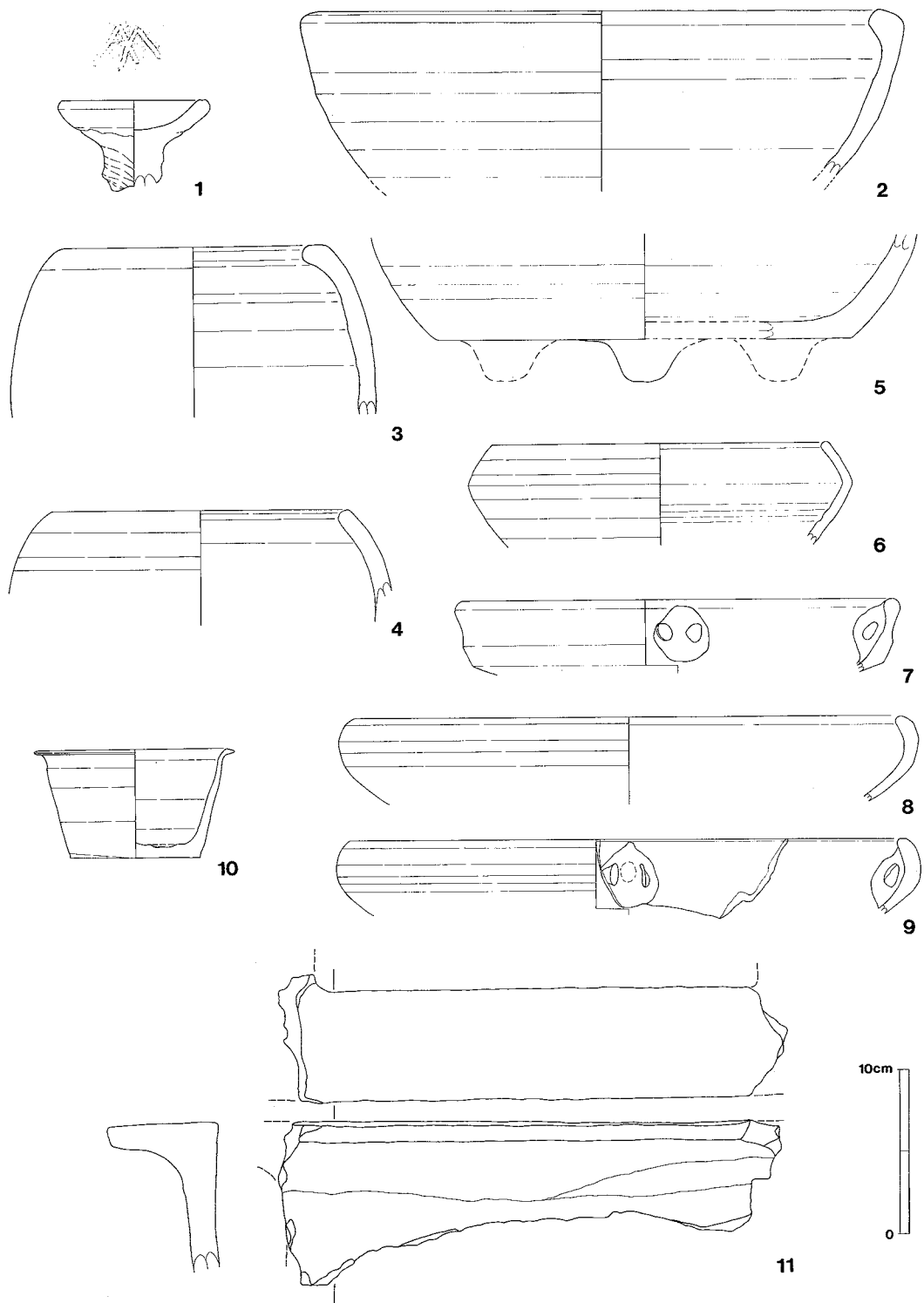
第84図 摺鉢(3), その他



第85図 かわらけ類



第86図 土物類(1) (拓影1/2)



第87図 土物類(2)

に多くなり、ばらつきがある。櫛目の数と幅を計測し比を取ってみたが、ほぼ比例し、おおむね1：2.5から1：3.5の範囲に入る。第82図2のみは1：1.5となり極めて細かい。工具の材質が違う可能性も考える必要があるかも知れない。

11. かわらけ (第85図)

計測処理が出来るほどの量が出土しなかったため、概観を述べるに留める。墨書のある個体は出土していない。かなりの割合で煤や炭化物が付着している。8は底面に密な渦巻き文が施される上製のかわらけである。また34は見込み部分に円形の黒斑がある精製かわらけである。

型成形のタイプは白色の粘土を用いたものが多く、大型の砂粒を含む。炭化物の付着している個体もある。20数片出土したが、3号遺構からもっとも多く出土した。いずれも小さな破片で1/2以上残るものはない。

12. 土物 (第86・87図)

第86図1～5は陶器を含めた灯明具である。2は志戸呂の製品で、その他の陶器は瀬戸美濃産である。6の耳かわらけはこの地点では唯一出土したものである。

焼塩壺はかなりの破片が出土したが法量を知ることができる個体が非常に少ない。口縁から底部まで残る資料のみ図示した。27は小片であるために焼塩壺かどうか確実ではない。判読できないがわずかに見える文字は深く刻み込まれており、印の圧痕ではないように思われる。板作りの焼塩壺は内面に布の圧痕があり、通常は縫い目が認められるが、当て布を裏返しに使ったのか、縫い目ではなく1条の隆起線状の圧痕が残されている。

先に述べたように大型の土物類は出土量が少なく、完形で図示できるものがない。第87図1は受け部分にやや先の尖った工具で記号を刻んだ瓦燈の一部である。6は硬質で叩き目が外面に残り、江戸在地系土器ではないようである。御殿下記念館地点の192号遺構で出土したような口縁に格子目の圧痕文のあるほうろくも出土している。

第1表 陶磁器観察表

| 挿図番号 | 写真 | 種類 | 遺構 | 特 徴 |
|--------|--------|----|-----|---------------------------|
| 第56図-1 | 35-1 | 磁器 | 105 | 口縁部は歪んで楕円形を呈す。 |
| 第56図2 | | 磁器 | 105 | 外面には陰刻を施す。 |
| 第56図3 | 35-2 | 磁器 | | 高台内二重圏線 |
| 第56図4 | 35-4 | 磁器 | 4 | 口縁2重線, 高台内一重 |
| 第56図5 | | 磁器 | 3 | 高台内一重, 「宣」 |
| 第56図6 | 35-3 | 磁器 | 34 | 雪輪, 三友, 高台内一重 |
| 第56図7 | | 磁器 | 4 | 楓, 高台内一重 |
| 第56図8 | | 磁器 | 126 | 高台部三重圏線 |
| 第56図9 | 35-5 | 磁器 | 142 | 花文, 唐草文, 高台内一重圏線, 釉切れ部分あり |
| 第56図10 | | 磁器 | 3 | |
| 第56図11 | 35-6 | 磁器 | | 梅鉢文 |
| 第56図12 | | 磁器 | | 型紙 |
| 第56図13 | | 磁器 | | 発色不良 |
| 第56図14 | | 磁器 | | 梅樹, 高台内圏線 |
| 第56図15 | | 磁器 | | 矢羽, 底部厚い |
| 第56図16 | | 磁器 | | 焼けている, 高台内圏線 |
| 第56図17 | 35-8 | 磁器 | 76 | 福寿字, 十角, 角に2, 3本沈線 |
| 第56図18 | | 磁器 | | 梵字, 見込み寿字 |
| 第56図19 | 35-7 | 磁器 | | 外面文様5単位 |
| 第56図20 | | 磁器 | 3 | 「大明成化年製」, 高台内圏線 |
| 第56図21 | | 陶器 | 49 | 山水文, 貫入多い |
| 第56図22 | 35-9 | 磁器 | | 焼き継ぎ痕 |
| 第57図1 | 36-1 | 磁器 | 4 | 高台裏青磁釉, 底部12個体分 |
| 第57図2 | | 磁器 | | 釉切れ, 内面鉄分付着 |
| 第57図3 | | 磁器 | 4 | 色絵, 高台一部欠損, 内面鉄分付着 |
| 第57図4 | 36-4・5 | 磁器 | 3 | 墨弾き, 焼けている, 「大明年製」 |
| 第57図5 | | 磁器 | 142 | 白磁 |
| 第57図6 | 36-2 | 磁器 | 142 | 鷺, 桃, 「宣徳年製」 |
| 第57図7 | | 磁器 | 3 | 焼けている, 高台内圏線 |
| 第57図8 | | 磁器 | 4 | |
| 第57図9 | | 磁器 | 126 | 見込み圏線 |
| 第57図10 | 36-3 | 磁器 | | 高台内圏線, 「年製」 |
| 第57図11 | | 磁器 | 49 | 灰褐色の発色, ろくろ調整痕残す |
| 第57図12 | | 磁器 | | 高台内無釉, 砂付着, 釉むら有り |
| 第57図13 | | 磁器 | 34 | 上半のみ釉掛け, 見込み灰落ち |
| 第57図14 | 36-7 | 磁器 | | 印刻獅子, 高台内透明釉, 焼けている |
| 第57図15 | 36-6 | 磁器 | 140 | 色絵, 丸文, 高台内圏線, 「大明成化年製」 |
| 第57図16 | 36-10 | 磁器 | 140 | 金彩紅釉, 高台内二重圏線 |
| 第57図17 | 36-9 | 磁器 | 100 | 紅釉, 「玉質金華」 |
| 第57図18 | | 磁器 | | 竜文, |

| 挿図番号 | 写真 | 種類 | 遺構 | 特 徴 |
|--------|-------|----|-----|----------------------|
| 第57図19 | | 磁器 | | 色絵，高台内圈線，「大明成化年製」 |
| 第57図20 | 36-11 | 陶器 | 105 | 高台内無釉 |
| 第57図21 | 36-13 | 磁器 | | 色絵， |
| 第57図22 | 37-1 | 磁器 | 4 | 畳付け釉削り，「大明（成）化年製」 |
| 第57図23 | 37-2 | 磁器 | | 高台内圈線，「大明洪武年製」，焼けている |
| 第57図24 | | 磁器 | 3 | 高台内圈線，「玉（ ）佳（ ）」 |
| | 36-8 | 磁器 | | |
| | 36-12 | 磁器 | | 黄，緑，紫 |
| 第58図1 | | 陶器 | | 透明釉， |
| 第58図2 | | 陶器 | 39 | 灰釉，高台内無釉 |
| 第58図3 | | 陶器 | 49 | 灰釉，高台部分無釉 |
| 第58図4 | | 陶器 | 39 | 灰釉 |
| 第58図5 | 37-3 | 陶器 | 39 | 灰釉呉須絵 |
| 第58図6 | | 陶器 | 128 | 献上手唐津 |
| 第58図7 | | 陶器 | 3 | 色絵，呉須鉄絵，高台部無釉 |
| 第58図8 | 37-4 | 陶器 | 39 | 京焼き風，赤，緑 |
| 第58図9 | | 陶器 | 142 | 「清閑寺」 |
| 第58図10 | | 陶器 | 39 | 小杉茶碗 |
| 第58図11 | | 陶器 | 39 | 小杉茶碗 |
| 第58図12 | | 陶器 | | 小杉茶碗 |
| 第58図13 | | 陶器 | 93 | 鉄絵，「清水」 |
| 第58図14 | | 陶器 | 105 | 天目 |
| 第58図15 | | 陶器 | 3 | 天目 |
| 第58図16 | | 陶器 | 6 | 白天目 |
| 第58図17 | 37-5 | 陶器 | 34 | 鉄釉，志戸呂 |
| 第58図18 | | 陶器 | 39 | 灰釉，底部削り |
| 第58図19 | 37-6 | 陶器 | 4 | 畳付けのみ無釉，高台螺旋削込み |
| 第58図20 | | 陶器 | 105 | 志野釉 |
| 第58図21 | | 陶器 | | 鉄釉，胎土目痕，底部一部無釉 |
| 第59図1 | 37-7 | 磁器 | 4 | 祥瑞 |
| 第59図2 | 37-9 | 磁器 | 4 | |
| 第59図3 | 37-8 | 磁器 | 3 | 寿字 |
| 第59図4 | 37-10 | 磁器 | | |
| 第59図5 | | 磁器 | 4 | 明青磁壺蓋 |
| 第59図6 | | 陶器 | 39 | 透明釉 |
| 第59図7 | | 陶器 | 3 | 鉄釉，上面5本櫛目，裏面ナゲ調整 |
| 第59図8 | | 陶器 | 49 | 透明釉，貫入あり，裏削り痕残す |
| 第59図9 | | 陶器 | 93 | 鉄釉，裏面回転糸切り痕，溶着痕 |
| 第59図10 | 37-11 | 磁器 | 49 | |
| 第59図11 | 37-12 | 磁器 | | |
| 第59図12 | 37-13 | 磁器 | | 内面施釉 |
| 第59図13 | 37-14 | 磁器 | 88 | |

| 挿図番号 | 写真 | 種類 | 遺構 | 特 徴 |
|--------|--------|----|-----|----------------------|
| 第59図14 | | 陶器 | 142 | 灰釉，裏面一方向調整 |
| 第59図15 | | 磁器 | 4 | 型紙，畳付け砂付着，内面鉄分付着 |
| 第59図16 | 48-1 | 磁器 | 49 | |
| 第59図17 | 48-2 | 磁器 | 4 | 発色不良，蓋3個体分 |
| 第60図1 | | 磁器 | 4 | 畳付け無釉 |
| 第60図2 | | 磁器 | 6 | 高台内一部無釉，口縁部鉄釉 |
| 第60図3 | 39-2 | 磁器 | 3 | 色絵，赤，緑，黄 |
| 第60図4 | | 磁器 | 105 | 変形型打ち，畳付け砂付着 |
| 第60図5 | 39-6 | 磁器 | 4 | 変形皿，糸切り高台，砂付着，変形福字 |
| 第60図6 | 39-5 | 磁器 | 140 | 口紅，ハリ支え，変形福字 |
| 第61図1 | | 磁器 | | 「宣嘉年製」，高台内圏線，ハリ支え |
| 第61図2 | | 磁器 | 6 | 福字，3個体 |
| 第61図3 | | 磁器 | 49 | 高台内圏線， |
| 第61図4 | 39-4 | 磁器 | | 色絵，赤 |
| 第61図5 | | 磁器 | | ハリ支え，高台内圏線 |
| 第62図1 | 38-3 | 磁器 | 93 | 長吉谷，ハリ支え |
| 第62図2 | | 磁器 | 93 | ハリ支え，37-1と見込み文様のみ異なる |
| 第63図1 | | 磁器 | 93 | ハリ支え，高台内圏線 |
| 第63図2 | 38-1 | 磁器 | 93 | ハリ支え，高台内圏線 |
| 第64図1 | | 磁器 | 140 | 陰刻，蛇の目釉剥ぎ |
| 第64図2 | 38-2 | 磁器 | 93 | ハリ支え，畳付け砂付着，高台内圏線 |
| 第65図1 | 39-1・3 | 磁器 | 4 | 角福，ハリ支え黄，青，赤，緑 |
| 第65図2 | 40-2 | 磁器 | 142 | ハリ支え，千左，口紅 |
| 第65図3 | | 磁器 | 4 | 印刻白磁，口紅，柿右衛門 |
| 第65図4 | 40-2 | 磁器 | 4 | 変形福字，口紅 |
| 第66図1 | 42-1 | 磁器 | | 高台内圏線 |
| 第66図2 | | 磁器 | 3 | 高台内圏線 |
| 第66図3 | | 磁器 | 49 | 変形福字 |
| 第66図4 | 41-1 | 磁器 | 3 | 渦福，ハリ支え |
| 第66図5 | 41-2 | 磁器 | 4 | ハリ支え，高台内圏線 |
| 第67図1 | 42-6 | 磁器 | 3 | 渦福 |
| 第67図2 | 41-3 | 磁器 | 4 | 高台内圏線，ハリ支え，角福(?) |
| 第67図3 | 42-5 | 磁器 | 93 | ハリ支え，高台内圏線 |
| 第67図4 | 42-3 | 磁器 | 3 | ハリ支え，高台内圏線 |
| 第67図5 | | 磁器 | 3 | 型紙，高台内圏線 |
| 第68図1 | | 磁器 | | 「大明年製」，高台内圏線，コンニャク判 |
| 第68図2 | | 磁器 | 6 | 高台内圏線，コンニャク判 |
| 第68図3 | 42-4 | 磁器 | 93 | 多数，ハリ支え |
| 第68図4 | | 磁器 | | 高台内二重圏線，銘有り |
| 第68図5 | | 磁器 | 4 | 発色不良，コンニャク判(?) |
| 第68図6 | | 磁器 | 49 | コンニャク判，見込み輪翹ぎ |
| 第68図7 | | 磁器 | | |

| 挿図番号 | 写真 | 種類 | 遺構 | 特 徴 |
|--------|---------|----|-----|-------------------------------|
| 第68図 8 | | 磁器 | | 近代 |
| 第68図 9 | | 磁器 | | 近代 |
| 第68図10 | | 磁器 | | 福祿 (寿) |
| 第68図11 | | 磁器 | | 燕楽軒 |
| 第68図12 | 50- 2 | 磁器 | | 燕楽軒 |
| 第68図13 | | 磁器 | | 燕楽軒 |
| | 42- 2 | 磁器 | | |
| 第69図 1 | | 磁器 | | 高台内圏線 |
| 第69図 2 | | 磁器 | | 高台内圏線 |
| 第69図 3 | | 磁器 | 4 | |
| 第70図 1 | 43- 3 | 磁器 | 3 | 畳付け砂付着, 角銘あり |
| 第70図 2 | 43- 1 | 磁器 | | 「大明成化年製」, 口鏽 |
| 第70図 3 | | 磁器 | | 畳付け砂付着, 放射状削り痕 |
| 第70図 4 | | 磁器 | | 畳付け砂付着, 焼けている |
| 第70図 5 | | 磁器 | 4 | 畳付け砂付着, 焼けている |
| 第70図 6 | | 磁器 | 3 | 畳付け砂付着 |
| 第70図 7 | | 磁器 | | 畳付け砂付着, 圏線, 焼けている |
| 第70図 8 | | 磁器 | | 焼けている |
| 第71図 1 | | 磁器 | | 二重圏線, 畳付け砂付着, 銘有り |
| 第71図 2 | 43- 2 | 磁器 | 76 | 色絵, 見込み陰刻, 緑, 赤, 畳付け砂付着 |
| 第71図 3 | | 磁器 | 100 | 釉切れ |
| 第71図 4 | | 磁器 | 3 | 芙蓉手, 砂付着, 焼けている |
| 第71図 5 | | 磁器 | 4 | 焼けている |
| 第71図 6 | | 磁器 | | |
| 第71図 7 | | 磁器 | 3 | 畳付け砂付着 |
| 第71図 8 | | 磁器 | | 砂付着, 焼けている |
| 第71図 9 | | 磁器 | | 砂付着, 焼けている |
| 第72図 1 | | 磁器 | 33 | 「(大) 明成 (化年) 製」 |
| 第72図 2 | | 磁器 | 150 | 「(大) 明成 (化年) 造」, 圏線, 口鏽 |
| 第72図 3 | 43- 4 | 磁器 | 3 | 二重圏線, 銘不明 |
| 第72図 4 | | 磁器 | | 圏線, 焼けている |
| 第72図 5 | 43- 5 | 磁器 | | |
| 第72図 6 | 43- 5 | 磁器 | | 砂付着, 二重圏線, 「大明成化年造」 |
| 第73図 1 | | 磁器 | | 色絵, 緑, (赤) |
| 第73図 2 | 44- 1 | 磁器 | 3 | 色絵, 赤, 黄, 緑, 赤字福 |
| 第73図 3 | 44- 7 | 磁器 | 34 | 色絵, 口鏽, 赤 |
| 第73図 4 | 44- 2 | 磁器 | 96 | 色絵, 口鏽, 砂付着, 赤, 緑, 黄, 角皿, 銘有り |
| 第73図 5 | 44- 3・4 | 磁器 | 3 | 色絵, 口鏽, 赤 |
| | 44- 5 | 磁器 | | 高台内圏線, 赤, 黄, 緑, 角銘 |
| 第73図 6 | | 磁器 | 100 | 色絵, 赤 (茶?), 側部無釉 |
| 第73図 7 | 44- 6 | 磁器 | 39 | 色絵, 赤, 口鏽 |
| | 44- 8 | 磁器 | | 色絵, 黄, 緑, 底面砂付着 |

| 挿図番号 | 写真 | 種類 | 遺構 | 特 徴 |
|--------|---------|----|-----|-----------------------------------|
| 第73図 8 | 44-9 | 磁器 | 6 | 色絵, 赤, 緑, 茶, 青 |
| | 44-10 | 磁器 | 3 | 色絵, 赤, 緑, 茶, 口鏝, 波状縁 |
| 第73図 9 | 45-1 | 磁器 | 6 | 瑠璃釉白花, 焼けている, 外面透明釉 |
| 第73図10 | | 磁器 | 3 | 瑠璃釉白花, 高台内無釉 |
| 第74図 1 | | 磁器 | 3 | 黄釉, 焼けている, 「嘉(靖年)製」 |
| 第74図 2 | 45-2 | 磁器 | 174 | 外面瑠璃釉, 高台内鉄釉 |
| 第74図 3 | 45-5 | 磁器 | 100 | 白磁, 陰刻, 碁笥底 |
| 第74図 4 | 45-3 | 磁器 | | 吹き墨, 砂付着, 高台内圏線 |
| 第74図 5 | | 磁器 | 96 | 陰刻, 砂付着 |
| 第74図 6 | 45-4 | 磁器 | | 吹き墨, 砂付着, 高台内二重圏線, 「(大明嘉)靖(年製)」 |
| 第74図 7 | | 磁器 | 5 | 砂付着 |
| 第74図 8 | | 磁器 | | 陰刻, 砂付着 |
| 第74図 9 | 45-7 | 磁器 | | 碁笥底, 焼けている, 高台内透明釉 |
| 第75図 1 | 口絵 6-4 | 磁器 | 36 | 青花黄彩, 焼けている, 裏面透明釉 |
| | 口絵 7-10 | 陶器 | 3 | 色絵, 青緑, 紺, 白 |
| 第75図 2 | 46-1 | 磁器 | 140 | 褐色の発色 |
| | 46-5 | 磁器 | 93 | 陰刻, 櫛, ヘラ |
| 第75図 3 | 46-3 | 磁器 | | 陰刻 |
| 第75図 4 | 46-6 | 磁器 | 4 | 浮き彫り, 裏面下部釉拭き取り |
| | 46-7 | 磁器 | 128 | 陰刻, 高台内砂付着 |
| 第75図 5 | 46-8 | 磁器 | | |
| 第75図 5 | 45-8・9 | 磁器 | 69 | 三彩, 焼けている, 緑, 黄 |
| 第75図 6 | 45-6 | 磁器 | | 口鏝, 三足(?) |
| 第75図 7 | 47-2 | 磁器 | 105 | 色絵, 黄, 赤, 緑 |
| | 47-3 | 磁器 | 22 | 色絵, 赤, 緑, 黄 |
| 第75図 8 | | 磁器 | 140 | 高台内圏線, 「大明成化年製」 |
| 第75図 9 | 47-1 | 磁器 | 3 | 側縁無釉, 色絵, 赤, 緑, 黄 |
| 第75図10 | 47-6 | 陶器 | | 青, 茶, 内面下半・底面無釉 |
| 第75図11 | 47-4・5 | 磁器 | 3 | 内面施釉 |
| 第76図 1 | 47-7 | 陶器 | 147 | 釉むら目立つ, 畳付け砂付着 |
| | 48-3 | 磁器 | 3 | 瑠璃釉, 陰刻状に貼付 |
| 第76図 2 | 48-4 | 陶器 | 140 | 貼付有り(把手?), 灰釉 |
| 第76図 3 | | 磁器 | 4 | 焼けている |
| 第76図 4 | 48-7 | 磁器 | | 釉切れ有り, 口唇・底面のみ無釉 |
| 第76図 5 | 46-2 | 磁器 | 3 | 砧手 |
| 第76図 6 | | 磁器 | 76 | 白磁, 浮き彫り |
| 第76図 7 | 48-5 | 磁器 | 4 | 瑠璃釉, 赤, 内面にも瑠璃釉たれる, 内面・底面透明釉, 砂付着 |
| 第76図 8 | 48-6 | 磁器 | | 内面透明釉, 外面鉄釉(?) |
| 第76図 9 | 48-8 | 磁器 | | 釉切れ有り, 高台砂付着 |
| 第76図10 | | 磁器 | 100 | 内面透明釉 |
| 第76図11 | 48-9 | 磁器 | 3 | 口唇無釉 |

| 挿図番号 | 写真 | 種類 | 遺構 | 特 徴 |
|--------|--------|----|-----|---------------------|
| 第76図12 | | 磁器 | 4 | 底面施釉 |
| 第76図13 | | 磁器 | | 底部無釉 |
| 第76図14 | | 磁器 | | 畳付け部のみ無釉, |
| 第76図15 | 48-10 | 磁器 | 34 | 砂付着 |
| 第77図 1 | 47-11 | 陶器 | 5 | 白釉 |
| 第77図 2 | 47-10 | 陶器 | 100 | 白釉, 青, 茶, 黄 |
| 第77図 3 | 47-8 | 陶器 | | 白釉 |
| | 口絵 7-8 | 陶器 | 105 | 色絵, 青, 紫, 裏面銅緑釉 (?) |
| 第77図 4 | 49-5 | 陶器 | | 志野織部 |
| 第77図 5 | | 陶器 | | 志野, 付け高台 |
| 第77図 6 | | 陶器 | | 志野 |
| 第77図 7 | | 陶器 | 126 | 釉上陰刻, 灰釉 |
| 第77図 8 | | 陶器 | 49 | 高台部無釉, 灰釉 |
| 第77図 9 | | 陶器 | | 総釉 |
| 第77図10 | | 陶器 | 105 | 灰釉, 型打ち, 回転糸切り痕 |
| 第77図11 | 49-3 | 陶器 | | 緑 |
| 第77図12 | 46-9 | 陶器 | | 粉青沙器 |
| 第77図13 | | 磁器 | 4 | 染付, 輪剥ぎ |
| 第77図14 | | 陶器 | 34 | 輪剥ぎ, 内面銅緑釉 |
| 第77図15 | | 陶器 | | 輪剥ぎ, 銅緑釉 |
| 第77図16 | | 陶器 | 39 | 浮き彫り |
| 第77図17 | | 陶器 | 3 | 鉄絵, 底部のみ無釉 |
| 第77図18 | | 陶器 | | 灰釉・鉄釉掛け分け |
| 第77図19 | | 陶器 | 39 | 銅緑釉流し掛け, 鉄絵 |
| 第77図20 | | 陶器 | | 鉄釉 |
| | 47-9 | 陶器 | 3 | 型成形 |
| 第78図 1 | | 陶器 | | |
| 第78図 2 | | 陶器 | 3 | 砂目 |
| 第78図 3 | | 陶器 | | |
| 第78図 4 | | 陶器 | 49 | 砂目 |
| 第78図 5 | 49-4 | 陶器 | 34 | 器面平滑 |
| 第78図 6 | | 陶器 | | 砂目 |
| 第79図 1 | 49-9 | 陶器 | | 鉄絵, 口唇部銅緑釉 |
| 第79図 2 | 49-8 | 陶器 | 100 | 鉄絵, 銅緑釉 |
| 第79図 3 | | 陶器 | | 灰釉, 胎土目 |
| 第79図 4 | 49-7 | 陶器 | 93 | 白泥, 緑釉 |
| 第80図 1 | | 陶器 | | 灰釉 |
| 第80図 2 | | 陶器 | 4 | 鉄釉, ウノフ釉 |
| 第80図 3 | | 陶器 | 88 | 灰釉 |
| 第80図 4 | | 陶器 | 4 | 灰釉 |
| 第80図 5 | | 陶器 | 49 | 灰釉 |
| 第80図 6 | | 陶器 | 39 | 灰釉 |

| 挿図番号 | 写真 | 種類 | 遺構 | 特 徴 |
|--------|-------|----|-----|----------------------------|
| 第80図7 | 49-2 | 陶器 | | 鉄絵 |
| 第80図8 | | 陶器 | 4 | 志戸呂 |
| 第80図9 | 49-1 | 磁器 | 3 | 畳付け砂付着 |
| 第80図10 | | 磁器 | 140 | 畳付け砂付着, 灰被り |
| 第80図11 | 46-4 | 磁器 | 150 | |
| 第80図12 | 46-12 | 陶器 | 100 | 刷毛目, 内面当て具痕 |
| 第80図13 | | 陶器 | 3 | 鉄釉, 底面ろくろ痕, 高台内釉拭きとり |
| 第80図14 | | 磁器 | 49 | 色絵, 赤 |
| 第80図15 | | 磁器 | 150 | 上部接合面 |
| | 46-10 | 磁器 | 39 | 象眼 |
| | 46-11 | 磁器 | | 象眼, 内面釉垂れ込み |
| 第81図1 | 47-12 | 陶器 | 100 | 黒褐釉削りとり, 胴下半施釉 |
| 第81図2 | 47-13 | 陶器 | 6 | 内面無釉, 焼けている |
| 第81図3 | | 磁器 | 3 | 内面無釉, 小孔多い |
| 第81図4 | 50-3 | 陶器 | 69 | 褐釉, |
| 第81図5 | | 陶器 | 3 | 鉄釉, 灰釉, 焼けている |
| 第81図6 | 50-5 | 陶器 | 69 | 黒褐釉, |
| 第81図7 | | 陶器 | | 鉄釉 |
| 第81図8 | | 陶器 | 139 | 外面錆釉, 内面灰釉 |
| 第81図9 | | 陶器 | 3 | 鉄釉 |
| 第81図10 | | 陶器 | 49 | 灰釉, 鉄釉流し掛け |
| 第81図11 | | 陶器 | 49 | 鉄釉, 砂目, 焼成後穿孔 |
| 第82図1 | 49-6 | 陶器 | 105 | 鉄釉, 櫛目10本, 右回転, 底部同心円? |
| 第82図2 | | 陶器 | | 鉄釉, 櫛目13本 |
| 第82図3 | | 陶器 | | 鉄釉, 櫛目11本, 胎土目 |
| 第82図4 | | 陶器 | | 櫛目11本, 右回転, 鉄釉, 胎土目 |
| 第83図1 | | 陶器 | 34 | 櫛目8本, 右回転, |
| 第83図2 | | 陶器 | 126 | 櫛目7本, 見込同心円+放射状?, 鉄釉 |
| 第84図1 | | 陶器 | 93 | 鉄釉, 櫛目8本, 右回転 |
| 第84図2 | | 陶器 | 142 | 櫛目7本, 右回転, 見込放射状?, 鉄釉, 胎土目 |
| 第84図3 | 50-1 | 陶器 | 12 | 鉄釉, 獅子頭部分銅釉+藁灰釉 |
| 第85図1 | | 土器 | 4 | 赤色粒含む |
| 第85図2 | | 陶器 | 4 | 左回転 |
| 第85図3 | | 土器 | 126 | 赤色粒含む |
| 第85図4 | | 土器 | 3 | 左回転 |
| 第85図5 | | 土器 | 140 | 左回転 一部灯芯痕あり |
| 第85図6 | | 土器 | | 左回転 焼成前穿孔 |
| 第85図7 | | 土器 | 49 | 左回転 焼成前穿孔 煤痕あり |
| 第85図8 | | 土器 | | 螺旋状糸底 赤色粒雲母粒若干含む |
| 第85図9 | | 土器 | 150 | 左回転 口縁炭化物付着 |
| 第85図10 | | 土器 | 4 | 底面, 底部周辺削り 赤色粒含む |
| 第85図11 | | 土器 | 126 | 左回転 赤色粒含む 灯芯痕あり |

| 挿図番号 | 写真 | 種類 | 遺構 | 特徴 |
|--------|----|----|-----|------------------------|
| 第85図12 | | 土器 | 150 | 底部ナデ? 赤色粒目立つ 灯芯痕あり |
| 第85図13 | | 土器 | 4 | 右回転 全周炭化物付着 |
| 第85図14 | | 土器 | 105 | 左回転 赤色粒含む |
| 第85図15 | | 土器 | 4 | 左回転 灯芯痕あり |
| 第85図16 | | 土器 | 4 | 左回転 灯芯痕あり |
| 第85図17 | | 土器 | 105 | 左回転 全周炭化物付着 |
| 第85図18 | | 土器 | 4 | 左回転 赤色粒含む 一部炭化物付着 |
| 第85図19 | | 土器 | 4 | 左回転 灯芯痕あり |
| 第85図20 | | 土器 | 49 | 左回転 灯芯痕あり |
| 第85図21 | | 土器 | 49 | 左回転 灯芯痕あり |
| 第85図22 | | 土器 | 142 | |
| 第85図23 | | 土器 | 49 | 左回転 |
| 第85図24 | | 土器 | 142 | 右回転 赤色粒含む 灯芯痕あり |
| 第85図25 | | 土器 | 142 | 赤色粒含む 全周炭化物付着 |
| 第85図26 | | 土器 | 49 | 灯芯痕あり |
| 第85図27 | | 土器 | 142 | 左回転 赤色粒 外面放射状斑 |
| 第85図28 | | 土器 | 12 | 左回転 赤色粒含む 全周炭化物付着 |
| 第85図29 | | 土器 | | |
| 第85図30 | | 土器 | 147 | 左回転 底部周囲ケズリ 底部のみ黒色化 |
| 第85図31 | | 土器 | 147 | 赤色粒含む |
| 第85図32 | | 土器 | 69 | 左回転 赤色粒含む |
| 第85図33 | | 土器 | 34 | 外面丁寧なケズリ 内面回転調整 精製 |
| 第85図34 | | 土器 | 34 | 左回転 一部灯芯痕あり |
| 第85図35 | | 土器 | | 手づくね |
| 第85図36 | | 土器 | 34 | 左回転 焼けて変形 |
| 第85図37 | | 土器 | 34 | 左回転 灯芯痕あり |
| 第85図38 | | 土器 | 4 | 整形内面のみ 砂粒多く含む |
| 第85図39 | | 土器 | 34 | 左回転 全周煤付着 |
| 第85図40 | | 土器 | 34 | 左回転 全周煤付着 |
| 第85図41 | | 土器 | 3 | 外面上部のみ調整 砂粒含む 全周(?)煤付着 |
| 第85図42 | | 土器 | 34 | 左回転 赤色粒含む |
| 第86図1 | | 陶器 | 49 | 鉄釉, 底部周辺拭き取り |
| 第86図2 | | 陶器 | 49 | 鉄釉, 底部周辺拭き取り, 重ね焼き痕 |
| 第86図3 | | 土器 | | 透明釉, 左回転 |
| 第86図4 | | 陶器 | | 鉄釉, 底部周辺拭き取り, 見込み窯道具痕 |
| 第86図5 | | 陶器 | 49 | 鉄釉, 底部周辺拭き取り, 重ね焼き痕 |
| 第86図6 | | 土器 | | 左回転 |
| 第86図7 | | 土器 | 126 | 内面側縁上部に布目痕 |
| 第86図8 | | 土器 | 12 | 内面一部に布目痕, 縁部分黒変 |
| 第86図9 | | 土器 | 69 | 内面一部に布目痕 |
| 第86図10 | | 土器 | | |
| 第86図11 | | 土器 | 34 | 内面に布目痕 |

| 挿図番号 | 写真 | 種類 | 遺構 | 特 徴 |
|--------|------|-----|-----------------------|------------------|
| 第86図12 | 50-6 | 土器 | | 内面に布目痕 |
| 第86図13 | | 土器 | 39 | |
| 第86図14 | | 土器 | | |
| 第86図15 | | 土器 | 39 | |
| 第86図16 | | 土器 | | 輪積み成形 |
| 第86図17 | | 土器 | 142 | 輪積み成形 |
| 第86図18 | | 土器 | 39 | 輪積み成形 |
| 第86図19 | | 土器 | | 輪積み成形, 刻印30 |
| 第86図20 | | 土器 | 4 | 輪積み成形 |
| 第86図21 | | 土器 | 93 | 輪積み成形 |
| 第86図22 | | 土器 | | 輪積み成形 |
| 第86図23 | | 土器 | | 輪積み成形, 刻印32 |
| 第86図24 | | 土器 | | 板作り, 刻印33 |
| 第86図25 | | 土器 | 4 | 板作り, 刻印34 |
| 第86図26 | | 土器 | | 板作り, 刻印35, 底面布目痕 |
| 第86図27 | | 土器 | | 銘有り |
| 第86図28 | | 土器 | | ろくろ成形 |
| 第87図1 | | 土器 | 140 | 焼成前刻線, 皿部分張り付け |
| 第87図2 | | 土器 | 39 | 口縁上部煤付着 |
| 第87図3 | | 土器 | 34 | 内面指頭痕 |
| 第87図4 | | 土器 | | 口縁部内外面回転ナデ |
| 第87図5 | | 土器 | 126 | 瓦質, 外面ミガキ |
| 第87図6 | | 土器 | 100 | 硬質, 叩き目あり |
| 第87図7 | | 土器 | 4 | |
| 第87図8 | | 土器 | 49 | 口縁部, 底部境界に沈線 |
| 第87図9 | | 土器 | 49 | |
| 第87図10 | 土器 | 49 | ろくろ使用, 見込みろくろ目残す, 左回転 | |
| 第87図11 | 土器 | 122 | 瓦質, 張り出し部上面ミガキ | |

第2表 山上会館地点・御殿下記念館地点共通遺物一覧表

| 挿図番号 | 接 合 | 同 一 製 品 |
|--------|----------------------------|---------------------------------------|
| 第56図20 | 9, 93, G(169) | GX |
| 第57図1 | | 3, 93, 105 |
| 第59図17 | G429, G665, G(832), G(849) | G(220) |
| 第69図3 | | G(19), G162, G(181), G532, G678 GX |
| 第60図4 | | G373 |
| 第61図1 | | GX 3, 4, 6, 33, 93, 49, 125a |

| 挿 図 | 接 合 | 同 一 製 品 |
|--------|--------------------|------------------------|
| 第61図 2 | | 4, 33, 88 |
| 第61図 3 | | 33 |
| 第61図 4 | | 3, 105, G532 |
| 第61図 5 | | |
| 第62図 1 | G1A | |
| 第62図 2 | | GX |
| 第65図 1 | | 4, 49 |
| 第65図 2 | | |
| 第65図 3 | 33, G534 | GX G49, G241 |
| 第65図 4 | | 49, G537, G753, G(916) |
| 第66図 5 | 6, 97 | GX |
| 第67図 1 | | 4, 49 |
| 第67図 2 | 33, 49, G(425) | GX |
| 第67図 4 | | 4 |
| 第69図 3 | | GX |
| 第70図 1 | | GX |
| 第70図 2 | | |
| 第71図 1 | | 4, 33 |
| 第71図 2 | | 3 |
| 第71図 5 | | 93 |
| 第71図 7 | G678 | |
| 第72図 2 | | G50 |
| 第72図 3 | G534, G959 | GX G678 |
| 第72図 6 | | 100, G(27), G959 |
| 第73図 4 | | 3, 49, 105, G(916) |
| 第73図 8 | | 69, G(208) |
| 第73図10 | | G665 |
| 第75図 5 | G270, G(514), G532 | |
| 第75図 6 | | |
| 第75図11 | | G(11), G82 |
| 第76図 1 | | 105, G678 |
| 第76図 4 | | GX 65, G532 |
| 第76図 8 | | 140, 174 |
| 第80図12 | | 49, 128 |
| 第81図 1 | G(206) | GX G28, G(514) |
| 第81図 3 | | 6, 49 |
| 写真 8—2 | G534 | 4, 64, 162 |
| 写真10—5 | | 6, 66, 101 |
| 写真12—1 | 105 | |
| 写真12—6 | G(916) | |
| 写真13—7 | | 3, 34, 64 |
| 写真13—9 | | 4, G626, G678 |

* Gのつくのは御殿下記念館地点の遺構

* ()は報告されていない遺構

* GXは御殿下記念館地点包含層

第4節 人形・小物類 (第88図)

当地点での人形類の出土は非常に少ない。ほとんどが第39号遺構から出土している。第88図1・2は第39号遺構出土の白磁である。1の小杯は型成形で器壁の厚さは一定していない。内外面に黒褐色の斑点が見られる。高台裏に砂が付着する。2は紅皿ともいわれる製品で高台内に砂が付着している。3はやはり紅皿と考えられる磁器皿で外面に型で蛸唐草文の陽刻が施されている。外面は無釉である。包含層出土。

6・7はおはじき状の磁器片転用品である。39号遺構でのみ出土している。いずれも染付磁器皿の破片を打ち欠いたものであろう。縁部は摩滅している。

4は3号遺構出土の陶製鼠である。足と尾は別に張り付けたものであろう。小さいながら精巧に作られている。腹部は無釉である。十二支の組み物の一つであろうか。

5は39号遺構出土の素焼きの人形の顔部分である。江戸で多く出土する幼児をかたどった人形の一部と考えられる。胎土は橙色系である。

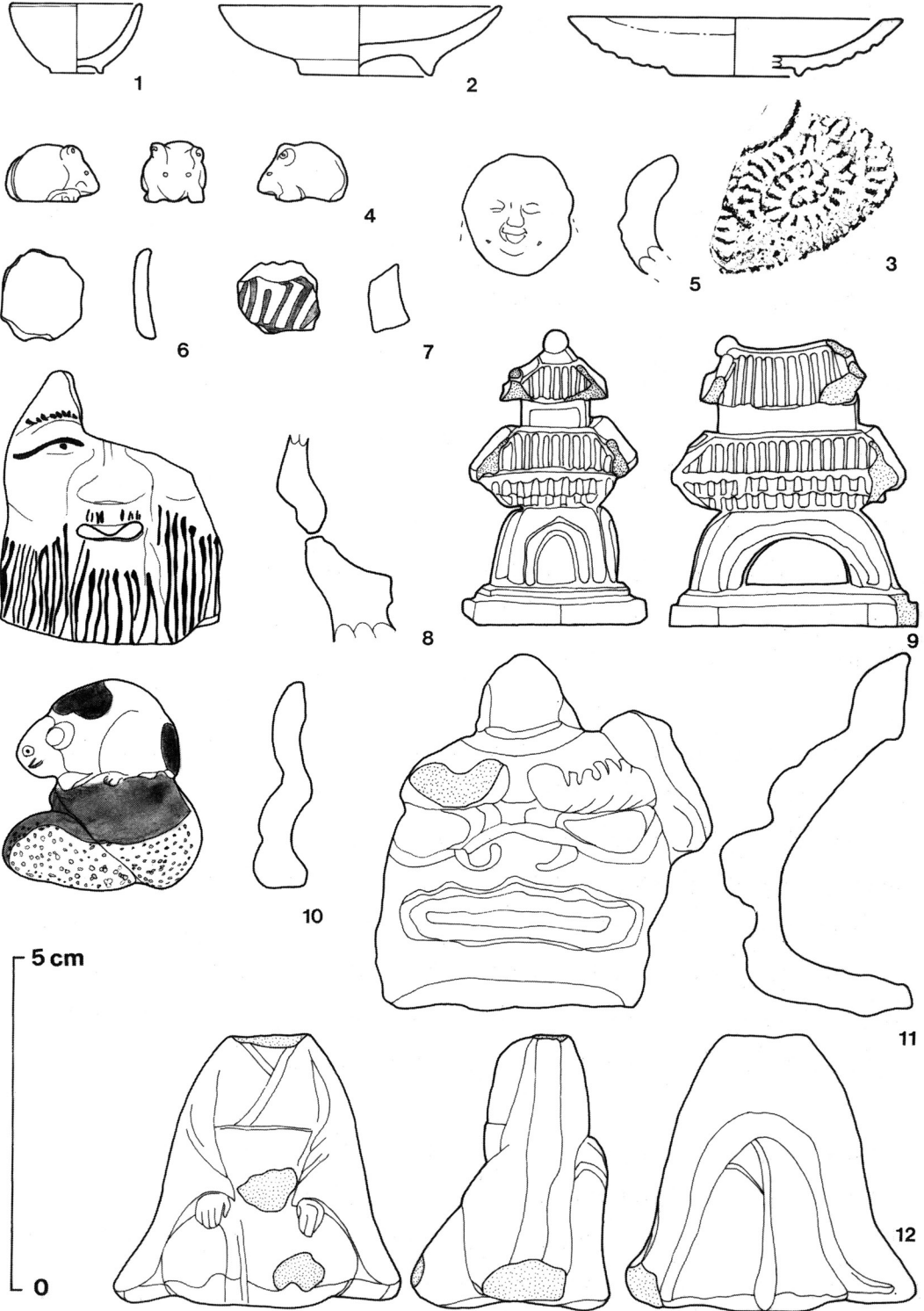
8は117号遺構出土の磁器製の人形頭部である。型成形か。眉とひげは呉須で描かれている。中国の製品であろう。内面は無釉で口の部分から釉が流れ込んでいる。

9は39号遺構出土の山門または龍宮城をかたどった置物である。型で成形した部品を張り合わせたものと考えられる。胎土は浅黄橙色で褐色の釉を施す。箱庭具の一つであろうか。

10は39号遺構出土の素焼きの鼠である。型成形、中空で胎土は淡黄色である。鼠には褐色、その下の部分には赤色の彩色が施されている。底部に穿孔があり、本来の完品の半分であることが分る。鼠が乗っているものが何であるかはわからない。他の例では俵や唐辛子、小槌に乗っているものがある。鼠は大黒様の使いとする信仰があり、福德を招くものとされていたらしい。特に白鼠は大切にされたという。

11は包含層出土の素焼きの獅子頭である。型成形。胎土は橙色系である。今戸産であろうか。

12は39号遺構出土の官女と思われる素焼きの人形である。型成形、中空で胎土は橙色系である。底部に穿孔はない。江戸の他の遺跡でも同じタイプのものが多く出土している。



第88図 ミニチュア，人形類

第5節 瓦類

山上会館地点から検出された瓦は、その多くが破片であり図示できる資料に限られている。そのため、軒瓦は各文様・範型毎に分類が可能な資料を図示し、丸瓦、平瓦、棧瓦は完形資料を、道具瓦は遺存状態の良好な資料を選択して図示した。刻印は種類毎に図示した。資料は、遺構毎に図示することを基本としたが、資料の点数の少ない遺構から検出されたものについては遺構外のものと一括に扱い、最後に種類毎にまとめて図示した。

瓦の良好な一括廃棄の資料として検出された遺構は限られ、36・100・105・150号遺構および105・140号瓦集中層等の1期の遺構に集中してみられる。いずれも本瓦葺き用の瓦であり、第3分冊考察編での瓦1期に相当する。これらの遺構のうち特に140号瓦集中層は量、質的にも極めて良好な遺存状態を示し、瓦落ちと判断することができる。また、105号瓦集中層からは、特殊な形態をする丸瓦12類と平瓦3類のセットが多量に検出され、軒瓦・道具瓦も供伴している。

以下、各遺構毎に説明をするが、瓦の分類については考察編の分類と一致する。

36号遺構 (第89図～第92図) 本瓦葺きの資料を検出した。小型の瓦と棟の瓦が集中して検出された。

軒瓦には、軒丸瓦が連珠三つ巴文C7類(第89図1)と軒平瓦42類(第89図2)、19類(第89図3)の小型のもののみである。丸瓦は特殊な形態をした12類d(第89図4)のみを図示したが、他に丸瓦9類の全長30cm前後の資料もみられる。平瓦は1類で、長さ24.0cmの小型のもの(第92図1)が計測可能な資料として観察できた。資料の中には縦方向に半割されたものが多くみられる(第92図2)。棟に使用された瓦には、棟瓦と熨斗瓦がみられる。棟瓦は1類(第90図1)が検出され、熨斗瓦は文様をもつ15類(第89図5、第90図2、第91図1・2・4～6)と無文の20類(第91図3)が検出された。熨斗瓦15類は多量に検出され、大きさが3種類と側面文様が3範型確認された。屋根瓦以外には海鼠瓦2類(第92図3)がみられる。

39号遺構 (第93図) 棧瓦葺きの資料中に本瓦葺きの資料が混在して検出された。

軒瓦には、「江戸式」のIGa類範型1の中心飾りがみられる(第93図3)。その他に図示したのは道具瓦だけで、熨斗瓦19類(第93図1)、輪違瓦1類(第93図2)、筋違瓦(第93図5)である。筋違瓦には丸に花卉8の菊花の刻印が押されている(第93図4)。

49号遺構 (第93、94図) 棧瓦葺きの資料中に本瓦葺きの資料が混在して検出された。

軒瓦は、軒丸瓦の剣梅鉢の中心のみが検出されたが分類は不明(第93図6)。軒平瓦は5類
型1(第93図7・8)、軒棧瓦は「江戸式」IVFa型2(第93図9)、連珠三つ巴文c(第93図
10)が検出された。平瓦は長さ20.0cmと小さく、凸面のみが磨かれ一般の平瓦と異なる(第94
図6)。熨斗瓦は3種類みられ、19類(第93図11)、17類2(第93図12)、類(第93図13・14)が
みられる。刻印は5種類みられ、彦六(第93図15)は丸瓦12類、丸に庄(第93図16)、丸に太(第
93図17、18)は棧瓦、8弁の菊花は丸瓦(第93図20)、丸(第93図19)は熨斗瓦に捺されてい
る。屋根瓦以外には海鼠瓦1類(第94図1・4・5)と9類(第94図2)がみられる。1類の
うち4と5は1枚ものを半分にした大きさで、他の一枚ものとは垂直に接合し、壁の角に使用
されたものである。接合の際には両者の接合部分に櫛描きが施されている。

88号遺構(第95図) 棧瓦葺きの資料が検出された。棧瓦はほとんどが破片のため、軒瓦と熨斗
瓦のみ図示した。

軒棧瓦の軒丸部連珠三つ巴文Cが3点(第95図1～3)みられ、「江戸式」IKiの資料と同範
である。軒平部は検出されなかった。熨斗瓦は18類型1(第95図4・5)のみを図示したが、
他に19類の破片が検出されている。

4号遺構(第95図) 本瓦葺きの資料が主に検出された。

軒平瓦は26類(6)、19類(8)、47類の唐草のみの資料(7)が検出された。熨斗瓦は厚手
の4類が検出され、凹面に条線がみられる(9)。熨斗瓦では他に15類の破片が検出されてい
る。屋根瓦以外では海鼠瓦の3類(10)と4類(11)、甑の2類(12)と3類(13)がみられ
る。海鼠瓦はいずれも釘隠しのために釘穴の回りが播り鉢状にえぐられている。刻印は丸に一
が2型(14・15)とやまに本(16)がいずれも丸瓦に捺されている。

93号遺構(第96図) 本瓦葺きの資料が検出された。小型と大型の資料がみられる。

軒丸瓦は無剣梅鉢紋が3型検出された。A3類(1)、A17類(2)、A18類(3)である。
軒平瓦は類(4)のみである。丸瓦は5類で全長33.0cmが完形で確認された(5)。また全長
は不明だが、小型の丸瓦9類がみられる。熨斗瓦は17類型2のみ(6)図示したが、他に15
類がみられる。刻印は、丸(7)、丸に一(8)、8弁の菊花(9)、16弁の菊花(10)の4種類
が確認され、いずれも丸瓦に捺されている。

97号遺構(第97図) 本瓦葺きの資料を検出した。小型の瓦が集中している。

軒丸瓦はC4類(1)、A19類(2)、A18類(3)の3型みられ、いずれも小型のもので

ある。軒平瓦は49類（5），54類（4）が検出された。丸瓦は9類中最小で全長24.5cmのものである（6）。刻印はいずれも丸に一（7～8）で，軒丸瓦C 4類と丸瓦9類に捺されている。

100号遺構（第98図） 本瓦葺きの資料を検出した。平瓦，丸瓦は破片が多く，道具瓦を中心に図示した。

軒丸瓦は連珠三つ巴文A 8類（2）のみ検出された。丸瓦は破片であるが刺し縫いが荒く施されている資料を含み，丸瓦5類と9類が混在していると考えられる。道具瓦は輪違瓦3類（4），用途不明の瓦（1）。海鼠瓦は釘穴が中心よりにみられる2類（3）が検出された。

150号遺構（第98図） 本瓦葺きの資料を検出した。熨斗瓦が中心にみられ，そのほとんどが15類であり，36号遺構に図示したものと同一のためここでは，15類以外のもののみを図示した。

軒平瓦は56類（5）のみ検出された。図示した熨斗瓦はいずれも厚手のものである。中心飾りに梅鉢を配する1類（6）と2類（7）がみられる。7には分割線が凹面に施されている。

105号遺構（第105・106図） 本瓦葺きの資料を検出した。

軒丸瓦は無剣梅鉢紋A13類が検出されているが図示しなかった。軒平瓦は22類（3），44類（4），38類（5）の3種類を検出した。丸瓦は9類（第18図1・2）で全長32.0cmの完形品が多く検出された。熨斗瓦は厚手の4類（7）。面戸瓦は1類（2）と2類（1）の小型のものがみられる。6はおそらく鳥伏間か隅軒丸瓦と考えられる。刻印は丸と六角形と丸に一のみである。丸は熨斗瓦に，他は丸瓦に押されていた。

105号瓦集中層（第99～105図） 良好な一括廃棄がみられた地点である。特殊な形態をした丸瓦12類と平瓦3類の瓦が供伴して検出された。丸瓦・平瓦ともに接合率がよく完形になるものが多くみられる。

軒瓦は点数，種類とも少なく，軒丸瓦は無剣梅鉢紋A19類（第99図1）が3点，軒平瓦4類（第99図2）が1点の1種類ずつのみである。丸瓦は12類のうちa（第100図1），c（第100図2），d（第101図1），e（第99図3）が検出された。平瓦3類は大型のもの（第101図2，第102図1）が多く，布目が凹面に残るものや小型のものも若干みられる。平瓦3類には筋違瓦は2形態みられる（第102図2，第103図1・2，第104図1・2）。熨斗瓦も小型の7類がみられ，中心に無剣梅鉢文を配している（第104図4・6）。棟込み瓦の一種と考えられる三角形の瓦が多数検出され（第103図3～6），長さが8cm～12cmまでほぼ1cm刻みでみられる。また，側面に唐草3反転の文様をもつ第104図3と5は平面形，断面形ともにやや変わったもので，熨斗

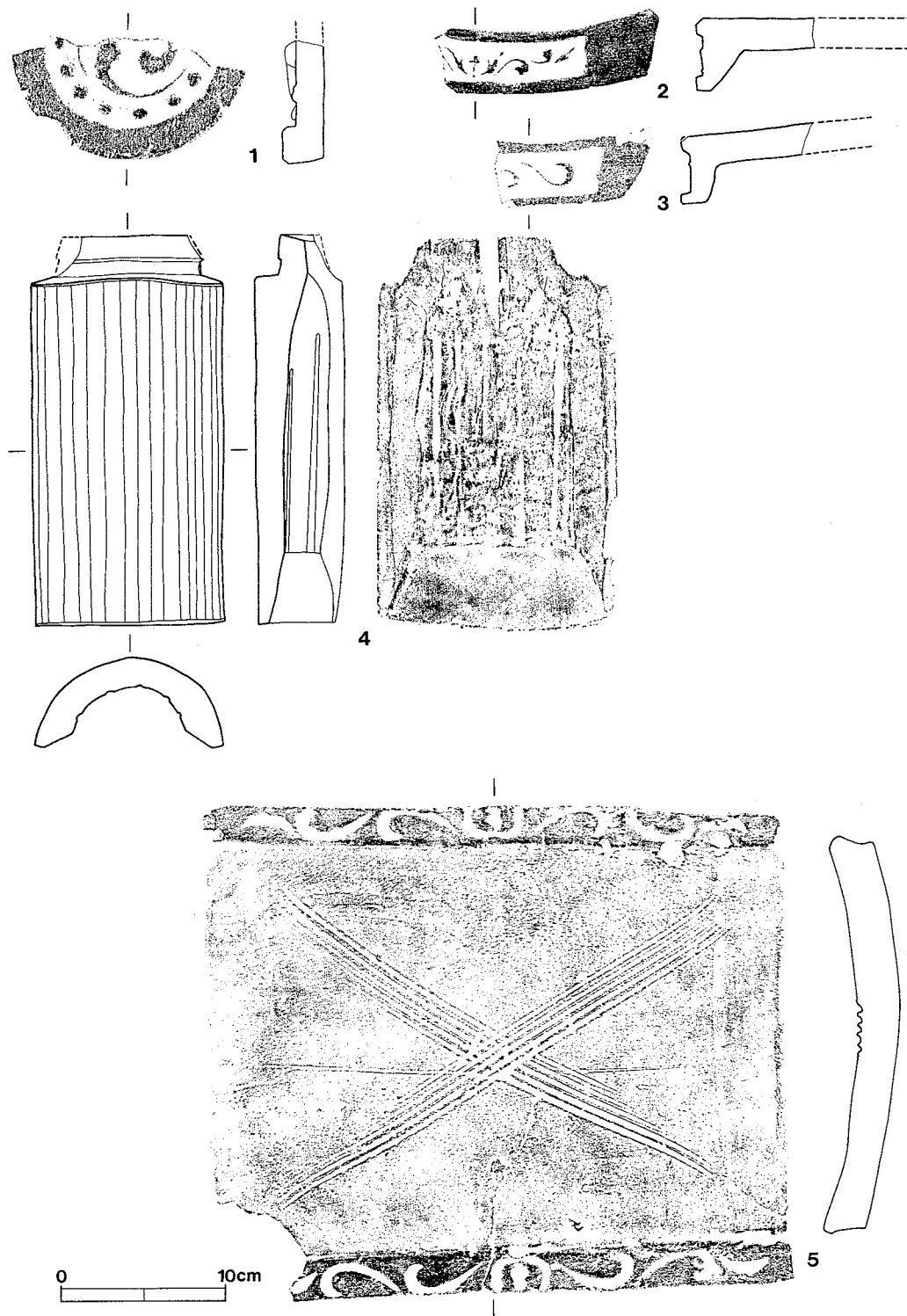
瓦12類に分類した。

140号瓦集中層（第107図～第115図） 本瓦葺きの瓦を検出した。瓦落ちの状況で検出され、平瓦、丸瓦の良好な資料が検出された。

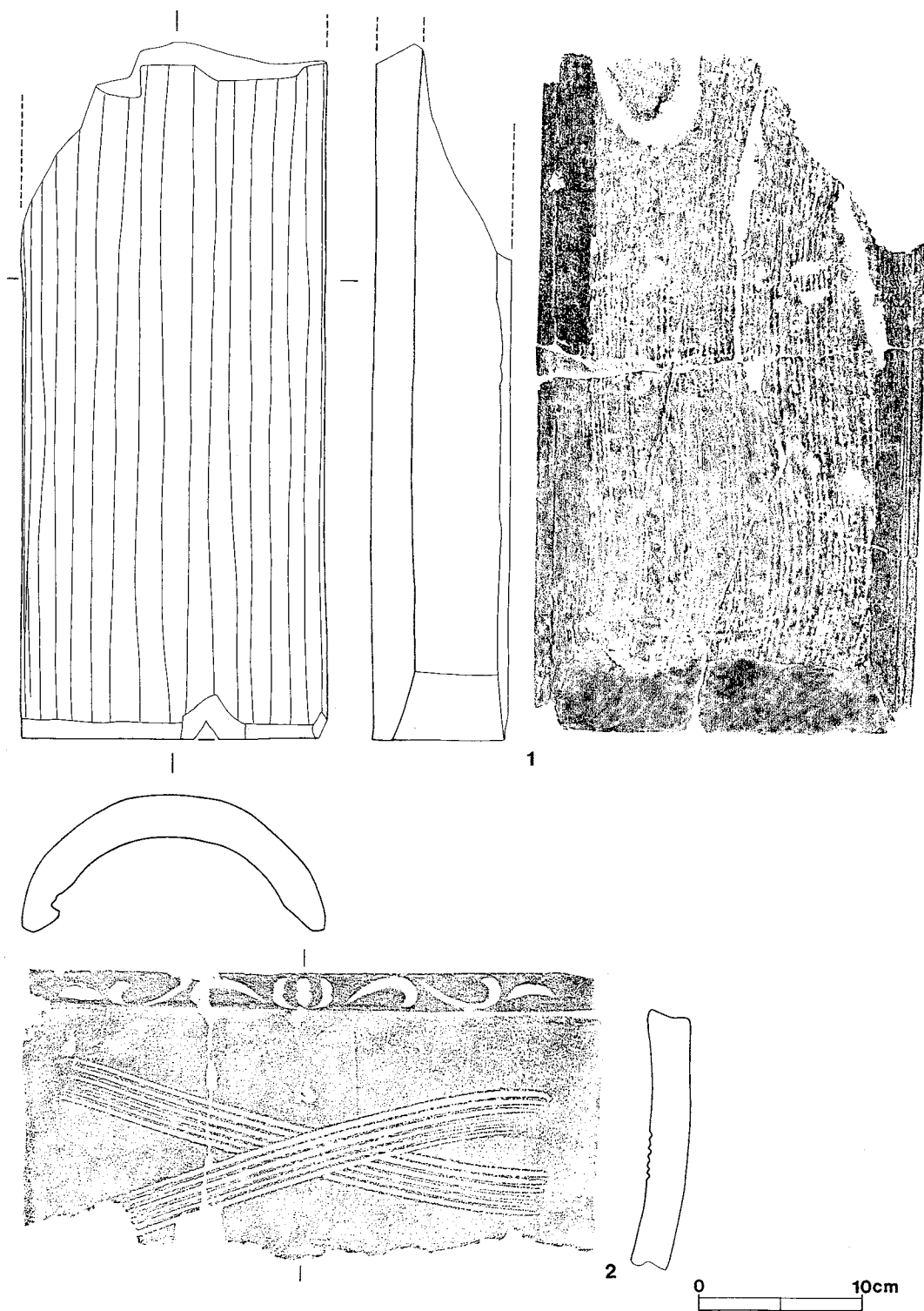
軒丸瓦は無剣梅鉢紋が6 範型、連珠三つ巴文が7 範型みられる。無剣梅鉢紋はA14類が中心で30点検出された（第107図1・2）。A5類（第107図3）、A20類（第107図4）、A13類（第108図1）、A16類（第108図2）、A18類（第108図3）が1点づつ検出された。連珠三つ巴文A8類（第108図4）、A9類（第109図1）、A7類（第109図2）、B3類（第109図3）、B5類（第109図4）、B7類（第110図1）、C13類（第110図2）が検出された。軒平瓦は19類範型1（第○図1・2）が中心に33点検出された。8 類範型1（第110図3）、17類（第110図3）、20類（第111図1、2）、22類（第111図6）、34類（第111図4）、35類範型1（第111図8）、43類（第111図9）、46類（第111図7）、52類（第111図5）がみられる。

丸瓦は9類のみで全長35.0cm（第112図1）と全長29.0cm（第112図2、第113図1）がみられ、後者が中心に検出されている。平瓦は1類で全長が28.0cm（第114図3、第115図1）と24.0cm（第114図1・2）の資料が多くみられ、前者が中心に検出された。1点のみ大型の全長33.0cmのものが縦方向に半割された状態で検出された（第115図2）。熨斗瓦は少ないが15類が中心に検出されている。図示したものは条線のない資料（第113図2）と2類（第113図3）である。ほかに輪違瓦（第113図5）と玉縁をもたない丸瓦（第113図4）がみられる。海鼠瓦4類がみられる（第115図3）。

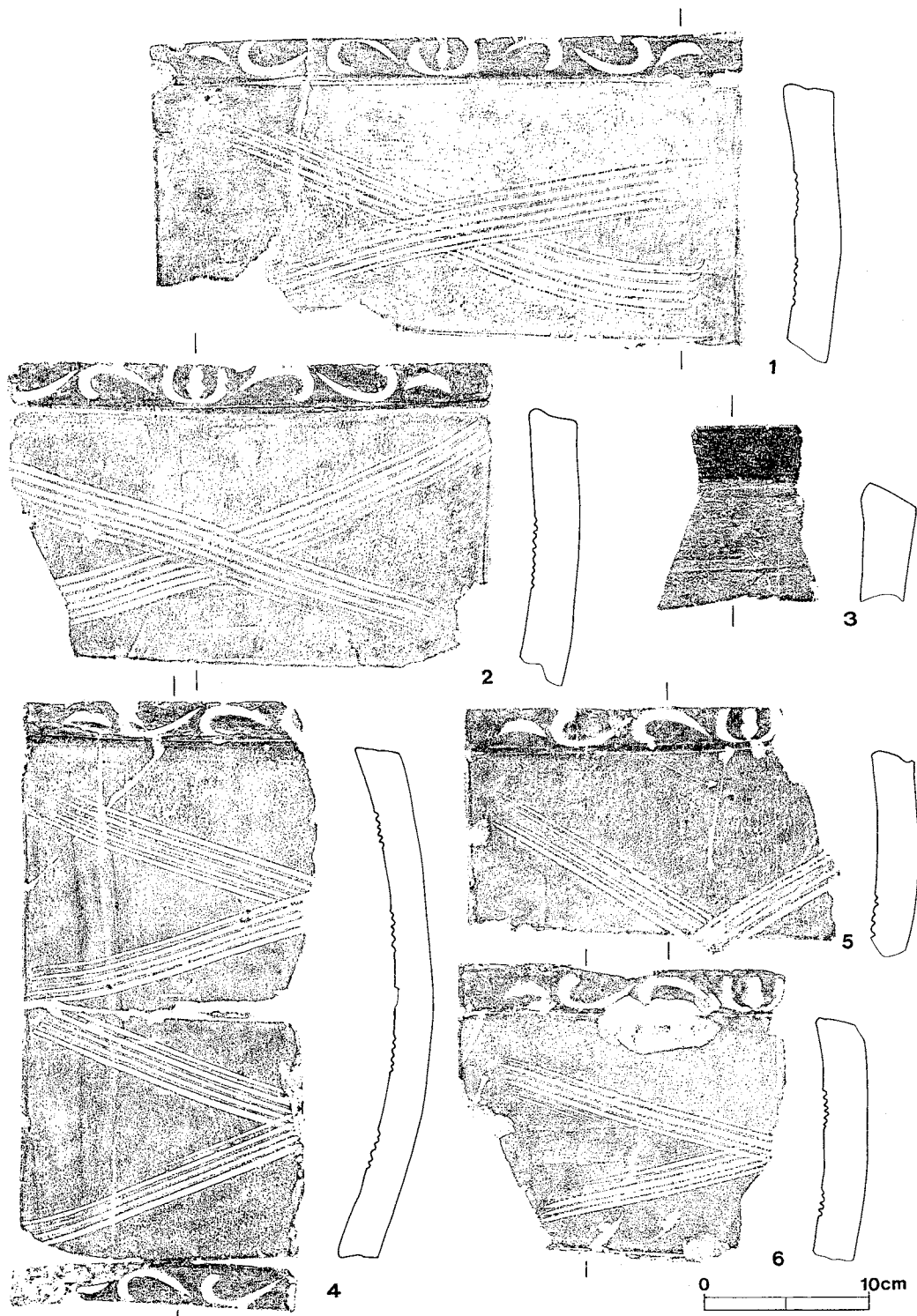
その他の遺構・遺構外（第116図～第124図） ここでは、前述した種類以外の資料のみを図示したが、その大部分が御殿下記念館地点と重複するので、ここでは説明をばぶく。考察編を参照していただきたい。



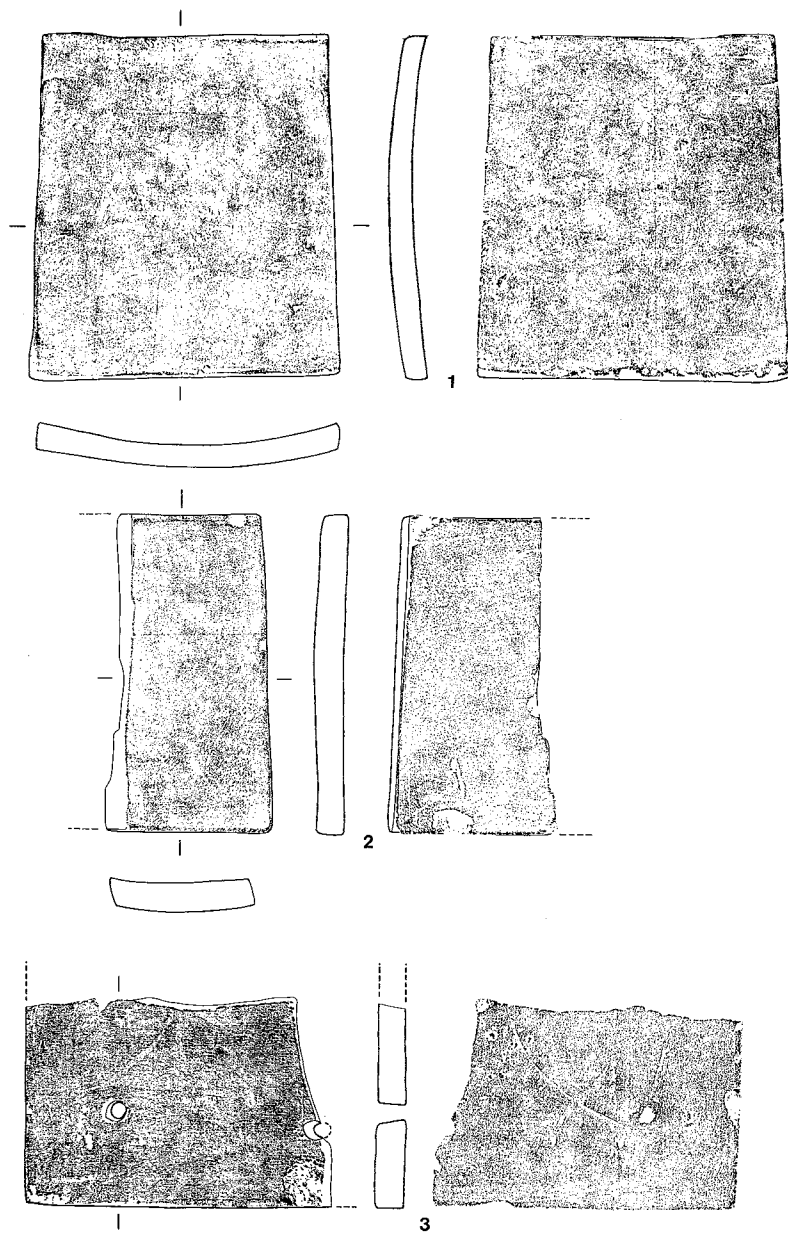
第89图 36号遺構出土瓦(1) 軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦(1)・熨斗瓦(1)



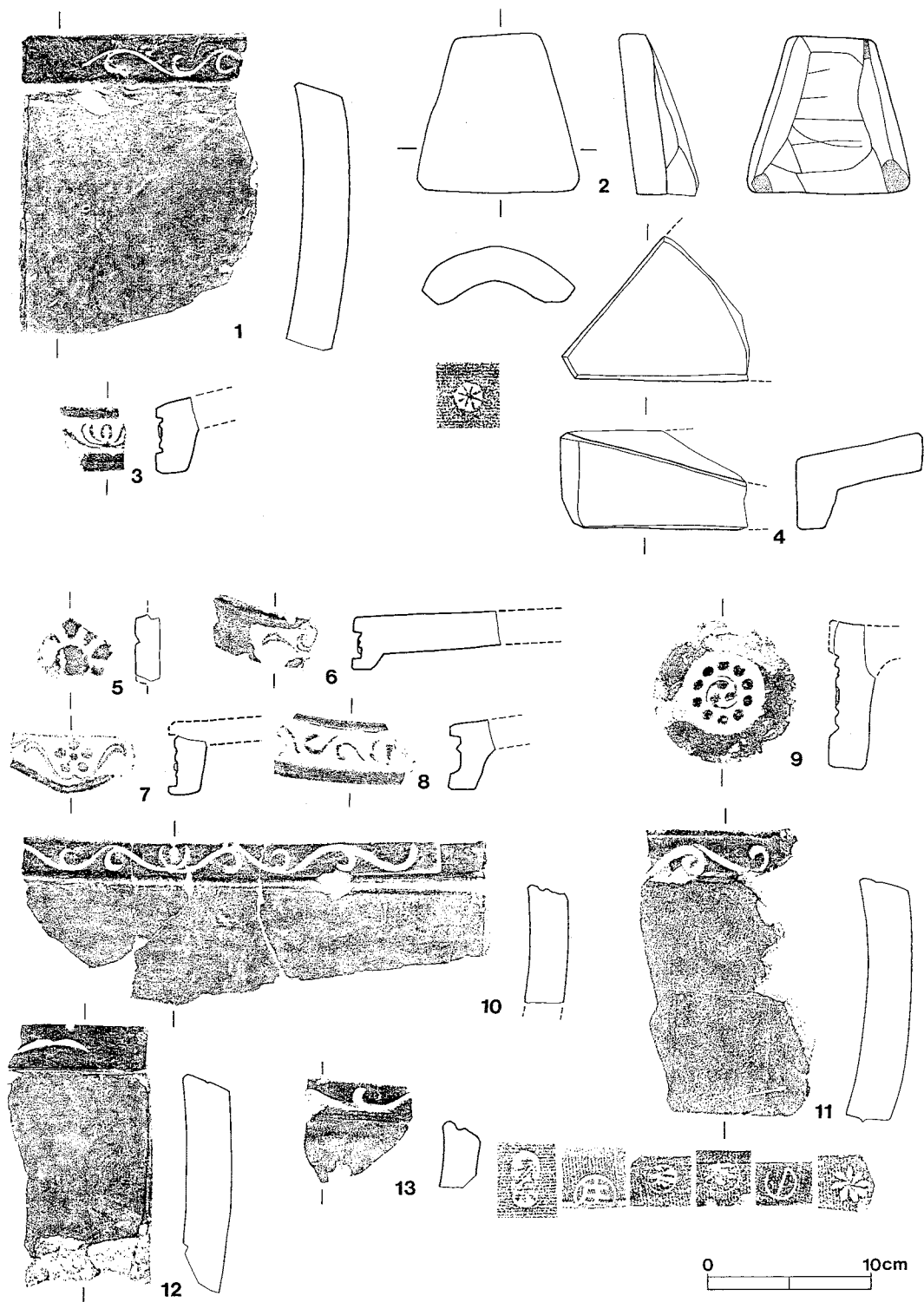
第90图 36号遺構出土瓦(2) 丸瓦(2)・熨斗瓦(2)



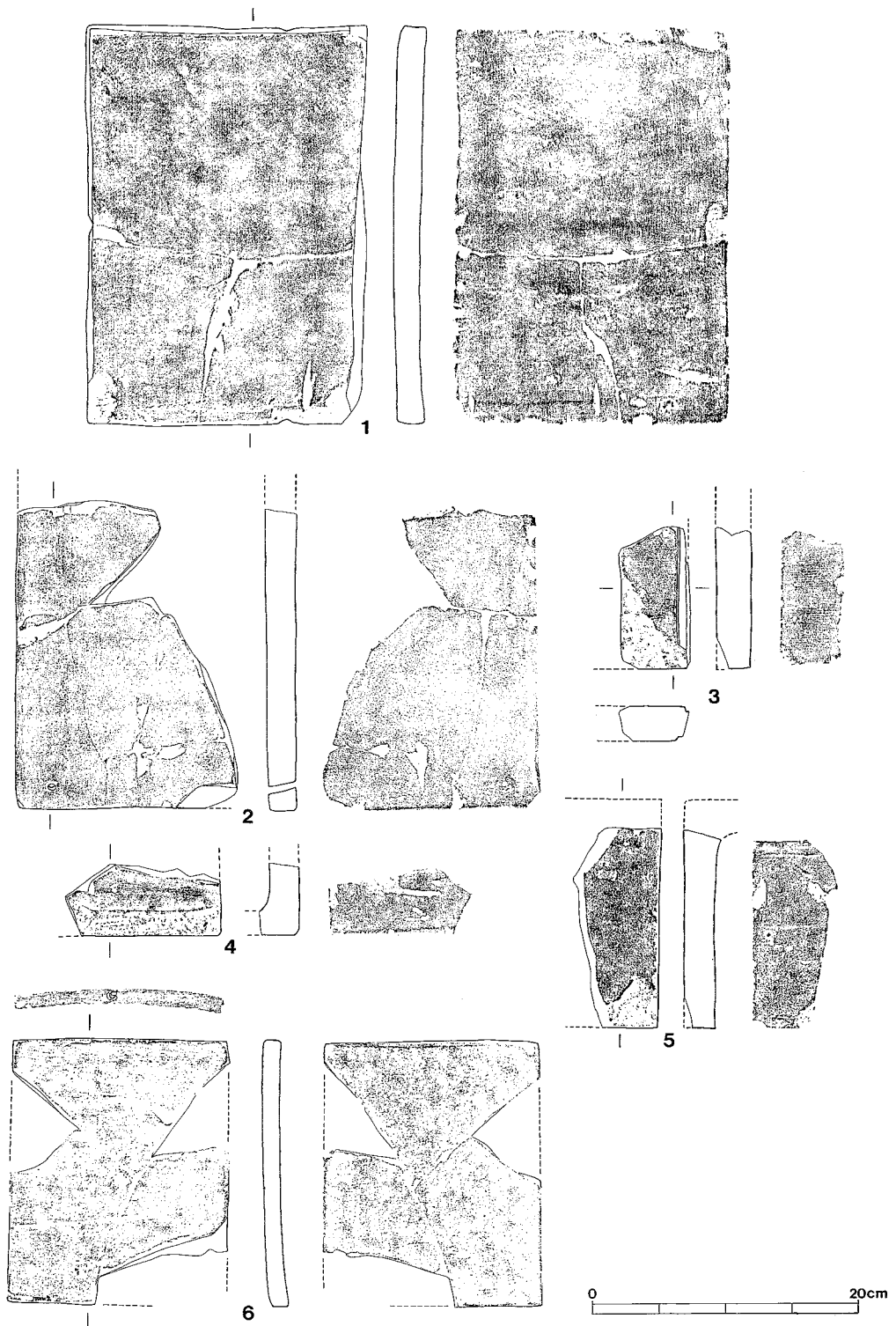
第91图 36号遺構出土瓦(3) 熨斗瓦(3)



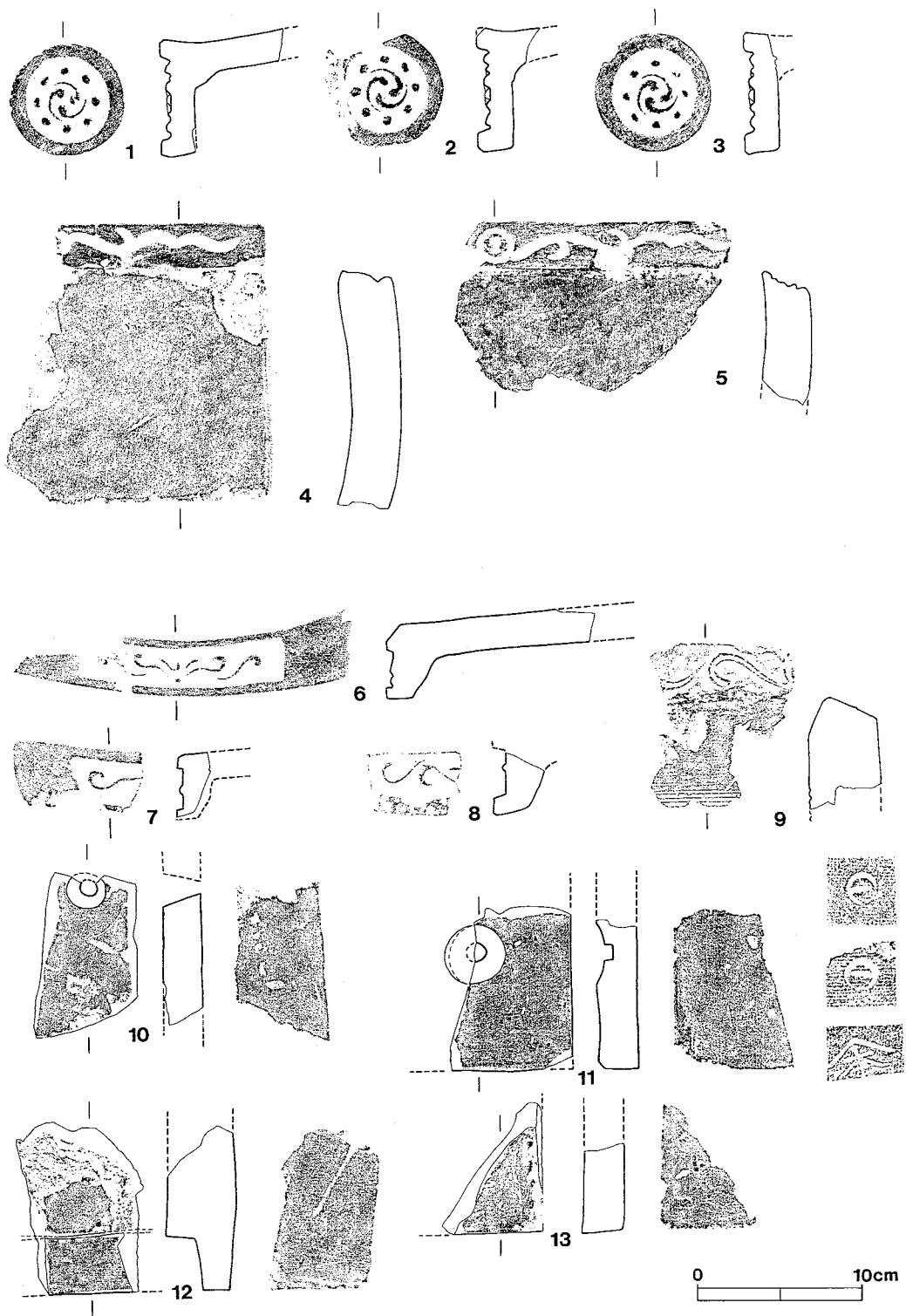
第92図 36号遺構出土瓦(4) 平瓦・海鼠瓦



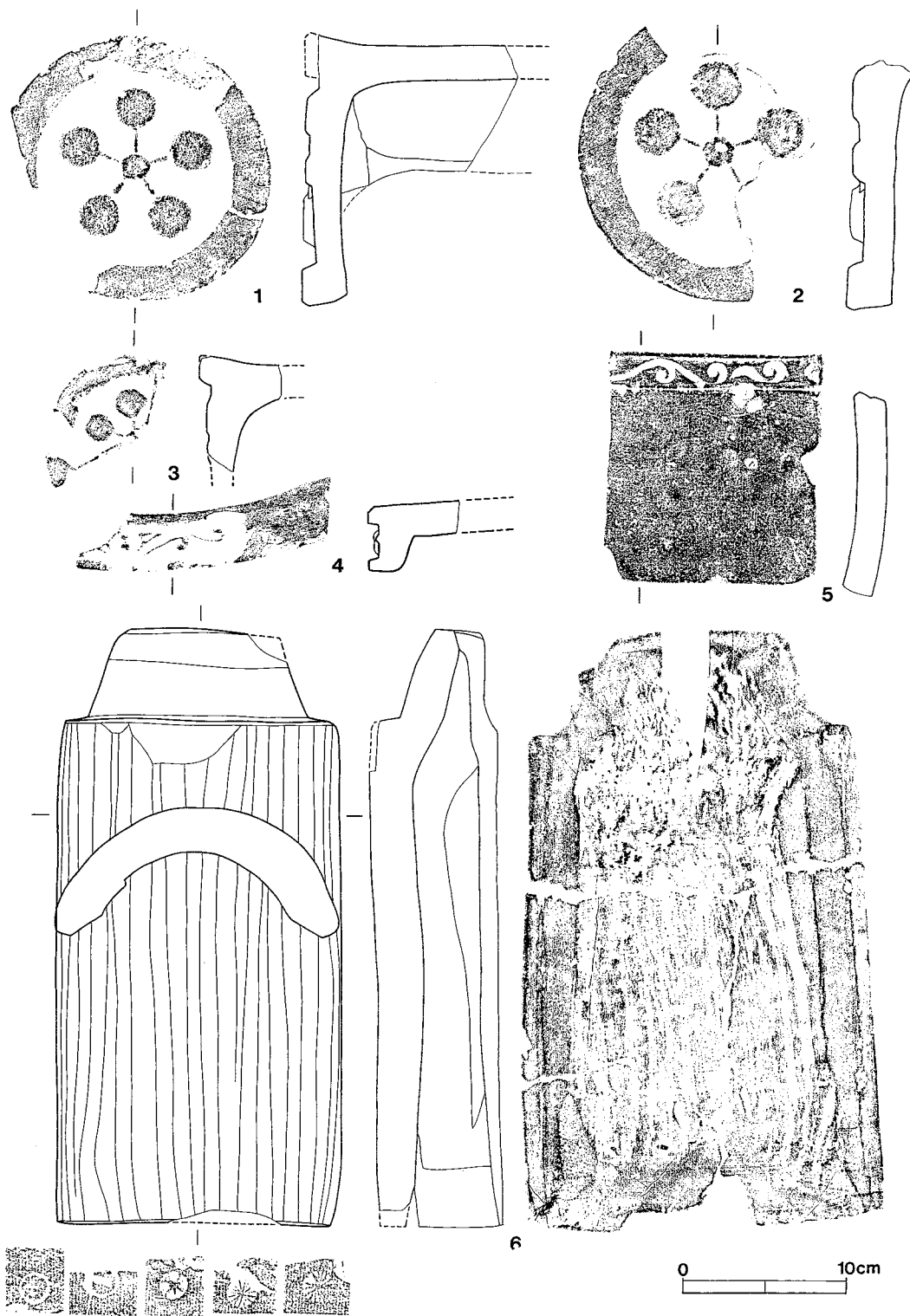
第93图 39号遺構出土瓦, 49号遺構出土瓦(1)



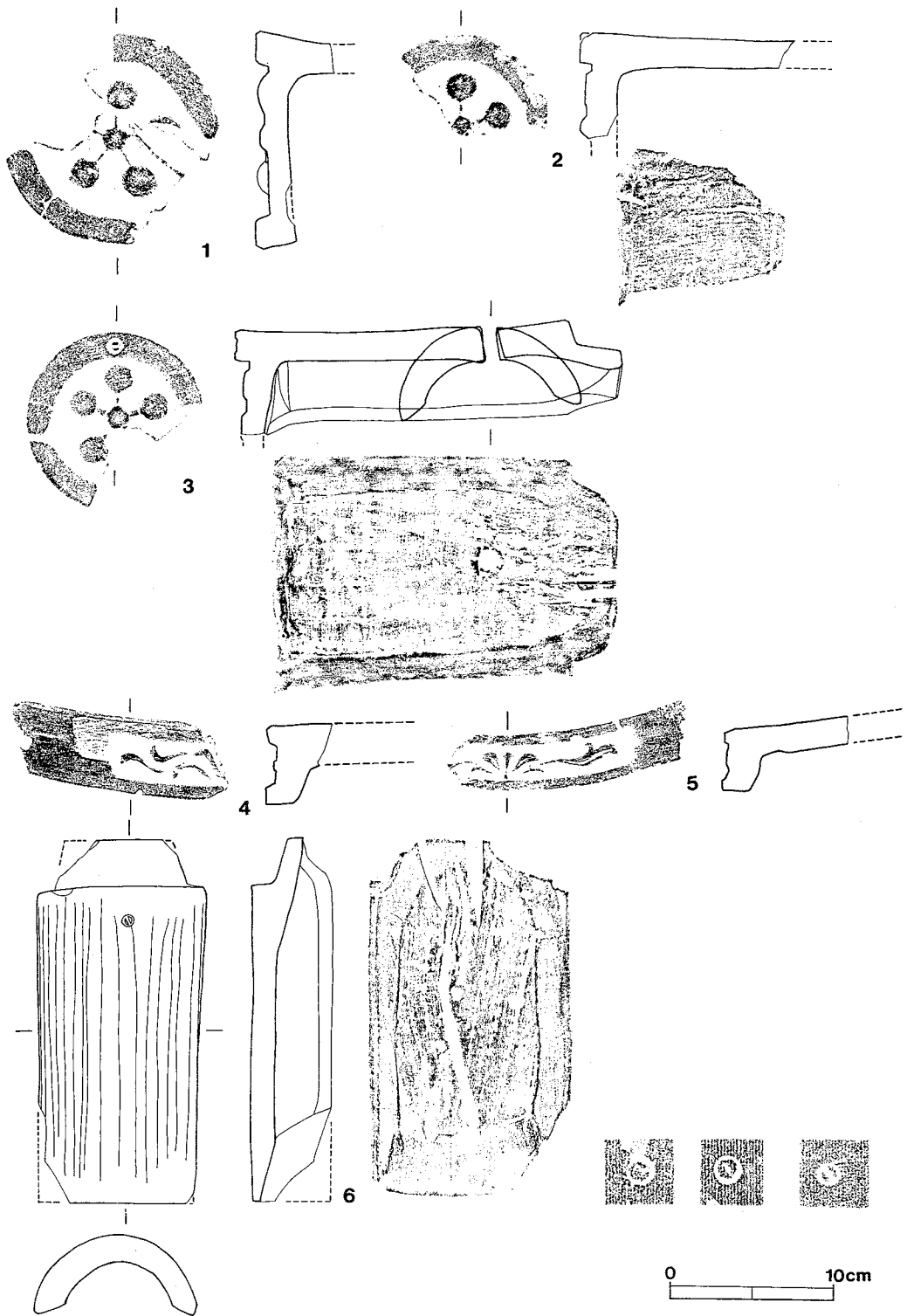
第94図 49号遺構出土瓦(2) 海鼠瓦・平瓦



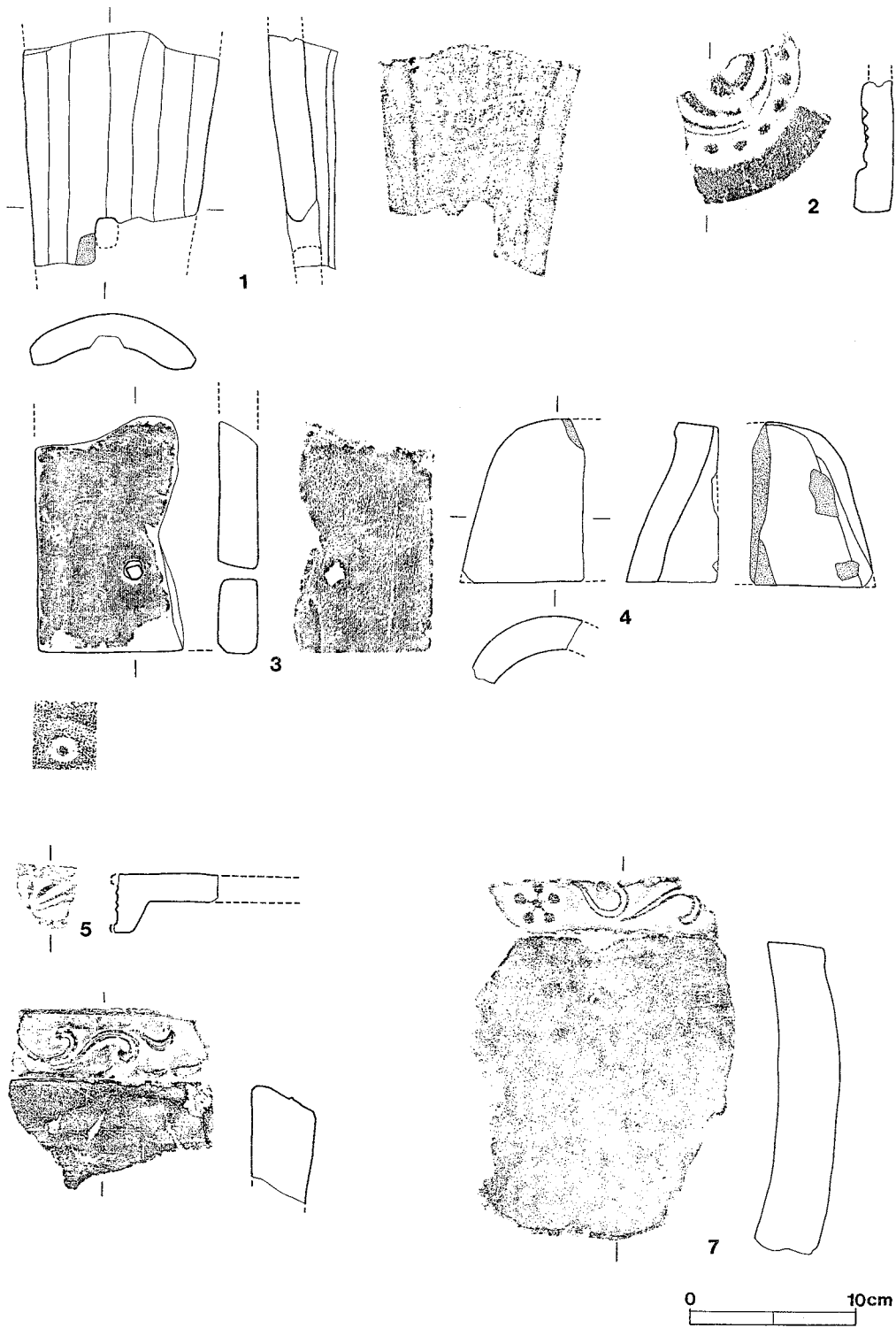
第95图 88号遺構出土瓦，4号遺構出土瓦



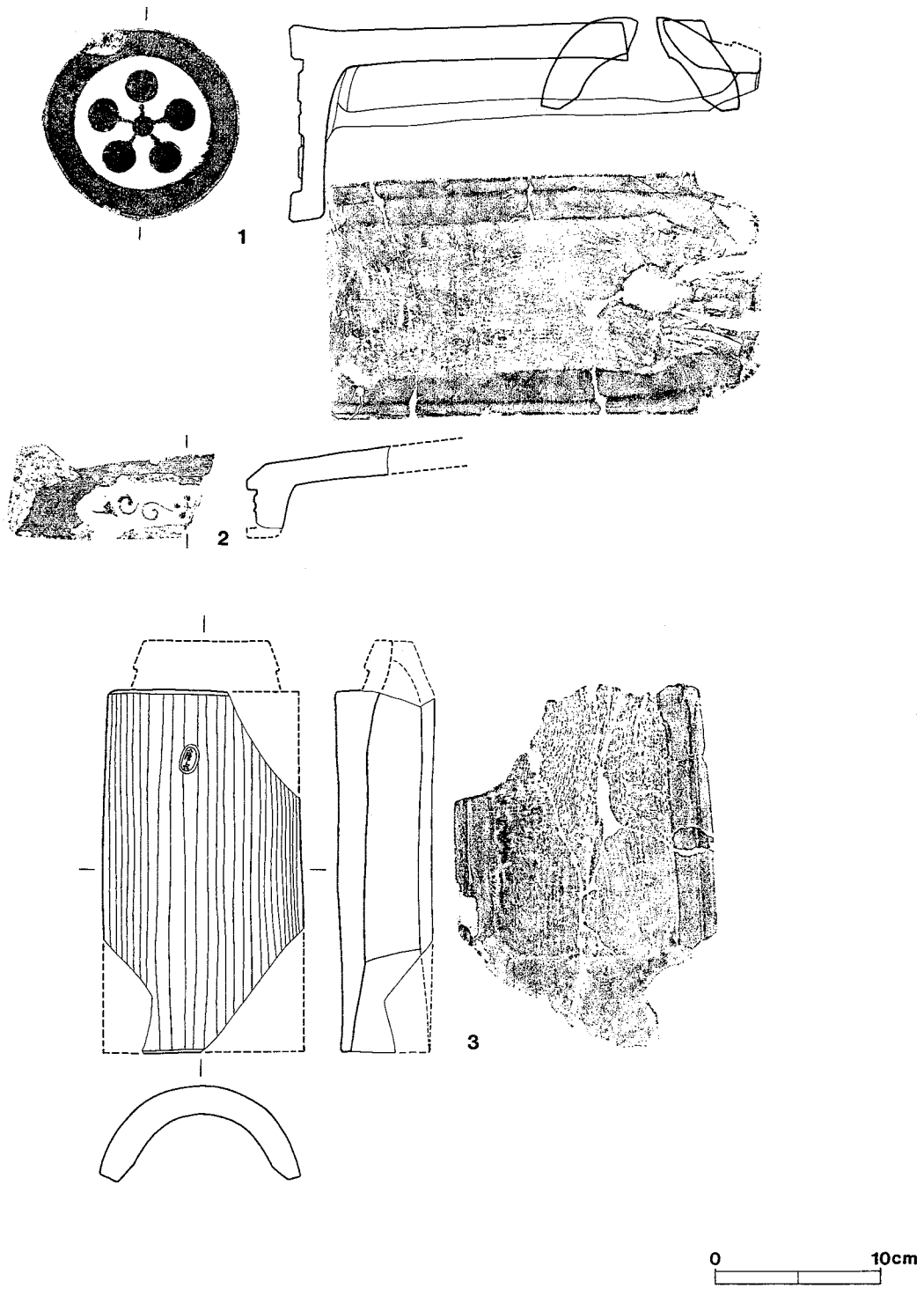
第96図 93号遺構出土瓦



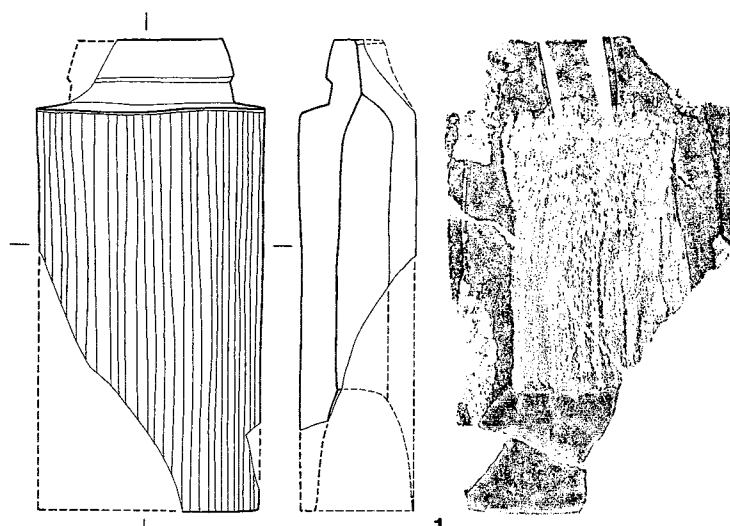
第97图 97号遺構出土瓦



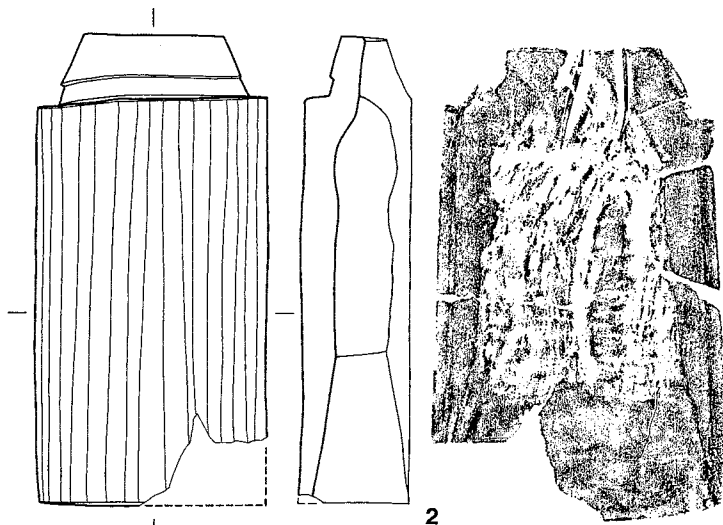
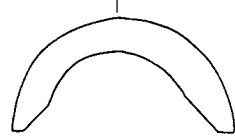
第98图 100号遺構出土瓦, 150号遺構出土瓦



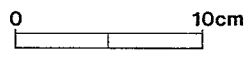
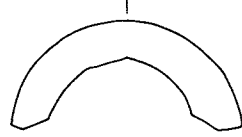
第99图 105号遺構瓦集中層出土瓦(1) 軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦(1)



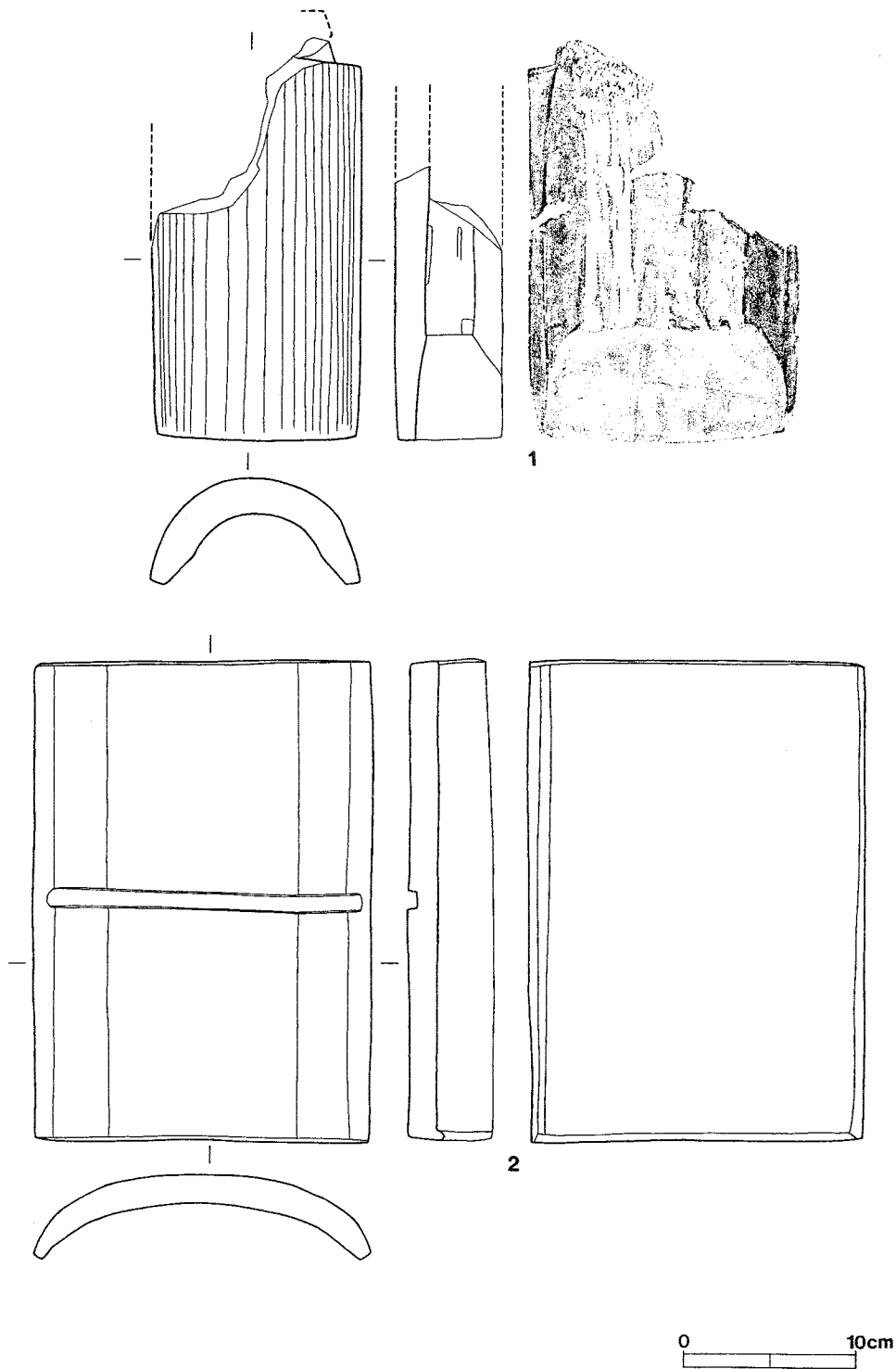
1



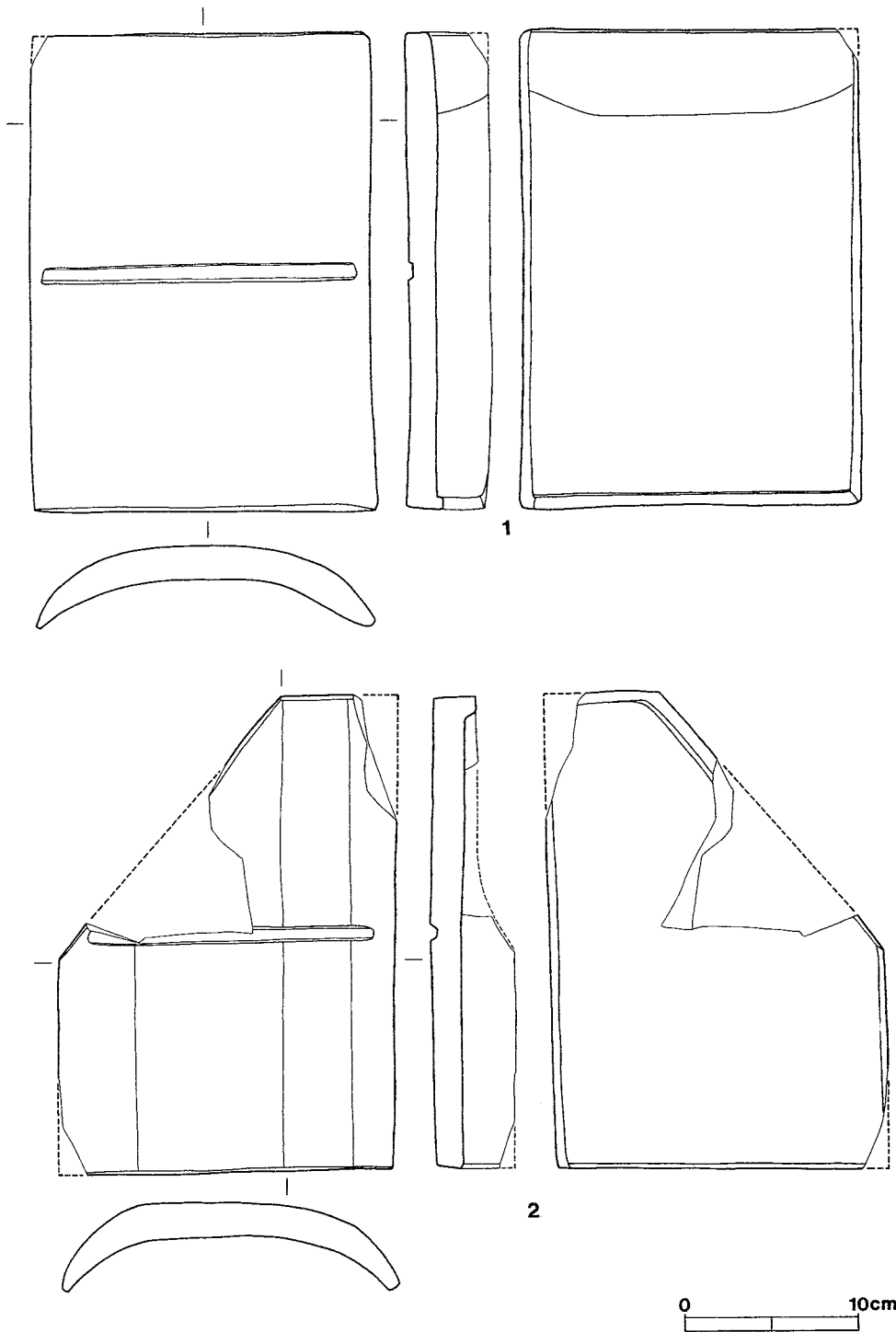
2



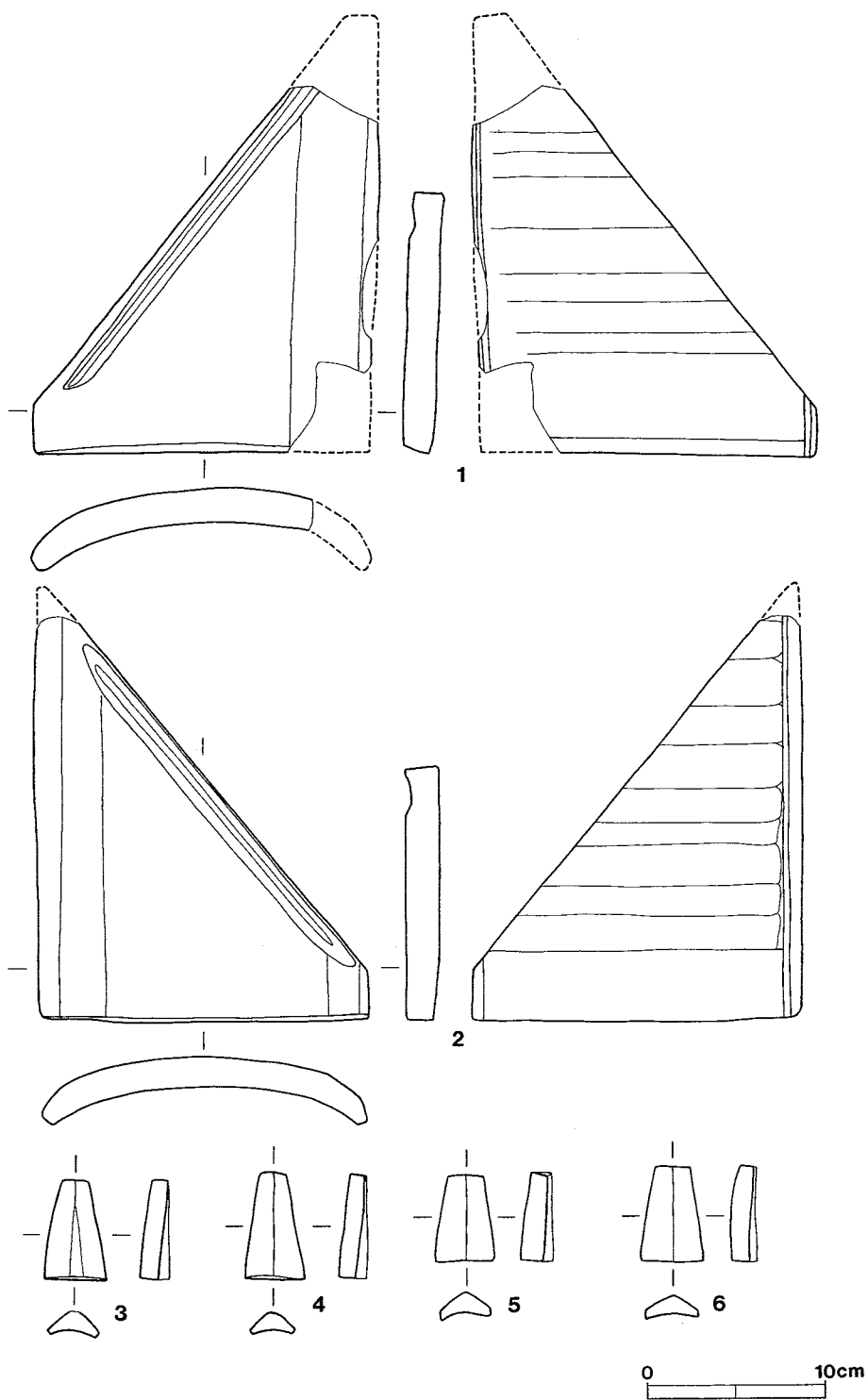
第100図 105号遺構瓦集中層出土瓦(2) 丸瓦(2)



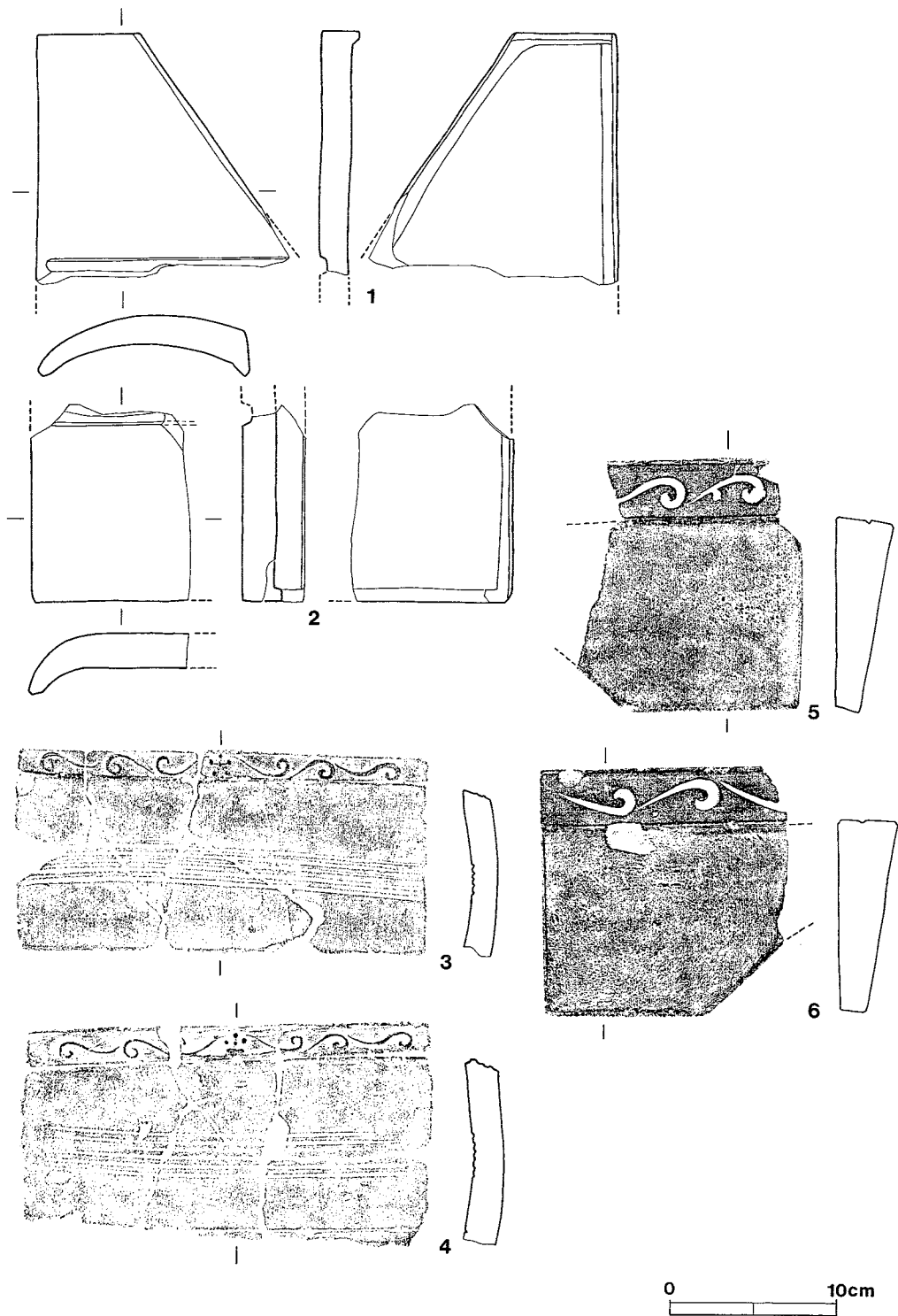
第101图 105号遺構瓦集中層出土瓦(3) 丸瓦(3)・平瓦(1)



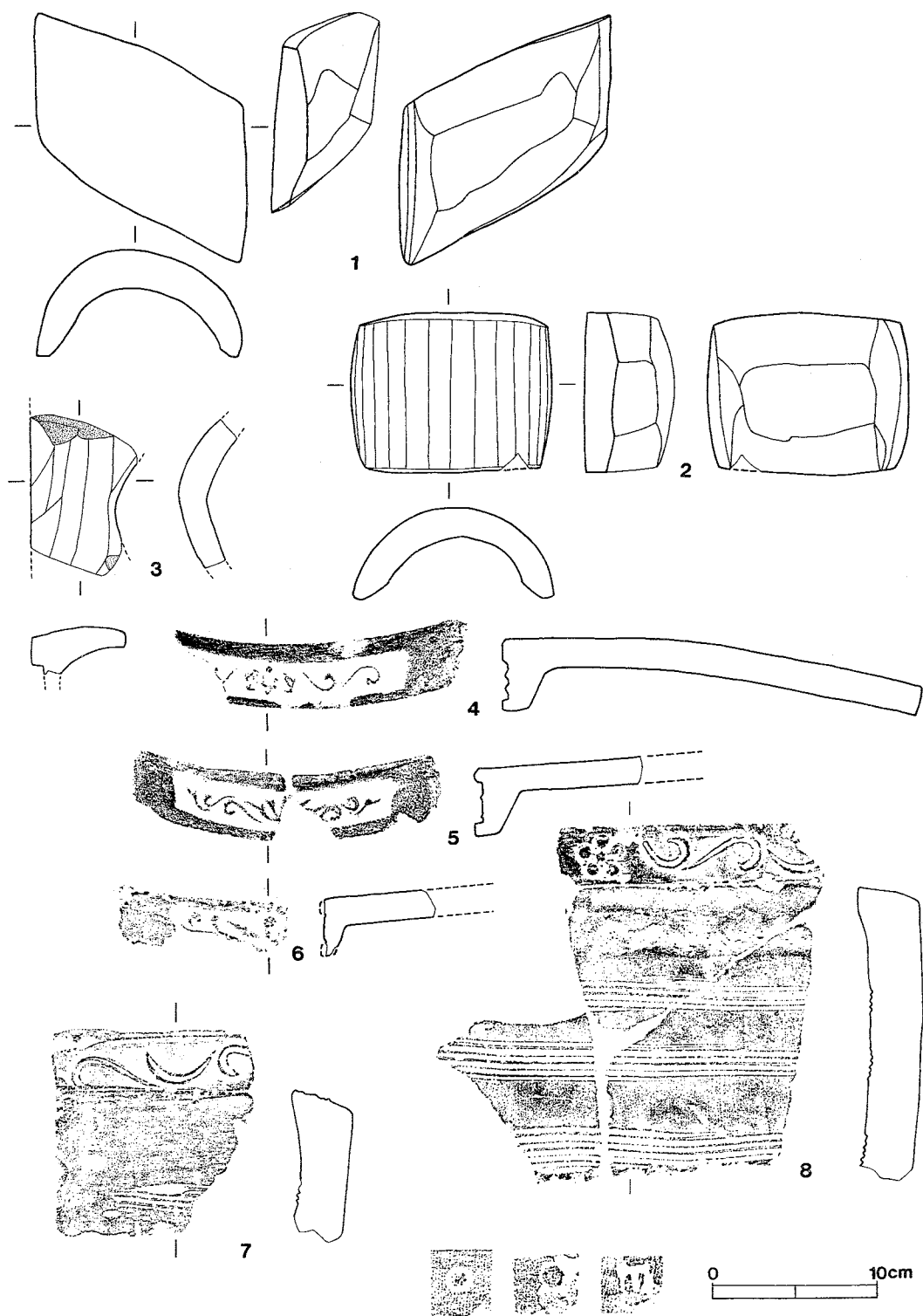
第102図 105号遺構瓦集中層出土瓦(4) 平瓦(2)・切平瓦(1)



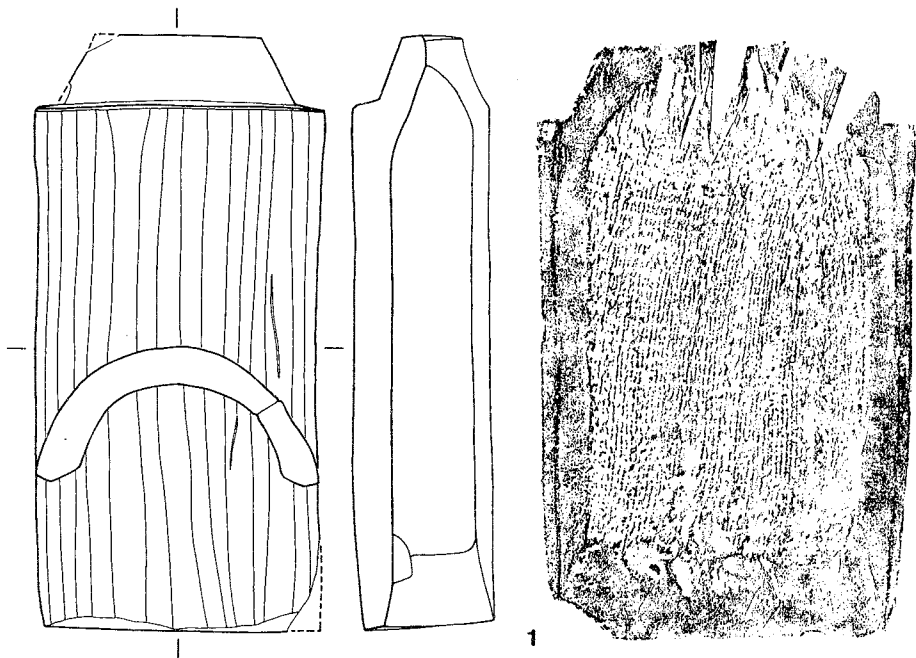
第103图 105号遺構瓦集中層出土瓦(5) 切平瓦(2)・道具瓦(1)



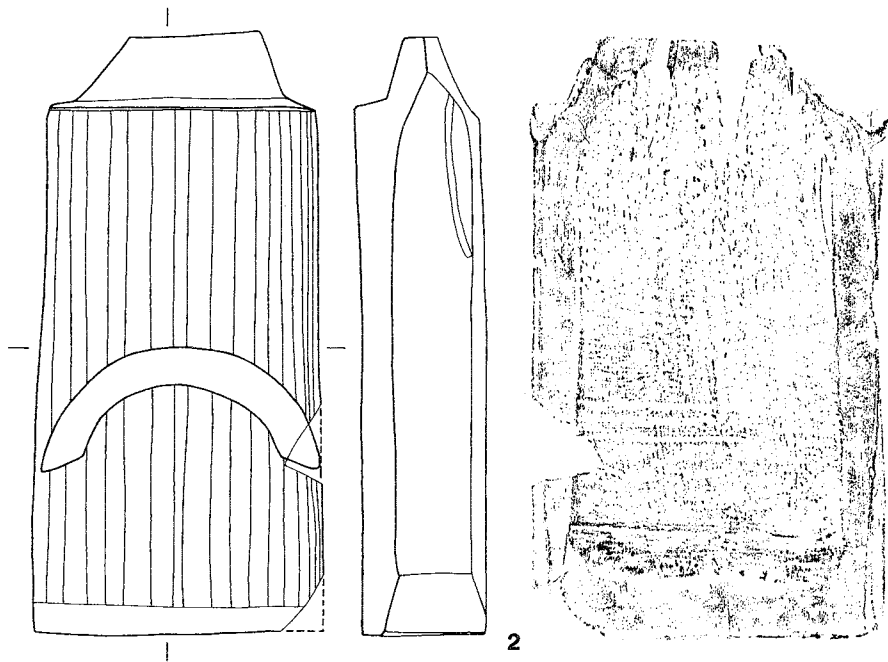
第104图 105号遺構瓦集中層出土瓦(6) 切平瓦(3)・熨斗瓦



第105图 105号遺構瓦集中層出土瓦(7) 道具瓦(2), 150号遺構出土瓦(1)



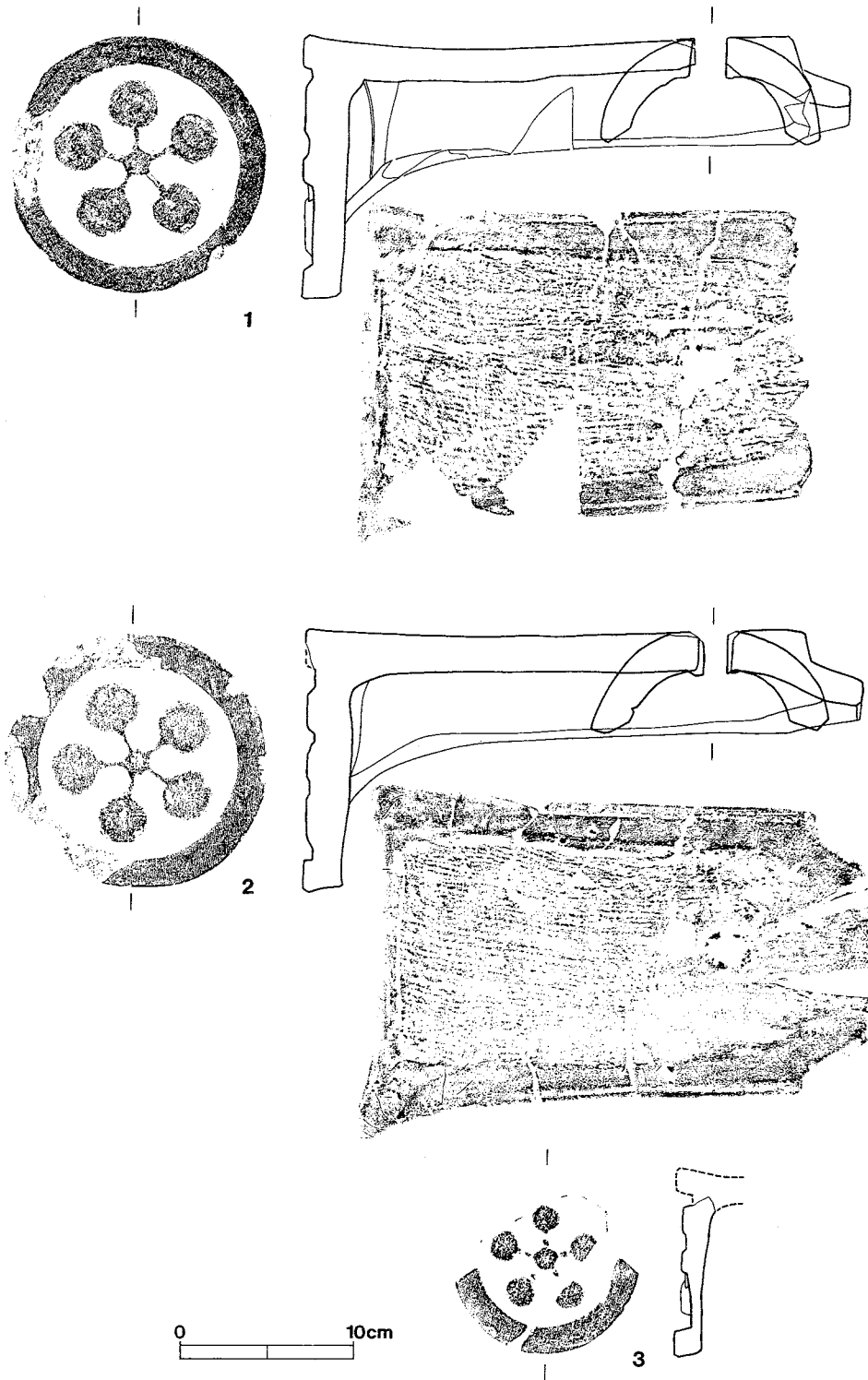
1



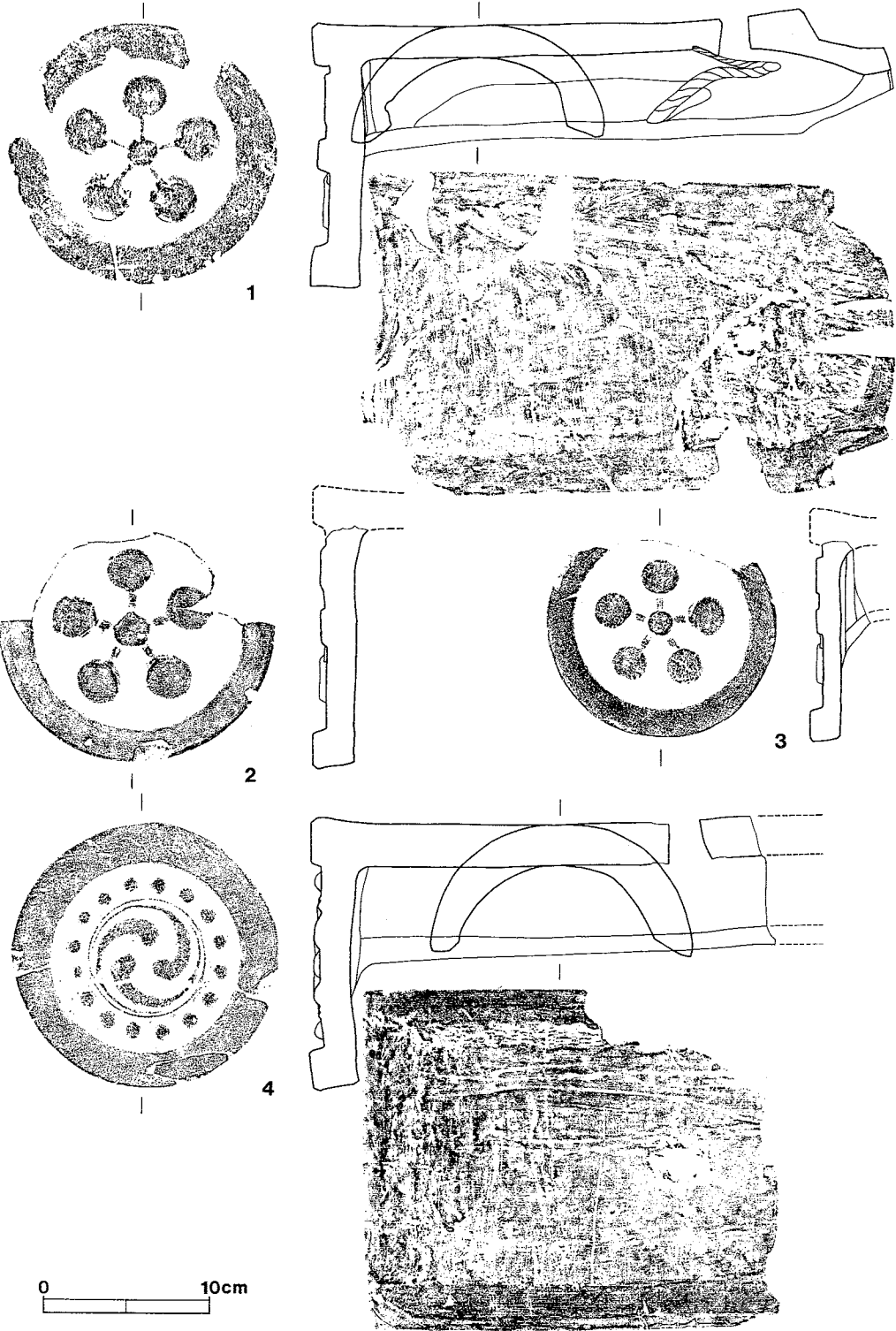
2

0 10cm

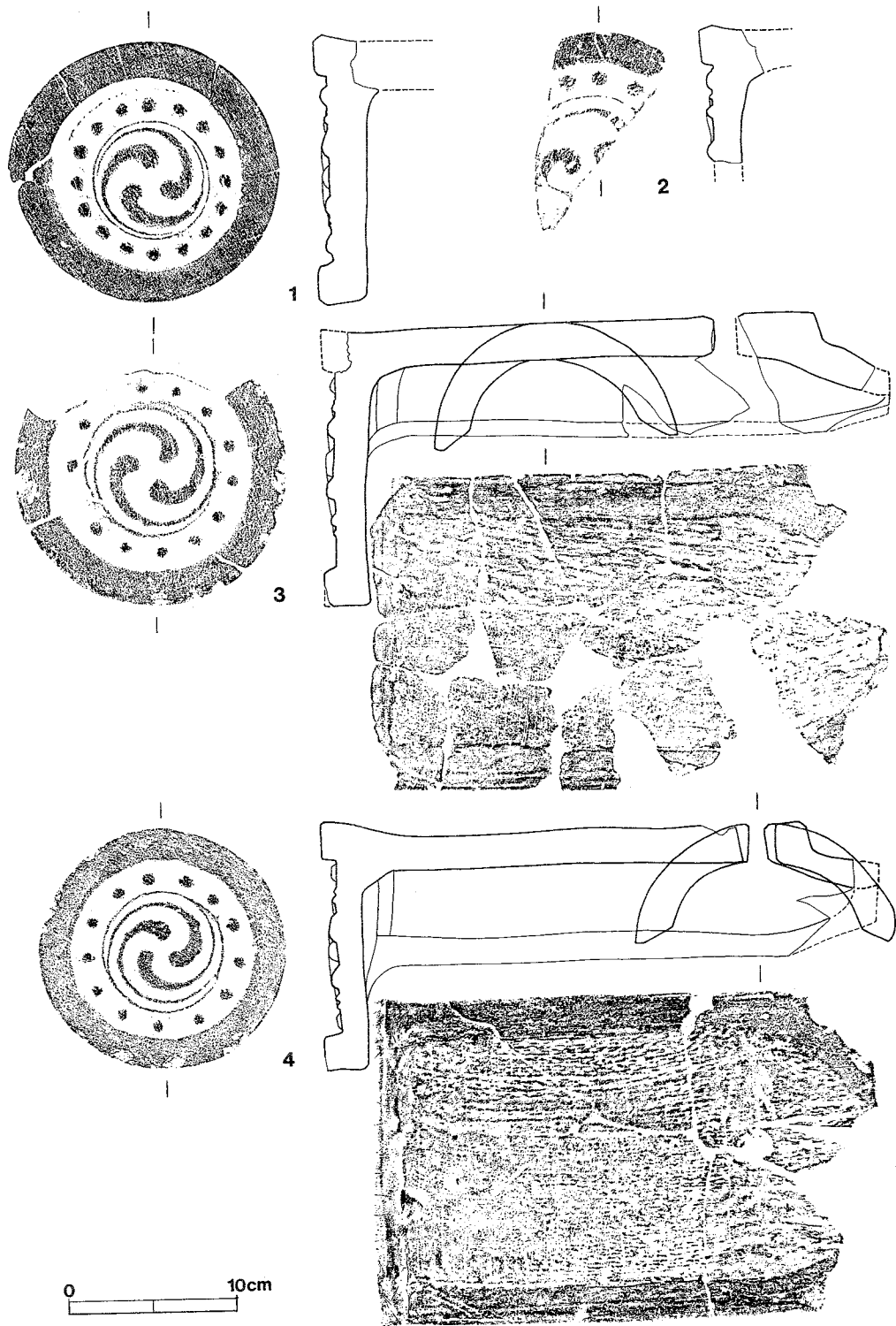
第106图 150号遺構出土瓦(2) 丸瓦



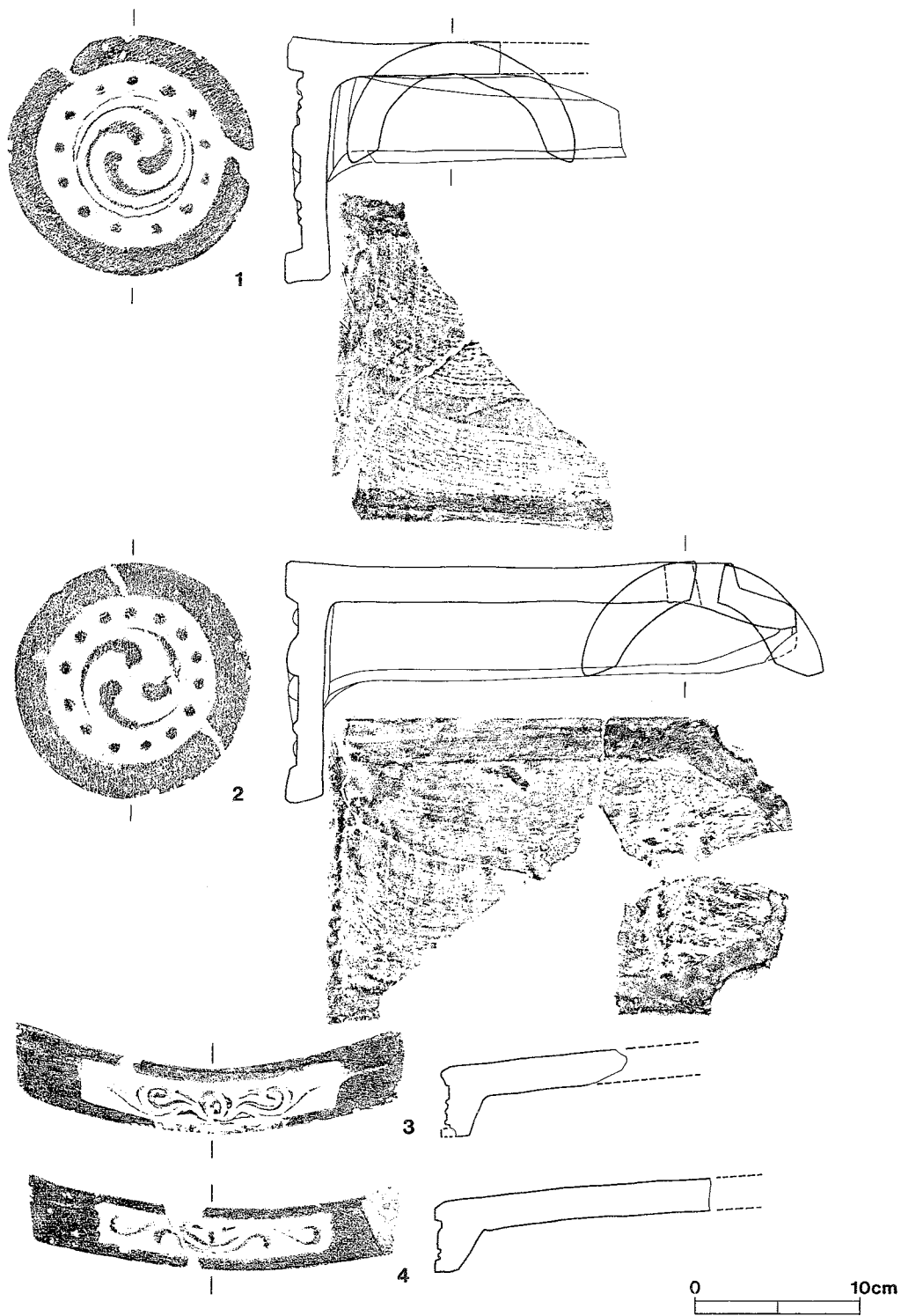
第107图 140号瓦集中層出土瓦(1) 軒丸瓦(1)



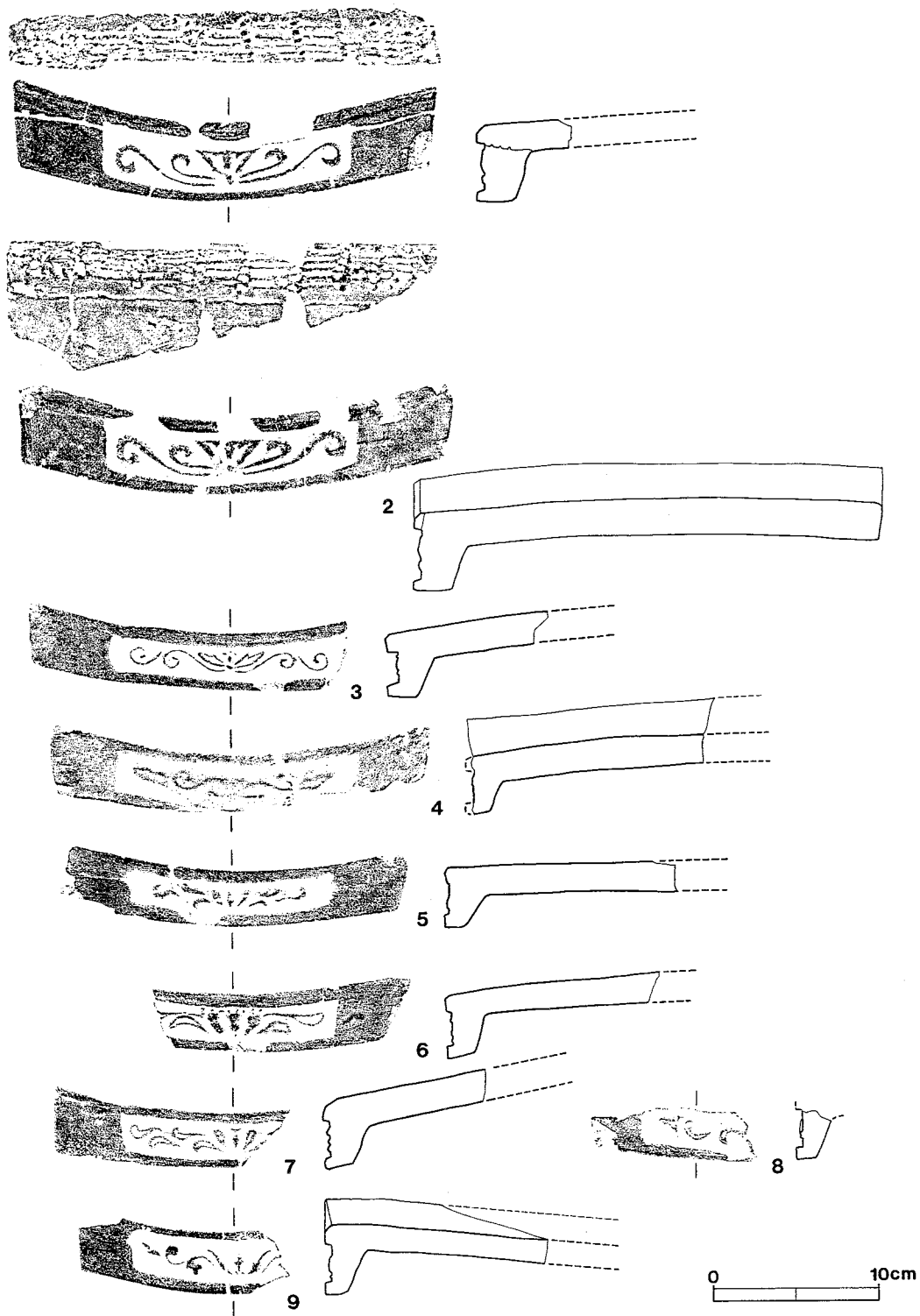
第108図 140号瓦集中層出土瓦(2) 軒丸瓦(2)



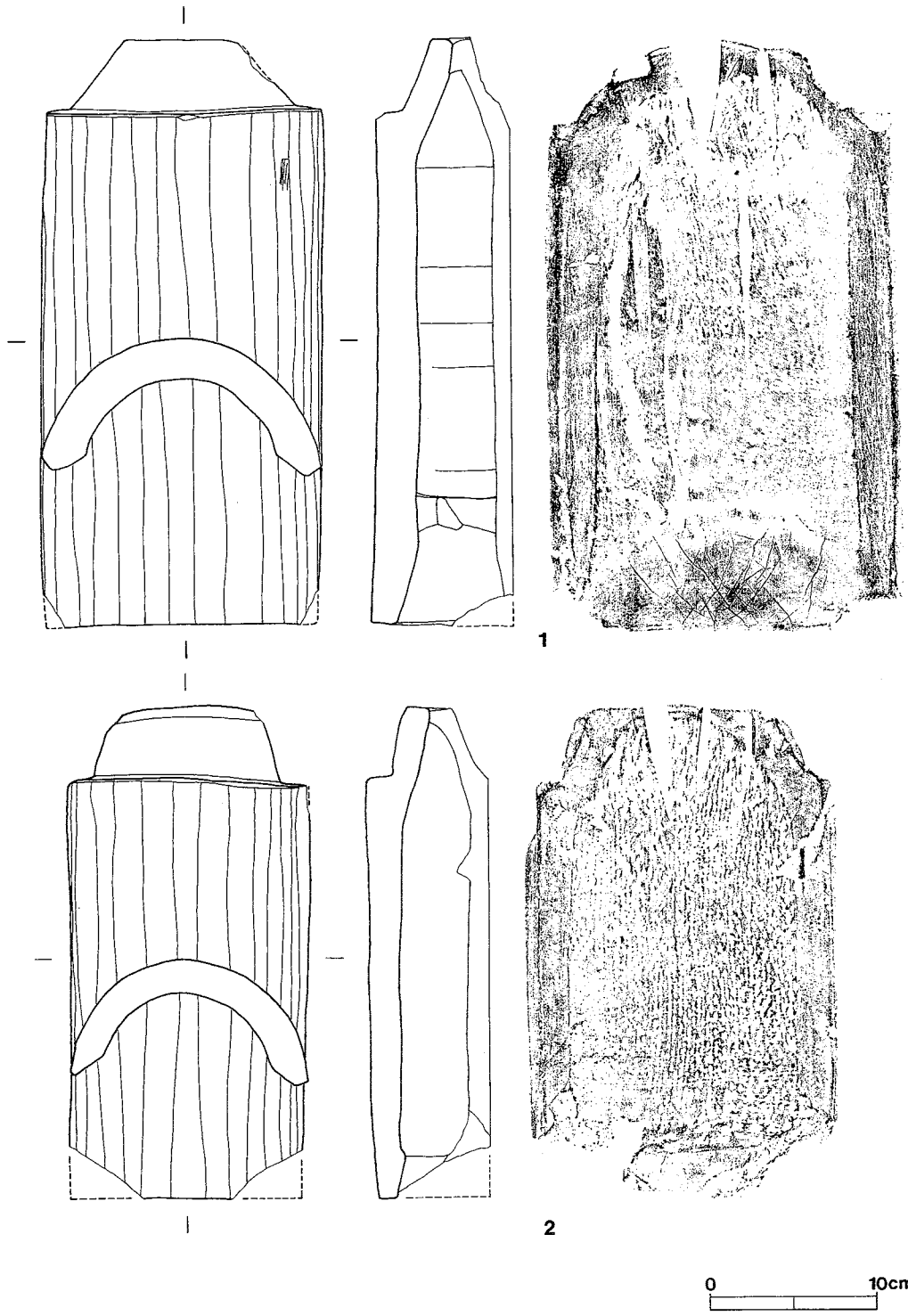
第109图 140号瓦集中層出土瓦(3) 軒丸瓦(3)



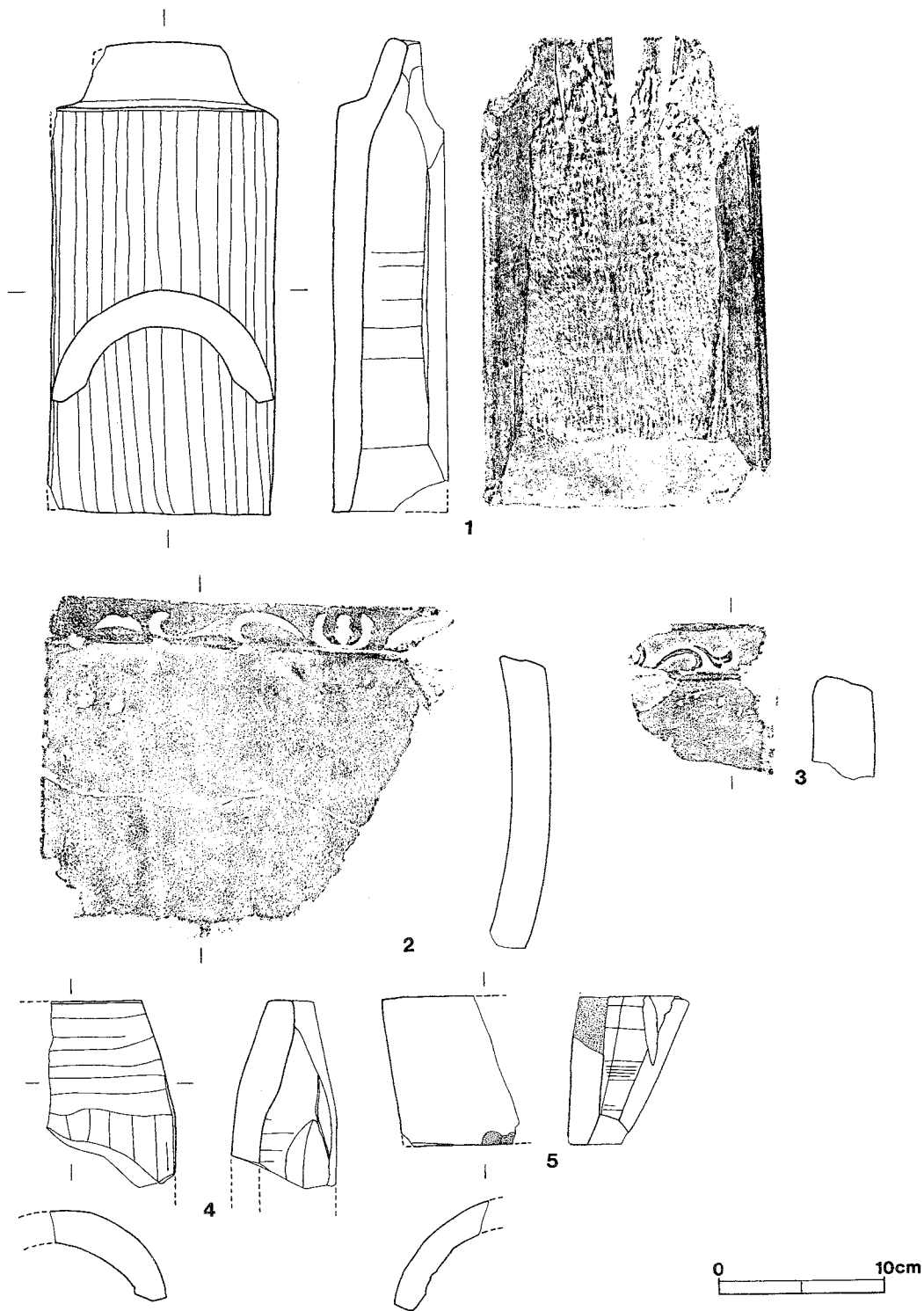
第110图 140号瓦集中層出土瓦(4) 軒丸瓦(4)·軒平瓦(1)



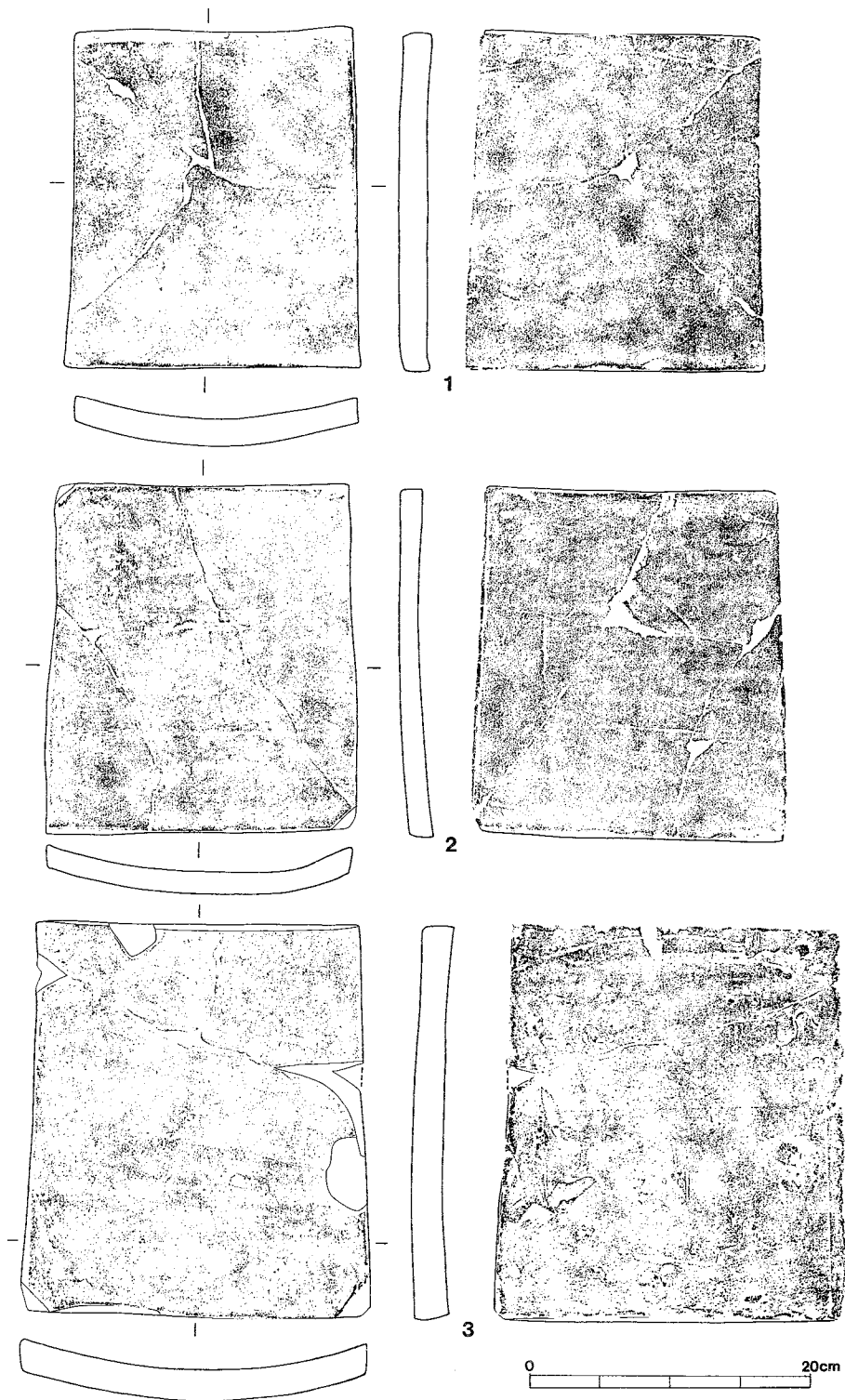
第111图 140号瓦集中層出土瓦(5) 軒平瓦(2)



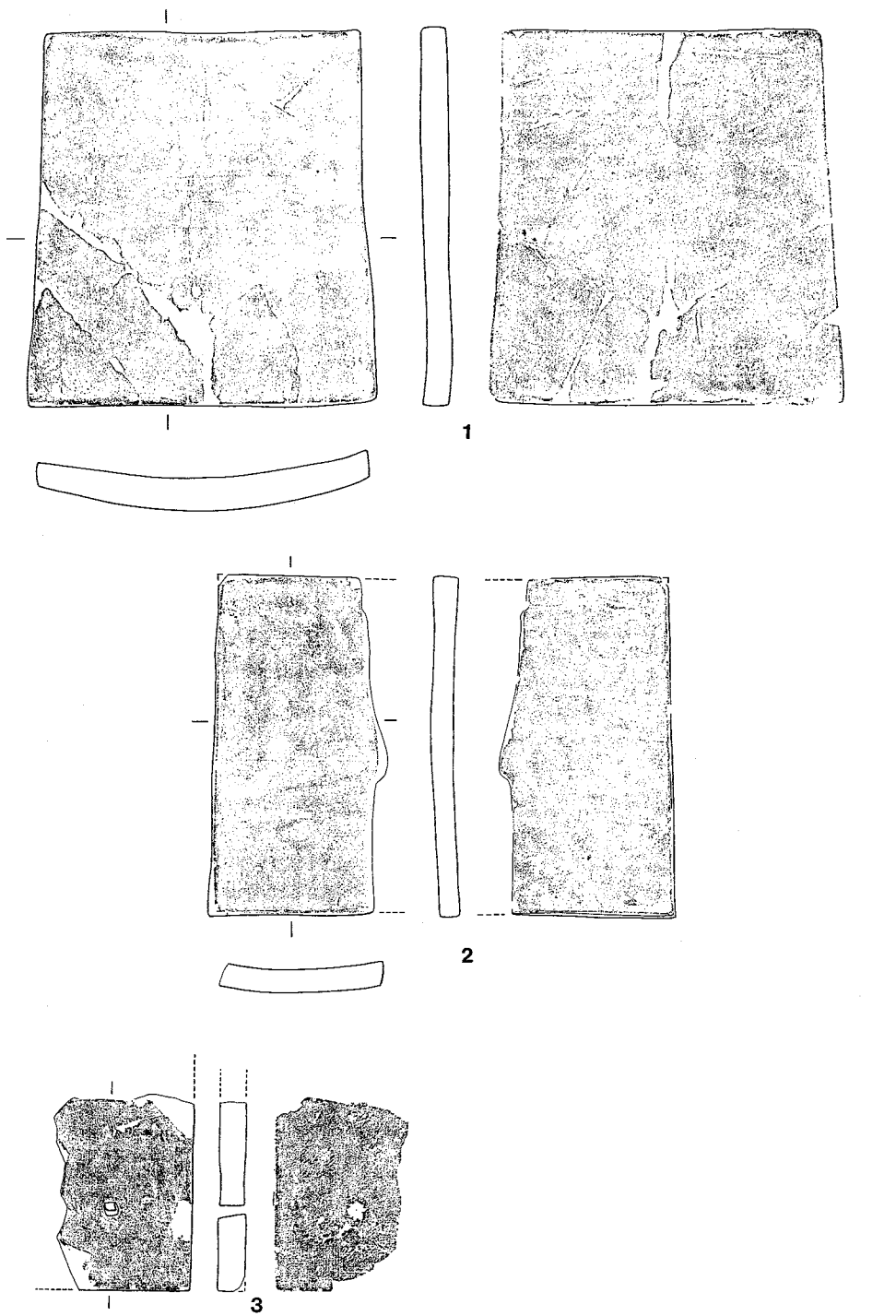
第112图 140号瓦集中層出土瓦(6) 丸瓦(1)



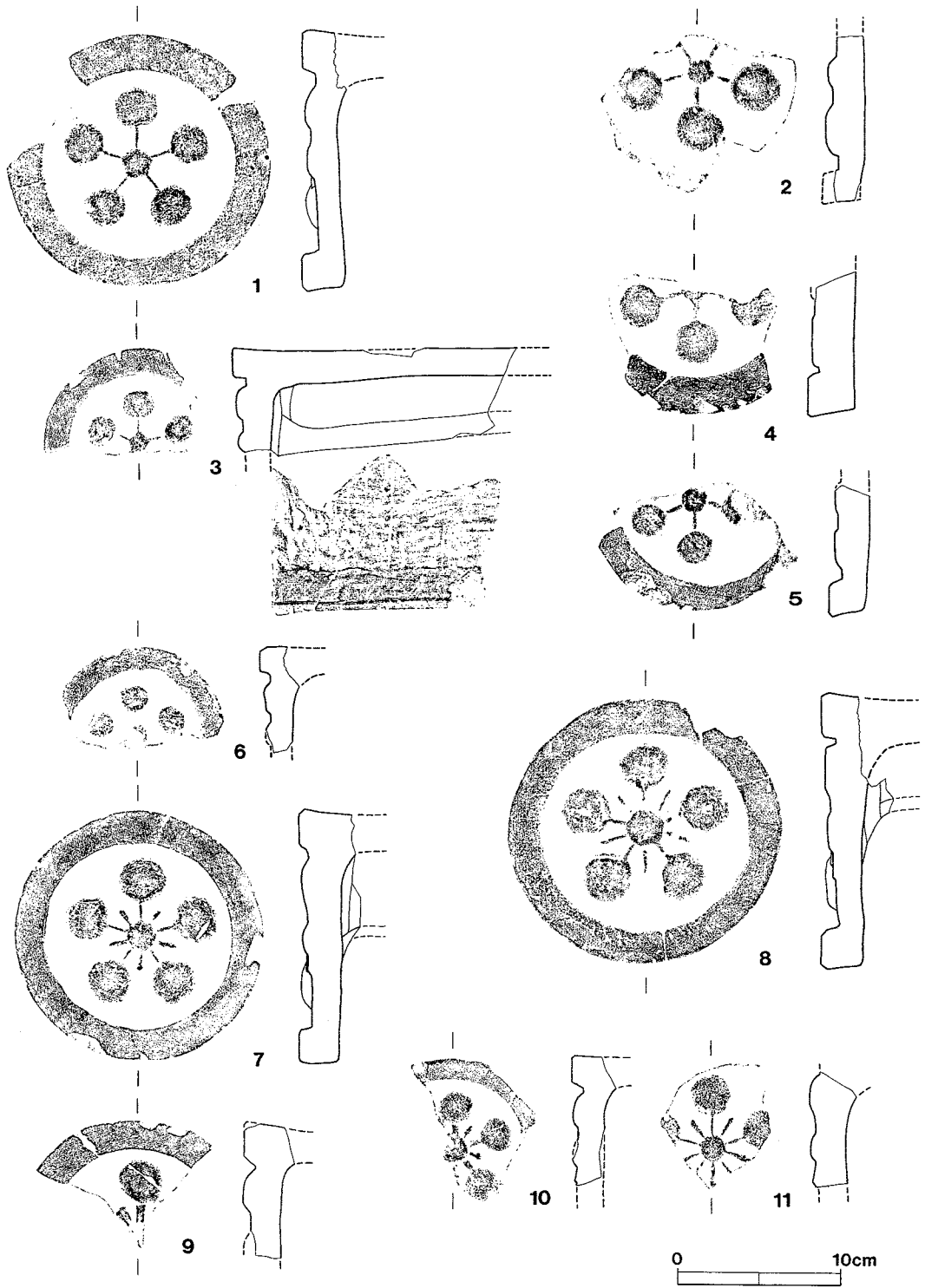
第113图 140号瓦集中層出土瓦(7) 丸瓦(2)·熨斗瓦·道具瓦



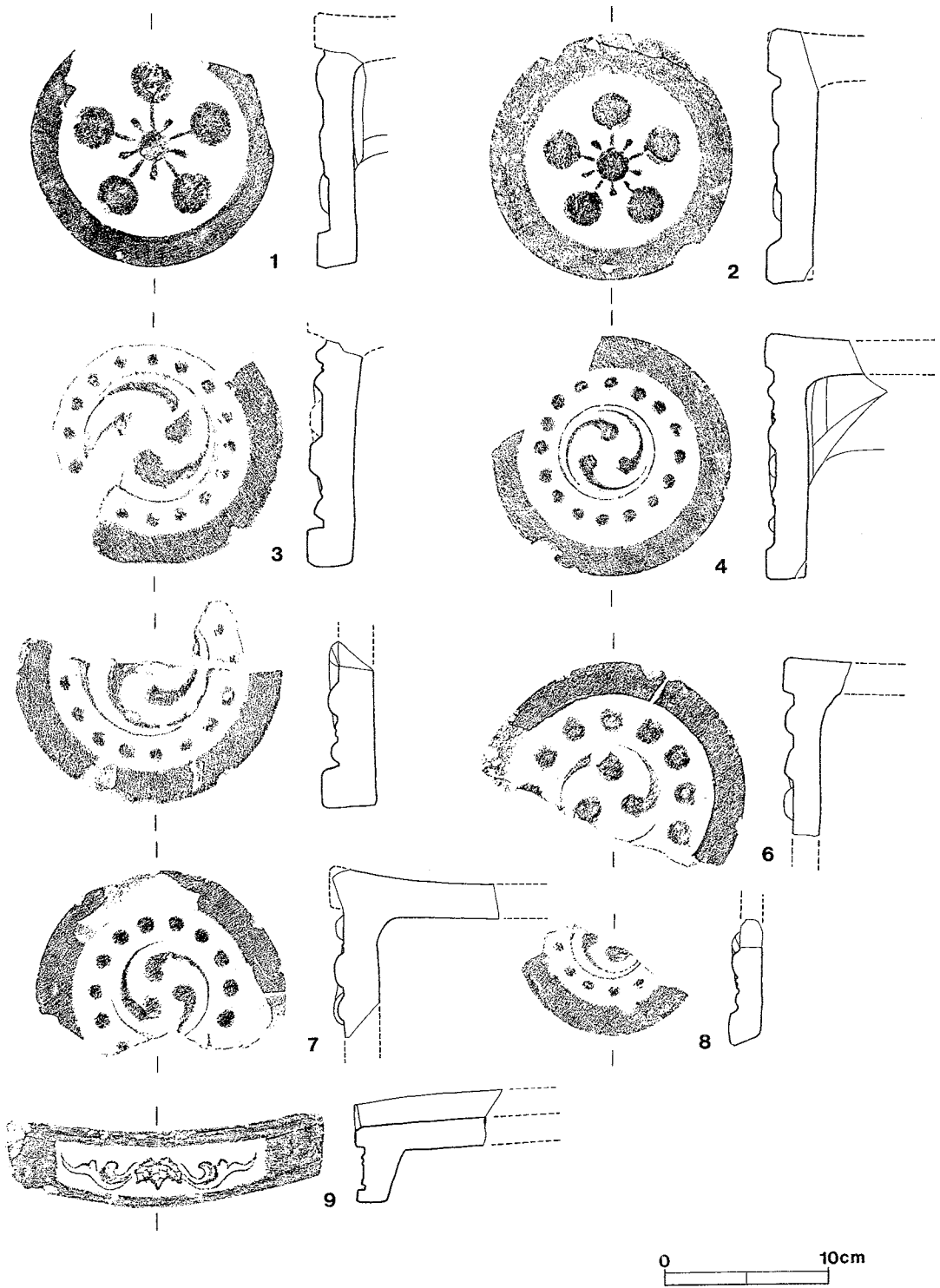
第114图 140号瓦集中層出土瓦(8) 平瓦(1)



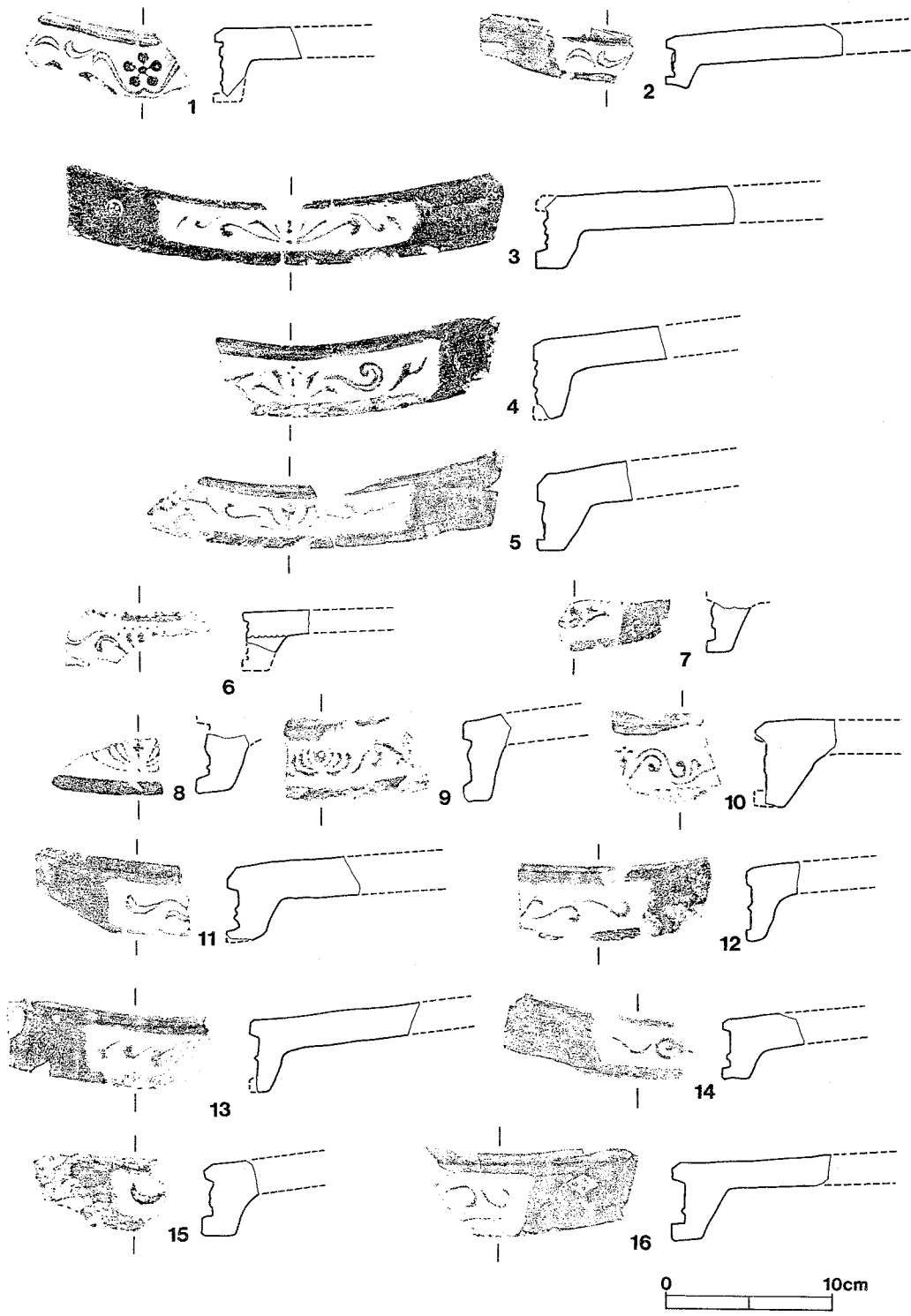
第115図 140号瓦集中層出土瓦(9) 平瓦(2)・海鼠瓦



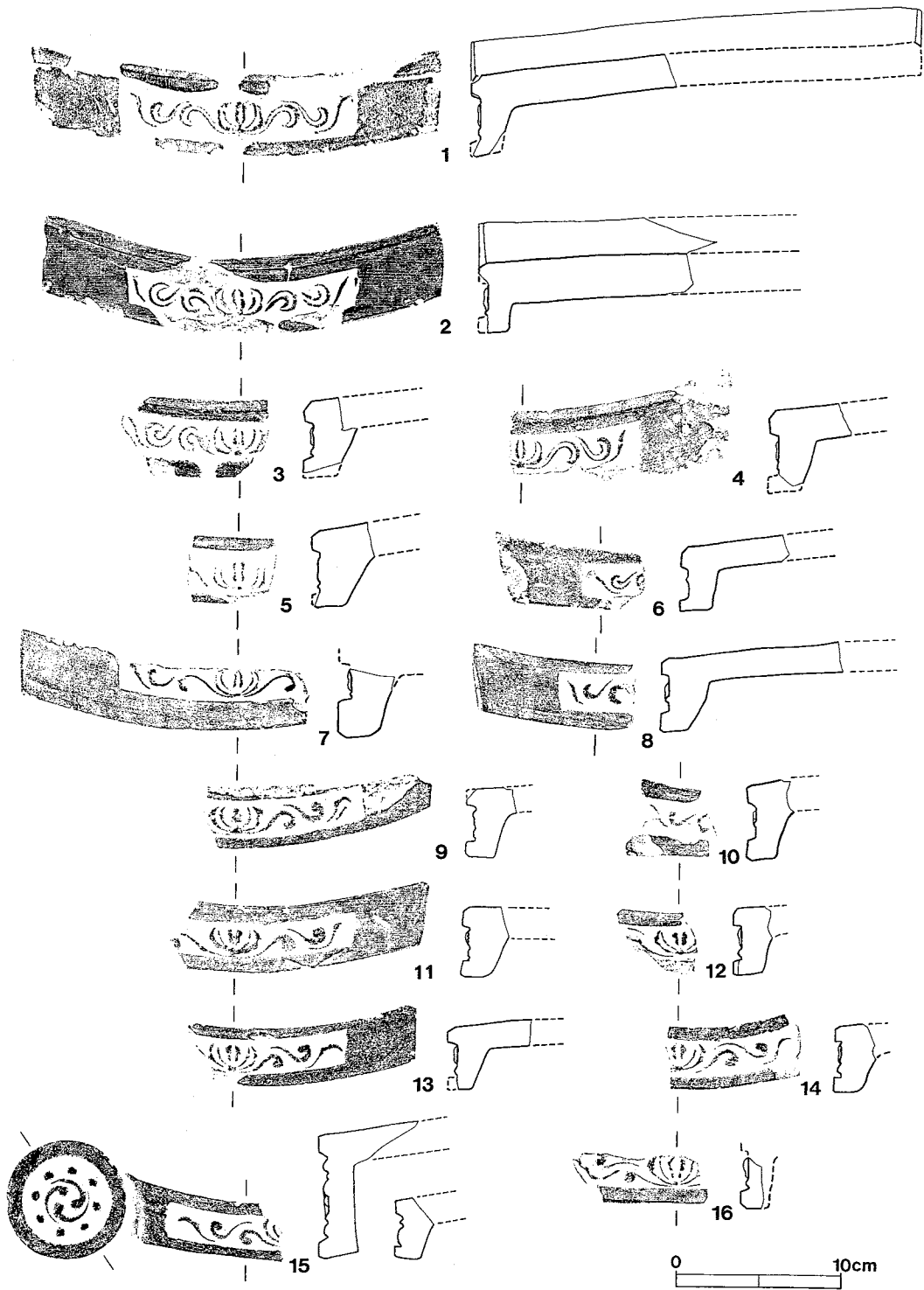
第116図 軒瓦(1)



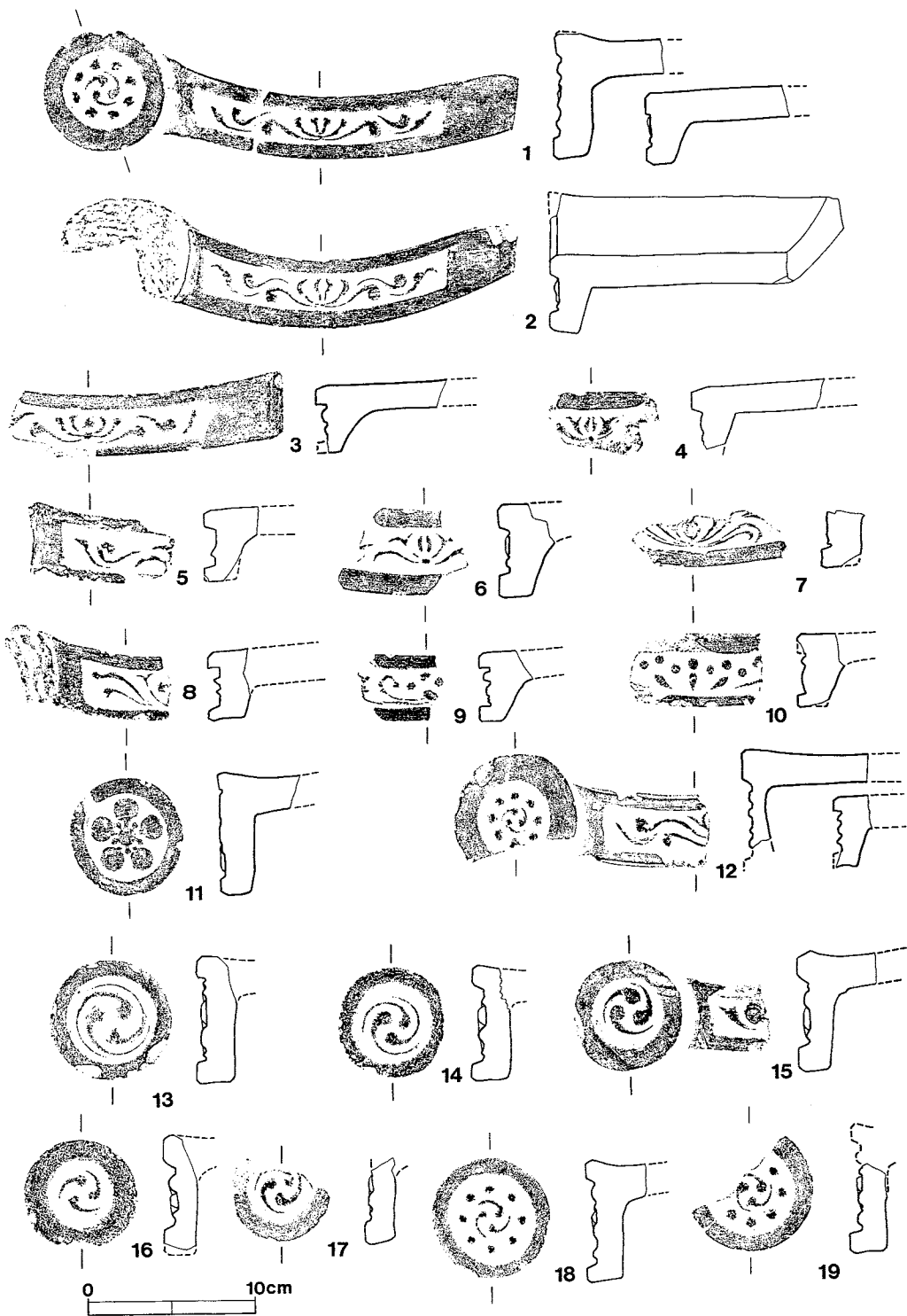
第117図 軒丸瓦(2)・軒平瓦(1)



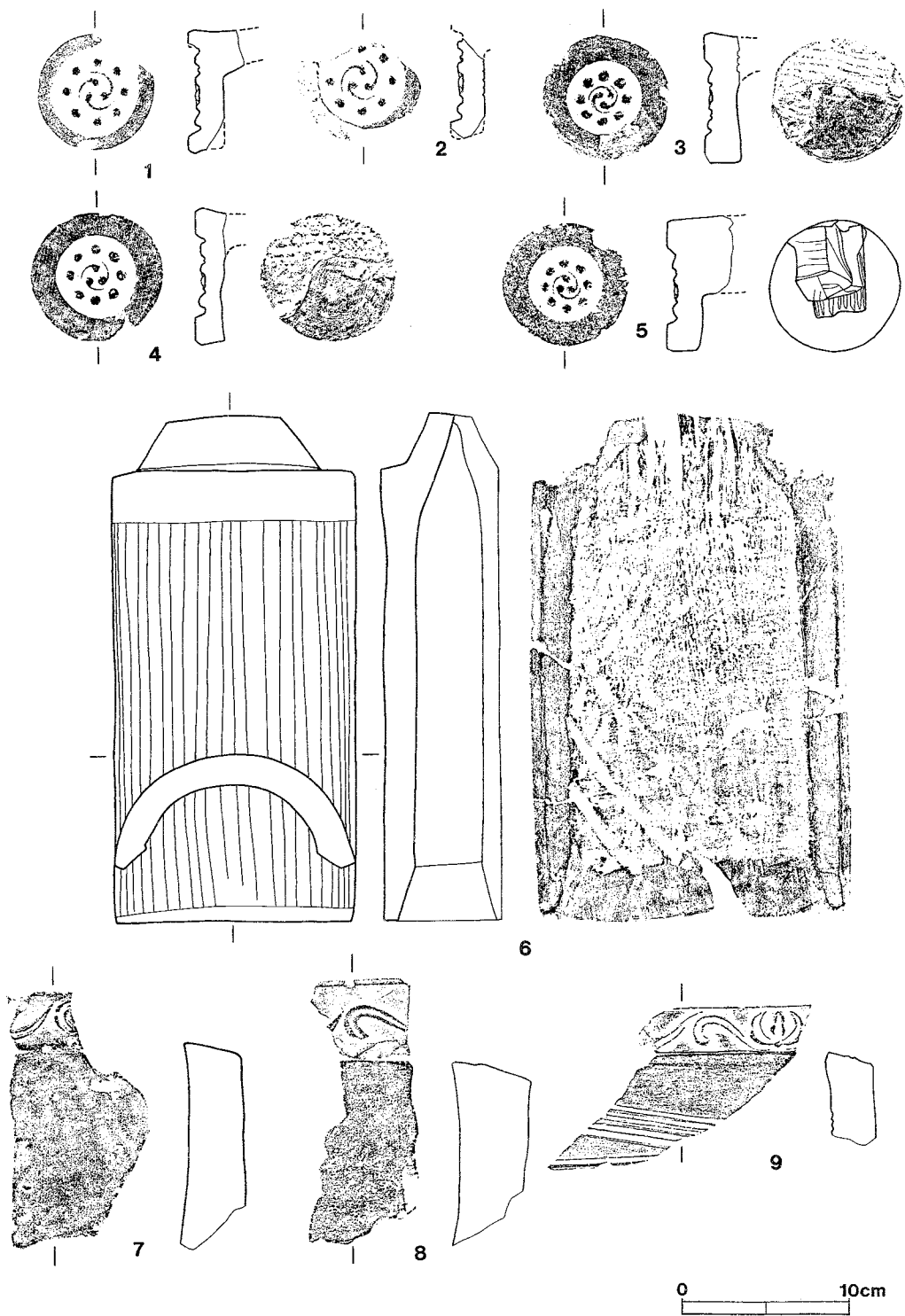
第118図 軒平瓦(2)



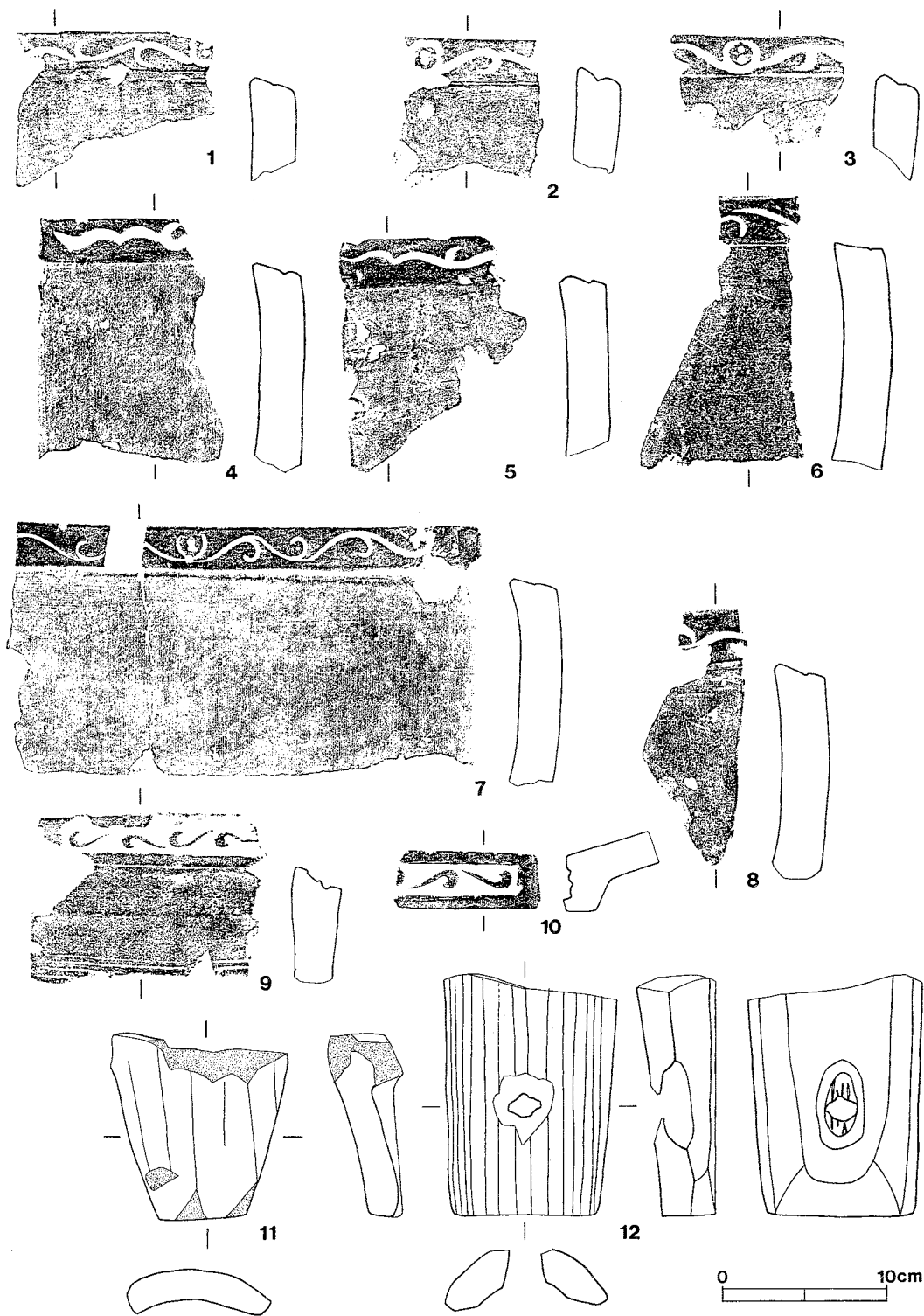
第119図 軒平瓦(3)・軒棧瓦(1)



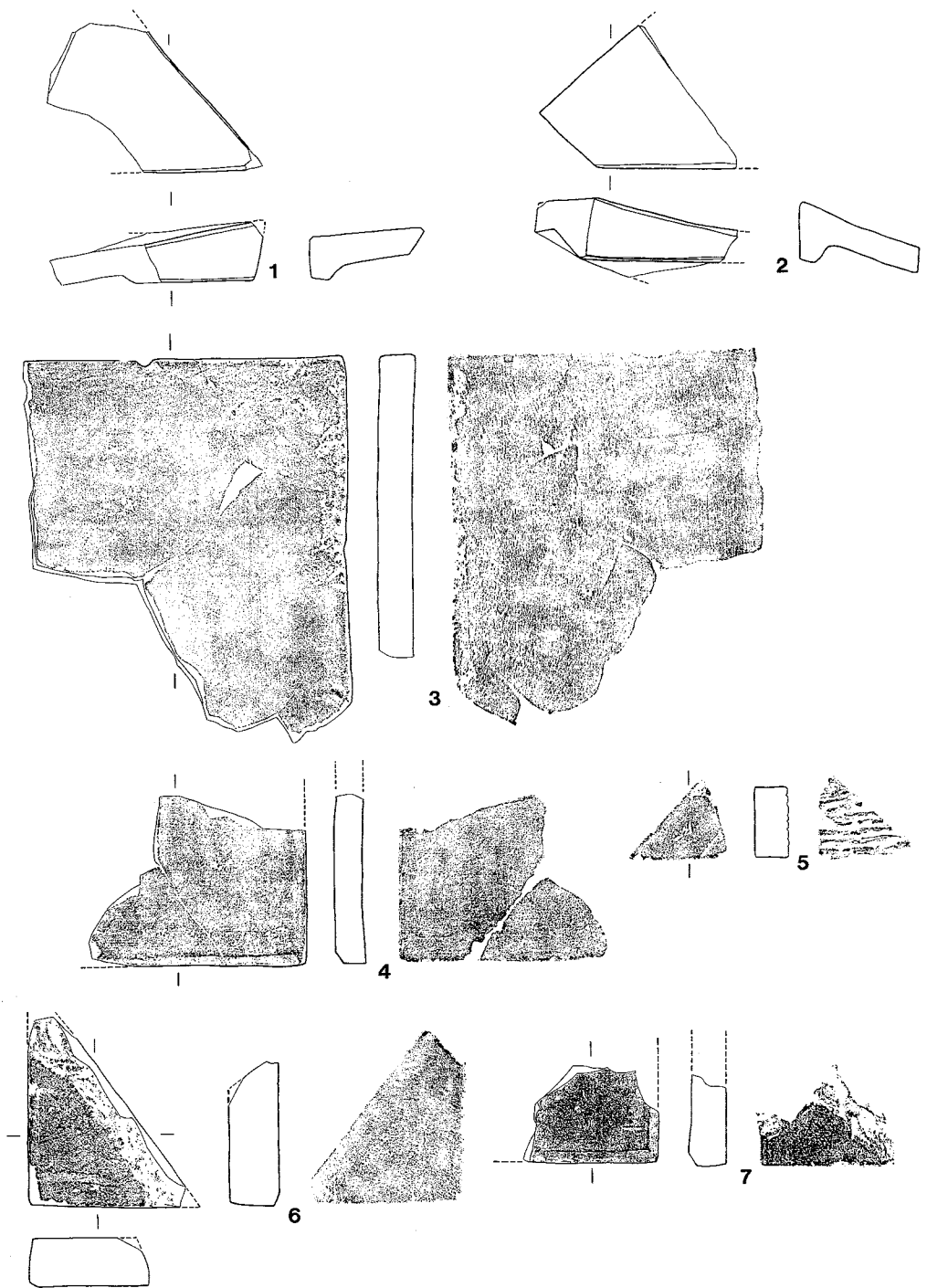
第120図 軒棧瓦(2)



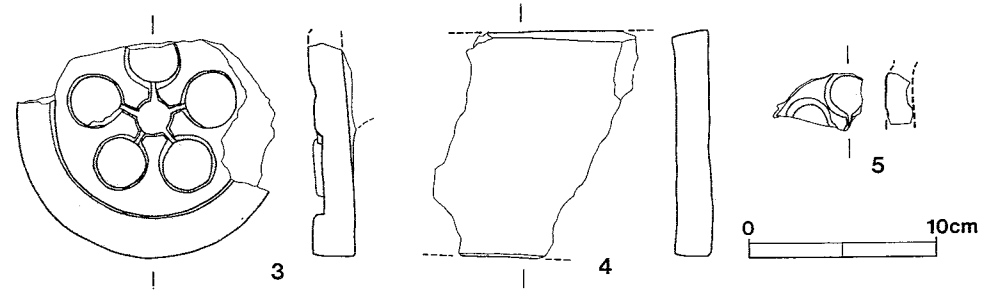
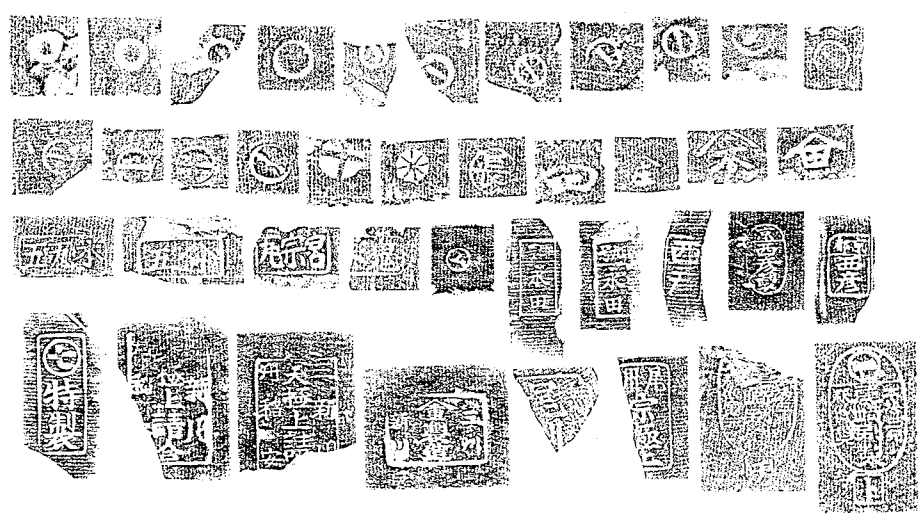
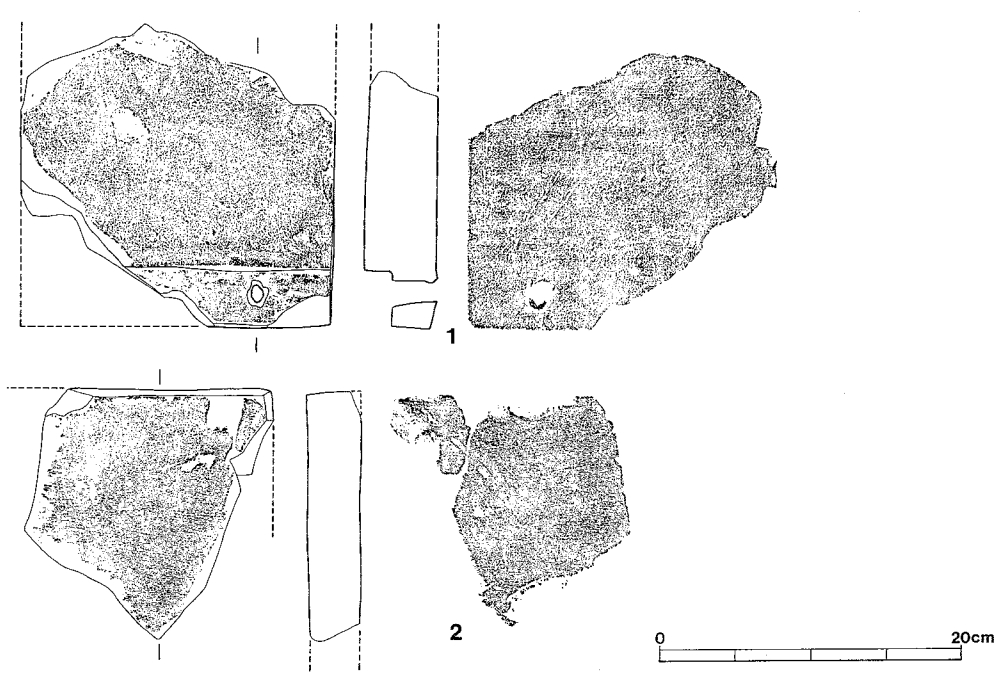
第121图 軒棧瓦(3)・丸瓦・熨斗瓦(1)



第122图 熨斗瓦(2)·道具瓦(1)



第123図 道具瓦(2)・海鼠瓦



第124图 博·刻印·金箔瓶瓦

第6節 金属製品・石製品

1. 銅製品 (第125回)

第125図1～9はキセルである。御殿下記念館地点の分類に従えば、1・2は雁首C類、3は雁首D類、4は吹口A類、5・6は吹口B類、7～9は吹口C類である。4は34号遺構、6は8号遺構、7は140号遺構、9は4号遺構からそれぞれ出土している。そのほかは包含層出土である。

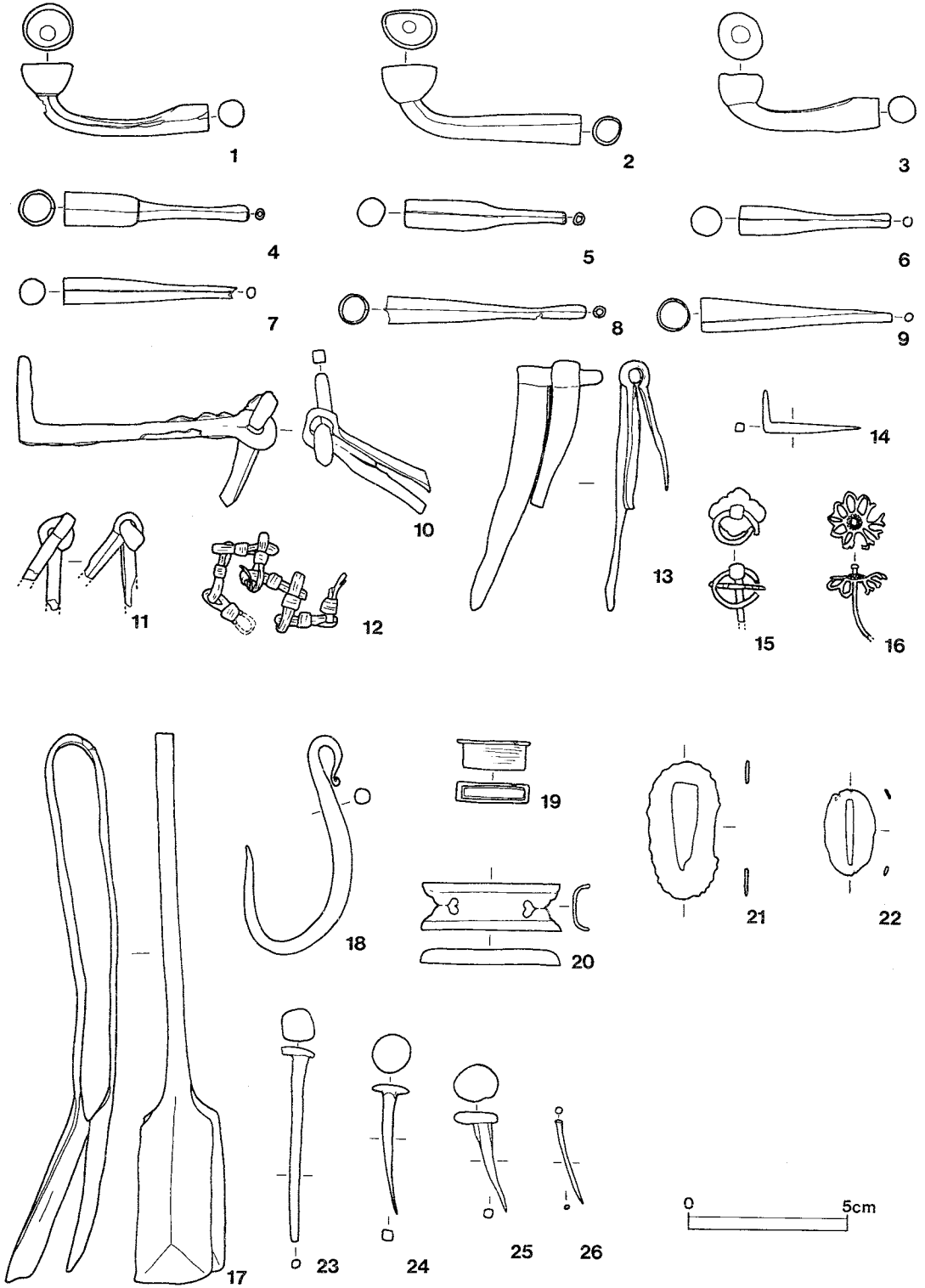
10～12は鎖類である。10は一方の先端がL字状に曲げられている。34号遺構からの出土である。11は12号遺構の桶の内側から出土している。12は69号遺構からの出土である。13は蝶番の一種で34号遺構から出土している。14は34号遺構から出土したL字状のフックである。15・16は簞笥などの飾り金具である。15は引き手であろう。先端に輪がついている。34号遺構の出土である。16は3号遺構からの出土である。17は蠟燭の芯をつまむはさみである。105号遺構出土である。18は釣り針状の銅製品で、鉤の類であろう。3号遺構からの出土である。19は用途不明の銅製品である。刀装具であろうか。4号遺構の出土である。20は建築用の飾り金具であろう。遺構外出土である。21・22は切羽である。21は105号遺構からの出土である。22は外側に被いを持つタイプであろうか。23～26は鋌である。23・25・26は140号遺構、24は69号遺構からの出土である。

2. 銭 (第126回)

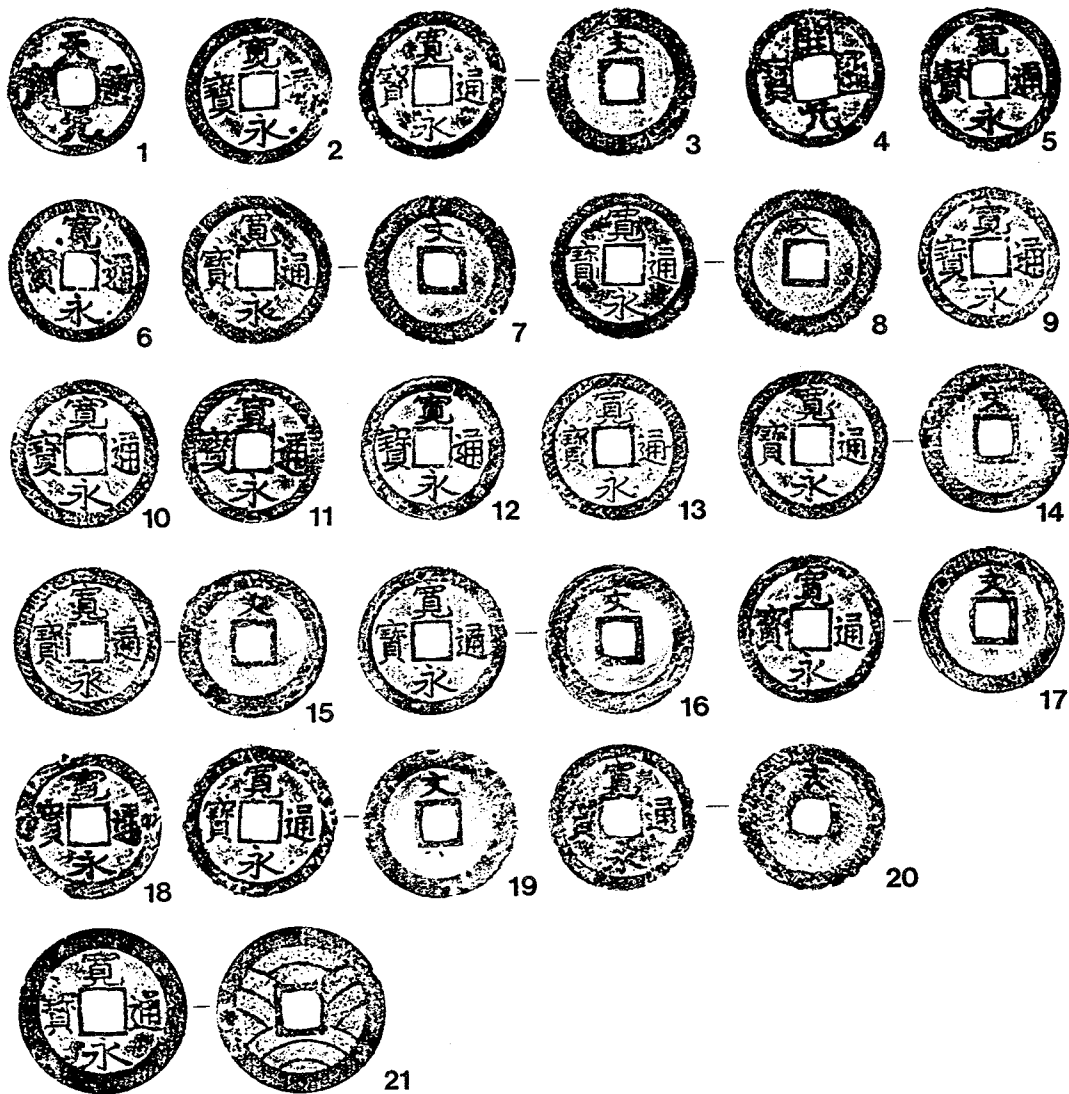
一つの遺構から銭が大量に出土した例は少ない。第126図1・4は4号遺構からの出土である。1は天元聖寶である。4は開元通寶である。2・3・5～7は3号遺構からの出土である。8は17号遺構からの出土である。9は33号遺構、10～17は34号遺構からの出土である。34号遺構からは古寛永と新寛永の「文銭」の両方を出土している。18は93号遺構からの出土で、新寛永である。19は98号遺構、20は142号遺構、21は遺構外の出土である。

3. 鉄製品 (第127・128回)

第127図1は包丁である。49号遺構から出土した。2は鋌である。140号遺構からの出土である。69号遺構からは大量の釘が出土した。これらは錆がほとんどついておらず、保存状態は極めて良好である。第127図3から第128図45は全て69号遺構から出土した。釘の長さには呼び寸と正寸があり、実際の長さは呼び寸より短いのが普通である。呼び寸は五分刻みである。3・

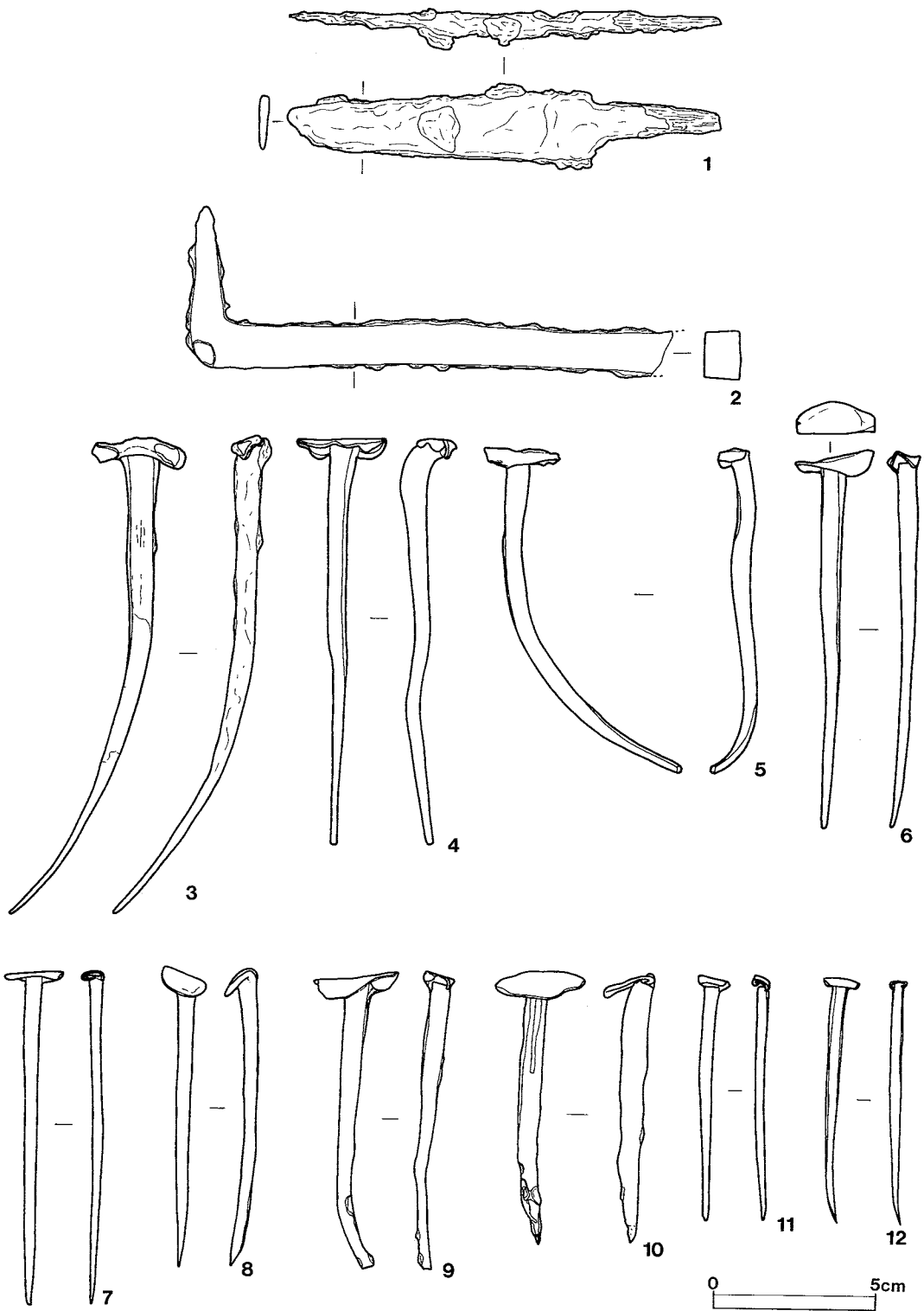


第125图 金属製品

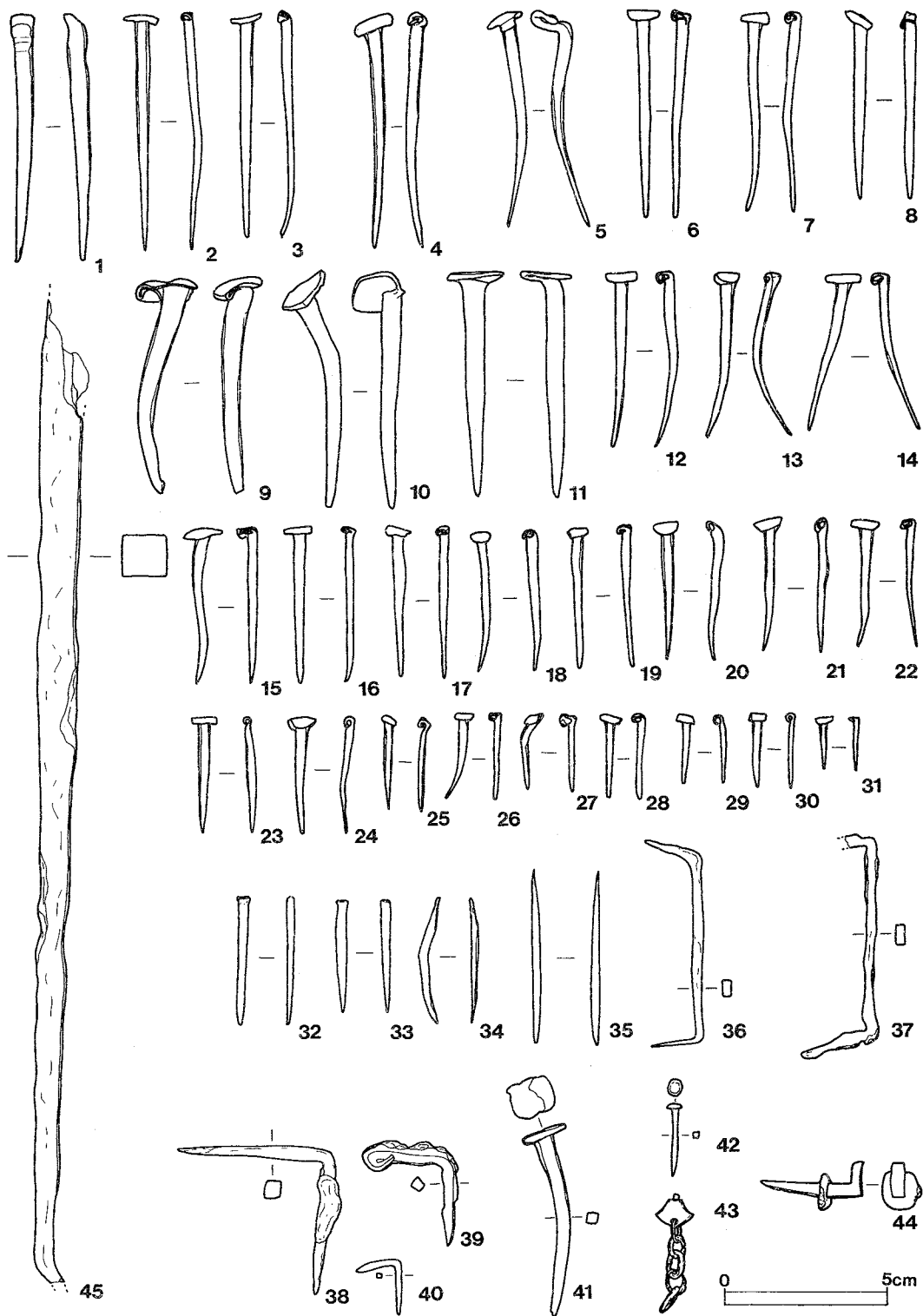


第126図 金属製品

4は呼び寸五寸の頭巻釘である。5・6は呼び寸四寸の頭巻釘である。7～10、第128図2～5は呼び寸三寸五分の頭巻釘である。1は呼び寸三寸五分の切釘である。6～11は呼び寸三寸の頭巻釘である。12～17は呼び寸二寸五分の頭巻釘である。18～24は呼び寸二寸の頭巻釘である。25～28は呼び寸一寸五分の頭巻釘である。29～31は呼び寸一寸の頭巻釘である。32・33は切釘である。34・35は合釘である。36・37は鋸である。38～40は合折釘である。41・42は鋸である。43は鎖のついた小型の鉄製品である。用途は不明である。44は鈎である。45は大瓦釘と考えられる。頭部と端部を欠損している。 (黒田晃)



第127図 金属製品



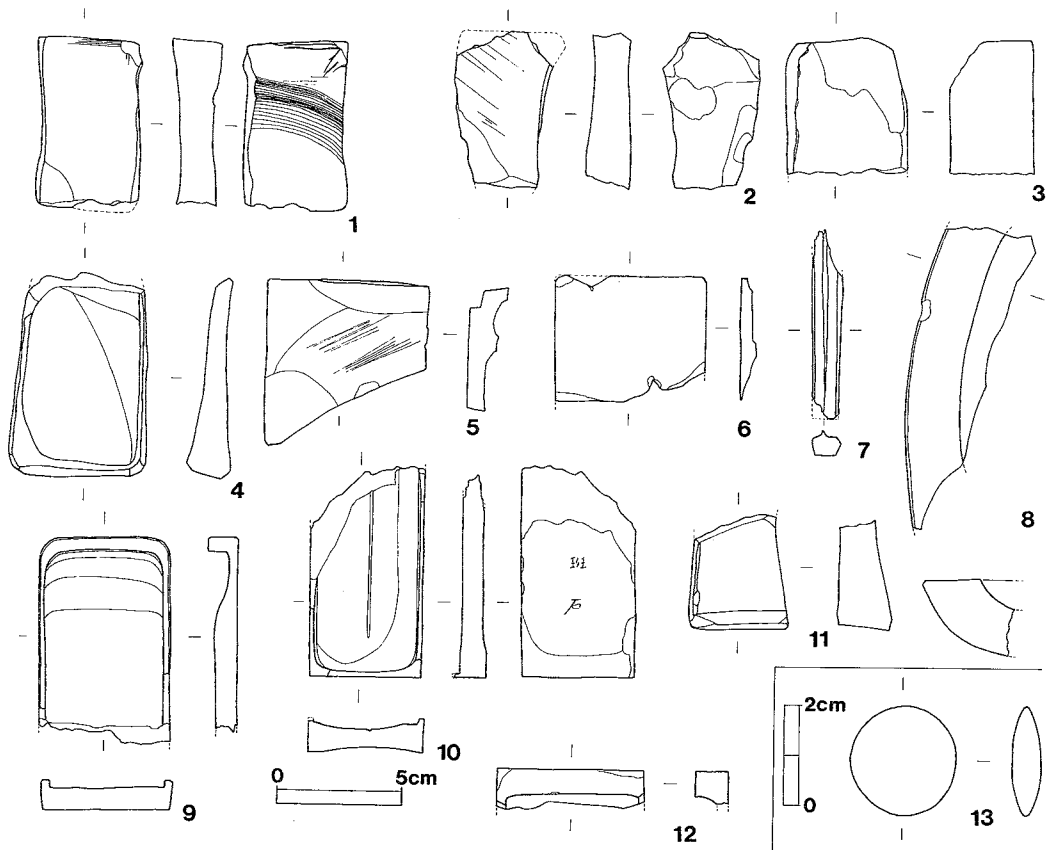
第128图 金属製品

4. 石製品 (第129回)

第129図 1～8 は砥石である。1～7は短冊状，8は棒状を呈する。短冊状のものは研ごうとする刃物を動かし，棒状のものは砥石自体を動かして使用したのであろう。

9～11は硯である。10の裏面には「斑石」の刻字がみられる。他の遺跡の例からみて，本来「虎斑石」（とらふいし）と刻まれていたと考えられる。遺跡出土の硯には「高島虎斑石」と刻まれた例が多く，硯石の産地として著名な滋賀県高島産の石であると思われる。

12は石臼の一部である。13は黒の基石である。白の基石は発見されていない。石製ではなかったために失われたのであろうか。



第129図 石製品

第3章 考察

第1節 藩邸絵図と遺構の対比

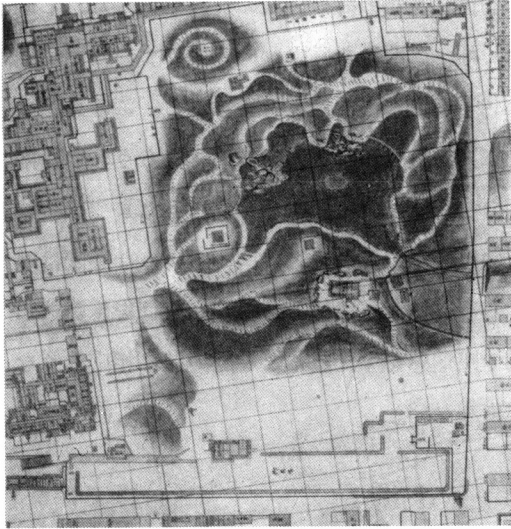
加賀藩邸絵図のうち、育徳園内の様子が描かれているのは19世紀中頃以降の数枚に過ぎず、これらには心字池東側に「御亭」という建物と苑路が描かれている。また苑路は描かれていなくても天保年間以降の絵図には「御亭」が見える。その他には18世紀代の四角馬場がある時代の絵図にのみ心字池東側に建物が描かれている。それ以前の絵図となると元禄元年の絵図に東側の建物群から池方面へのびる幅の広い道が描かれているだけで、育徳園の変遷は絵図からはなかなか追いにくい。

1. 苑路の変遷

とりあえず藩邸時代の育徳園の景観が、どの程度近代に残されているかを検討するために、明治初期の測量図と絵図の比較を行った。最も古い近代の図は明治14年の東京大学医学部の図で池の北東部にはまだ氷室が残っている。このあとに参謀本部陸軍部測量局が作成した精度のよい1/5000図と比較すると苑路の配置には矛盾はない。次に明治16年作成の1/5000測量図と幕末の絵図とを比較してみると「御亭」がない以外は、この段階では庭園にほとんど変更が加えられていないことが判る(第 図)。ところが発掘区を当てはめてみると、検出された遺構と幕末の苑路には一致するものがない。明治16年の等高線に注目すると、発掘区の部分は概ね標高22m前後である。発掘時の標高が20mから21mであったことを考えると山上御殿や山上会議所の建設にともない削平が行われたことが推測される。したがってこのときに19世紀中葉の藩邸時代の苑路は失われたと考えられる。

次に年代を追って、苑路の変遷について述べる。

I 期 この期に属する道にあたる遺構には155号遺構と105号遺構があるが、これらは双方とも後の時代の苑路とは異なり底面を固めていない。特に105号遺構は溝が多く、あまり通常の道としての機能は考えにくい。双方とも苑路というよりはむしろ溝と考えた方がよいであろう。この時代は本郷邸はまだ下屋敷であり庭園部分と屋敷地の区画が明確でなかった可能性があり、かりに道であっても、苑路という名称は相応しくないかも知れない。



江戸御上屋敷絵図（部分、天保～弘化年間）



五千分一東京測量原図より（明治16年）

第130図 発掘区と旧地形（1/4000）

Ⅱ期 元禄元年(1688年)の絵図に現在のグラウンド方面から池へ伸びる、幅の広い道が描かれている。これと対応する砂利面が御殿下記念館地点のⅢ期の遺構として検出されている。これと連続するのが97号遺構であると考えられ、絵図に描かれた道であろうと推測される。前代の105号遺構をそのまま埋め立てたものである。97号遺構はさらに36号遺構の斜面へ続き、そこには池へ降りていく階段が設けられている。

76号遺構はその後に作られた苑路であると考えられる。切り通し状のセクションを呈し、底部はローム質土と砂を交互に突き固めて形成されている。これは以降の苑路と共通する技法である。またこの時までには基本的に東西方向に遺構が展開する。

Ⅲ期 庭園に大改修を加えたと伝えられる第5代綱紀の時代の後半期以降にあたる。本郷邸が正式に上屋敷となり、元禄15年の将軍御成、本郷邸の新築、松姫の御守殿建設と17世紀末から18世紀初めは本郷邸内が大きく変貌を遂げた時代である。それにともなって育徳園にもたびたび手が加えられたのであろう。陶磁器の年代がこの時代に偏るのもそのあたりに一因がありそうである。

苑路として最も古いのは3号遺構であり、ついでわずかしか残らないが29号遺構、そして4号遺構がつくられる。33号遺構はおそらく4号遺構と同時期であろう。これらは前代の97号遺構、36号遺構を埋めて新たな築山を築いた後に掘削されており、かなり大規模な改修であったことがわかる。この時池への通路は別の箇所へ設けられたようで、発掘区の部分では苑路は池を巡るかたちに変更されている。

再び育徳園に手が加えられる契機となったのは19世紀初頭の梅の御殿の建設であった。この時代の絵図には育徳園内の苑路は描かれておらず、唯一御殿から庭園へ向う段のついた路が描かれているのみである。位置からみて、この路は49号遺構にあたると考えられる。この苑路の延長部分は検出されなかったが、発掘区北西部で二方向に分かれ一方向は北へ、もう一つは南へ、おそらく4号遺構の上層につながっていたものと推測される。49号遺構はそれまでの苑路とは異なり、底面を硬化させてはいるが、ローム層と砂層の互層を突き固めるような手間はかけていない。49号遺構とほぼ同じ時期と考えられる遺構が6号遺構であるが、底面を意識的に硬化させてはいないこと、全体が深い切り通し状で圧迫感を与えることなど苑路に相応しくない要素が多く、積極的に苑路であるということが出来ない。

2. 建築物

次に発掘区内に存在したと考えられる建築物について、同様に年代を追って記述する。

I期 石垣を伴う建築物が南側に建てられていた。その屋根に葺かれていた瓦が斜面に落ち込んでいる。この瓦は今のところ類例のない形態を示しており注目される。同種の瓦は105号遺構の北側からも流れ込んでおり発掘区北側にも建物があった可能性を示している。

II期 宝永一享保年間に第6代吉徳の正室松姫のための御守殿が存在したが、この建物を記載した藩邸部分図が残っている。このとき屋敷の北東部分は池に接して造られており、北側を画する塀の外側に小さな建物と井戸が記されている。現在も残る心字池南の高台上の東屋との位置関係をみると、この御守殿の一部が発掘区内に入るようである。発掘区には93号遺構と126号遺構の2つの井戸があり、このどちらかが絵図に見える井戸に対応するのではないだろうか。位置としては126号遺構のほうがよさそうで、III期に組み入れた110号遺構、111号遺構がその西側の「御享」の一部かも知れない。

出土遺物や遺構の切り合いからすると69号遺構もこの時期である可能性があるが、18世紀初めの発掘区部分の絵図がないために確実でない。同じ形態の21号遺構と共に庭園には似つかわしくない遺構である。また大量に投棄されていたカキの貝殻が武家屋敷内の蛸殻葺屋根の存在を示すものか気にかかる遺構でもある。

III期 苑路の3号遺構が使われなくなって直ぐに、34号遺構が作られたようである。何らかの上部構造が有り、地下室的な機能を果たしていたのではないかと考えられるが、残念ながら対応

する絵図がない。厚く堆積した焼土は火災後の後始末であるかも知れない。

19世紀初頭の梅の御殿の建設の際には育徳園と御殿の間に柵が設けられたことが絵図からわかる。それとよく一致するのが30号遺構である。

絵図に描かれているのは19世紀半ばの「御亭」であるが、起伏の差の大きい地形の上に建てられたため、図面毎に測量誤差が大きいことが推測され、その位置の現在の図への正確なあてはめは難しい。しかし近代初期の図に見える苑路に囲まれた空き地部分にあったと考えて大きな間違いはないであろう。発掘区と近代図のあてはめが正しく、さらに明治時代の苑路が幕末の苑路と一致するとすると、「御亭」は発掘区の北部分にあったことになる。発掘区北側で検出された礎石は53号遺構と136号遺構であるが、136号遺構は4号遺構より古いので、この「御亭」とは時代が整合しない。53号遺構がその一部とすれば129号遺構、130号遺構、133号遺構の柱穴などが「御亭」に関わるのかもしれない。またもう一つの可能性として、発掘の初期に非常に浅い位置で検出され山上会議所の基礎と考えたB17区の礎石（写真32）が「御亭」であったかも知れない。そうだとすると絵図面における発掘区的位置をやや北寄りに修正する必要がある。

まとめ

庭園の造営をめぐる2、3の問題点を述べて結語としたい。

山上会館地点の調査期間は当初の予想を大きく上回ったが、その一因の一つには調査者が持っていた大名庭園に対するイメージに誤りがあったことが挙げられるであろう。近世初期の江戸の土木工事が非常に規模の大きいことは知られているが、武家地も例外ではなく、庭園のような建築物のあまりない箇所でも度々大規模な改修が行われていたという事実は全く予想外のことであった。本報告では遺構を3期に区分したが、苑路のみの変遷でみるとⅢ期にはさらに3つ以上の段階がある。庭園と言えは景観を保つことが当然であり、一度完成すれば手を入れることはあまりないものという思い込みは誤っていた。

屋敷内の庭園に頻繁に大規模な改修が行われることが江戸の大名屋敷に通有なものであったかどうかは、まだ他に比すべき発掘例がないため判断がつかない。加賀藩の場合は本来下屋敷であった場所に上屋敷を移し、すでに庭園の要素を持っていた場所に屋敷を構えたという事情を考え合わせる必要があるかもしれない。また時代によって藩邸内に小規模な庭園を作っていたことが絵図からわかるが、そのような小庭園と育徳園との関係はどのようであったのであろうか。

庭園の造営と一口に言っても、大きな池をうがち、東京湾を頂上から望めるような築山を築き上げるような規模であるから、それだけの土の供給や排土の処理をどうしたのか大いに気にかかる場所である。現在の総合図書館の位置にあった栄螺山はおそらく心字池を掘削した排

土で築造されたのであろう。発掘区内の築山の断面を見ると黒土の堆積の上にローム質土が堆積しており、どこかで掘った自然堆積の土をそのまま積み上げた様子が窺える。また I 期の105号遺構の埋め立てには東京パミス層下の粘土も大量に使われており、かなり深くまで掘った地点から埋め立て用の土を運搬したことがわかる。すぐ近くの御殿下記念館地点の大土坑の土も使われたかもしれない。石材は外から運び込まざるをえないが、土は藩邸内でまかなっていたのではないだろうか。大がかりな造営の度に土置き場が必要となったはずであるが、多くの地下室が藩邸内のあちこちに掘られていることから、残土については日頃からなんらかの取り決めがあったとも推測できるであろう。

第2節 石垣の刻印について

山上会館地点の石垣（150号遺構，200号遺構）からは様々な形の刻印がみつまっている。刻印の施された位置は構築時の正面に限らないので採石場でつけられたものと考えられる。

石垣に刻印がなされる例は各地の城の石垣等にも多く見られ、金沢城、大坂城などの刻印の研究がある。都内では江戸城の石垣の刻印を竹橋付近や日比谷公園の中で観察することが出来る。大坂城や江戸城などの天下普請で石垣に刻印が施される理由は、石切り場において各藩の寄進した石の所在を明らかにするためであり、その刻印は大名の家紋や相紋を示す場合が多い。また金沢城の石垣の刻印については、田端氏が集成、分類を行っており、「寛文七年城下町図」「延宝金沢図」「加賀藩組分侍帳」などの史料と照合して、それぞれの刻印を加賀藩の家臣に当てはめた解釈をしている。つまり天下普請の場合は各藩の、また藩内の普請の場合は家臣の紋が石材に刻み込まれたと考えられる。

山上会館地点の二つの石垣からは合計14種類の刻印が確認されている。このうち金沢城にも同種の刻印が見られるのは3～6・9～14の10種類あり、この石垣が加賀藩の藩内の普請である可能性が高い。これに対して大坂城との共通例は4種、篠山城採石場との共通例は7種類あるが、これら金沢城以外の共通例はいずれも幾何学的図形であり同じ解釈ができるものではない。

第3表に確認された刻印を掲げた。以下田端氏による金沢城石垣刻印と家臣の比定をもとに記述を行うが、山上会館地点の石垣の構築年代は金沢城石垣構築の1610年よりかなり下と考えられるので、個人名は必ずしも一致しない。1は他のどの遺跡からも例が見られない。削り形も雑であり、刻印ではないのかも知れない。2は15が一部が削れたものの可能性がある。3は卍であり、加賀藩士長九郎左衛門連龍の家紋である。4は左半分の一に丸が加賀藩士毛利兵

庫の家紋である。5はこの形を横にしたものが金沢城の石垣にみられる。6の丸に十字は加賀藩士奥村河内栄政の家紋である。7は轡であろう。金沢城には例が見られない。8は金沢城にもある刻印であるが田端氏によれば該当する家臣がいない。9は茶の実である。加賀藩士高島五兵衛定方の家紋である。10は加賀藩士永原土佐守孝治の家紋である。11は加賀藩士多田次郎左衛門の田の字であろうか。12・13は松葉であり、それぞれ加賀藩士本田安房守政重、西尾隼人長昌の家紋である。14は加賀藩士の西村右馬助の家紋である。15～17は参考資料として付属病院中央診療棟地点の2号組石、6号組石、10号組石などの水路で確認された刻印を掲げた。このうち15・16は金沢城に共通例が見られる。

参考文献

田端寶作1977『金沢城石垣刻印調査報告書』

藤井重夫1982「大坂城石垣符号について」『大坂城の諸研究』岡本良一編 名著出版

1988『篠山城採石場』 近畿自動車道舞鶴線関係文化財調査報告9

第3表 石垣刻印一覧表

| No. | 刻印 | 150号遺構 | 200号遺構 | 病院地区 | 金沢城 |
|-----|----|--------|--------|---------|---------|
| 1 | | 1 | 無 | 無 | 無 |
| 2 | | 2 | 無 | 無 | 無 |
| 3 | | 3 | 無 | 無 | 有 |
| 4 | | 1 | 無 | 無 | ○ のみ有 |
| 5 | | 1 | 無 | 2 | ⓵ という形有 |
| 6 | | 2 | 無 | 無 | 有 |
| 7 | | 1 | 無 | 1 | 有 |
| 8 | | 2 | 1 | 1 (大 無) | 有 |
| 9 | | 3 | 1 | 2 | ⓶ の形有 |
| 10 | | 1 | 無 | 無 | 有 |
| 11 | | 1 | 無 | 無 | 有 |
| 12 | | 1 | 無 | 無 | 有 |
| 13 | | 無 | 無 | 1 | 有 |
| 14 | | 無 | 1 | 無 | 有 |
| 15 | | 無 | 無 | 2 | 有 |
| 16 | | 無 | 無 | 1 | 有 |
| 17 | | 無 | 無 | 1 | 無 |

第3節 出土した輸入陶磁器類について

御殿下記念館地点を含め、藩邸中枢部に近いこの地点では、特に輸入陶磁器に質の優れた出土物が多かった。その中でもいくつか特筆すべき陶磁器があるので、まずそれぞれについて詳述する。

瑠璃釉白花盤

山上会館地点と御殿下記念館地点の両方から破片が出土している。口縁部はみつかっていない。また法学部4号館地点E11-1土坑からも同種の底部破片が出土しており、同一個体であるかも知れない。断面を観察すると文様部分は瑠璃釉を削り白土をのせており、高台外側の圏線部分は瑠璃釉を削って地肌の白を見せる手法を用いているようである(第131図)。

出土したのは山上会館地点では3号遺構、157号遺構など18世紀前半に属する遺構であり、御殿下記念館地点ではやはり18世紀前半代の4期に属する665号遺構からである。

この製品は完形品では東洋陶磁美術館收藏の安宅コレクションの「大明宣徳年製」銘のあるものやフーリア美術館收藏品などごく僅かの数しか知られていない。伊藤郁太郎氏のご協力により大阪市立東洋陶磁美術館で実見する機会を得たが、白花の部分に陰刻がない他は釉調や黒斑のある無釉の底面の状態もほぼ同じであり、同時期の製品とみて間違いなであろう。これまで明代初期の中国陶磁器はほとんど舶載されなかったとするのが一般的な考え方だっただけに、宣徳期のしかも官窯の製品をどのような経路をたどって前田家が所有するにいったか、問題となるところである。なお弘治年間の官窯の優品として美術全集によく登場する梅沢記念館所蔵の青花碗も前田家伝来と伝えられているらしい。

近年発表された景德鎮の明代永楽・宣徳期の官窯からも同種の製品が出土している。これは写真を見る限り陰刻がないようである。

ヨーロッパ製品

山上会館地点、御殿下記念館地点合わせて5点出土している。軟質で多孔質の明るい色の胎土に特徴がある。第77図に文様の残る3点を示した。1は筒形の容器で、鉛白釉上に青で文様を描く。釉の厚さにムラがあるために器面に凹凸がある。2は皿の一部である。口縁部に花の図柄が巡るタイプであると思われる。3は取っ手の一部と考えられる。白釉が熱を受けたのか、暗灰色になっている。残り2点の内の1点は上記3点と同じく淡黄色の軟質の胎土で鉛白釉を地とした陶器である。器形は不明である。もう1点は皿の底部付近の破片で見込み部分は鉛白釉を施し、外面は透明釉をかけた淡橙色の胎土の陶器である。文様が見込みに描かれていたらしく、わずかに黄色の文様の一部が残っている。

出土した遺構は1は5号遺構，2は100号遺構，3は御殿下記念館地点の18世紀初頭の包含層，器形不明の破片は御殿下記念館地点1期の959号遺構，皿底部は6号遺構である。

前田家が「オランダ」を所蔵していたことは，弘化年間の「道具帳」に記載されている通りであり，現在も前田育徳会のコレクションに残っている。ただし出土品と同じ器形のものがない。ヨーロッパ製品は茶道具としての需要であったというので，あまりセットとしてではなく，個別に求められたのであろうか。

道具帳には以下が記載されている。

阿蘭陀こまの手棗 縹り有

おらんだ 但先御帳二者阿蘭陀御茶碗与有之

阿蘭陀軸御筆

阿蘭陀青山水継

阿蘭陀葉替徳利

阿蘭陀鉢 但御箱書二明暦三年十二月九州伊藤小左衛門より
江戸江来与有之

阿蘭陀小鉢 但御箱書二字和島屋次兵衛上ル与有之

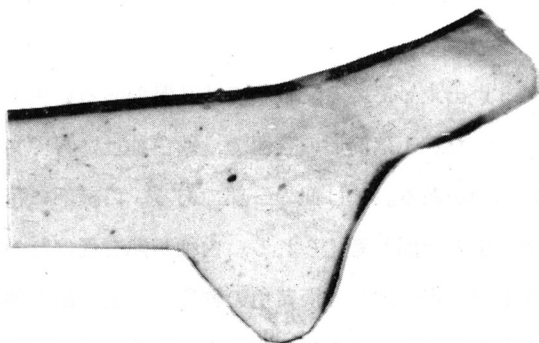
青阿蘭陀鉢

阿蘭陀かめ

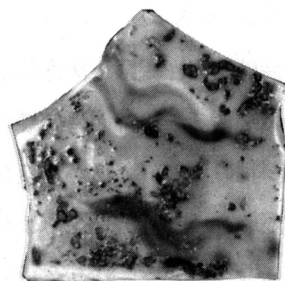
阿蘭陀物御壺

そのほか古染付，祥瑞の破片が多く出土したのも当地点の特徴である。その中には葡萄棚の文様を施した芋頭水差し，呉良大夫祥瑞造銘のある碗がある。

色絵も南京手と呼ばれる黄緑を基調とした皿類を主としているが，万暦・嘉靖に遡ると思わ



瑠璃釉自花皿断面 約2倍



青花黄彩碗破片 約1,5倍

第131図 磁器片拡大写真

れる個体も少なくない。また黄色釉を地とし、沈線で文様を描き緑その他の色で彩色する素三彩が目立った。そしてその祖形とも言われる成化頃から始まった染付の上に黄色釉をのせる青花黄彩の手法を用いた破片が山上会館、御殿下記念館それぞれ1点ずつ出土している（巻頭写真G4・5，第131図）。

このような特殊な陶磁器の入手には大名間の贈答を考える必要があることを西田宏子氏より御教授戴いた。そこで「加賀藩史料」に記載されている17世紀代の将軍と藩主との贈答の記録を調べたが、特に頻繁に贈答が行われている家光と3代利常との間でも、陶磁器が記録されているのは家光から利常あてに贈られた高麗茶碗1件のみであった。

ただし元禄15年の将軍御成の記事に将軍側からの贈品として以下のような陶磁器類が記されている。

| | | |
|----------|--------|-----|
| 松平大学頭 | 御茶碗 | 500 |
| 松平紀伊守殿御内 | 御皿 | 100 |
| 前田市左衛門 | 御茶碗 | 100 |
| 溝口左門 | 御皿 | 100 |
| 溝口織部 | 茶碗 | 100 |
| 興津能登守 | 伊万里焼御皿 | 200 |
| 福島助六 | 御茶碗 | 100 |
| 土屋忠兵衛 | 御茶碗 | 100 |
| 千本兵左衛門 | 大皿 | 50 |
| 河村源右衛門 | 御茶碗 | 100 |
| 小島昌恰 | 御茶碗 | 100 |
| 高林弥市郎 | 手塩皿 | 100 |
| 徳山又兵衛 | 御皿 | 200 |
| 堀筑後守 | 御皿 | 200 |
| 逸見八左衛門 | 御皿 | 100 |
| 上田兵庫 | 御茶碗 | 100 |
| 増田壽得 | 高原焼 | 200 |
| 広徳寺 | 御茶碗 | 50 |
| 前田備前 | 高原焼御茶碗 | 100 |
| 永見 | 御茶碗 | 50 |
| 玉井勘解由 | 高原焼御茶碗 | 100 |
| 前田源随 | 御茶碗 | |

この他に御盃があるが、漆器の可能性もあり除外した。

総計すると2750点余りの碗、皿類が一日に持ち込まれたことになる。数からみておそらく新品の揃いのものであろう。輸入陶磁器であったかどうかは判断がつかない¹⁾。

大名の本郷邸訪問の記事もあるが、簡略な記述のため贈答品について詳しく知ることができない。いずれにしても簡単な史料探索で輸入陶磁器の入手についての知見を得るのは無理であろう。

今のところこれまで調査された江戸の大名屋敷の中でも特筆すべき内容の輸入陶磁器が当地点から出土しているわけだが、前田家に特有な現象であるのか否かは即断できない。ただし尾張徳川家の伝世品をみる限り、少なくとも大大名クラスでは必ずしも特殊なことではないと考えられる。

古いものでは南宋、鎌倉時代まで遡る青磁があるが、尾張の豪族であった前田家がどのようにして、優品を収集したのか、また国元に置かれる製品と江戸屋敷に置かれる製品の関係も興味ぶかい。とにかく確実なのは前田家が陶磁器についてかなりの眼を持っていたということである。

註

- 1) なおここで注目されるのは高原焼で、これは江戸浅草にあった將軍家御用の焼き物で、茶器を専門としたという。この日高原焼は400個持ち込まれている。この数は前田家の所有した陶磁器に比べればごくわずかな割合であろうが、遺物に含まれる可能性の十分ある数である。今後陶器類の分類の際には注意が必要である。

参考文献

飯田瑞穂校訂 1978 「加賀前田家表御納戸道具目録帳」『茶道古美術蔵帳集成下巻』 国書刊行会
根津美術館 1987 「阿蘭陀」

第4節 遺構から出土した蛎殻について

遺構中の貝層は焼土と共に検出されるのが一般的であった。焼土には釘が含まれており、例えば69号遺構では大小約2000本もの釘が貝と共に出土した。このことから検出された貝が食物残滓ではないことが想像されるが、殻に漆喰が付着しているものがあることからこれらの貝が蛎殻屋根に使われたものであると考えるに至った。

蛎殻屋根は現存例がなく、江戸特有の建築技法であるために実体がほとんどわかっていない。建築史の分野では水野耕嗣氏が法制や随筆の記述をもとに発表されたものがある。氏の引く『嬉

遊笑覧』、『塵塚談』を参考にすると、蛎殻屋根の最盛期は享保頃にあり、文化・文政期にはほとんど姿を消したとみられる。法令での初出は万治3年(1660)で、その内容は茅葺・藁葺・こけら葺の家屋は上に土を塗るように命じ、その際蛎殻や芝を用いてもよいというものである。その3年前の明暦の大火の直後には瓦葺が禁止されているが、これは倒壊した家屋で瓦により圧死した人が多かったためともいわれる。瓦葺に代わる防火対策として蛎殻や芝を用いることを奨励したのであろうか。このうち享保10年(1725)まで法令では蛎殻屋根は登場しない。17世紀後半から18世紀初めにかけて蛎殻葺がどの程度普及したのかはわからないが、享保年間の法令を見る限り依然として茅葺の家屋が多かったことが推察される。元禄4年(1691)に江戸参府したケンペルの日記にも板葺と書かれているのみである。一方、横井也有『鶉衣』前編には享保17年に初めて江戸在勤となった時の紀尾井町の屋敷の様子を記した部分があり、二階の窓から蛎殻屋根が見渡せることが描写されている。吉宗の治世中には度々瓦葺を奨励する法令が出されており、その中で蛎殻葺も併用されたことがわかるが、後年には蛎殻葺を瓦葺に改めるよう命じており、いわば臨時措置として蛎殻葺にすることが行われたようである。明和9年(1772)に至ってもなお瓦葺蛎殻葺奨励行令が出されており、江戸における瓦の普及の遅さが知られる。

先に述べたように蛎殻葺は江戸特有の技法であり、大都市であった京や大阪では既に瓦が普及していたためにあえて防火対策として蛎殻屋根を推奨する必要がなかったのであろう。ただし正徳元年(1711)頃の作といわれる近松門左衛門の浄瑠璃、『大職冠』に蛎殻屋根という言葉が用いられているのは気にかかる所であり、関西においても少なくとも名称は知られていたのかもしれない。ただしこの場合は漁村において行われていた葺き方を指し、必ずしも江戸のものではない可能性も考えなければならないであろう。

その葺き方であるが出土した漆喰のついた殻は層をなしており、瓦のように規則的に並べられたものではなかったと考えられる。屋根の縁に貝留めという庇を設けていたといい(『嬉遊笑覧』)、また風雨によって落ちた貝殻を始末しない者がいるという苦情が出ていることから(享保18年正月、『享保選要類集』等)、上層は特に固定してはいなかったのではないだろうか。実際に出土した貝のうち漆喰のついたものは少数である。

次に材料の蛎殻について水野氏は大型の化石を用いたのではないかと推測しているが、考察編の金子浩昌氏の論考にあるように殻のサイズは特に大きくはなく、非常に小さいものも含まれている。組成はハマグリ、アカニシ、シジミをわずかに含み、圧倒的な量のカキで占められている。ハマグリにも漆喰のついたものがある。江戸の名物に蛎は挙げられているが、食物残渣と考えにくいことは先に述べた通りであり、自然貝層から採取した可能性が高い。日本橋蛎殻町の地名の由来は堀を掘った際に蛎殻が多量に出土したことにあるというが、江戸の低地に

は縄文海進時の有楽町貝層が形成されており、その層のうち特に蛎の集中した部分から採取したのではないだろうか。採取した層から蛎以外の貝類を抜き出す作業が行われたかどうかはわからない。水野氏は瓦に代わるイメージから葺かれた蛎殻が非常に大きなものであったと想定し、化石層の利用を考えたようである。

なお、今後も蛎殻屋根の葺き方に関して手掛かりを与える資料が出土する可能性が高いので、貝類の取り上げに際しては注意が必要である。

参考文献

- 水野耕嗣 1986 「牡蛎殻葺について」 日本建築学会大会学術講演梗概集
ケンペル (斎藤信 訳注) 1977 『江戸参府旅行日記』 東洋文庫, 平凡社
岩田九郎 1958 『完本うずら衣新講』 大修館書店

あとがき

江戸における大名屋敷内庭園の初めての本格的調査として当地点の調査は特徴付けられ、検出した遺構、遺物共に様々な成果を上げることができた。

遺構は、庭園の度重なる大きな改修を裏付け、景観復元が困難なほど複雑な切り合いをみせた。石垣とその北側の大溝は下屋敷時代の遺構であると考えられ、絵図に残っていない17世紀前半の様相を示す重要な遺構群である。石垣には刻印が刻まれ、屋敷においても城郭とほぼ同様の切り石の取り扱いが行われたことがわかった。上屋敷としての整備が進む中で17世紀末から18世紀初めにかけて改修が繰り返され、溝の埋め立て、築山の築造、苑路の変更が相次いだ様子がその後の遺構群から判明した。この時に埋め立てられた地下室と考えられる遺構からは漆喰を伴って蛸殻が大量に出土し、現存しない蛸殻屋根についての貴重な手がかりを提供することとなった。また砂利を含む土とローム質土を交互に突き固める一般的な苑路の構築法についても知ることができた。現在の育徳園の範囲は19世紀中頃の梅の御殿取り壊し以降のものをほぼそのまま受け継いでおり、梅の御殿が存在した時期にはやや西寄りに育徳園と屋敷を区画する柵があったことが絵図から知られるが、それは遺構としても確認できた。

通常、庭園遺構の調査で行われる庭園としての景観復元は遺構の切り合いが多いために断念した。一方庭園跡の割には植栽痕もあまり多くは検出されなかった。当地点が庭園の中心部分ではなく、屋敷の増改築に伴って境界が移動するような周辺部分に当たっているためにあまり大きな木を植えることをしなかったのかもしれない。

遺物は遺跡の性格から細片が大多数で、まとまりを捉えにくくカタログ的な報告とならざるを得なかった。しかしながら内容は豊富で、特に輸入陶磁器には他の遺跡にはこれまで見られなかったような高い品質の製品があり、大大名のコレクションの一端を示した。中でも注目されるのは陶磁器のまとめで取り上げた瑠璃釉白花皿などの中国官窯製品であるが、同時に高麗青磁や三島手など朝鮮半島製の陶磁器が関東の近世遺跡から出土した例も極めて少ない。今後購入や贈答の記録が発見されれば、更にこれらの資料の重要性は増すであろう。加えて望まれるのは現存する大名コレクションの単なるリストだけではない公開である。

初めての近世の調査に携わった率直な感想として、わずか数世代過去の事象がいかに失われ、忘れ去られているかを実感し、驚きを禁じえなかった。政治史、制度史、社会史など近世史の視点は多岐に渡るが、近世考古学が提供しつつある生活遺址のデータが拓く視点は近世社会の復元に留まらない内容を持っている。遺物が発見されても無視され破壊されることが今なお多い近世遺跡への理解、認知の普及が急務とされるところである。

